

論 小 遷 馬 司

新 田 幸 治

上  
司馬遷小論

## 序論

司馬遷を研究するとき、その第一の資料は「史記」一百三十卷であることは言を俟たないが、これに加うるに「報任少卿書」がある。任安、字は少卿、時に益州の刺史であった者からの書信に対する司馬遷の返書である。任少卿の手紙は太始三年か四年（B・C九四・九三）のいずれかに書かれたものと考えられ、司馬遷の返書によれば、その内容は「物事に接するには慎重に、賢者を推薦し、ひとかどの人物を推挙することを以てその責務とするように」とのことであった。司馬遷の返書は、任少卿の書信を受けとった後に、武帝に従って東行し、或いは雍に随行するなどの行事に追われて、数カ月後に書かれた様子が伺える。班固は古えの賢臣の義にのっとりて人材推挙を以て責務にせよというように解している。時に司馬遷は中書令となり、尊寵を蒙って職務についていたから、友人としてかような書信となったものである。そして、任少卿がこの書信を書いた後に、何らかの罪をおかしたらしい様子が、司馬遷の返書からうかがえる。

これより先、司馬遷は元封元年（B・C一一〇）に父談の死に遭っている。漢家始めて封禪の礼を行なった際に、談はこれに従事することができず、発憤のあまり死の床にあり、遷が郎中として西南を略定して帰還した時に河・洛の間で会見した。父の遺命は、孝の順序を述べ、名声を後世に挙げ、父母を顕彰するのが孝の最大なる

ものとし、孔子の獲麟絶筆より四百有余年、以来史官の記録は廢絶しているが、今や、漢室興起し、海内一統、明主・賢君、忠臣の義に死する者があるにもかかわらず、太史として論載せず、天下の史文を廢せんことを懼るというものであった。

かくして、司馬遷は「史記」論述に力を注いだのである。この著作は太初元年（B・C一〇四）頃に始まると考えられている。因みにほぼ完成をみたのは征和二年（B・C九一）の頃かとされている。この間の天漢二年（B・C九九）、李陵の禍に遭遇した。この件によって受けた遷の苦痛は想像を絶するが、さきの返書「報任少卿書」に於いて詳細に述べられる。私信である故に、より直接的にその心情が吐露されていると思われる。

司馬遷の生涯について述べる場合、李陵の禍を黙過することは出来ない。この一件は著述の上で微妙な影を落とさずにはおかなかったと思われるからである。李陵の禍と称せられるこの事件は、深く遷の肉体・精神を傷つけた。この事件を材とする中島敦「李陵」によって広く知られる処でもある。李陵は五千にも満たぬ歩卒をもって匈奴と死闘をくりかえし、転戦千里、救援のないままに、遂に捕われた。これについての朝廷内の雰囲気は、武帝の憂慮に対して、全軀保妻子の臣輩等が李陵の敗戦を誇張し、連勝の報告の時、祝杯を挙げたことを忘れたかのような振舞いに、司馬遷は自ら不羈と述べる如く義憤を抱いたのである。李陵の平素と人と為りを知る者として黙過し得ない思いに駆られていた。遷は李陵の平素よりみて、匈奴に捕われたとはいえ、必ず漢に報くいんとする志を抱いていると確信し、敗れたとはいえその戦功は天下に布告するに足ると考えていた。たまたま帝の召問があつて奉答の機会を得た遷は、帝の憂懼をやわらげ、李陵を悪しざまに云う臣下輩の語を止めようと上記の如き内容を以てしたのであつたが、李陵を弁護することが寵臣貳師將軍を貶めるものと解され、直ちに投獄さ

れたのである。遷りりの忠誠心がかくも無残な形で報われた。「是余之罪也夫、是余之罪也夫、身毀不用矣。」と「自序」で慨嘆したのは当然である。家は貧しく、刑を軽くするための資産もなく、救ってくれる友人もない。かくて蚕室に投ぜられ、家名をやぶり、天下の笑いを誘ったと述べる。最悪の刑を受け、なお、賤しいとされる奴僕や婢妾さえも時には自殺するような恥辱を蒙りながら生き続けるのは何故か、それは文采の後世に伝わらないことを恐れるからであると云う。

富貴でありながら後世に名の伝わらずに消え去った人々がいかに多かつたことか、ただ特別に卓絶した者だけが名を遺したのである。西伯は「周易」、仲尼は「春秋」、屈原は「離騷」、左丘明は「国語」、孫子は兵法、呂不韋は「呂氏春秋」、韓非は「説難・孤憤」、「詩」三百篇は賢者の発憤、と述べるように西伯、孔子以下、それぞれが困難に身を置いて、思う処が発揮できないことから、未来に期待を寄せて、論著にその憤りを込めたのであるという。「太史公自序」にはほとんど同様の記述がある。発憤著書の謂である。「自序」には「夫詩書隱約者、欲遂其志之思也」、或いは、「此人皆意有所鬱結、不得通其道也。故述往事、思來者」とも述べる。「往事を述べ來者を思う」とあるのは書信も同じであるが、期待する思いは切実である。

すでに、それらの先行する人々があり、自分もまた文采を後世に伝えんとしている。「わたしは不遜にも文学に自分を託そうというのである。天下に散逸していた言い伝えを収集し、行為や事業に照らして考察し、その始めと終わりの理を総合して論じ、成功と失敗、興起と衰亡の源を考える」と云う。「自序」には「網羅天下放失旧聞、王迹所興、原始察終、見盛觀衰、論考之行事」とあり、三代を推定し、秦・漢を記録し云々と、十二本紀以下の表・書・世家・列伝の著作の意を述べるに至る。この書信の場合、この五体例を述べた後に、極めて注目

に価する語が続いている。「欲以究天人之際、通古今之變、成一家之言」とあるのがそれである。天と人との分際を究めるの意であり、「伯夷列伝」の天道への疑念や、「項羽本紀」に自己の滅亡を天意によるとするのは誤りであると指摘するように、あらゆる歴史事象を組成せしめるのは人間そのものによると司馬遷は考える。従って、漢の同時代に生きた董仲舒が「道之大原出于天、天不變、道亦不變」（対策三）と呼号する、天人合一、儒家一尊の思索とは相反することになる。七十列伝という多くの人々の伝が立てられる所以は才能ある人の描いた軌跡に、深い共感と感動を覚えていたからに他ならない。しかし、この遷が期待する人間主体の世界は、社会制度の整うほどに窮屈な世界に転換しつつあった。「遊俠列伝」・「貨殖列伝」などに描かれる世界からは権力の介入によって消え去ろうとしている嘆きが聞かれる。古今の變に通ずとは、十表に示される「三代世表」第一以下に記入される王侯達の封国と發展、そして滅亡などが瞭然となる。一言には「物盛而衰、固其變也」、「物盛則衰、時極而転、一質一文終始之變也」、「事勢之流、相激使然」（平準書）、「原始察終、見盛觀衰、論考之行事」（自序）等々がその底流としてある思索である。

司馬遷の人間そのものに対する温かい眼差しは、遷自身の資質によるものであろう。遊俠や貨殖の世界が国家の前に遠のきつつあることを愛惜の情をもって見つめているのである。

本論考は「史記」を材として司馬遷の思索の諸相を明らかにし、ひいてはその全体像を把握しようとしたものである。「史記」の諸篇全体を採り挙げている訳ではないが、その特徴的な篇を以て究明することとし、他篇の関連する記述に示される司馬遷の感懐をも含めて可能な限り採用し、検討した。

本論文の構成と内容について、第一章は「史記」の諸相として、武帝治下に於ける司馬遷自身の処世のありようを論じ、著述中には明瞭な記述としてはその心情は表出されていない等の事柄によって、読者は宜しく紙背に徹する読解が要求されるであろう。その全体構成に於ける本紀・表・書・世家・列伝の五形式が至当な理由によつて成立している点を概観した。この枠組みは漢代社会を含めた古代からの諸要素を包攝し得ると共に、遷自身の人々への強い愛惜の情が、情勢と人間、君臣、庶民、物情等を美事に描きわけているのである。特に、司馬遷の人間そのものに対する洞察は、列伝に於いてより細密に採られるところであるが、「史記」全体を通ずる歴史の推移を示す「物盛んにして衰うるは、固よりその変なり」、或いは「松柏後凋」などは、社会事象を含めた人間への哀歎を込めた思考と見られる。第三節の司馬遷よりみた思想界の一側面は儒家第一へと推移する過程において黄老等の他思想との確執及び変貌が見られるのであるが、司馬遷の精神的自由はむしろ父談の述べる六家要旨にみられる道家を下敷にしながらも、批評基準は儒家的である。しかし、遷の見る儒家の漢代初期の実態は礼容と祭儀を中心とする形式に傾いていた。董仲舒等の漢朝を正統化する理論も上述の如く遷にとっては人間主体の意味からいっても、堅固な思想の世界が構築されているわけではないというのがその認識であるとみられる。第四節では「史記」全体を通じて多くの諺が採られて、記述の上で極めて有効であることは、既に先人の指摘するところであるが、その庶民性、文学性の一面を示すものではある。特に「千金の子は市に死せず」の諺の裏面にこめられる遷の意の分析とその効用について考察したものである。

第二章は本紀に於ける、特に呂后を中心とした論考である。天下に号令を下す、所謂世界の中心たる者の伝が本紀である。その意味で短命とはいえ項羽は本紀に列せられた。呂后の場合は称制の一事を以つて恵帝に代わっ

て本紀に列せられた。但し、血の肅清を続けざるを得なかったにもかかわらず、天下経営の上ではほとんど功績が認められない等の要因を明らかにしようとした。「政不出房戸」という記述の意を重視したい。「呂后伝」は上述に於いて触れ得なかった呂后を中心とする一族の興亡を、広く「史記」全体から関係する記載を網羅し、比較検証して、興亡の全体像を明らかにしようとしたのである。

第三章の世家については、この形式が「史記」の世界を構成する上で、忠信行道、以奉主上と意味づけられ、三十世家中、第十八陳涉世家以下では漢朝草創期の功臣等が排列される。陳平・蕭何・曹參・張良等は共通した思想基盤、即ち道家思想にたつ。功臣といえども処世・保身に巧みさは要求される。陳平の巧みさは群を抜く。その処身の様態を明らかにしようとした。「外戚世家」は第十九に位置づけられ、本紀と歴史的推移で、后妃・外戚を列するにふさわしい。薄姫を筆頭とする、所謂婦徳を嘉したのであるとは司馬遷の謂であるが、后妃婦徳の歴史であると共に、呂后を除いた女性周辺史でもある。

第四章は列伝の周辺として、列伝全体に関わる考察を主としている。「列伝」考Ⅰ・Ⅱは、遺名に希みをかけざるを得なかった司馬遷自身と、その才能を振るって当代に活躍し、駆け抜けた人々を、同じく遺名によって救済することこそ己れの使命と覚悟したところに生まれた形式、それが列伝なのである。個人の名は湮滅し易く、賢人の称揚を得なければ後世に伝えられぬ。「物盛而衰」・「松柏後凋」に示される歴史の把えようは、人間個人との結びつきで救済の道が求められたのである。又、Ⅱでは「大宛列伝」・「遊俠列伝」・「貨殖列伝」の立伝の意を探求したもので、特に後者二伝に示される世界は、社会が権力によって整齐されるほどに、消滅し、終焉の時を迎えることを司馬遷は慨嘆したのである。さらに雅・俗字使用に於ける人物評価をたずねたのが、「列伝」考



Ⅲである。

第五章の列伝の諸相は、それぞれ特色を有する諸篇を取り上げて論究したもので、一伝を主たる材としているが関連する諸伝より資を採ることは勿論である。第一節の伯夷をめぐる論に於いて、この伝の大序的性格は、天人の際を究むという司馬遷の意識の一端を示すものである。天道果して是か非か、伯夷餓死に材を得て、この命題を解明せんとした遷は、結局、聖人の称揚を得なければ、いかなる善行も正義も伝わらないと思いを致したのである。それに代わる者は遷自身であった。伯夷の正体は殷を支える一族である可能性のあることを論じた。

第二節では韓安国は景帝の弟である梁王の内史となり、位人臣を極めるに至ったが、極めて人間的成功と失敗が繰り返され、深中隱厚の壺遂を推薦した識者の眼の確かさと壺遂愛惜の情に浸る遷の意とが組み合わさった伝と云える。第三節は、貨殖の世界は自然の発展に任せられるべきで、庶民が才覚のみならず、美貌なども材として経済活動に奔走する、自由であるべき場であった。それがいまや、国家を背景にした興利の臣が入り込んで、庶民の世界が衰微してゆく様相と司馬遷の感懐を論じた。第四節の卜式なる人物は、牧畜を業とし、その体験から然るべき歳月と然るべき物の推移を洞察して、人為の限界を知覚した者であり、経済の世界が桑弘羊等興利の臣の介入によって庶民が困窮するに至ったことを憤り、旱天に祈るに弘羊を烹れば天は雨を降らさんという感慨をもちます。これを記述した遷もまた同じ地平に立つ者であることを論じた。第五節・第六節のⅠ・Ⅱについて、漢代の地理的・文化的広がりを知る上で、重要な資料を提供するのは「貨殖列伝」である。司馬遷は二十南遊を始めとする知見の全てを此処に集約し、地域にはそれなりの産業・人情・風俗の厚薄が存するという。加えて司馬遷の経済思想について論述した。第七節の太史公自序については、司馬遷の自伝であるが、著述動機に関わる壺

遂との「春秋」をめぐる問答は、遷の自問自答に近い様相を示し、当時の知識人士の「春秋」理解を端的に示すものである。この問答は「春秋」とは異なるとしながら、内実は「春秋」に倣ったことを示すためのものと論究した。第八節の「成一家之言」については、刑余の司馬遷が遺命・揚名の孝を思うとき、先人に例をとり、「史記」著述をもって一家言を為した。その内容と遷の心情等を検討した。

# 司馬遷小論

## 目次

### 序論

#### 第一章「史記」の諸相

第一節 司馬遷の記述について ..... 三

第二節 「史記」の構成について ..... 一五

第三節 司馬遷より見た思想界の一側面 ..... 二六

第四節 司馬遷と諺の周辺 ..... 四〇

#### 第二章「本紀」について

第一節 読「呂后本紀」 ..... 七五

第二節 呂后伝 ..... 九二

#### 第三章「世家」について

第一節 「世家」考——陳平・蕭何・曹參・張良等 ..... 一八一

第二節 読「外戚世家」——后妃婦徳をめぐって ..... 二〇二

第四章 「列伝」の周辺

第一節 「列伝」考Ⅰ ..... 三三二

第二節 「列伝」考Ⅱ ..... 三三六

第三節 「列伝」考Ⅲ — 雅俗の人物評価について — ..... 三六四

第五章 「列伝」の諸相

第一節 「伯夷列伝」をめぐって ..... 二七五

第二節 読「韓長孺列伝」 ..... 三〇二

第三節 「史記」貨殖管蠡 ..... 三三四

第四節 ト式考 ..... 三三六

第五節 二十南遊と「貨殖列伝」Ⅰ ..... 三四〇

第六節 二十南遊と「貨殖列伝」Ⅱ ..... 三五八

第七節 「太史公自序」について ..... 三七八

第八節 「成一家之言」について ..... 四〇四

結語 ..... 四二一

収載論文一覽及び改題 ..... 四二五

第一章 「史記」の諸相

## 第一節 司馬遷の記述について

「服其善序事理、弁而不華、質而不俚、其文直、其事核、不虛美、不隱惡、故謂之實錄」と「漢書・司馬遷伝」に班固が評価する司馬遷の「史記」は、一百三十卷五十二万六千五百字の大著であるが、今、その著作についての一端に触れたいと考える。

「本紀」十二篇、「表」十篇、「書」八篇、「世家」三十篇、「列伝」七十篇の次第で著者司馬遷の言を借りれば「余述歴黃帝以來至太初而訖」<sup>(1)</sup>の歴史が記載されているのであるが、此の著の完成が何時であったかは分明でない。後程に触れる「報任安書」が、王国維氏「太史公行年考」に依れば太始四年（BC 93）遷五十三才の十一月に書かれ<sup>(2)</sup>、此の頃ほぼ完成したとみるものが多く、此の書信が為された後数年を経ないでその生を終えた様である。司馬遷の没年について定説はない。滝川氏「太史公年譜」等の説も「史公没年不詳」或いは昭帝即位後かと述べており、季鎮淮氏は「司馬遷」の中で、武帝末年前後として武帝の生涯と大略一致すると述べている。但し、司馬遷の死については問題があるとして郭沫若氏「関于司馬遷之死」、常君実氏「司馬遷伝略」等に述べられる「下獄死」説は、その没年が不詳であるだけに何らかの事情を思わせ、悲劇の晩年として同情を禁じ得な

いが、常氏の記述する様に今後の考証を俟つより仕方がないであろう<sup>(3)</sup>。推論の域を出ないが病死或いは自殺の説もある<sup>(4)</sup>。

さて、班固は「司馬遷伝」に「十篇欠、有録無書」と記述して、遷の没後百三十篇中の十篇が当時已に失伝していた事を示している。遷は「太史公自序」で「蔵之名山、副在京師、俟後世聖人君子」と述べ、正副二部を作成して後世に備えた事になるが、後漢の班固（32～92）の頃には十篇の亡失をみているのである。その篇名を列挙すれば、「孝景本紀」「孝武本紀」「礼書」「樂書」「兵書（律書）」「漢興以来将相名臣年表」「三王世家」「傅靳蒯成列伝」「日者列伝」「龜策列伝」であるが、全部又は一部の亡失を漢博士褚少孫が補綴したとされている。

「孝武本紀」の註「史記集解」には「張晏曰、武紀、褚先生補作也、褚先生名少孫、漢博士也」とあり、その他の篇の補綴についても異説がある<sup>(5)</sup>。

「太史公自序」の「集解」に「駟案、衛宏漢書旧儀注曰、司馬遷作景帝本紀、極言其短、及武帝過、武帝怒而削去之、後坐拳李陵、陵降匈奴、故下遷蚕室、有怨言、下獄死」とあり、同文が「孝景本紀」の「考証」にも引かれてはいるが王鳴盛の言を引き、「與情事全不合皆非是」としている。「魏書・王肅伝」には「漢武帝聞其述史記、取孝景及己本紀覽之、於是大怒、削而投之、於今此兩紀有録無書後遭李陵事、遂下遷蚕室、云々」と見えており、王国維氏は最為無稽としている<sup>(6)</sup>。恰かも「李陵之禍」は武帝が虎視眈々として狙っていた絶好の機会を与えたかの如き印象を吾々に植えつけるが、絶大な権力を有する武帝が機会を待つというのは首肯し得ないから、此の記事は矢張り論外として置くべきであろう。

「孝武本紀」について「太史公自序」には「漢興五世、隆在建元、外攘夷狄、内脩法度、封禪、改正朔、易服

色」として漢帝国の始祖劉邦より五世、その隆盛を極めたのが初期の建元年間であったと述べる。武帝は建元より十度も年号を改めており、長くても七年目には改号しているのである。いま此処で「攘夷狄」というのは主として当時北方に勢力を保持して中国を窺っていた匈奴を指すものと思われる。「自序」の「匈奴列伝」著作の項には、夏殷周三代以来、匈奴は中国の患害の種であったので彼等の強弱の時期をみて征討せんとしたとある。武帝期におけるその様子は「平準書」に元朔年間(1)の対匈奴戦を記して十余万人を以つて朔方に築衛し、数十百巨万を費すとか、「受賜黄金二十余万斤」と捕斬した兵士に与えた等々が述べられている。這樣的戦い(2)は同篇に「至今上即位数歳（中略）都鄙慶復皆満、而府庫余貨財、京師之錢累巨万、貫朽不可校、太倉之粟、陳陳相因、充溢露積於外、至腐敗不可食云々」と述べる豊饒な国庫も忽ちに空虚となつて、遂には「武功爵」と称して売爵するに至る窮乏を招来した。勿論、これは対匈奴戦にのみ費消されたのではなく、武帝の四方に對しての積極的な対策があつた事にもよる。元封三年には東方に出兵して楽浪等四郡を設置し、西域に對する動きとしては有名な張騫(3)の事蹟がある。這樣な中で国庫を満たすべく武帝の側近として商人出身の桑弘羊(4)が均輸平準の物価安定策を以つて臨んだ。又、粟を納入する事で官に補せられ、罪を贖う事も出来るという政策も用いた。その結果は一年のうち天下の財用は饒かになつたと「平準書」に述べられている。しかし、同篇末尾に此の年に小旱魃があつたため、帝は官に命じて雨乞いをさせたと記述し、続けて卜式の「今弘羊令史坐列肆、販物求利、亨弘羊、天乃雨」という言葉を載せて締めくくつてゐる。弘羊を釜ゆでにするならば天は雨を降らせるであろうとは、弘羊との何らかの確執があつたとはいへ痛烈である。「史記会注考証」に諸例を挙げて「皆史家於叙事中寓論斷法也」とある様に司馬遷が此れを記録した事に並々ならぬ意味が込められているのを吾々は汲み取る必要がある。



這樣に武帝の採つた政策については外に「貨殖列伝」を併せ見るべきであらう。其処には「布衣匹夫之人、不害於政、不妨百姓、取与以時、而息財富、智者有采焉」（自序）と述べる世界が既に司馬の眼前に無いこと前述の如くであつて、如何なる才覚の持主も武帝の政策によつて此の世界から締め出されてしまったのである<sup>10</sup>。「最下者与之争」という記述が為されている「貨殖列伝」全体が痛烈な批判をその中に秘めていると見てよいであらう。

とに角、班固が雄才大略と称道し、吉川氏がその著「漢武帝」の中で、一人の強力な天子によつて統治される事こそ、秩序を保つ方法であるという信念がこの時代に最高潮に達し、武帝はその期待に答えたと述べるその治世下に、司馬遷はほとんど武帝と生卒を同じくして「史記」を完成させたのである。

## 二

「報任安書」は友人任少卿に対する返信である。従つて遷は自らの思いを隠すことなく述べていると考えられる。此の中に「待罪鞶帶下、二十余年矣」<sup>11</sup>とあつて、官途についている事を這樣に云つたものであるが、臣下の言として然るべき態度と受けとめられるとはいへ、武帝治世五十四年間に丞相の位につく者の約半数が自殺、死刑という悲惨な結末を持っている事に注意すれば、これが決して虚言でない事が知られる。司馬遷の「史記」著作動機の一に挙げられる「李陵之禍」にしても、誰でもが臣下として其の可能性を有していたのである。司馬遷の場合この事件は著作の上に大きなかげりを落している。父の太史公談は死に臨んで黄河と洛水の間に子遷と

会い、泣いて日頃論著せんとした処を遺託したと「自序」に述べられており、三年後に遷は太史令を拜し「於是論次其文、七年、而太史公李陵之禍、幽於縲紲」と同篇にある。李陵の事件は「漢書」に拠つた中島敦の名作「李陵」に詳しいが、「李將軍列伝」の篇末に後人竄入の疑いある一文と「報任安書」にはや、詳しい記載がある。

李陵は五千に満たぬ歩卒を以つて深く匈奴の地に入り、連戦十有餘日、旃裘之君長咸震怖するの状況を現出したが、匈奴が一國を挙げて李陵の軍を包囲したため、転關千里のすえ遂に全滅屈服するに至つた。当初、其の活躍を報ずる使が朝に入るや、酒杯を挙げて上奉した公卿王侯も、陵の敗るゝを聞いて打沈む武帝に対しては憂懼して出入する所を知らぬ有様であつた。元來、遷と陵とは格別の交際があつた訳ではなかつたが、陵には国士の風があると考へて此の遠征を見守つていたのである。故に一たび悲報の廷内に入るや「全軀保妻子之臣」共が、帝の苦惱を寧ずるところか悪意ある言辭を弄するのを見て憤慨した。敗れたとはいへ陵の匈奴に対する戦いの功績は天下に称揚する価値があると考へていたのである。そこに適々召問があつた。遷は李陵の功を述べたが、その言の終らぬうちに陵を称揚するのは貳師將軍の無功を云うものと武帝は誤解し、忽ち獄吏の手に引き渡されたのである。「報任安書」に述べられる李陵の事件と司馬遷との關係は凡そ以上の如きものである。下獄の後、宮刑を以つて命を長らえた遷は「史記」を書き継いだ。当時、錢財を納入することで贖罪の法もあつたが、遷には資産もなく、救つてくれる友人もなかつた事が此の書信の中に述べられている。後世においてこの事の悲憤が「貨殖列伝」を書く動機になつていと説く学者も有るがうがちすぎである。

さて、此の刑の悲惨であつた事は同書信に「最下腐刑極矣」としているのでも想像がつこう。自殺を知らない訳ではないが、この恥辱の中に生きるのは後世に残すべき著述がないからであるとしている。従つて遷の晩年に

ついで著作が完成した以上、自殺したのではないかと考える根拠はここにある様である。又、「以汚辱先人、亦何面目復上父母之丘墓乎（報任安書）」と先祖・父母の墓参も出来ないとする恥辱の思いは誠に深刻である。貝塚氏は「史記―中国古代の人びと」の中で、司馬遷は古代の埋葬儀礼に基く不具に対する觀念、肉体の欠損は先祖に対する悪であるという宗教的罪悪感によつて苦しめられたとされている。「是以腸一日而九迴（中略）每念斯恥、汗未嘗不發背霑衣也（同書信）」と恥辱のために腸はねじれ、冷汗は衣を霑す有様であつたことが述べられている。ともあれ遷が看過し得なかつたのは、かの佞臣輩の輕薄な振舞に対する憤りと陵に対する同情とからであつた。生來の反骨と俠氣とが彼を動かした。「素所自樹立使然也」と述べざるを得なかつた処に生來のものがあると考えられるのだが、「自序」には「是余之罪也夫、是余之罪也夫」と喟然として嘆じ、西伯・孔子・屈原・孫子・韓非子等が著作したのは發憤したからに外ならぬと思いを致している。

### 三

「太史公自序」と此の書簡の内容とを併見すれば、「史記」の著作についての一端を窺うことが出来よう。父談の遺命は「今漢興、海内一統、明主賢君、忠臣義士、予為太史而不論載、廢天下之文、予甚懼焉（自序）」という非常に簡潔なものであつた。遷の家系は遠く周室の太史であつた事を談は述べている。その後司馬氏は分散して諸侯に仕え、秦を経て談になつてから太史令を拝したのである。先祖が曾つて奉じていた職に就いたのであるが、これは「僕之先人、非有剖符丹書之功、文史、星曆、近乎卜祝之間、固主上所戲弄、倡優所畜、流俗之所

軽也（報任安書）」と述べる程の賤職であった。太史公と称するのは尊称である。王利器氏の注では皇帝の左右に侍する点から公と称したので、太史令が通称であると説明している<sup>112</sup>。ところで「史記」を見ると遷自身が公と称している個所が少なからず存在することについて、公は官の意であると解する説がある<sup>113</sup>。天文・律曆がト祝に近いものとしているが、「曆書」にある様に「論語・堯曰篇」の語を引いて「天之曆数在爾躬、舜亦以命禹、由是觀之、王者所重也」<sup>114</sup>と述べて実は重要な事柄であった様に思われる。又、ト祝は古代において、特に殷王朝の頃には貞人群がいて日常的行事は亀甲、獸骨等を用いる占トによる神意が決定する<sup>115</sup>という重要な仕事であった。これが春秋戦国の混乱を経て漢代に入ると、人間の力というものがあらゆる面で自覚される様になっていたため、主上の戯れに畜えられる程度と認識されるようになっていたのであらう。

さて太史については「齊太公世家」に「齊太史書曰、崔杼弑莊公、崔杼殺之、其弟復書、崔杼復殺之、少弟復書、崔杼乃舍之」とあり、此の事件は「春秋左氏伝」襄公二十五年の記事では、や、同じ文の後に「南史氏聞太史死、執簡以往」の語がある。南史氏は太史を佐ける者であった様である。這樣的太史職に倣する思考憧憬が司馬遷になかったとは云い切れない。記録する事については手本とすべき先例がある。孔子が魯の史官の記録によつて「春秋」を作り、内には褒貶の意が込められていると<sup>116</sup>「孔子世家」に述べ「後世知丘者以春秋、而罪丘者亦以春秋」と孔子の語を載せているのは、司馬遷が「自序」で後世の聖人君子を俟つというものと無関係ではないであらう。「自序」の中で述べる談の言葉も「春秋」に触れ、遷自身も父の意が「春秋」を継ぐ事にあつたのではないかと考えていた。しかし、上大夫壺遂との問答<sup>117</sup>では「春秋」は乱世であつたからこそ意味があつたので、当代は明君を推戴して全てが宜しきを得ている以上、如何なる事を論じようとするのかと鋭い反論を受け

ている。これに對して「余所謂述故事、整齊其世伝、非所謂作也、而君比之於春秋謬矣」と答えているが、誠に苦しい弁解であると云えよう。何故ならば上に明君あるのに褒貶鑑戒の意を寓する「春秋」の如き著述を為すことは、取りも直さず漢王朝に對する不満を述べる事に外ならないからである。しかも、「自序」の中で「本紀」より「列伝」に至る百二十九篇（自序を除く）の著作動機を仔細に述べる際に、「秦楚之際月表」に著の字を用いる外は全て作の字を用いて「作五帝本紀第一」の如くしている事は見逃せない。だが、此の回答は結局「春秋」とは異なる体裁の歴史書を作るといふ結果をもつた。貝塚氏は「古代中国の精神」の中で、この反問によつて史学としての学問が成立したのであると述べられる<sup>13</sup>。処で、司馬遷が紀伝体といふこの歴史書の形態を採用するについては、「自序」の壺遂との問答中に暗示的な次の一文が孔子の言として「我欲載之空言<sup>14</sup>、不如見之於行事之深切著明也」と記述されている。具体的な事柄によつて示す方が、より切実・明白になるであろうの意である。

司馬遷が事実を述べる事に努力した点は、その著作全体を通じて実に良く資料を綴つたの感を読者に与える。シヤパンヌ氏は其の著「史記著作考」<sup>15</sup>の中で「呂后本紀」の陰惨な一文を引用して司馬遷の感情を示す語は片言隻句も見当らぬと驚嘆しているが、これが全てでない事は「列伝」に読みすすんだ時に、著者の感情が俄かに投影され始めたことに気付く筈である。人間そのものへの限りない愛惜と具体的事象での表現とが相俟つて創出されたのが「列伝」であつた様に思われる。

父談は遺命の中で「揚名於後世以顯父母、此孝之大者」と述べているが、肉体の欠損という不孝を背負ったとはいえず、結果的に司馬遷は「史記」を著作する事で此の期待に報いた。そして、此の著作が湮滅する事を恐れて二本を作り、後世の聖人君子を俟つという細心の注意を払ったのである。「伯夷列伝」の中で聖人の驥尾に附されなければ後世に伝わらないのだと云う認識は、特に列伝の記述には重要な意味をもっている。個人に関する事蹟が消滅し易い事を許由、卞隨・務光等<sup>20</sup>の例で司馬遷は熟知していた。従つて如何なる傑出した人物も這樣的聖人の称揚を得なければ到底後世に名を伝えられる事はないのだと悲しみを述べるのである。この篇が、列伝の序文的性格を持つている点は既に常識となっており、司馬遷は「天道是邪非邪」という曾つてない問題を提出した。伯夷なる<sup>21</sup>人物は此の問題を提出するための道具でしかないと云える。「自序」で「扶義倣儻、不令己失時、立功名於天下」と述べるのが「列伝」を著した事の意義である。功名を立てる事は後世へ名を残すための一条件である。いったい名については「君子疾没世而名不称焉（論語衛靈公篇・伯夷伝）」とある様に後代においても強い関心をもたれた。現世において不運であればあるほど名に対する希求は熾烈で、むしろ不当である程に、当然後世名によつて報われるという信仰に近いものがあつた様に思われる。そして司馬遷は「史記」によつて自己を含めて後世に名を残すことに成功したのである<sup>22</sup>。だが、「古者富貴而名摩滅、不可勝記（報任安書）」と述べる様に消え去つた者は多い。その故に司馬遷は此等の人々に対する愛惜の情を禁じ得ないのである。

遷は伯夷なる人物の善行が餓死という形で終つた事に大きな不満を抱き、他方に盜跖なる悪人が天寿を全うした事を思う時、天が善人に与みするという一般に伝えられる事柄は、現世において不運に見舞われた者の信仰で

はなかつたかと思ひ及んだのである。「非公正不發憤、而遇災者、不可勝數也（伯夷伝）」方しく司馬遷が然うであつた。李陵の禍は正義・善意に根ざした考えを述べたにも拘らず極刑をもつて酬われたのである。それだけに不当な境遇にあつた者に対する同情は厚く、故なく天に然る所以を求めざる者に対しては、冷厳な態度で此れに臨む様子が諸伝中及び太史公曰の中に散見するのである。

目加田氏は著書「屈原」の中で、遷が不当な罪を受けて世を恨み憤る心から屈原に同情する意が強く、屈原伝の資料としては充分でないと述べられる。司馬遷は「太史公曰」の中で「屈原伝」に限らず、所々に悲嘆の声を放っている。

司馬遷が激しい語調で非難する例として「項羽本紀」がある。項羽は四面楚歌の後、漢高祖に追い詰められ、天が這樣にしたのだと部下に告げているが、自らの過失をこそ責めるべきであつて、天が滅すと考えるのは大変な誤りであると論断している。又、「蒙恬伝」にも阿意興功の罪をあげて同様の批判を記述している。遷は透徹した目で人間を見極めようと努力しており、従つて何等かの形で其の才能を發揮した者について一伝を設け、一人或いは数人の生き方を記載したのである。後に班固によつて批判された処の「遊俠列伝」<sup>24</sup>「貨殖列伝」等、或いは「刺客」「酷使」「佞幸」の諸伝もその意味で生み出されたと云えるであらう。

司馬遷と其の著作の一端を窺つてきたが、最後に魯迅が「漢文学史綱要」の中で「史家之絶唱、無韵之離騷」<sup>25</sup>と評している事を付記して擱筆する。

- (1) 班固「司馬遷伝」 訖於天漢。王氏「太史公行年考」 今觀史記中最晩之記事、得信為出自公手者、唯匈奴列伝之李広利降匈奴事（征和三年）、餘皆出後人統補也。
- (2) 手紙について季鎮淮氏「司馬遷」は王氏に同じ、滝川氏「太史公年譜」征和二年（BC91）とする。史記完成について滝川氏征和二年、常君実氏「司馬遷伝略」同じ。前述の季氏、貝塚氏「史記」は大始四年（BC93）とする。
- (3) 郭氏論文、中国古典散文研究論文集、原載第四期歴史研究
- (4) 李長之著「司馬遷之人格与風格」
- (5) 滝川氏「史記会注考證」 孝景本紀の考證に陳仁錫曰、此必太史公本書、非後人所補也。李氏「司馬遷之人格与風格」に論楮先生がある。
- (6) 王国維著「太史公行年考」
- (7) 紀庸編著「漢代对匈奴的防禦戦争」、張維華著「論漢武帝」「史記、李將軍列伝、衛將軍驍騎列伝」等
- (8) 「史記、大宛列伝」「漢書、張騫伝」
- (9) 安作璋著「漢史初探」中「論桑弘羊」
- (10) 宇都宮清吉著「漢代社会経済史研究」に「貨殖列伝」は商業的經濟社会への挽歌であると説く。
- (11) 「季布欒布列伝」季布の言「臣無功竊寵、待罪河東」と同様の例がある。
- (12) 「作家与作品叢書、司馬遷」中「太史公自序」注。
- (13) 朱東潤著「史記考索」
- (14) 訓戒であつて、此処では天の秩序を保つべきの意であろう
- (15) 「中国文化叢書・思想史」
- (16) 「史記・孔子世家」春秋之義行、則天下乱臣賊子懼焉。
- (17) ワトソン著「司馬遷」に此の問答は遷の創作かも知れぬとする。結局、春秋と関係もあるが同時に異つてもいる事を述べたのだとする。



- (18) 司馬遷と「春秋」との関係については、前項ワトソン氏、李長之著「司馬遷之人格与風格」等多数ある。
- (19) ワトソン氏は「空言」を「理論的判断」と解し、王利器氏は「空口説白話」と解している。
- (20) シャバンス著「史記著作考（司馬遷史記訳注序）」岩村忍訳。
- (21) 「莊子」に堯は天下を許由に譲らんとし、卜隨・務光には殷湯王が天下を譲らんとした話があり、何れも受けなかつたという。
- (22) 拙稿「伯夷管窺」、東洋大学紀要23号、
- (23) 森三樹三郎著「上古より漢代に至る性命觀の展開」に司馬遷が「名」に対して強い関心があったとある。
- (24) 「東洋」九卷五号、荒井氏「仁俠の怨念と理念」もこれに触れている。
- (25) 屈原の悲憤の詩。

## 第二節 「史記」の構成について

さきに「東洋」(第九卷第十一号)に於いて「史伝」なる一文を草し、中国史上に雄才大略と称せられた漢の武帝とほぼ生卒を同じくした司馬遷が「史記」一百三十卷五十二万六千五百字の著作を為し遂げた事について、著者と其の著作の一端に触れた。

その中で筆者は司馬遷が事実を述べる事に努力し、且つ「列伝」等に於いては著者の感情が俄かに投影されている点に触れ、人間そのものに対する愛惜の情がこの様な形で表出されたものと理解した。この様な感情の表出が実は「李陵之禍」(前掲「史伝」を参照されたい)という一事によって、より一層その度を加えた事は否めない。それ程この一件によって司馬遷の身に加えられた刑罰は悲惨なものであり、精神的屈辱は到底耐えられぬものであった。しかし、彼が生きながらえて此の著作を完成したのは父親である太史談の遺命と、刑余の身として祖先の墓前にも上る事が出来ぬという宗教的苦悩から少しでも解放されるための後世への揚名の意味があった様である。従つて司馬遷にとつて此の事件は著作の上に大きなかけりを落していると思ふのである。

李長之氏は「司馬遷之人格与風格」第六章司馬遷之体験与創作(下)——史記各篇著作先後之可能的推測なる項を設けて、父親司馬談の手に成ると思われるもの、談か司馬遷の著作か弁別しがたいものの十七篇を除く一百十

三篇について年代的に六区分している。「李陵之禍」以後を第五群・第六群として、第五群に四十二篇の多数を其の影響ありとして配している。如何に李陵の一件が此の著作の上に大きな影響を与えたかが判るであらう。いずれこれ等諸相については機会を得て述べたいと考えている。

さて、「史記」が「本紀」「表」「書」「世家」「列伝」という五形式からなる構成である点については前記「史伝」にも触れた処であるが、今少しく此れ等について見てみよう。「史記」末尾にある「太史公自序」には「罔羅天下放失旧聞、王迹所興、原始察終、見盛觀衰、論考之行事、略推三代、錄秦漢、上記軒轅、下至于茲、著十二本紀。既科条之矣。竝時異世、年差不明、作十表。礼楽損益、律歴改易、兵權山川鬼神天人之際、承敝通變、作八書。二十八宿環北辰、三十輻共一轂、運行無窮、輔弘股肱之臣配焉。忠信行道、以奉主上、作三十世家。扶義倣儻、不令己失時、立功名於天下、作七十列伝」とある。この説明によれば「本紀」はおよそ帝王の歴史を記すものの意である。処でこの「本紀」なる名称については趙翼著「廿二史劄記」の各史例目異同の項に「古有禹本紀尚書世紀等書。選用其体以敘述帝王」とある如く実は基く所があるものであつて、司馬遷は「大宛列伝」太子公曰に於いて「禹本紀」なる古書を引用しているのである。盧南喬氏「論司馬遷及歷史編纂學」(文史哲叢刊第三輯「司馬遷与史記」所収)の附録史記材料来源之一には此の書を資料として司馬遷が使用したものとして挙げている。従つて既述の如くに「本紀」なる語が古書に其の名が見える事は明らかになつたと思われるが、果して此の書が司馬遷が用いる意と同じく帝王の事蹟について述べたものであつたか否かは疑問なのである。即ち「大宛列伝」末尾に於ける引用に於いては、「山海経」なる地理類及び異物怪物の類を多く記載するもの―但し、此の書は貝塚氏が「神々の誕生」(再版「中国の神話」)に述べられる如く中国古代の素朴な伝承が含まれていて、

吾々に古代人の信仰等を知る上での貴重な資料を提供するものである——と列挙されており、且つ「禹本紀言河出崑崙。崑崙其高二千五百余里。日月所相避隱為光明也。其上冇醴泉瑤池」と述べる所よりすれば、この書は地理類及び異物の類を記載するものであった様に推測せしめるのである。「史記会注考証」には「漢書芸文志」雑家者流に「大禹」三十七篇が記録されている所から、或いは呼称を異にしているが実は一書ではあるまいかと推論しているのであるが、この書物が亡失して伝わらないので確かめる術はない。

「本紀」がおよそ帝王の歴史を記述するためのものである事は以上の如くであるが、趙翼は前述著書の中で「惟項羽作紀、頗失当。故漢書改為列伝」と述べて項羽が「本紀」に列せられている事は穩当ではないとするものである。漢書に於いては後に触れる陳勝と共に「陳勝項籍第一」として記載されており、著者班固の判断を示すものと考えられる。これについて滝川亀太郎氏「史記会注考証」史記総論の史記體製の項には「十二本紀、以先後次第。王子嬰未降之前、天下之權在秦。既降之後在楚。故列項羽於本紀也。不為孝惠立本紀、併之於呂后者、由政之所出也」と項羽が「本紀」に列せられる妥当性を論述されている。項羽が一時期に於いて天下に号令を下す位置にあったことは事実が示しているものであって、滝川氏の見解が至当なものである事は論を俟たない。「項羽本紀」末尾には太史公曰として興起も滅亡も實ににわかであったと述べている。

項羽の事蹟については鴻門の会や垓下の戦での四面楚歌の中に於ける悲歌愴慨等によって名文と相俟つて余りにも有名である。そして其処では荒けずりな、それでいて情に流される人間としての項羽を読者は見るのである。虞美人との別離、さらに名馬騶との別れというように場面は展開し、烏江の亭長による江東に王たれとする進言に對して、突如として江東の子弟八千人と共に出陣し、今は一人も帰る者もないのに自分一人がおめおめと帰っ

て江東の父兄にどの面さげて会えようか、また、父兄が憐れんで自分を王とするも自分は心中に愧じざるを得ないと考えた項羽は自ら死をえらぶのである。しかも最後には旧知の者に自分の首級を与えんとする等の心情が、ある種の気取りとして潔くありたいとする人間の共感を誘うのである。一方の「高祖本紀」に記述される事蹟は計算された行動が目につくものである。高祖の一面を示す話が「項羽本紀」に記述されていて、逃走の際に於いて高祖は二人の自分の子供を馬車が重いため敵に追いつかれそうになると三度も突き落すという冷酷な利害にさとい性格が出ていて、余りにも項羽との違いがある様に思えるのである。ともあれ、武田泰淳氏が「史記の世界」の中で「本紀」に記載される者達は世界の中心であつたと述べる処のものである。そして、後漢の班固の「漢書、司馬遷伝」賛には「其言秦漢詳矣」と称する様に秦漢の際に於ける記述は特に詳細を極めているといえよう。

「表」は十篇であるが所謂年表とも言うべきものである。趙翼「廿二史劄記」各史例目異同の項では列侯将相三公九卿等の功名の表われた者については立伝されている。従つてこれ以外についての「此外大臣無功無過者、伝之不勝伝、而又不容尽没、則於表載之、作史体裁、莫大於是」と述べて「表」の作製が歴史著述の上で偉大な開拓であつたとしている。「考証」史記体製に於いては「史記之有表、以紀伝兼編年也」とその大体を述べる。そもそも「表」を作成するに當つて司馬遷が参考とした資料には「三代世表」に「余読諫記」とあり、「十二諸侯年表」に「太史公読春秋曆譜謀」とも記述している処から此れ等の書のあつた事が判明する。その他に何点かの書があり、これに加えて「春秋」「国語」の史実を参考に行っていることも記している。「漢書芸文志」には歴譜家十八家、六百六卷が著録されているが、譜謀家の書が単に世代、諡号のみを記して簡略である——と司馬遷は「十二諸侯年表」の末尾に述べて「春秋」等の書に照合して確実を期した様子が見える。

ここで此の「表」に記載される事柄にまつわる話に触れたい。一九七二年初めより湖南省長沙市東郊にある馬王堆一号前漢墓が発掘され、千余点に上る豪華な副葬品も学術的に貴重なものばかりで目をみはらせたが、最も素晴らしい事はほぼ二千余年前の婦人の屍体が発見されて世界を驚倒させたことであろう。この漢墓から出土した漆器に「軼侯家」の朱文字や、封泥に「軼侯家丞」とある所から軼侯の夫人であろうと推測されているのである。「史記、惠景間侯者年表」には軼国「長沙相、侯七百戸。惠帝二年（前一九三年）四月庚子、侯利倉元年」と記録されていて、その歴史的事実として認める事が出来ると共に、如何にこの記述が確かであるかが判明するであろう。この婦人が軼侯利倉の夫人であったか、二代の利竊の夫人であったかというように諸説のある所であるが、ほぼ利倉の近親者とする観方が強いのである。また、この出土品の中に「彩繪帛画」があり、天上の世界、人間の世界、地下の世界を描く上・中・下の部分に区分出来るもので、当時の哲学・文学・美術・歴史を知る上での貴重な資料を提供している。吉田賢抗氏は「史記の世界に目を開いて」（新釈漢文大系季報三十）の中で、漢墓発掘によって「史記、始皇本紀第六・封禪書」（二十五弦の瑟の話は「孝武本紀第十二」に見える）に記述される二十五弦の瑟の実在が確認されたこと、地方の産物として「史記、夏本紀」に記録されるものと合致するなどが確認されたと述べられる。

「書」は八篇あるが「自序」に述べる如く礼・楽・兵・曆・天文・鬼神・山川・貨幣経済等について記載するもので、功用・弊害・変遷を具体的に跡づけた、所謂文化史とでも称すべき内容をもつと言える。趙翼の前記著書の各史例目異同は「八書乃史遷所創。以紀朝章国典」と述べて司馬遷の創始にかかることを明らかにしている。そして班固の「漢書」に於ける「十志」は右記の二篇を一篇とした面を持つが、大体が名称を変更したもので「書」

を踏襲したものであり、別に「刑法・五行・地理・芸文」の四志を増益している。「漢書」の体裁に及ぼす影響もさることながら、「書」の末尾に位置する「平準書」には司馬遷の批判精神が散見して、その思考を知る上での好個の材料を提供するものと言える。彼の批判精神については別の機会にゆずる。

「世家」は「自序」に於いて衆星が北斗星をめぐるが如く、三十輻が一こしきを中心として運行するが如くに、主上を奉じて忠信行道する股肱の臣を以つてなぞらえたものであると述べる。趙翼は前掲書の同項に於いて「史記衛世家賛、余読世家言云々、是古來本有世家一体、選用之以記王侯諸國」と述べて司馬遷が做つたものとするが、「考証」史記体制の項で滝川氏は「孟子云、仲子、齊之世家也、猶言世祿之家」と述べ、史目として立てたのは遷に創まるとされた。盧南喬氏は前掲論文の中で滝川氏の論の当を得ている事を例証を挙げて論じ、「世家」とする本文中の記述は「本紀」に対して用いられたものであるとした。しかし乍ら、本文中に於ける記述は然うであるにしても、「世家」という語は前述「孟子」勝文公章句下に見えるものであって、B・ワトソン氏は「司馬遷」の中で所謂世祿の家に於いて其の歴史が録せられていた可能性は存すると述べる。処で「三十世家」と「三十輻」とするものにはいささか作られた数という感じを吾々に与えるであろう。

さて、「三十世家」を通観して第十六までが周王朝の成立より始まる諸侯国の歴史である事に気づくであろう。そして第十七「孔子世家」、第十八「陳涉世家」が「世家」の類としては趣の異つたものとして目につくのである。但し、此の一線を画するものとして理解出来る理由の一つは、此の二篇を間に入れて先秦諸侯国の歴史と漢以後の諸侯の歴史とがあるということであろう。先ず「自序」の司馬遷の意を見れば「周室既衰、諸侯恣行。仲尼悼礼廢樂崩、追脩經術、以達王道、匡乱世反之於正。見其文辭、為天下制儀法、垂六芸之統紀於後世。作孔子世家」

というものである。孔子は天下の爲めに儀法を制定し、六芸（易・書・詩・礼・楽・春秋）の統紀を後世に垂れた功績によるものと考えている様である。司馬遷の頃は武帝が儒家を尊重して方正・賢良・文学の士を招いたり、公孫弘の儒学の停滯を嘆いた奏請が行われたりした事によって、儒家が他学派を圧倒した時代であった。且つ、遷は孔子の子孫である処の孔安国に学んでいるのであるから、家系としての「孔子世家」の末尾に孔子の家系を数代にわたって記述している——その歴史と共に学派が隆盛に向いつつある趨勢によって「世家」に録したと考えられるのである。従つて「列伝」中にも「儒林列伝」を立てたのは此の学派の隆盛を考慮しての事であると言えよう。司馬遷自身も儒家的教養を身につけていたが、「自序」中に父談の六学派の要旨を記述して、儒家の学問が規範にしばられて勞多くして功すくないという欠点を挙げ、道家の物に拘われる事のない觀方・在り方を褒めるのは、自己の歴史家という立場が偏する事の許されぬものという自覚によるのであろう。ともあれ、この学派の「素王」として尊崇する孔子は、この時代の趨勢と共に「列伝」に入れるには余りにも大きな存在であったと考えられる。

他方の「陳涉世家」について「自序」は「桀・紂失其道・而湯・武作。周失其道、而春秋作。秦失其政、而陳涉發迹、諸侯作難、風起雲蒸、卒亡秦族。天下之端、自涉發難。作陳涉世家」と述べる。この一文によると司馬遷が陳涉を取り上げたのは、専ら秦の失政によつて陳涉が兵を挙げるといふ發端を爲した事を功業として評価した意を示している。しかし、陳涉自身について言えば「孔子世家」末尾に記述されるが如き家系の記載はない。司馬遷は「陳涉世家」の末尾に於いて「陳勝雖已死、其所置遺侯王將相、竟亡秦。由涉首事也。高祖時、為陳涉置守家三十家賜。至今血食」と述べ、一に陳涉拳兵の功業を挙げ、二に高祖の時に三十家の家守を置いて遷の頃



に至るも犠牲を供えて祀られていた事が判明する。して見ると陳涉挙兵の功業は漢帝国の成立に依つて終止符をうち、長く漢によつて祭祀される事で「世家」に録せられるべきであるという司馬遷の判断があつたと言えるであらう。

さて、「列伝」について「自序」には義により、才気すぐれて時を見失うことなく功名を立てた者について伝を立てたと述べる。「七十列伝」に於いて第七十は「太史公自序」であつて、司馬遷自身の家系、六家（陰陽・儒・墨・名・法・道）の学の要旨と批判、父談の遺命、上大夫壺遂との問答、著作動機等を述べるものである。亦、第一「伯夷列伝」は前掲拙稿に於いても触れた所であつたが、大序的性格を持つ一文であつて伯夷なる人物の伝がその主体を占めるものではない。司馬遷自身を含めて後世に名を残す事が現世に於いて不運に遭遇した者への最大の賜物とする考えが彼の中にあつたと思われる。ことに個人の行蹟が消滅しやすい事を憂えた一面があり、その下地には人間そのものに対する愛惜の情があつたと言える。

「列伝」そのものについて最も問題となつたのは伝の語である。「索隱」は「謂敘列人臣事跡、令可伝於後世」と解して最も司馬遷の意に近い様に思われる。伝が漢代に於いては古書を意味する場合がある事は「李將軍列伝」に「論語」を「伝曰」として引用しているのを見て理解されよう。しかし、此処で言う伝の解としてはいささか趣を異にする。筆者は司馬遷の後世に伝えたいという願望のあることを重視したい（拙稿「史記列伝小考」東洋学研究第三号）。

「七十列伝」には前掲盧南喬氏の論文中で述べる如く類伝（性質相従）、分国之史、所謂伝記という記述内容による分類が出来る様である。類伝は「刺客列伝」「儒林列伝」「游侠列伝」「貨殖列伝」等によって知られる様に、

幾人かの此の様に分類され得る者達が一伝中に記述される形式を指している。例えば刺客には曹沫・專諸・子襄・聶政・荊軻等が記載されている。分国之史とされるものには「東越列伝」「朝鮮列伝」「西南夷列伝」「匈奴列伝」「大宛列伝」等があるが、国或いは族を以つて記述されているものである。

「列伝」の第一から第七十に至る各伝の位置について、趙翼は前掲著書の中で「其次第皆無意義、可知其隨得隨篇也」として位置関係の見当らぬ事を例を挙げて述べている。しかし乍ら、李長之氏は前掲著書中の司馬遷風格之美学分析の項に於いて、各伝の位置が夫々の理由を以つて排列され、完成された建築美を見い出すとすら述べている。但し、「大宛列伝」が第六十三に位置するものについては——趙翼が隨得隨編の例として挙げた一としてこの伝があるのだから——李氏もこの一篇の位置関係が基だ不明としている。この点について筆者は「史記列伝初考」（東洋大学紀要第二十七集）に於いて司馬遷が故意に「酷吏列伝」と「游侠列伝」の間に排列したものであって、この不自然さの故に却つて此処に読者の注意を喚起しようとしたのではあるまいかと推測した。

「酷吏列伝」は武帝を中心とする漢帝国の法の嚴酷なる執行人達の伝記が主体である。張湯を筆頭として凡そ十一人について述べられているが、如何に彼等の法の執行が嚴酷なものであつたかは「非武健嚴酷、惡能勝其任而愉快乎」（酷吏列伝）と酷薄な人間でなければどうして此の任務に耐え得ようかと司馬遷は述べる。また、張湯について「平準書」の中では「張湯死、而民不思」と全く人民に信望のなかつた様子を記述している。だが司馬遷は彼等酷吏と称せられる者達の中に廉潔と称してもよいと思われる美点を見い出して評価しているのである。従つて慘酷にして姦汗なる者は人の戒めと為し得るし、酷薄ではあつても廉潔なる者は任務に忠実にして人の規範と為し得る事を公平な目で見ていのである。法の執行が如何に苛酷なものであつたか、例を挙げれば王温舒

は広平郡の都尉（武官）となった時、特に十余人の悪官吏を使って——その為め裏がわかる——郡中を見張らせて摘発を行い、場合によっては一族皆殺しまでやつてのけたために盜賊は広平郡に近づかなかつたという。また、大姦悪なる者は一族皆殺し、小姦悪なる者は死罪にしたい旨を上書奏請して僅か二三日後には早くも着手し、刑死者の血は十余里にわたつて流れたというが如きであつて、酷吏と称せられる所以である。

他方の「游侠列伝」は法網を破るも止むなしとする側にある。司馬遷は郭解なる游侠を描く事にこの伝の半ばを費やしているが、御史大夫公孫弘の論議によつて郭解が族滅された記述をもつて惜哉と慨嘆し終る。彼等游侠の徒は人の困難を救うためには一諾命をも投げ出す者達であつて、庶民の生活感情からして言えば称賛される存在であつた。しかも、当時彼等が非常に大きな力を持つていた事が判明する話がある。劇孟は諸侯にまで名の知られた任侠の徒であつたが、呉・楚が反乱を起した際に彼を味方に引き入れていない事を知つた、後の宰相周亜夫は劇孟を味方にしていない呉・楚では大した事は出来ぬと判断したという。劇孟の去就を一国と同様の重みで考えていた事がわかる。また、郭解の名声が高くなつてから道で会う人が皆さけた中で一人だけ足を投げ出して彼を見ている者があり、解は自分の徳のいたらぬ反省の材料とした上、この不作法な男のために県の属官に頼んで踐更（兵役交替）の時には外して欲しいと申し入れて数回にわたつて実行されたという。これ等の話は「游侠列伝」に記述されている処のものである。司馬遷がこの伝を立てたのは「誠使郷曲之侠、子季次・原憲、比権量力、効功於当世、不同日而論矣」という其の生きた時代に於ける功績には、はるかなへだたりがある点に注目したからに外ならない。「考証」には「周末游侠極盛、至秦漢不衰、修史者不可没其事也」と述べ、歴史家として注目せざるを得ない社会情勢があつたとするものである。司馬遷の記述中に於ける季次・原憲は共に孔子の弟子

で、仕官せずして読書と君子の徳を以つて隠棲し終つた人物であり、しかもその名声は後世長く伝えられ慕われている者達である。司馬遷の先に挙げた立伝の理由よりして此の二人の対置されている意味が一層明らかとなる。強大な国家権力下に於いてこの様な著述を為すことは実に勇氣のいるものであつたと思われる。相反する二伝の間に此の一伝を入れる事で隠蔽すると同時に読者の注意を喚起するものである。

さて、班固は「漢書、司馬遷伝」贊に於いて「論大道則先黃老而後六經、序遊俠則退処士而進姦雄、述貨殖則崇勢利而羞賤貧」と批判して、専ら「列伝」にのみ集中している。黃老については先に司馬遷の歴史家の立場として少しく触れた所であり、遊俠についても同様先に触れた。今一つ批判の対象となつている貨殖は第六十九に立伝されている「貨殖列伝」を指している。「無嚴処奇士之行、而長貧賤、好語仁義、亦足羞也」とか、祭祀・飲食・被服に事欠くが如きは慙すべきもの等と記述する所にこの非難があつたのであるが、富の追求が人の情性であるとする司馬遷の認識と、班固が「漢書、貨殖伝」に於いて貨殖による敗俗傷化を訴える立場、即ち自己の立つ社会情勢が整つたものであり、儒家的教養が定着した時代の認識とではこの様な批判が出るのは当然である。司馬遷は此処でも人間の行動の一つとして幾人かの才能を遺憾なく發揮した者のために立伝したのであつて、姦巧を以つて富むものを是とするのでは勿論ない。貨殖の世界に於ける物の理を透徹した眼で確かめて記述しているのである。

以上「史記」に於ける「本紀」「表」「書」「世家」「列伝」の五体裁を概観して此の稿を終る。

## 第三節 司馬遷より見た思想界の一側面

一

漢代の儒学の大勢を知る上で有力な一つの資料を提供してくれるのが「史記」である。勿論、著者司馬遷という卓越した歴史家の目を通してではあるが、当時の儒学の興隆の様相、或いはこの興隆に至るところの経緯にも触れられている。それはまた多岐にわたるものでもある。しかしながら、儒家が漢代の政治界に現われたのを司馬遷は同時代人として見聞していることにこの資料の確かさがあるといえるであろう。司馬遷自身が儒家思想に多大の尊敬をはらっていたことは、孔子を「世家」に序し、また「仲尼弟子列伝」を書き、更に当時の儒家について「儒林列伝」を立てて記述するなどによっても窺われるところである。また、「漢書・儒林伝」には孔安国に触れて司馬遷が彼について学んだことを記しており、「太史公自序」には「春秋」の論議が述べられていて、自ら大儒董仲舒に聞いたとしているのは、正に彼の儒家的素養がいかに深かったかを裏づけるものである。さらにまた周公・孔子の後を継ぐものは自分であるとの意を表明している。諸篇に見える司馬遷の評語などには儒家が経典として重要視するところを以って批評するなどの例が散見し、批評基準のよって来たところを推測することができよう。

ところで、漢代思想界は儒家を第一としながらも、いろいろの思想が混在していた形跡が見え、特に漢代初期に於けるそれは不明瞭な面が多い。勿論、儒家が第一の位置を約束されたのは武帝期であるが、それに至る経緯の側面を司馬遷は把えている。その複雑な漢代儒家の様態を本田成之氏は「前漢の経学」（『支那学』第二卷十・十一・十二号）に於いて大略次の如く述べられている。前漢の経学は刑名法術と陰陽災異を以ってその精神とし、しかも六経に根柢を据えている。要は如何にしたら当世に用いられるかという所にあった。苟くも実際の用に役立たせようとするなら勢い漢儒の如くなるのが当然であろう、と。実用のための変化が儒家の中に加わっていることを指摘されている。しかしながら、その反面には純粹にその学統を守り通そうとした者達がいたことをも「史記」は書き残している。後に触れる二儒生の如きがそれである。

さて、「劉敬叔孫通列伝」の「太史公曰」には叔孫通は世に現われ用いられることを希い、現今の務を考えて礼を定め、その進退は時と共に変化せしめて、結局は漢代の儒家の宗となつたとあり、漢代儒家の先駆を為すという榮譽を与えると共に、時世と変化適応してゆく彼のあり方を伝中に述べている。当世に用いられることを希う一儒家の姿を浮き彫りにしている篇である。叔孫通は秦の時には文学をもつて召されて博士となつた者であるが、二世皇帝の問答に示されるように保全第一を心掛ける様子が見える。逃亡した彼は項梁に従い、次いで懷王、そして項羽に仕えたのちに高祖に従うというように実にめまぐるしい姿を吾々に示す。その応変の鮮かさは思想を掲げて潔白さを誇る儒家の徒という、顔回や原憲を筆頭とする彼の後世伝えられる印象とははるかに異なる思いがするようである。叔孫通には何ら儒家たるの誇りすらないように思える記述が見える。高祖が儒服を嫌うのを知るや直ちに楚風の服を着てみせるのである。また、彼が高祖に従つた当時はいまだ争乱の時期であつたため、

彼につき従うところの弟子達を推薦することなく専ら群盜や壯士を推薦しているのである。これらはその時勢に合う彼のあり方を如実に示すものであると云えよう。結局、叔孫通は時宜を得た高祖への進言によって確たる地位を獲得するに至るのである。彼は「夫儒者難与進取、可守成、臣願徵魯諸生、与臣弟子共起朝儀」と述べ、守成こそ儒家の仕事という時期到来を宣言するかのようである。かくして高祖をして「吾適今日知為皇帝之貴也」と云わしめた儀式を制定したのであつた。

「儒林列伝」にも記述されてあるように、如上の経緯をもつて叔孫通に従つていた儒生は全て官に任ずることを得たのである。司馬遷が叔孫通を以つて漢朝儒家の宗としたのはいよいよ儒家が具体的に朝廷に重きを為す地盤を築いたと考えたからに他ならない。但し、彼のあり方がそのまま容認されるべき儒家の処世であつたかといへば、司馬遷は必ずしもそうは考えていなかったようにも思われる。司馬遷は魯まで態々儒生三十人を迎えに出かけた叔孫通に対して、二名の儒生が同行することを拒絶した話を記載している。それはよく彼等のあり方を示すものである。

公所事者且十主。皆面諛以得親貴。今天下初定。死者未葬、傷者未起。又欲起礼楽。礼楽所由起、積徳百年而後可興也。吾不忍為公所為。公所為不合古。吾不行。公往矣。無汗我。叔孫通笑曰、若真鄙儒也。不知時變。

(劉敬・叔孫通列伝)

司馬遷がこの二儒生と叔孫通との会話を態々記載したのは、恐らく二儒生の云うところに共鳴するものを覚えていたからではあるまいか。まず叔孫通のもつ諂諛への非難であるが、儒家の潔白性、純粹性というものとは相容れぬものがあるであろう。さらに驚くべきことは礼楽の興隆というものが徳を積むこと百年の後にあるべきで

あるという、いささか誇張を含むとはいえ信念の確固たる姿勢であろう。天下が定まって未だいくばくもなく、死者は葬られず傷者はなお立たぬ此の時期に礼楽を興そうとすることの尚早を戒めるこの一文は、儒家の思想がまだ治国の理論とはなり得ないであろうとする考えを示している。儒家の説く理想的国家像は安定した世界でこそ通用するものである一面をも示すものであろう。儒家の理想が長い忍耐の歴史の中で命脈を保ち続けてきたことの自信がこのような言辭となつて表われたのであろうか。魯に於いてこのような考えを持つ儒生のあつたことは、魯にこそこの学派のもつ純粋さが保持されているという司馬遷の認識をも反映しているように思われる。

さて、魯に於ける儒家の態度について、司馬遷は一つの象徴的な事件を「項羽本紀」の中に記述している。項羽の死後、魯だけは主君である項羽のために節を守り死せんとする様子が見えた。「儒林列伝」では魯の儒者たちが高祖の軍に囲まれた中にあつても、なお礼楽を講誦し、絃歌の音が絶えなかつたという。司馬遷はまことに聖人の教化が行き届き、礼楽を好む国ではないかと感嘆するのである。高祖もまた感じ入りこのために項羽を魯公として葬り、泣いて立ち去つたという。貝塚茂樹氏は「儒教的精神の勝利」（「古代中国の精神」所収）の中に於いてこの事件は「武帝時代に於ける儒教の現実界における勝利を予見させる事件である。儒教が中国の国教となり得た根源としてわたくしは今まで述べてきた一連の出来事に示されている比較的少数の学徒の乱世に遭つて義を守る熾烈な思想主義を重要視すべきではなからうかと考えるものである」と述べられる。

司馬遷は「孔子世家」の「太史公曰」の中で、魯に行つて実際に仲尼廟堂の車服礼器を眼にし、儒生の孔子の旧宅に習うのを見て徘徊して立ち去ることができなかつたと述べている。これもまた司馬遷が魯に於いてこそこの学統が保持されているという認識の基盤となつているものといえるのではあるまいか。しかし乍ら、さきの魯



の二儒生に対する叔孫通の返事はいかにも一笑に附す態度である。時勢の変化を知らぬ鄙儒であるという。この時勢に変化適応することこそ叔孫通のあり方であったのである。二儒生がまだその時期にあらずとしたのに対して、この時期こそ「可守成」の機会であるとし、結果的には彼が引きつれた儒生たちは尽く官に任じたのであるから、司馬遷が漢朝の儒宗としたのにはその功績をも含めて立伝した訳である。「太史公自序」に於ける立伝の理由には朝廷の礼を明らかにし、宗廟の儀法を制したことを挙げてゐる。また、七十列伝を作つた動機についての説明には義を扶け、才氣の人にすぐれて、時機を失わずして功名を天下に立てたものについて述べたとする。してみると時勢を機敏に把えて、高祖に尊貴を思い知らせることににより、儒家の地位を重からしめた功績が司馬遷をして立伝せしめたことになるであろう。一方に於ける二儒生も儒家としてのあり方を示すものとして司馬遷を把えていたのであろう。

ところで叔孫通の所謂儒家としての学はいかなるものであつたかとなると、どうやら礼のみであつたように考えられる。彼は高祖に進言するのに礼は時世や人情によつて増減するもので、夏、殷、周の礼の損益する所は知ることができ（論語・為政篇）というのには礼は同じきを繰り返さないの意である。願わくは古礼を取り秦の儀法をまじえて新らしい儀礼を作りたいというものであつた。しかしながら、彼が引き連れていたところの百余人では不十分であるとみえて魯の儒生三十余人を徴し出すことになる。「儒林列伝」には丞相田蚡が黄老・刑名百家の説をしりぞけて文学儒者数百人を採用したという記載があるが、「漢書・儒林伝」には「延文学儒者以百数」と記述され、また、「平津侯主父列伝」には元光元年（「史記」及び「漢書・公孫弘卜式兒寛伝」には元光五年）に作るが、「孝武本紀」に後六年竇太后崩。其明年、上徵文学之士公孫弘等」。考証、元光元年。とあり、「漢書・

武帝紀」には元光元年五月の項に「董仲舒・公孫弘等出焉」とあるに拠って元年とした）に推薦された公孫弘が太常のもとに出頭したが、その人数は百余人であったとあることから考えて、恐らく「漢書・儒林伝」や「平津侯主父列伝」に見える人数の方がより事実に近い、この時期に於いても百余人というのは甚だ思い切った採用であったように思われる。してみると高祖の五年から七年にかけての時期はようやく戦乱が一段落したばかりであるから、叔孫通に当初より従う者百余人と更に魯の儒生三十余人を加えた人数はいささか誇張されたものなのではあるまいか。

そもそも叔孫通が魯の儒生を徴さなければならなかった理由は何んであったのか。先に彼が従っていた百余人の儒生では不十分であったと考えた。彼等は戦乱を経て叔孫通につき従って来た者達であるから、或いはその教養は浅かったとしても無理はないように思われる。ともあれ叔孫通の見るどころ礼法を實際に取り行うには不安な材料が多かったであろう。そうでなければ彼自身が態々魯にまで出かけて行く必要は見当らないように考えられる。叔孫通が礼を以って高祖に進言したのには、朝廷には戦乱に身を置いてきたために粗暴に振舞う者が多く、当然饗覽を買うという有様に礼を以って整正するのが最も効果的であると考えたからである。それには彼自身が礼法に通暁していなければならなかった筈である。ところがいま魯の儒生三十余人を徴さなければならなかったのは、彼が従っていた儒生のみならず彼自身も指導して儀法を定めるには荷が勝ちすぎたということであるように思われる。かくして、彼等は魯の儒生を加えて月余におよぶ練習を重ねたという。もつとも一経をもつて儒家と称するのは叔孫通等だけに限らず、漢代のほとんどの学者は儒林列伝に述べられてあるように一経をもつて一家を立てていたようである。とはいえ全く他の経を学ばなかったというのでは勿論ない。董仲舒など

の議論は「春秋」一経のみではできぬことであると本田氏の前掲論文に於いても指摘される通りである。主父偃などの伝にも「春秋」「易」及び諸子百家を学んだとある。

更に、魯の儒生を徴したことの原因については前述の如きもののみではなく、魯こそ儒教の学統を守るものという認識が叔孫通にもあつたように思える。魯が最後まで節義のため死せんとする気構えをみせ、絃歌誦する様子は甚だ劇的であり、このことによつて高祖が魯の儒生に対して特別な感情を抱いていたとしても不思議ではないであろう。事実高祖は先に触れたような遇しかたをしている。叔孫通は変化適応することで半生を過してきた、したがつて魯の儒生等の如く落ちついて学問に専念できなかったであろう、しかしながらこの二者のありようは甚だかけ離れたものがあつて、司馬遷がこれを取り上げて記述した理由の一端もここにあるように思われる。魯に出かけた叔孫通は二儒生の非難を浴びるが、「叔孫通笑曰、若真鄙儒也。不知時変」と記述されるのがこの非難に対する回答である。田中謙二氏の「史記の〈笑い〉」（『東方学報』四一）は「史記」に記述される笑いの特異さを分析された論考であるが、氏の指摘されるように笑う主体の心理を投影するものとして叔孫通の笑いを考えた場合、ここに於ける「鄙儒」であると極めつける笑いも意外に複雑なものであつたのではあるまいか。表面上には明らかに嘲笑であり、語調も強いものがある。しかしながら彼の従える儒生が百余人もありながらなお且つ魯の儒生三十余人を徴さなければならなかつたことの心中を考えると、単に自分を優位におく者としての笑いではないように思われる。

更にこの魯の儒生を徴することについて、先の高祖の魯の儒生に対する特別な感情があつたとするならば、この魯の儒生を徴す何らかの言葉か、或いは言外に示されるものがあつたかも知れない。「史記」はこの間の事情

について触れるところはないが、或いは叔孫通自身がこの間の機微を察して自ら言い出したものとすれば、これもまた彼のもつ諂諛の表われとして、より一層その心裡は複雑なものがあつたのではあるまいか。

## 二

叔孫通は漢朝初期に於いてその儀法を制定し、高祖をして皇帝たるの尊貴を知ると言わしめ、遂に漢朝に儒教の根を据えさせた功績を評価して司馬遷は彼を儒宗と称したのであつた。ところで、叔孫通の儀法の制定などによる目前みるべき成果があつたとはいへ、この時期の前後はまだ儒家にとつては長い甚だ華々しくない歴史が展開されてきたのである。やはりそれは苦難の歴史といえるかも知れない。

秦の所謂焚書坑儒なる事件は学問の断絶を迫るものとして悪名高い。「儒林列伝」に於いて儒家が陳渉の下に孔子の礼器を抱いて馳せ参じて臣下となつたのは、その積年の怨みをはらさんとしたからであつたと記述されている。しかしながら、儒家のみがその対象になつたような印象を我々に与えるが決して然うではない事も周知の通りであつて、このように見えるのは儒家の喧伝によるところが多かつたためであらう。実際には秦では儒家をも文学として招いたことが同列伝によつて何われる。同伝中に記述される伏生は秦の博士であつたとある、また、司馬遷が漢朝の儒宗として記述し作伝した叔孫通は、秦の二世の下にあつて博士を待命する者であり、後に博士となつてゐる。更に二世の招集によつて面前に集つた博士・諸生三十余人の中には幾人かの儒家がいたのであらうと考えられる。従つてこのように秦に仕えていた者達が有つたことも事実なのである。

漢朝になってからは經学を専門に修めて伝授する者があると共に、他方では叔孫通の如く政治上に於いて活躍する者達とがあつたのである。前者に於ける訓詁の伝授が「儒林列伝」に主として記述されるところのものであり、政治上に於いて實際みるべき活躍する場を得た者が立伝せられてその事跡が載せられるに至つたともいえる。勿論、司馬遷の評価、選択の眼を経てではある。宮崎市定氏は「中国の歴史思想」(「アジア史論考」中巻所収)に於いて、司馬遷が儒教の立場に立つているは明らかであるが(中略)併し「史記」が決して儒教の目からはかり社会を觀察しているのではない。(中略)彼が追求するのは儒教の底に横たわる普遍的な道、儒教道徳を成立せしめた人間性であり既成の儒教道徳の型ではないと述べられる。その故にこそ司馬遷は班固によって大道を論ずれば黄帝を先にして六経を後にし、游侠を序ぶれば処士を退けて姦雄を進め、貨殖を述べれば勢利を崇びて賤貧を羞かしむと贊に於いて非難されたのである。しかしながら、このことが所謂司馬遷の良史之材たる所以であつたと云える。「貨殖列伝」について、宇都宮清吉氏は「史記貨殖列伝研究」(「漢代社会経済史研究」所収)に於いて司馬遷の立場はひろくして厚い人間主義的立場に立つものとされ、戦争が社会と経済の不調和をもたらし、更に経済界が独自の民衆の世界であるにもかかわらず政治的権力が入りこんだために、今や商業的経済社会の没落が決定的になりつつあることに対する批判であると述べられた。「游侠列伝」について筆者は曾つて「史記列伝初考」(「東洋大学文学部紀要二十七集」なる小論を公にしたが、游侠の信義と功用は庶民の生活感情から取るべきものありとした司馬遷は、この人間生活の一つの世界が嚴酷なる法網などによって終焉の時を迎えようとしていることを慨嘆したものであるとした。また筆者は「史記列伝小考」(「東洋学研究第三号」で「伯夷列伝」に記述される「歳寒然後知松柏之後凋」(論語・子罕篇)の語及び拳世混濁、清士乃見の語によって表出される司

馬遷の感慨がすでに過去をいとおしむところのものであったとした。B・ワトソン氏は著書「司馬遷」（今鷹真訳）の中で武帝下に於いてよいことが数多成し遂げられ、またよいことが数多滅び去った。成し遂げたことではなく、滅び去ったことのほうが司馬遷の眼にとまったと述べられる。司馬遷は「太史公自序」に於いて「扶義俟儻、不令己失時、立功名於天下。作七十列伝」とその立伝の理由を述べるのであるが、人間そのものの生き方を共感をもって記述しているといえよう。「史記」を著述する上での司馬遷の態度は人間性の上に立脚した自由な精神によってもたらされたものであった。

漢朝の初期は「高祖本紀」の「与父老約。法三章耳。殺人者死・傷人及盜、抵罪。余悉除去秦法」という告諭や、「太史公曰」にある「秦政不改、反酷刑法。豈不繆乎。故漢興承敝易變、使人不倦。得天統矣」、また「酈生陸賈列伝」の陸賈の言に秦は刑法をのみ守って変えることが無かつたために滅亡したというような記述に示されるように、秦の法治主義を反省するにはじまってこの弊害よりよく脱却にむかつたばかりであった。そして、この時期に於けるまだ変化動揺する社会に最も有用であったのが道家の現実には思想であったといえよう。「曹相国世家」の曹參は高祖の下で東奔西走してその功績は多大なものであった。彼が斉の宰相として任に就いていた時に、長老諸生を招いて人民の安定した生活をさせるべき方法を聞いたが、斉に本来いた処の儒者が百余人であったにもかかわらず、それぞれの言説が異っていたために參は何れとも決定することが出来なかつたという。結局、膠西の蓋公が黄・老の言説を身につけていることを聞いて招きその説を取ることにした。「治道貴清静、而民自定」（考証、老子下篇云「清静為天下正」）又云「我好静而民自正」というのが蓋公の答えて、九年間の在位中斉国はよく治まって賢相と称されたという。「太史公曰」には「參為漢相国、清静、極言合道。然百姓離秦

之醜、後参与休息無為。故天下俱称其美矣」と述べる。この時期の社会情勢に道家の思想がいかに適合していたかがわかると共に、司馬遷が曹参のあり方に賛美する気持を有していたことを思わせる記述である。また、「太史公自序」に述べられる父談の六家の学問の要旨には道家にのみ貶意が見られず、「道家、使人精神専一、動合無形、瞻足万物。其為術也、因陰陽之大順、采儒・墨之善、撮名・法之要、与时遷移、応物变化。立俗施事、無所不宜。指約而易操、事少而功多」としてある。そして父談は黄・老の学を黄生に学んだという。司馬遷がこのような談の道家に対する論を支持する考えがあつたことはほぼ確かである。そしてこの時期には自由な精神と自己の才能を表現する場が保障されてあつたと見られるであろう。反面にはまだ漢朝の体制には固定されずに束縛すべきものが多く存在せず流動的な面があつたと云えよう。

ところが武帝時に入つて国家としての体裁がいよいよ整備されてくると、この帝国を維持する理論が要請されて儒教がその地位を獲得してくるのである。宮崎市定氏は「中国史」上に於いて儒家が他の諸家よりも優位に立つた理由を、「儒教の何よりの強味は、それが歴史学を踏まえていることである。(中略) 儒学は古くは夏殷周三代の盛時があり、下つて春秋がそれを受け、春秋の終りは孔子の時代であり、それ以下は孟子、荀子等の学者が承けて現代史に至っている。こういう一貫した歴史体系を持っているのは儒教だけである。言いかえれば儒教だけが、中国とは何であり、何であるべきかを教えることができたのであつた」と述べられる。国家の隆盛と永続を願う漢朝に過去の事例とかくあるべきであるという現在及び未来への信念を与えたのが儒家であつたといえるであらう。

さて、これに先だつて「鄼生陸賈列伝」には甚だ暗示的な陸賈と高祖との問答がある。陸賈はしばしば高祖に

対して「詩経」や「書経」の義理について説き且つ称赞したという。高祖は自分は馬上にあつて天下を得たのであつて「詩経」「書経」には関係がないと罵つたとあるが、これに対する陸賈の言は堂々たるもので、

居馬上得之。寧可以馬上治之乎。且湯・武逆取而順守之。文武並用、長久之術也。昔者吳王夫差・智伯、極武而亡、秦任刑法不変、卒滅趙氏。郷秦秦已并天下、行仁義法先聖、陛下安得而有之。

と述べ、高祖は不愉快な様子を示す一方に恥かしい様子があつたと司馬遷は記述する。高祖が儒者嫌いであつたことは「黥布列伝」などにも見え、天下平定後に於ける随何の功績に対する高祖の「腐儒」という罵りの語が、天下を治めるのに何んの役に立つかという言葉と共に記述されており、結局はその功績を論ぜざるを得なかつたという。しかし、随何の淮南王に対する言説は多分に縦横家的性格をもつものであるように見える。従つて高祖の持つ儒家についての認識はおよそ当時の知識人士をそのように考えていたということであるらしい。また「鄒生・陸賈列伝」には「沛公不好儒。諸客冠儒冠來者、沛公輒解其冠、溲溺其中」とか「豎儒」とかの記述が見えて、その毛嫌い振りが伺われる。しかし、鄒食其は沛公に説くのに六国合従連衡の時代をもつたとあるから、これもまた縦横家的性格が強くあつたものと見ることが出来る。同伝には考証に指摘されてあるように多分に後人の補入と思われる記述があり、「太史公曰」には世上に鄒生を伝える書は多いが「鄒生被儒衣往説漢王。迺非也」であると否定している。しかし、この一文には「状貌類大儒、衣儒衣冠測注」という様子と、高祖の「言我方以天下為事、未暇見儒人也」とする拒絶が見え、鄒食其もまた高陽の酒徒であつて儒者ではないと明言する。従つて司馬遷が云う世上に伝えられる鄒生の伝記はどうやら儒者ではないことを強調する一例でもあつたのである。ともあれ、このような縦横家的活躍をする者達も儒家の名を冠せられて世上に伝えられていることを正し



たのが「太史公曰」の記述であったと考えられる。このような中で叔孫通は儀礼を整えることで高祖の帝位の尊貴を形の上で知らしめ喜ばすことになる。

孝文帝の時期には賈誼がいる。孝文帝は「儒林列伝」には本来刑名の学を好んでいたとある。賈生の伝には詩を賦し文に巧みであることで郡中に名が聞えていたとあり、また、李斯に学びすこぶる諸子百家の書に通じていたと記述されてある。板野長八氏の著書「中国古代に於ける人間観の展開」の「賈誼」の項には「賈誼は法刑による支配と礼楽による教化を併用し、言わば法家と儒家とを合せることになった。又、礼・法の外にその性を全うしようとする荘子的見解を懐き、且つ呪術的信仰をももっていた」と指摘される。司馬遷は「太史公曰」に於いて「読服鳥賦、同死生、輕去就、又爽然自失矣」と慨嘆する。孝文帝は即位したばかりで謙讓して積極的ではなかったが、諸律令の改定などは賈生より出たものであった。しかしながら、周勃・灌嬰・張相如・馮敬等によって毀られたために文帝もまた彼を長沙王の太傅に任命した。中央より追われて齟齬した賈誼の精神は生死を同一視し去就を軽んずる世界に憩うのである。賈誼がこのような複雑な思想傾向を兼ねて持たざるを得なかったのは、君主を始めとするこの時代の帝国を永続せしめるための理論としての儒教と実際上の政策に於ける法・道・儒の混然たる思想界の複雑さでもあったように思われる。

漢朝初期は先の曹参のみではなく陳平もまた黄・老の学を好む者であった。蕭何もまた「蕭相国世家」の「太史公曰」には「因民之疾秦法、順流与之更始」と記述するところよりすれば道家の傾向をもつ者であった。高祖の功臣の多くはこの時期ようやく老境にあった。孝文帝は刑名の学を好みながらも一方に於いては儒教についての理解も相当に行き届いたものがあつたようである。詔中の「詩経」（大雅、洞酌）「愷悌君子、民之父母」の引

用もさることながら、当時天下に「尚書」を学ぶ者が居らず、ただ済南の伏生のみが秦の博士として、「尚書」を治めていることを知って、わざわざ鼂錯を派遣して学ばしめたことが「袁盎・鼂錯列伝」に記述されている。板野氏は前掲著書の「鼂錯」の項には錯は儒家ではあるが郡県制度の上に立つ国家権力に忠実であって法家系の人に非常に接近していたと指摘される。同伝に記述される「鼂錯曰、固也。不如此、天子不尊、宗廟不安。錯父曰、劉氏安矣。而鼂氏危矣。吾去公帰矣。」という父子の対話はその側面を浮き彫りにしたもので、この前文に記される改定されるころの法令三十章が錯の手に成ることを考え合せると彼の国家安定の策は法家的な厳酷さをもつと云えよう。「太史公曰」には錯を評して「語曰、変古乱常、不死則亡、豈錯等謂邪」と述べる。しかし、呉楚七国の乱は漢朝にとつては基礎を強固にするものとなった。そもそも鼂錯は申不害、商鞅などの刑名の学を軹県の張恢に学んだ人物であった事が記述されている。

文・景両帝より武帝に至るの間、殊に景帝より武帝初期の時代は竇太后が黄・老の教えに心酔しており、それは「外戚世家」には黄帝、老子の言を好み、景帝を始め太子や竇氏一族は黄・老の書を読み、其の術を尊ばざるを得なかったとあるほどである。従つて儒教を好まぬということもあつて時には儒家への圧迫もあつたが、「万石・張叔列伝」には竇太后は儒者は飾り多く内容が少ないが万石君の家だけが違つたと云つたとさへ記述されている。また、「儒林列伝」には景帝の面前に於いて詩の博士である轅固生と黄生と論争したことが記述されている。黄生は「太史公自序」に父談が「習道論於黄子」とある者と同じ視されて考えられている人物であり、徐広は「好黄・老之術」と注する。しかしながら、この論争に於ける黄生はその言辞に於いて「韓非子」外儲説左下に記載される費仲の紂に説く語を引いて「冠雖敝、必加於首。履雖新、必関於足。何者、上下之分也。」（外儲説左下「冠

雖穿弊、必戴於頭。履雖五采、必踐之於地」とある）と述べ、法家的性格との接近を物語っているようである。この論争は景帝によつて打ち切られて、これより後は受命・放伐について敢えて明らかにする者が無かつたといふ。轅固生は廉直であつて竇太后の前で老子の書について「此是家人言耳」と述べて怒りを買つたとある。太后が期待するものは美事に裏切られたのである。この二学派の抗争は相当に激しいものがあつたように見られる。そして、轅固生の目は阿諛を事とする儒者にも向けられていて、公孫弘に対する「務正学以言、無曲学以阿世。」は彼自身の性格と相俟つて生れた敵しさであろう。それはまた叔孫通に対する彼の二儒生のもつ潔白性と相俟つるものがあるように思われる。

### 三

さて、さらに「史記」中に記述される者でその学んだところを明らかにしている幾人かを列挙すれば次の如くなる。「張枳之・馮唐列伝」に王生は処士で黄帝・老子の言に通じていて張枳之を重からしめる役割を果したとある。して見ると張枳之もまたこの影響を受けてその持する処も同じであつたように考えられる。「万石・張叔列伝」に直不疑は老子の言を学ぶとある。張叔は「孝文時、以治刑名言、事太子」とあり孝文帝に合う者であつた。且つ不疑・張叔共に長者と称されたとある。「田叔列伝」には「叔喜劍、学黄・老術於楽巨公所」とある。「魏其・武安侯列伝」の魏其侯竇嬰は竇太后の一族であるから「外戚世家」に記述されるように、当然黄・老の書を読まざるを得なかつた者の一人であつたのであろうが、「魏其・武安、俱好儒術」とあるから儒教にも明る

い人物であったようである。武安侯田蚡は「蚡并有口。学槃孟諸書。」（漢書芸文志）雑家に「孔甲槃孟二十六篇」自注、黄帝之史、或曰夏帝孔甲。似皆非。とある。雑家者流については班固は「兼儒墨、合名法、知国体之有如此」と説明する）と記述されており、この「学槃孟諸書」は諸家の長所を取って学んだの意味に解すべきもののように思われる。そしてこのような傾向よりすれば前述の儒教に明るかったのはその学問的傾向のしからしむるところであつたろうと考えられる。「孝武本紀」に記述される如くに「上郷儒術、招賢良。（中略）欲議古立明堂城南、以朝諸侯。草巡狩封禪改歷服色事。」せしめたのであつたが、文学を以つて公卿に列せられてこれに関与した趙綰・王臧・魯の甲公等を推薦したのは魏其侯・武安侯であつた。しかし、この事は竇太后との確執を生み、結局は王臧・趙綰等が自殺せざるを得ない立場に追い込まれることになる。この事件につて「魏其・武安侯列伝」には竇氏一族に対する素行治まらざる者を取り締まるを以つてする弾劾の一件が記されており、彼等が「務隆推儒術、貶道家言」であつたことに黄・老を信奉する竇太后がいよいよ不愉快になつていつたと記述されてある。また、建元二年に政治上の事柄を竇太后の手を経ない形にしたいと趙綰が上奏したことで彼女の怒りを買つたとある。ただ、同伝にはこの二人の自殺についての記載は見当らない。此の二人の退けられる直接的な要因として記述されるのは右の三項のうち最後のものである。しかし、「孝武本紀」には黄・老の学を好んで儒術を好まなかつた竇太后が趙綰等の不正を調べ上げるといふ隠微なやり方で彼等を自殺に追い込んだとある。このために「諸所興為者皆廢」とやりかけた事柄がすべて廢絶せざるを得なかつた状況が記述されている。此処では二つの思想のぶつかり合いの形が見られるのである。この事は「封禪書」に於いても同じく記載されている。

もつとも、「孝武本紀」にはその成立上に問題があり、「漢書芸文志」や「司馬遷伝」に於いて「有録無書」と

記述される十篇の中に算えられる一篇であつて、褚少孫の手によつて鈔写成立するものとされている。「太史公自序」の集解には「司馬遷作景帝本紀、極言其短、及武帝過、武帝怒而削去之」云々という衛宏の説を引いて、その失伝の理由を語り、李陵の禍との関連で司馬遷の悲憤と相俟つていよいよ彼自身の著作ではないとするようである。李長之氏は「司馬遷之人格与風格」に於いて「封禪書」との重複は補書するにしてもほとんどそのまま鈔写することは却つて不自然であると指摘して、むしろ、方士等に愚弄せられた武帝の一生を描くことで、ここに司馬遷の最大の風刺が込められておるとし、遷自身の著作であると考えている。これも、父談の封禪・祭祀に与らなかつたための憤死との関連よりすれば、司馬遷の屈折した心情が何らかの形を以つて表現せられて然るべきものように考えられる。班固の記述は単に目睹し得なかつたことの意味にも受け取られ、「太史公自序」には「今上本紀」とあるものが「孝武本紀」としてあるなど後人補筆を思わせる部分があるにせよ、封禪・祭祀に終始する武帝の姿は矢張り異様な描き方であるように思われる。武帝を描く時に司馬遷の脳裡にあつたものは匈奴等に対する政策よりも上述の如き姿であつたのであろう。

さて、趙綰・王臧等の自殺に追い込まれた一件は「儒林列伝」にも同様に述べられており、かように竇太后と武帝を頂点とする二思潮の争いはこれ等の犠牲をまで生じた激しいものであつた。趙綰・王臧等の自殺と申公の帰隱は儒家の衰退を余儀なくせしめ、事業の廢絶もまた時期を待たざるを得なかつたが、これも建元六年の竇太后の死によつて、儒家は一時的な逼塞から解放されることになるのである。趙綰・王臧は二人共に魯の申公の弟子であり、申公より「詩経」を学んだという。「儒林列伝」によれば申公はこの二人の推挙によつて朝堂に上つたとあり、帰隱も病氣によるものとあるが、前記の二人の自殺とは無縁ではあるまい。

「韓長孺列伝」には、「嘗受韓子・雑家説於騶田生所」とある。韓非子及び雑家の説を学んだとする処よりすれば、諸家の長所を適当に採るといふ傾向があつたものであらう。「太史公自序」には「智足以応近世之變、寬足用得人」とその著作の意を述べてその柔軟な処世がうかがえる。韓安国の推薦した人物には「廉士」という共通の特色がある外に、推薦された者の一人であつた壺遂には「太史公自序」に司馬遷との「春秋」についての問答があり、その儒家的素養の深かつたことが伺える。また、司馬遷と共に律曆の制定に参与している処から考えても相当な学問を有する人物と思われるが、これとする学派を示す記事は見当らない。やがては丞相ともなるべき人物であつたのが没したと愛惜の口調があるのみである。韓安国が推薦する者は天下の名士なのであり、これに拠つて見るに彼にはその学んだ所に示される如く固定的な狭さはなかつたように思われる。

「平津侯・主父列伝」に於ける公孫弘は「年四十余、乃学春秋雑説」と記述されて、四十余才にして学問を志したもののようである。「春秋雑説」について考証は何焯の説を引いて雑家の説であつて儒・墨・名・法を兼ね合せたるものとしているが、「漢書芸文志」の六芸略春秋に記録される「公羊雜記八十三篇」をもつて顧実は「弘習公羊蓋此類」としている。いづれを是とするかは軽々に判断することは避けなければならぬが、「儒林列伝」には「春秋」を以つて布衣より三公に上つたとあり、また、斉の胡毋生は「春秋」を教授し弘も「亦頗受焉」とあるから、「春秋」及び「雑家」の説と考えることの方が公孫弘の行動などに照らし合せてみて真実に近いように思われる。公孫弘は外面に寛大を装うという人物であつたらしい事は司馬遷の記述に見える処である。主父偃の死や董仲舒の流謫は弘の力によるものであつた。公孫弘については俣野太郎氏は「続・史記に描かれた公孫弘——史記における武帝時代第一——」（『無窮会東洋文化研究所紀要』第九輯）に於いて司馬遷の弘に対する厳しい記

述のよつてきたる処を緻密に分析論証されておられる。この厳しきは「太史公自序」に於ける「余聞董生」とする所より考えられる師弟かそれに近い関係にあつた董仲舒が公孫弘によつて流謫せられたことも無縁ではなからうと思われる。「習文法吏事、而又緣飾以儒術」とする記述よりすれば武帝の儒教に心を寄せることに巧みに迎合する趣が見える。この事については「儒林列伝」には轅固生が同じく齊より召されて弘に会つた折に「公孫子、務正学以言、無曲学以阿世」とする痛烈な語が記載されており、董仲舒もまた佞諛の徒として弘を見ていたことが同伝に記述されている。そもそも、公孫弘の相貌が秀麗であつたこともまた彼の重んぜられる因由の一つにすらなつてゐるのも、武帝の儒教への関心の程度も知れるようではある。また、「汲・鄭列伝」には公孫弘が「徒懷詐飾智、以阿人主取容」と非難する汲黯の語が見える。これは汲黯が黄・老の学を信奉することとも関連してゐるようであるが、弘の有様を如実に示してゐるようである。弘の上書は謙讓にして堂々たるものであるが、この時期に淮南王・衡山王の謀叛の追求が厳しく為されており、彼の保身より出たと見る方が當を得ているように見られ、武帝の慰留を得ている。「太史公曰」には時運に恵まれた者としており、「上方郷文学。招後又以広儒墨。弘為拳首」とある。「儒林列伝」には公孫弘が三公の位に上つてから、靡然として天下の学問を志ざす者は儒学尊重の風に向い、彼の上奏文が採録されて儒学興隆に果たした役割が大きかつたことを物語るようである。しかしながら、前掲侯野氏論文に指摘されるように、司馬遷の記述からは弘の学問を認めるようなものは見えず、彼の出世欲と阿諛による儒術の変貌（張湯等との結びつきによる）を語るものとなつてゐる点は見逃せない。ひいては武帝治世への批判ともなつてゐることを汲み取らなければならぬであらう。

主父偃については「学長短縦横之術。晚乃学易・春秋・百家言」とある。「漢書芸文志」の諸子略縦横家には「主

父偃二十八篇」と記録されているから、本来彼はこの学を信奉する者であつたのであろう。晩年に於ける儒家・百家の学はどうやら此の時代との関わり合いで学んだもののように思われる。しかし、彼の「易」についての学問は相当なものであつた様で「儒林列伝」には「臨菑人主父偃、皆以易至二千石」と記述されている。本伝には当初齊の諸学者の間に入り出したがどうやら相手にされなかつたことが記述されており、また、諸公賓客の多くからも嫌われるにいたつたともある。主父偃はその高位に即くや「親不以為子、昆弟不収、賓客弃我、我阨日久矣」故に思いのままに振る舞うことを宣言し、齊の相となるや「始吾貧時、昆弟不我衣食。賓客不我入門。今吾相齊。諸君迎我、或千里。吾与諸君絶矣。母復入偃之門」という恨みを述べているのは彼のもつ性格を浮き彫りにしているように思われる。「漢書芸文志」に指摘されてあるように従横家の持つ暗い側面である「上詐譖而棄其信」というものが、齊の諸学者や賓客・諸侯の忌避する処となつていくように考えられる。

司馬相如についてはその賦に六経を引用している処より見て、儒家的素養の深かつたことがわかるが、この時代に生きた文人として当然であつたのもあろう。司馬遷は「太史公曰」に於いて「春秋」「易」「詩経」を引いて「所以言雖外殊、其合德一也。相如雖多虚辞濫説、然其要帰引之節儉。此与詩之風諫何異」と批判する。そも「太史公曰」には「論語」「孝経」「詩経」「書経」等を引いての批判が散見しており、其の基準としていくところがいかなるものであるかを示しているようである。

「汲・鄭列伝」に於ける汲黯は「学黄・老之言。治官理民、好清静、挾丞史而任之。其治黄大指而已。不苛小」と記述されている。黯の人となりは「性倨少礼。面折不能容人之過。合已者善待之。不合已者不能忍見。」という風であつたが、一方では好学、潔白、直諫を好む面のあつたことが記されている。殊に武帝に対する「陛下内



多欲、而外施仁義。奈何欲效唐・虞之治乎」の語は痛烈である。時に武帝は儒者を招いて理想を実現せんとして意気こんでいた矢先の事であった。黯は「寧令徒諛承意、陷主於不義乎」と述べるが、彼の脳裡に公孫弘・張湯等の姿があったように思われる。先に弘の部分に於いて些か触れたように、元光元年の招賢の折に第一にぬきんでられた者が公孫弘であった。そして、弘の専ら心掛けたものは出世と保身とであったから、張湯等と結びついて「及事益多、吏民巧弄」という傾向を生み出すことになった。このような傾向こそ汲黯の最も忌む処のものであることは、彼の学んだり実行してきたことと対比すれば明らかであろう。弘は儒術を以って重んぜられたといえ、内実は阿諛と張湯との関係で、いわば儒学の悪い方向への変貌であり、従って轅固生や董仲舒等の非難を蒙むることになったのであろう。黯が常に儒術を非難し、当時第一の尊重を得ていた公孫弘を面と向って詰り、張湯等をも含めてるのは、黄・老の術とは相容れないからである。

鄭當時は黄・老の言説を好む者であったとある。常に温和であることに心掛けて、甚だしくは事の当否を断ずるが如きこともしなかつたようで、同じく黄・老を学んだ汲黯とはその性格に差があった故であろうと思われる。「太史公自序」の立伝の意を述べて汲黯の蔽しさと鄭當時の長者と称せられた事とを挙げて二人の姿を浮き彫りにしている。「太史公曰」に述べられてある翟公の語「一死一生、乃知交情、一貧一富、乃知交態。一貴一賤、交情乃見。」と「汲・鄭亦云。悲夫」とある慨嘆は司馬遷の心情を吐露している。

「酷吏列伝」に述べられる張湯は「為人多詐、無智以御之」と記述される処の人物である。帝が儒術に関心を示しているのを見るや「湯決大獄、欲傳古義、乃請博士弟子治尚書・春秋、補廷尉史、亭疑法」というが如きであった。かくして名声榮譽を得たのであるが「刻深吏多為爪牙用者、依於文学之士」たるものであって、「儒林

列伝」に「尚書」を学んだ兎寛が古法によつて大獄を決したことで張湯に愛幸せられて位三公に上つたことが記されており、これ等の者達がその役割を果たしていたのである。加えて公孫弘の再三にわたる称揚を得て二者の結びつきはいよいよ深まつたものであらう。平津侯の伝に記述される武帝の儒術をもつて修飾せんとするの希望が実現されてくるのである。張湯を自殺するに追い込んだ朱買臣・王朝・辺通の三人の長史との怨恨は湯の凌折する等のことに主たる原因があつたようである。朱買臣は「春秋」に通じ、また「楚辭」にも通じていた人物であつた。王朝は「以術至右内史」とあつて術がいかなるものか判断すべき材料を欠くが、恐らく法家的或いは縦横家の学問を修めた者であるように考えられる。辺通は「学長短」とあるから他の例によつても明らかのように縦横の学を修めた者である。此処に今一人の博士狄山がいる。張湯は狄山を「愚儒」とし、狄山は湯を「詐忠」の者とする。当時に於ける張湯は「天下事皆決於湯」と記述される程の寵臣であつた。しかし、一方では人民の生活は安定を欠き、姦吏の横行などが跡を絶たず、峻烈なる法網も役に立たぬ程であつて、その責任は湯にあるといふのが公卿より庶民の等しく見るところであつた。博士狄山は匈奴との和親を主張し、法の嚴酷が生み出した弊害を述べたのであつたが容れられる処とはならなかつた。狄山の主張するところは多分に司馬遷が「酷吏列伝」に於いて主張するところと合致する。

司馬遷は「論語・為政篇」の語を引いて「導之以政、齊之以刑、民免而無恥。導之以德、齊之以禮、有恥且格」と云い、「老子」三十八章の「上徳不徳、是以有徳。下徳不徳、是以無徳」。五十七章の「法物滋章、盜賊多有」を引いて此れ等の言葉は真実のことであると述べる。秦は嚴密なる法網を施して末節に趨つて亡国の道を辿つたのであり、漢が興つてよりは嚴法を除去し、粉飾を取り去つて質朴なるものとし、法網は吞舟之魚すら通れ得る

ほどゆるやかであり、官吏もまた美厚純一で姦邪に趨ることなく人民はよく治まって平安であった。以上によって考えるに政治の要諦は法網の厳密さにあるのではないというのがその主張である。「太史公曰」には此れ等の酷吏のうち廉潔なる者は規範とするに足り、汚者は以って戒めとするに足りると述べ、禁姦止邪に力を傾注した点を挙げてゐる。しかし、最大の弊害は張湯の死後、益々法網が厳密になり、九卿が碌々として官を奉ずるのみで保身に汲々とする事態を生み、何等為すべきを知らずして政治の衰退を招いた事であると指摘するのである。

民倍本多巧、姦軌弄法、善人不能化。唯一切嚴削、為能齊之。作酷吏列伝。

と「太史公自序」の著作動機を述べる部分にはある。これは皮肉な云い方である。もとより司馬遷はこのような有様を是認しようとしてゐるのではない。民が許に走り法軌を弄ぶようになったのは法網の厳密慘酷なる処置によるものであつて、善人の教化が何等効果をもたらすことのない様子を示しており、益々法網の厳しさによつて齊えることが出来たと述べる。この時代に対する痛烈な諷刺である。本伝に於いて司馬遷は根本は道德にあると主張する。彼が冒頭に於いて引用した孔子・老子の言はこの点を主張するためのものであり、末節と考えられる法網が密になればなるほど政治を荒廢させるものとなる点を強調しているのである。この事は「貨殖列伝」に於ける国家権力の経済への介入が、経済界が自ら有する世界を破壊せしめていることに不満を抱き表明したことと相通する。

以上概観するところに拠れば、諸学の混然たることは明らかである。法網の厳酷さの故に秦は亡びたとする「高祖本紀」の記述に見られるような反省に始まって、よりゆるやかなる世情を現出するための支柱となつた黄・老の思想を経て、儒教は皇帝の尊位を謳い上げ、先の公孫弘と張湯の結びつきに示されるようなかなりの変貌を遂

げつつも漢代の指導的役割を果すようになるのである。

#### 四

漢代の特に武帝治下に於ける儒教の興隆は鬱結していたものが一時にその吐け口を見出し出したという感じを抱かせるものである。「太史公自序」に「唯建元・元狩之間、文辞粲如也」と儒林を記述する意を述べ、同時代人としての司馬遷の記述の仕方がかくも壮大な思潮の転換として印象づけるのである。

実際、司馬遷は「儒林列伝」を書き起すのに儒家の苦難の歴史よりしているため、なおその印象は強く吾々に与えられるのであろう。司馬遷は此の学派の衰退の跡をたどり、孔子の死後七十余人の弟子達は諸国に散り散りになって遊説したが、大なるものは諸侯に仕え、小なるものは士大夫の友となつて彼等を教え、あるものは世に隠れてしまったと記述した後に、天下の諸侯は戦乱に明け暮れる所謂戦国の時代をくりひろげて儒術を省みるものがなかったと述べる。更に斉・魯に於いてのみ此の学問が細々と続けられて来たのであると言う。しかし、これも汲黯の公孫弘に対する罵言「斉人多詐而無情実」や叔孫通のあり方などを見ると儒術の正統な存続として考えてよいのかは問題があるように思われる。やがて孟子・荀卿の出現はあるもののこの学は依然として低迷していたと云えよう。秦の末世に至ると詩・書を焚き経術の士を坑にしたために此の学問は大打撃を蒙ったのであると、司馬遷は「六芸從此缺焉」と記述している。そして、此の学派は陳涉の興起によってその命脈を保とうとする事について司馬遷は次の如く述べる。

陳涉之王也、而魯諸儒、持孔氏之礼器、往帰陳王、於是孔甲為陳涉博士、卒与涉俱死。

孔甲は「孔子世家」に「子慎生鮒、年五十七、為陳王涉博士、死於陳下」と述べられている鮒で孔子八世の子孫である。周知の如く陳涉は王位にあることおよそ半歳で御者の莊賈の手にかかって終えるという興亡の激しい人生を送った人物であり、司馬遷は「陳涉世家」に於いてその興亡の跡を説いて詳しいが、ここに云う孔甲等魯の諸儒については何等触れる所はない。司馬遷は「旬月以王楚、不滿半歳、竟滅亡。其事至微淺、然而縉紳先生之徒、負孔子礼器、往委質為臣者、何也。以秦焚其業、積怨而發憤于陳王也」と述べるが、そのきわめて微淺なる事柄とするものが陳涉の事跡に限って云うならば、「世家」に取り上げるほどの評価を為した司馬遷自身の意と違ふことになって、実に不明瞭な記述ということになるように思われる。孔甲を初めとする諸儒がいち早く陳涉の下に身を寄せて博士となった行動が、司馬遷の目には節操のない姿として把えられていたのであるまいか。この一件について「塩鉄論・褒賢篇」にはいかなるあり方を賢とするかの議論が展開されていく中で取り上げられている。その中で大夫は文学の主張する高行・盛節・潔言への皮肉な反論として孔甲等諸儒を持ち出しているのである。「卒俱死陳、為天下大笑」という述べ方はいささか誇張するところがあるようにも思えるが、当時の知識人士のうちにあつた彼等への批評の一面として把えることができるのではあるまいか。そして、これに対する文学の反論にも「道雖凶而儒墨或干之者、以為無王久矣」というもので、陳涉の行動が凶なるものという考えを示している。従つてこれに依拠せんとした孔甲等諸儒の行動はいささか輕挙にすぎるとはあるまいか。文学は王を求めること久しく、孔子より以来道は擁護せられて行つて行つて得ず、今また秦の学問に対する圧迫禁止を受くるに至り、この憤りを陳涉によつてはらそうとしたものであると説き、「論語・陽貨篇」の孔子の語を引いて「如

有用我者、吾其為東周乎」と述べるのである。司馬遷は「儒林列伝」の中で孔子は七十余君に仕官を求めたが迎えてくれる君主の無かったこと（『莊子・天運篇』「以奸者七十二君、論先王之道、而明周召之迹。一君无所鉤用」考証、愚按七十余君、本于莊子、莊子寓言、亦不足拠。——「十二諸侯年表」是以孔子明王道、干七十余君、莫能用。——）を明らかに誇張してではあるが述べている。先の「陽貨篇」の孔子の語はその素朴な希求を示したものである。

「塩鉄論」に於ける大夫等がこのように司馬遷の影響を受けたと思われる語を述べるのはこれに止まらない。「毀学篇」に於いては「司馬子」として「貨殖列伝」の語、或いはいささか変えて述べる部分も見られる。桑弘羊が司馬遷の影響を受けたことについては重沢俊郎氏の「司馬遷研究」（『周漢思想研究』所収）に於いて指摘されるところのものである。さらにまた、この経済論争に於ける桑弘羊と司馬遷との関係は「平準書」に於いて卜式の言を記述して桑弘羊を烹殺すれば天は雨を降らすであろうとする程であったと考えられるものである。この二者の対立の関係は経済に対する奥深い思想・学説にあった点についても、また宇都宮清吉氏の「史記貨殖列伝研究」（『漢代社会経済史研究』所収）に述べられるところのものである。

「塩鉄論」のこの記述によって滝川氏は「考証」に於いて「知史記之書、昭宣間、既行於世矣」として「漢書・司馬遷伝」に記述されている「遷既死後、其書稍出、宣帝時、遷外孫平通侯楊惲祖述其書、遂宣布焉」というより以前に相当流布していたものであると見ている。しかしながら、この見解に対立するかのように王国維氏は「太史公行年考」に於いて、「貨殖列伝」の語は桑弘羊の口より出たものではなく、著者桓寛の潤色によるものであろうとする。して見ると「褒賢」に於ける語もまた同様の疑いを以って考察しなければならないことになる。

であろう。この桓寛の潤色については「漢書・公孫劉田王楊蔡陳鄭伝賛」に桓寛に触れて「推衍塩鉄之議、増広条目、云々」とあることに基いて為されたものである。山田勝美氏は「塩鉄論」（中国古典新書）の解説に於いて議文と推衍増広の混在を識別することはすこぶる困難の業であると述べられ、「史記」からの引用が意外に多いものであるとされる。今、此処に於ける部分が果して潤色であるのか否かは判断すべき材料を欠いているようである。司馬遷が「太史公自序」に於いて「蔵之名山、副在京師。俟後世聖人君子」と記述した希いが、先の武帝怒りて削去するの説の真偽はともかく、意外に早く当時の人士の間に流伝していたものと考えるのが自然であるように考えられる。

さて、司馬遷が「儒林列伝」に述べる先の陳涉に頼って憤りをはらさんとしたことに対して、当時の一部であったにせよ人士の中に嘲笑する趣があつたことは「塩鉄論・褒賢」に見える通りである。司馬遷は「其事至微賤」と云い、賢良文学もまた陳涉の「道雖凶」と述べることから思量するならば、これに頼つた儒家のこの様なあり方は司馬遷の眼には軽拳と見えたのであろう。更に、この孔甲等諸儒が陳涉を頼る折に持参したものは「孔子礼器」とあるのみで、儒家の所謂經典らしきものの記述が見当らぬのは不思議である。もっとも、「塩鉄論」で大夫は「負孔氏之礼器詩書」と述べているから、何れが正しい記述と考えるべき判断しかねるが、案外孔甲等の学問の実体はこのような祭器を重点とするものであつたかも知れない。

かくして、高祖の魯の儒者に対する感動が記述されてある。司馬遷は齊・魯に於ける学問が盛んであることは古來その天性とでも云うべきものとしている。また、彼自身が齊・魯の都で学業をおさめ、孔子の遺風を觀たことを「太史公自序」に於いて述べている。「儒林列伝」に述べられている諸儒のほとんどが齊・魯の出身である

ことを見れば、司馬遷より見て褒貶相い半ばする者を含むとはいえ、学統が守られてあつたこともまた事実であつたと考えなければならない。

司馬遷は父談が黄老の思想を信奉したと考えられるのに対して、儒家の思想の興隆する中で成長した人物であつた。従つて、彼の記述に於いて見られる批評の基準となつてゐるものは儒家的であることの方が多いのである。しかし、これがより深い所で人間性の上に立脚して、自由な立場をも保ち得ているのである。それ故にこそ幅広い人間の活動をこのように記述し得たのであると云えよう。司馬遷の記述を通して漢代の彼が眼前に見る思想界の姿を概観してきたのであるが、そこに活躍する者達はそれぞれ独自の思想を信奉しながらも、やがては皇帝を頂点とする世界で埋没吸収されていつたのである。この思想界の動向は董仲舒等の献言と相俟つて、儒家自身にも先の竇太后や公孫弘等に見られるように他思想との確執と変貌を経ながら儒教第一へと推移していつた。「太史公自序」に司馬談が述べる六家の要旨に、道家の学は陰陽家・儒家・墨家・名家・法家の善を取り要を取るとし、時と推移し物に応じて変化するとして、その許容の広さを云うが、この時代のいづれの学派に於いてもこのような混然たる様相変化が見られるというのが実状であつたように考えられる。



## 第四節 司馬遷と諺の周辺

一

中国に於ける所謂古典には諺の類が多く引用されている。「史記」に於いても例外ではなく諺の類は多い。それは「本紀」以下「列伝」の中に記述されて、そこに記載される人物の相手を説得するための具として、或いは著者である司馬遷の批評の具としてなどそれぞれ効果あるものとなっている。それらは「諺曰」「鄙人有言曰」「鄙語曰」「語曰」「里語有之」などの形式をもつて述べられるが、中にはこのような形式をもたずに「聞」という語で述べられる諺の類もあるようである。

これ等諺語の類が「史記」の中に取り込まれた理由を、司馬遷の民間精神或いは人民性と現実主義精神によるものという観方がある<sup>(1)</sup>。元來、司馬遷は「太史公自序」に記述されているように河山の陽に耕牧する生活を十歳頃までしていたようであるが、更に二十歳の頃には広い地域にわたる游歴の旅もしている<sup>(2)</sup>。これ等の経験・知見が、当時の強権による骨組みの上に安住する士大夫等とは隔たりのあるものを司馬遷の中にはぐくんでもいたのであろう。富裕でもなかった彼が、李陵の禍によっていよいよ庶民に接近せざるを得なかったのではなかったか。刑余の人は人並にはあつかわれぬ(報任少卿書)。ましてや宮刑である。刑余の人であった孫贖はその

故に將軍を辞退している。司馬遷はこの屈辱によって鬱屈した精神のいかなるものであるかを身をもって理解したであろう。彼は「太史公自序」と「報任少卿書」の中で鬱結した精神が著作となって表現せられた例——西伯・孔子・屈原・左丘・孫臏・呂不韋・韓非——等のことを述べる。彼にとつて父司馬談の遺言によるこの著作こそ聖賢發憤の著作と同様の意味をもっていたのである。

「罔羅天下放失旧聞、王迹所興、原始察終、見盛觀衰、論考之行事」<sup>13)</sup>と述べた司馬遷は、さまざまな人間の生きざまとその周辺を独自の見識によって分析する。そこに記述された人々は社会のいかなる部分であれ、自己の才能によつて壯絶な生きざまを示した者たちであつた。こうした生きざまの中に処世・教訓などの諺語の類が生みだされてきたことを<sup>14)</sup>、遊歴等によつてより身近なものとしてきたのであろう。従つて、司馬遷はこの諺の中に含まれる真実なるものに心惹かれて活用したといえよう。

ところで、司馬遷のこの諺の引用について、雅或いは俗・鄙との関連はいかなるものであつたかをみるに、およそ次の如くであろうと考えられる。「五帝本紀」にその典雅な文辞を選んで五帝を述べたのであるというとき、尚書などを中心とした古典の記述において、真或いは正なるものが存在するという資料判断の一基準として考えられている<sup>15)</sup>。雅が真或いは正なるものとされたとき、諺も雅言となり得るであらう。司馬遷が鄙語と述べるべき文字通りとるべきではないかも知れない。彼の屈折した心情も考慮する必要があるであらう。諺語の中には汗みどろの生活の中から生れた英智と真実が存在しているが故に、かくも多くの引用があると云える。

以下に司馬遷と諺との関係の一端をみようとするものである。

「千金之子、不死於市」という諺は「越王句踐世家」と「貨殖列伝」の中に出てくるが、前者では陶朱公の言葉の中に「吾聞」として述べられ、後者では司馬遷の論述の中に「諺曰」としてある。

陶朱公即ち范蠡は貨殖の人としてもまた列伝に名が見える。范蠡は句踐をたすけて遂に会稽の恥を雪がしめ、此処に於いて輕舟に乗って江湖に浮び<sup>6)</sup>、陶を天下の物資集散の地と考えて居を定め、十九年間に三たび千金を積み、二たびは貧窮の友人や疏遠な昆弟たちにわけ与えたと伝えられる。司馬遷は「貨殖列伝」の中で、二たび千金を散じた点を評して「所謂富好行其德者也」と世間的によく口へのほりそうな語を記述している。この語はこの記述より前にある「故君子富好行其德、小人富以適其力」の語によって范蠡の事蹟を述べるのに応用された感もあり、或いはこの語も諺に類するものであつたかも知れない。総じて「貨殖列伝」の冒頭の記述には諺に類する語が多いように思われる。

司馬遷は貨殖の伝に於いて范蠡の貨殖人としての事蹟と先述の評を記述する前に、「管子」牧民篇の「倉廩実而知礼節。衣食足而知榮辱」を引き、礼はその富裕に生じ無にすたれると述べる。そして此処に「人富而仁義附焉」と記述するに至るのである。先の「君子富好行其德」というものが、小人が富めばその力にふさわしいことを為すということの対比で述べられているのに対して、此処では一般的に人という形で取り上げられているのである。君子小人に限らず、人は富裕になると兎角このようになるものだという認識を示しているものであろう。司馬遷は貨殖の世界に於ける一つの姿として、這樣のものがあると考えていたように見える。

「貨殖列伝」の中で司馬遷は次の如く述べる。賢人が廟堂に謀り、朝廷に論議し、節に死すということも、隠

居・巖穴の士が名声を得ようとするのも、つきつめれば富厚に帰るのであり、廉吏も廉買もまた同じである。また、壮士が軍中に命をかけて闘うのも重賞の故であり、村里の若者が強奪・掘塚などの悪事をはたらくのも貨のためである。そして、趙女・鄭姫の行動も、游閑貴公子の行動も例外ではない<sup>(7)</sup>というのである。容赦ない貨殖の世界を描き出して、年老いた親や軟弱な妻子をかかえ、祖先への祭祀や飲食・被服にもこと欠く始末で、なお慙愧しないようならば、人として例えようもない<sup>(8)</sup>と述べ、また、巖処奇士の行いもなく、貧賤に身を置いて好んで仁義を語るなどは恥ずべきである<sup>(9)</sup>とさえ述べるに至る。しかしながら、このような記述の中で諺を引いて、「百里不販樵。千里不販糶」というのは、「商売の實際上より出た諺であり、以下の一文は「管子」権修篇にも似た語が記載されているが、どうやら司馬遷は諺の類と考えていたようで、「居之一歳、種之以穀。十歳、樹之以木。百歳、來之以德。」と述べ、「徳者人物之謂也」と補説している<sup>(10)</sup>。人間の情性にもとづくという経済活動は智能のかぎりを尽して行われるものではあるが、所詮は人間の活動である以上、そこには自づからなる秩序や道德的側面が存在することを見ているのであり、このような中で富裕になった者達を司馬遷は賢人と記述しているのである。人々はその能力によってその欲する所を手に入れようとす。このようにして夫れぞれが家業に励み楽しむことは、恰かも水の低い方に流れるように自然な営みであり、所謂道理に合った姿なのである<sup>(11)</sup>。したがって、「凡編戸之民、富相什則卑下之、伯則畏憚之、千則役、万則僕、物之理也」ということも至極また当然の理として司馬遷の目に映るのである。これがこの世界の一様態なのである。故に「太史公自序」には「布衣匹夫之人、不害於政、不妨百姓、取与以時、而息財富。智者有采焉。」とその「貨殖列伝」を立てた理由を述べ、決して放縱の世界ではないことをも示している。また、その身を危険にさらすことなくして生活の資を得るのは

賢人もまたこれにつとめるものであるともいう。「本富为上、末富次之、姦富最下」という貨殖に於ける道德的規準も此の世界に自然に備わるべきものであった。この故に司馬遷は人為的な、特に政治の力を背景にして此の世界に割り込み、民と利を争うが如き輩を嫌悪したのである。そして、この庶民の自然の道に則つとつた世界、個人の能力によっていかようにも彩どることのできる世界の窒息に強く反対したのであった<sup>12)</sup>。

さて、范蠡は句踐を補佐して呉に報復した後、「大名之下、難以久居。且句踐為人、可與同患、難與処安」と考えて齊の地に向つたと「越王句踐世家」にある。范蠡は齊の地から大夫種に手紙を送つて「蜚鳥尽、良弓藏。狡兔死、走狗烹」と述べ<sup>13)</sup>、早く句踐の下を去るべきであるとすすめて、その理由を越王は長い頸で鳥のような口をしているので、このような人柄を上に乗るときには艱難は共にできても安楽を共にすることはできないものであると、自らが越王の下を去る時と同じものを挙げてゐる。このあたり、范蠡は知明の士と云えるであろう。大夫種の場合はその時宜を失い、反乱を企図しているという讒言によって自殺に追い込まれている。齊に於ける范蠡は海のとりに耕し、身を勞し力を尽していくばくもなく数千万<sup>14)</sup>の産を成したという。かくして、齊では招かれて宰相となつたが、「居家則致千金、居官則至卿相。此布衣之極也。久受尊名不祥」として、相印を返し、その財産をことごとく知友・郷党に分け与えて陶に居を構へたと記述されている。「貨殖列伝」に述べられる二たび千金を散したというものは陶に於いての事蹟ともみられるから、齊の相印を返却した時の財産分与はまた別に数えられるべきものであるかも知れない。こうした貨殖に長じていた范蠡が先述の「千金之子、不死於市」と述べる。

范蠡がこの諺を述べたのは、彼の次男が殺人の罪によって楚に捕えられたからである。死刑は免れぬものと知つ

ていながら、なお大金を以って贖わんとするのは、この諺が単なる言葉として存在するのではなく、実際に世上行われていたことを示すものであろう。この次男救出の一件は、末弟が蓄財の苦しみを知らないが故に惜しみなく貨財を散じ得るのに対して、長男は范蠡と共に貨殖に苦勞したため思い切った散財が出来ないという二人の違いによって不成功に終わった。元来、范蠡は末弟が富裕のうちに育ったため救出のためには大金を惜しまずに投ずるであろうと予測して楚に向わせようとしたのであったが、長男は家督の立場にある自分を救出に向わせないのは不肖であるからであろうと自殺をほのめかし、更に母親の言もあつて遂に長男を出発させたのであった。結果は范蠡が危惧したように長男が金を惜しんだために失敗し、次男は死刑となった。長男が弟の死骸と共に帰国した時、当然のことながら母親や村里の人々が嘆き悲しむ中で、范蠡のみが笑いながら「吾固知必殺其弟也」云々と述べるのである。楚の旧知莊生への手紙と「至則進千金于莊生所、聽其所為。慎無与爭事。」という訓誡を与えたといえ、当初よりこのような暗い子感を持ちながら長男を楚に向わせた范蠡の在り方は、吾々にとつていささか理解し難い面があるようであるが、千金を受けた莊生は「非有意受也。欲以成事後復歸之、以為信耳」として嚴重に保管して楚王に働きかけたのである。しかし、莊生の献言による大赦と考えなかつた長男が、先に進呈した千金が惜しくなつて取り戻したことから、莊生は「羞為兒子所売」として死刑は行われた。莊生は楚王の信頼を受けた人物で、また、然諾を重んずる人物であつたように記述されている。それだけに裏切られたという思いを抱いた後の莊生の言動には凄じいものがある。范蠡と莊生との関係についてはこの記述のみではなお理解し尽せないものがあるようで、この二人のありようには此の話自体の虚実と批判の問題がある<sup>16</sup>。ともあれ、

この話は大金を惜しんだ行為のため、莊生の意を損ねて失敗に終つたことを述べるが、貨殖の人として名高い范

蝨一家に於ける金にまつわる難かしい一面を物語っていて興味深いものがある。

「千金之子、不死於市」という世上にある言葉を蝨はそのまま実際に有り得ることとして実行し、半ば成功しているところを見ると、この諺の通り富裕の家の子は死刑にはならないものであったのであろう。「貨殖列伝」に於いて此の諺を引いた司馬遷は「此非空言也」と述べる。此処の「空言」は「虚言」と同義に用いられているものである<sup>17)</sup>。従って此処に云う「此れ空言に非ざるなり」或いは「虚言に非ざるなり」という司馬遷の感懐の表出は、他に於いて「誠哉是言也」と述べる<sup>18)</sup>。ほぼ同意の表出とは違う重いものが内に籠められているように思われる。「貨殖列伝」の「諺曰、千金之子、不死於市。此非空言也。」について、富裕の家の子はその富裕であるが故に榮辱を知っており、法を犯して刑死するが如き愚かな行為はないものとする理解がある<sup>19)</sup>。これは先述の「管子」牧民篇の語「倉廩実而知礼節、衣食足而知榮辱。」「礼生於有、而廢於無。」「人富而仁義附焉。」などの前文によつて生じた解のように思われ、いささか穿ちすぎの感あるを免れない。ところで、この諺の前に記述される一文には問題があるようで、この諺とのつながりはぎこちないものとなっている<sup>20)</sup>。むしろ、後文の「故曰、天下熙熙、皆為利来。天下壤壤、皆為利往<sup>20)</sup>」という語との結びつきで理解した方が司馬遷の記述の意に合うように考えられる。天下は利の有る所へ滔滔と趨くのである。いったい千乗の国の王も、万家の諸侯も、人民百家の如き小国の君主すらも貧を思い悩むものである。ましてや戸籍簿に組み込まれて税を取られる庶民ともなればなおさらのことであると司馬遷は記述する。先述の如く賢者・巖穴之士・廉吏・廉賈・壮士・趙女・鄭姫等々の行為が全て利を求め、利に結びつくものと道破した司馬遷である。こうした富のもつ力の種々の側面を彼は把握していたものと考えられる。しかも、蝨一家に於けるこの諺は富裕なる者に附加されるという道德的なものとは

無關係に、まさに富裕なる家の子弟は刑死しないものであるという意味で記述されている。この諺は富裕なる者達に日常を見聞し、このような階層や財産などとはほとんど無縁と考えている庶民の生活体験の中から、おそらくは多少の皮肉と多少の羨望を籠めて生れ語られてきたのではあるまいか。そして、こうして語られる諺は簡明直截である。

司馬遷は彼自身の眼前で富によつて罪の贖われた例を多く見ているのである。彼がその伝を書き、その人を目撃して、その人の死する日は天下に人挙げて哀しんだと称讃した李広がそうであった<sup>23</sup>。「諺曰、桃李不言、下自成蹊。此言雖小、可以論大也<sup>24</sup>。」と「太史公曰」を結んでいる。また、「衛將軍驍騎列伝」に「太史公曰、蘇建語余曰「云々とある蘇建もまた元朔五年にことごとく自軍を失つた罪を贖つて庶人に降つてゐる。このようなことは常時司馬遷の周辺に見られるところのものであり、贖金によつて罪をあがなつた者が再び官職に就くといった状況もまた彼の見るところであつた<sup>25</sup>。このような再登用の形は司馬遷自身もまた受刑後に中書令に任命されているから、さして異とするに足らぬことであるかも知れない。しかしながら、彼の身辺に実見するこれ等の事例は、文字通り富裕でありさえすれば刑死を免れることができるという極めて明瞭なものであつたのである。ところで、司馬遷は曾つて酒を酌みかわすことも、語り合うこともなかつた李陵のために、正当な功績を認めるよう召問に応答し、曲解のもとに獄吏に下されたのであつた。「報任少卿書」によれば李陵について「自守奇士、事親孝、与士信、臨財廉、取予義、分別有讓、恭儉下人、常思奮不顧身、以徇國家之急、其素所蓄積也。」と述べ、國士の風格を備えた人物と考えていたという。この応答がかくも無慘な刑を受けることにならうとは思ひもよらなかつたのは「故絶賓客之知、亡室家之業、日夜思竭其不肖之財力、務一心當職、以求親媚於主上、而事乃有大



謬大然者。」(報任少卿書)とか「乃喟然而歎曰、是余之罪也夫。是余之罪也夫。」(太史公自序)という不当を嘆く言辞などからでもわかろう。全軀保妻子之臣が李陵の罪を数え上げることに対する痛憤と共に、司馬遷が日頃考えている理想的な人柄を李陵の上に見ていたために起った禍いとも言えよう。この所謂「李陵之禍」に遭った時に、司馬遷は李陵の上に見るものとはまるで異なる自己の周辺に気づかざるを得なかった。「家貧、財賂不足以自贖、交遊莫救、左右親近、不為一言。」(報任少卿書)と記述した司馬遷の心情がいかなるものであったかは想像して余りあるものがある。時に、彼が李陵の上に見た重要な徳目の一つであった孝は、宮刑という最も忌わしい刑罰によって打ち碎かれ、後世に理解者を求め家名を揚げるのが唯一の残された孝を具現する道となった。司馬遷はこの刑によって祖先を汚辱し、父母の憤懣にもおまわりできぬ<sup>四</sup>と嘆く。しかも、この窮状に手を差しのべてくれる友人<sup>四</sup>もなく、皇帝の側近もまた彼のために一言の弁護を為すものがなかったのである。司馬遷にとつて「千金之子。不死於市。此非空言也。」というとき、この諺は知己・友情の問題をも含めて甚だ重い意味をもつものであったと考えられる。

### 三

さて、「袁盎蝘錯列伝」に文帝が霸陵より西に向つてその急峻の道を馬車で馳せ下ろうとした時、袁盎が轡を執つて迎え諫めた話が記述されている。抑えられた文帝は將軍は恐れられたのかと云うのに対して、「臣聞千金之子、坐不垂堂。百金之子、不騎衡。聖主不乘危而徼幸。」と述べ、万一の事態が起つた時に宗廟・太后をいっただう

されるのかと諫めたというのである。一方、「司馬相如列伝」には武帝が狩猟を好んで自ら野獸を追うという有様なのを見て、相如が上疎して諫めた文章を記載している。そこには、明智の者は遠く物事の芽生えぬうちに洞察し、危険の表われる前に避けるもので、禍というものは隱微のうちにあり、人の忽にする所に起るもの、「故鄙諺曰。家累千金、坐不垂堂。此言雖小可以喻大。」と諺を引いている。この二個所に引用される諺は恐らく本来同じものであったのが訛伝か或いはその情況に相応しい言い換えが行われたと考えられよう。ここでは相手を説得するための具として用いられ、後文によればその効果を挙げていることがわかる。ところで、字句の相違について「漢書」では坐字が無いなどの異同がある<sup>10</sup>が、この理解もまた諸説がある。「索隱」「集解」「考証」「漢書補注」などは諸説を引いて、堂の端に坐するのは地面にころげ落ちたり、屋根の瓦が落ちてきて当るという危険があること、また、てすり或いは馬車の横木などに寄りかかるなどしては折れたりして思わぬ危険に遭うというように字解を中心として為されている。袁盎及び相如の諺の引用はいづれも危険を避ける意味で使用され、諸注の場合も危険の意味で不変であるが、「漢書」に注した顔師古は「富人之子則自愛也。」（司馬相如伝では「富人之子則自愛深也。」）と述べている。富裕の家の子弟は、そのような危険をおかさぬようつとめるものの意であろう。これは先述の「千金之子、不死於市」について何焯が「知榮辱、恥犯法也」と理解したと同様のいささか穿ちすぎる観方であるように思われる、富裕の家の子弟はその富裕であるが故に刑死を免がれ得るものであるという庶民の皮肉や羨望の思いがこの諺にあらうとさきに述べたのであるが、今この諺においてもまた庶民のそのような声を聞く思いがあるのである。この諺の本来もっていた意味は、富裕の家の子弟はその富裕であるが故にこのような危険からはとかく遠ざかり得るというものではなかったであろうか。

「高祖本紀」に呂公が沛の県令を頼って居を定めた時、沛の主だった役人達が呂公の許に挨拶に行ったという話がある。この時、蕭何は取り仕切って「進不滿千錢、坐之堂下。」と下僚に命令していたのであるが、当時亭長であった高祖は「賀錢萬」と名刺に書いて差し出したため、大いに驚いた呂公は態々門まで出迎えて上席に案内したという。「賀錢萬」というのは嘘であるが、呂公が驚いて門まで出迎えるという礼をとったのは、名刺に記入された金額が並はずれたものであったからで、こうして高祖は上席に案内されたのである<sup>28</sup>。このことは金銭の多寡がその人の在るべき場所を決定する要因となっているから、富裕の家の子弟が堂の端に坐らせられることはないということであろう。袁盎及び司馬相如の諫言は、元来おかさなくてすむ危険を敢えておかそうとする主上への苦言なのである。従って、この諺は富裕なる家の子弟はその富裕であるが故に堂下に転落するような危険な所には坐らなくてすむ、また、屋根から瓦の落ちてくるような端近かに身を置くことはない、或いは折れるかも知れないようなてすりや馬車の横木には寄りかからせるようなことはないということ、恐らく顔師古の説明するようなものではなかったのではあるまいか。

#### 四

司馬遷が友情についていかに熱い思いを抱いていたかは、「管晏列伝」などに見られるところであり、いかにもろいものであるかもまた「張耳陳餘列伝」などに記述されるところである<sup>29</sup>。彼が希求する友情は勿論利害得失を超えたところにある。しかし、現実はどうであったかを彼の周辺に見ると、任安への返事の中で李陵の禍に

遭った自分に友人の誰一人として救いの手を差し伸べてくれるものはなかったと述べる。このことからわかるように彼が希求するような交遊関係がまるで無かったことを示しているようである。同じくこの手紙の中で、「諺曰、誰為為之、孰令聽之」と引き、琴の名手である伯牙が最大の理解者である鍾子期の死に遭って、二度と琴を弾くことをしなかったという故事を述べたのは、真に自分を理解してくれる者の無いことを嘆いたのである。また、「刺客列伝」中で予譲は、「嗟乎、士為知己者死、女為説己者容」と己れを知ってくれた知伯のために命を投げだしたことを述べるが、司馬遷はさきの手紙の中でこの言葉を引いている<sup>30</sup>。彼の孤独の思いがこのような形で記述されているのである。李長之氏は司馬遷が理想とする友情は既に所謂士大夫の世界には無く、市井にこれを見出し「游侠列伝」にあると述べる<sup>31</sup>。

司馬遷は任安への手紙の中で、全軀保妻子の官僚らが李陵の一度の失敗に手のひらを返すように罪を言いたてるといふ信義すら見当らない様子を述べている<sup>32</sup>。彼は自分の身を置いている世界が虚偽に満ちた、信義とは程遠いものであるかを知るにつけ、市井に於ける游侠の在りように注目せざるを得なかったのであろう。「游侠列伝」の「太史公曰」に述べるように、司馬遷自身が当時游侠の徒として有名であった郭解を見かけたこともあるから、李陵の禍以後に特に関心を持ったとは必ずしも云えない。が、しかし、「史記」全体の中でも「游侠列伝」や「貨殖列伝」は司馬遷の感慨の投影が濃いものの一つであることは確かである。今、彼にとつて「貨殖列伝」等に於ける世界とは違った意味で、游侠に於ける利害を超えた信義の世界は魅力的なものの一つであったろう。伯夷の高潔や魯仲連の千金を辞した態度など<sup>33</sup>は司馬遷好みの者達であったのではあるまいか。

ところで、「游侠列伝」で最も詳細であるのは彼自身が目睹したところのある郭解についてであるのだが、若い

頃の悪業を容赦なく描き<sup>34</sup>、年長に及んでようやく所謂任侠の体を得るようになった様子が述べられている。そして、司馬遷がこの伝の前半に述べる游侠の信義・効用は時代と共に游侠が小粒なものになっていくように思われる。魯の朱豕・楚の田仲・雒陽の劇孟、次いで郭解の順に次第に小さくなる。これは時代と共にその者の事蹟が具体的に知られるため瑕瑾が目立つことも関係があるのであろう。司馬遷は、「名不虛立、士不虛附」と述べ、さらに、この伝の末尾に「諺曰、人貌栄名、豈有既乎。於戯惜哉。」と言う。游侠について語る者はその名声を慕い喧伝する。しかもそれは虚実のいりまじったものではなかったか。栄名が一旦確立してしまうととかく実像を超えたものになるようである。

ここにいま一つの庶民の感情を反映する凄まじい諺がこの伝にある。「鄙人有言曰。何知仁義、己饜其利者為有徳。」己れに利益を与えてくれる者が有徳者なのだというこの諺は一面真実である。この場合、仁義などという小賢しい理屈は必要ない。司馬遷は游侠の徒は時に正義に合致しないこともあるが、一諾よく生死を無視して人の危難を救う者であり、危難は所謂有道者に於いてもふりかかるもので、ましてや一般人士においてはなおさらのことであると述べた後にこの諺を挙げる。従って伯夷がいかに周の文王・武王を論難しても利を受けた人民に支持されて王位を失わなかったし、一方、暴戾であった大盗の盜跖・莊躄の輩も一味徒党によってたたえられることになる。利を与えてくれる点では同様に彼等は有徳者であり得た訳である。仁義とか有徳者とか称せられるものの仮面をひきはがして容赦ない。しかも、この有徳者なるものはその勢の大なるが故に有徳者たり得る。「竊鉤者誅、竊国者侯。侯之門、仁義存<sup>35</sup>」この矛盾に対する皮肉嘲笑がある。司馬遷がこれに附言して「非虚言也」とするところに、この事実に対する屈折した彼の精神を見るのである。

- (1) 前者は李長之氏「司馬遷之人格与風格」司馬遷之民間精神の項。後者は季鎮淮氏「司馬遷」語言的運用の項。
- (2) 拙請「史記列伝考Ⅱ―『二十南游』と『貨殖列伝』(アジア・アフリカ文化研究所年報一九七四)・「史記列伝Ⅴ―『二十南游』と『貨殖列伝』補―」(『東洋学論叢』六)
- (3) 「太史公自序」。「報任少卿書」に網羅天下放失旧聞、略考其行事、綜其始終、稽其成敗興懷之紀。上計軒輊、下至於茲、為十表、本紀十二、書八章、世家三十、列伝七十、凡百三十篇、亦欲以究天人之際、通古今之變、成一家之言。とある。
- (4) 該語の総合的研究書には、朱介凡著「中国諺語論」諺語叢刊第五種などがある。
- (5) 拙論「史記列伝に於ける雅俗の人物評価の研究」―総合研究「中国文学に於ける雅俗の觀念に対する総合的研究」―分担執筆。
- (6) 「貨殖列伝」乃乘扁舟浮於江湖、变名易姓、適齊為鴟夷子皮、之陶為朱公。「越王句踐世家」乃装其輕宝珠玉、自与其私徒属乘舟浮海以行。(中略)范蠡浮海出齐、变姓名自謂鴟夷子皮。「越語」遂乘輕舟、以浮於五湖、莫知其所終極。とある。また、「淮陰侯列伝」の刺通の語に、大夫種・范蠡存亡越、霸句踐、立功成名而身死亡。とあり、「韓信盧紹列伝」の韓王信の返書には、夫種・蠡無一罪、身死亡とある。「漢書」刺通伝では范蠡及び亡の字は無く明快であるが、韓王信伝では語句は変わらず、顔師古は種の死と范蠡の逃亡の意に解する。「史記」刺通の語も顔氏の如く理解すべきもののように思われる。
- (7) 「貨殖列伝」の原文、賢人深謀於廊廟、論議朝廷、守信死節、隱居巖穴之士、設為名高者、安婦乎、婦於富厚也。是以廉吏久久更富、廉賈焯富。富者人之情性、所不学而俱欲者也。故壯士在軍、攻城先登、陷陣卻敵、斬將搴旗、前蒙矢石、不避湯火之難者、為重賞使也。其在閭巷、少年攻剽椎埋、劫人作姦、掘冢鑄幣、任俠并兼、借交報仇、篡逐幽隱、不避法禁、走死地如驚者、其实皆為財用耳。今夫趙女・鄭姬、設形容、揆鳴琴、揄長袂、躡利屣、目挑心招、出不遠千里、不挾老少者、奔富厚也。游閑公子、飾冠劍、連車騎、亦為富貴容也。弋射漁獵、犯晨夜、冒霜雪、馳阮谷、不避猛獸之害、為得味也。博戲馳逐、鬪鷄走狗、作色相矜、必爭勝者、重失負也。医方諸食技術之人、焦神極能、為重稍也。

吏士舞文弄法、刻章偽書、不避刀鋸之誅者、没於賂遺也。農工商賈畜長、固求富益貨也。此有知尺能索耳。終不余力而讓財矣。とあり、人々の活動は全て富の追求ということに帰結するのであって、ここに智能のかぎりを尽くすのであるとする。

(8) 「貨殖列伝」若至家貧親老、妻子軟弱、歲時無以祭祀、進饌飲食被服、不足以自通。如此不慙恥則無所比矣。

(9) 「貨殖列伝」無義處奇士之行、而長貧賤、好語仁義、亦足羞也。とある。註(8)と(9)などの文によつて、「漢書・司馬遷伝」には「述貨殖則崇勢利而羞賤貧、此其所蔽也」と評せられている。

(10) 「管子」權修篇。一年之計、莫如樹穀。十年之計、莫如樹木。終身之計、莫如樹人。とある。「貨殖列伝」の百歳、來之以德について、小倉芳彦氏は「諺の引用——左伝」と「史記」の場合——（『東洋史研究』第三七卷四号）で、いささか俗諺らしくない点があると指摘されておられる。「管子」牧民篇の語も、此処の賢者の任用を意味する語も、經濟と道德上の問題が関連して説かれていることに注意しておきたい。

(11) 「貨殖列伝」人各任其能、竭其力、以得所欲。故物、賤之傲貴、貴之傲賤、各勸其業、樂其事、若水之趨下、日夜無休時、不召而自來、不求而民出之。豈非道之所符、而自然之驗邪。

(12) 註(2)の拙論に於いて少しく触れたので参照された。

(13) この語は「史記」淮陰侯列伝・「韓非子」内儲説下（太宰嚭遺大夫種書曰、狡兎尽則良犬烹、云々とある）・「三略」・「文子」上德篇・「淮南子」説林訓等に類似の語があり、「考証」は蓋當時有此語、陶朱引之、後人述之と述べる。

(14) 「考証」「校補」に拠り十を千とした。

(15) 「越王句踐世家」この後文。彼非不愛其弟。顧有所不能忍者也。是少与我俱見苦為生難。故重弃財。至如少弟者、生而見我富、乘堅驅良遂狡兎。豈知財所從來。故輕弃之、非所惜吝。前日吾所為欲遺少子、固為其能弃財故也。而長者不能。故卒以殺其弟。事之理也。無足悲者。吾日夜固以望其喪之來也。

(16) 「考証」梁玉繩史記志疑引陳大令曰、赦中子殺人一節、必好事者為之、非實也、徇兒女子之言、而致中男子死、為不仁、以褊悻之莊生、而託以愛子、為不智、豈具霸越沼吳之識、竟失算若是乎、莊生之不廉不直、無足為友、更弗論已、

前賢亦嘗論之。(史記志疑、赦字作赦字)とある。句踐を補佐して会稽の恥を雪ぎ、遂に霸王たらしめた後に、退いて貨殖の人として名を成すなど、正に賢と称せられるに相応しい。しかし、この一件に関しては不仁不智、莊生の不廉不直(莊生雖居窮閭、然以廉直聞於國とあるに拠る)と批判せらるべき材料があるため、這樣的論を生んだのであろう。今、その真偽について述べるべきものを持たないが、范蠡が長男と妻との言によって中子救出の可能性が極端に失われることを承知の上でこれに同意せざるを得なかった親子の関係とか、中子の死骸を迎えて哀しむ人々と異って、独り笑いながら固より中子の死を覚悟していたとその理由を述べ「事之理也」とする達人ぶりなどが、司馬遷の執筆意欲を誘ったとも考えられる。「考証」何良俊曰(中略)与越事相聯者、則附見越世家中、其救中子殺人事亦附其后、此皆太史公作史法也。とある。

(17) 「空言」の使用例には「太史公自序」に於ける「空言」と「空文」のように司馬遷の「史記」著述の上で重要な意味をもつものがある。これについては、今鷹真氏「空言」空文考(司馬遷「太史公自序」「報任少卿書」に見える「空言」と「空文」の解釈について)、「入谷教授・小川教授退休記念中国文学語学論集」一九七四年)の詳細な論考がある。ここに云う「空言」「虚言」の類の使用例は「高祖本紀」空言虚語、非所守也。「廉頗藺相如列伝」秦貨負其疆、以空言求璧。「酷吏列伝」下士聞道大笑之。非虚言也。「游侠列伝」竊鉤者誅、竊國者侯。侯之門、仁義存。非虚言也。「佞幸列伝」力田不如逢年、善仕不如遇合。固無虚言。などがある。

(18) このような記述の例には、「楚元王世家」安危在出令。存亡在所任。誠哉是言也。「淮南衡山列伝」詩之所謂戎狄是膺。荆舒是懲。信哉是言也。「酷吏列伝」法令滋章、盜賊多有。太史公曰。信哉是言也。などがある。

(19) 「考証」何焯曰、不死市者、知榮辱、恥犯法也。

(20) 前文は「人富而仁義附焉。富者得勢益彰、失勢則客無所之、以而不樂。夷狄益甚。」とあつて諺曰に連なる。「考証」に中井積徳曰、以而楽句、似有脱誤。とあり、晏炎吾氏「史記貨殖列伝校釈」(「華中師院学报」一九八一年一期)には「富者、勢也。得勢益彰、失勢則客無所之、已而不楽とし、夷狄益甚は視若夷狄、且益甚之と考えるべきであるとされるが、ぎこちない点は解消されないように思われる。



(21) 「考証」吳乘權曰、四句用韻、蓋古歌謡也。此の四句について前掲註(10)の小倉氏論文は当時の俗諺らしく思われるとされる。筆者もまた同様に思う。

(22) 「李將軍列伝」(元光六年)匈奴より脱出して帰国した李広に対する処遇は次の如く、漢下広吏。吏当広所失亡多、為虜所生得、当斬。というものであったが、讀為庶人とある。司馬遷は李広の生きざまや信望に強く惹かれるものがあつたようである。

(23) 「此言雖小、可以輸大也」は「司馬相如列伝」の相如の上疎の中にも諺を引いてこの語がある。司馬遷は相如に倣つたものかも知れないが、諺のもつ英知・真実・普遍性等をかく言い表わしたのであろう。

(24) 「衛將軍驍騎列伝」には、趙食其は讀つて庶人となり、博望侯張騫は元狩二年に讀つて庶人となり、その後大行となつている。また、公孫敖は元光五年と元狩二年の二度にわたつて讀つて庶人となつている。

(25) 「報任少卿書」僕以口語、遇遭此禍、重為郷党所讟笑、以汚辱先人、亦何面目復上父母之丘墓乎。とある。

(26) 註(1)李長之氏同書の司馬遷与友情―司馬遷交遊考―の項に十六人の交遊あつた者の名を挙げている。

(27) 「漢書・袁盎晁錯伝」臣聞千金之子、不垂堂。百金之子、不騎衡。聖主不乘危、不徹幸」に作る。「司馬相如伝」は「史記」と同じである。本来この諺は不騎衡までであつて、相如は適當に切つて引用したようであり、聖主以下は鄙諺の類のように思えないから、袁盎がつけ加えたもののように思われる。

(28) 「高祖本紀」高祖為亭長、素易諸吏、乃給為謁曰、賀錢万、美不持一錢。謁入、呂公大驚、起迎之門。呂公者好相人。見高祖狀貌、因重敬之、引入坐。(「漢書・高帝紀」引入坐は上坐に作る)。師古注は以其錢多、故特礼之。「漢書補注」沈欽韓曰、此或已聞高祖之名、非為万錢驚起也。と理解に差があるが、前者の方がよいように思う。高祖の評判が極めて悪かつたことは蕭何が「劉季固多大言、少成事」と述べることで知られる。従つて仮りに善・悪いづれかの評判を耳にしていたとしても、やはり書かれていた金銭の多額であつたことに驚いたと考えるべきであらう。

(29) 前掲註(26)に詳しい。

(30) 「報任少卿書」士為知己者用、女為說己者容。に作る。「文選」「趙策」用字と死字に異同がある。

31) 前掲書。就著作時代上対司馬遷作品之劃分の項。李陵之禍の影響が「游侠列伝」にはあると述べる。また、注(1)李鎮淮氏同書には這篇游侠列伝可能是在遭了李陵之禍以後写的。と述べる。

32) 「報任少卿書」今拳事一不当、而全躯保妻子之臣、隨而媒孽其短、僕誠私心痛之。

33) 「魯仲連鄒陽列伝」於是平原君欲封魯連。魯連辭讓。使者三。終不肯受。平原君乃置酒。酒酣起前、以千金為魯連壽。魯連笑曰。所貴於天下之士者、為人排患、解紛、亂而無取也。即有取者、是商賈之事也。而不忍為也。とある。また、田單遂屠聊城。婦而言魯連、欲爵之。魯連逃隱於海上曰、吾与富貴而誦於人、寧貧賤而輕世肆志焉。と。

34) 「游侠列伝」解為人短小精悍、不飲酒。少時陰賊、慨不快意、身所殺甚衆。以軀借交、報仇藏命、作姦剽攻不休、及鑄錢掘冢、固不可勝數。

35) 「莊子法篋篇」彼竊鉤者誅、竊國者為諸侯、諸侯之門而仁義存焉、則是非竊仁義聖知邪。とある。前掲小倉氏はこの句も一種の鄙言であらうとされる。

第二章 「本紀」について

## 第一節 読「呂后本紀」

「列伝」は象徴的人間の生きざまとでもいうような姿を描いている。司馬遷は「太史公自序」の中で七十列伝を作った動機について、義を扶けて負むかず、才気高く人に抜きんで、時の宜しきに違わずして当代にその名を彰わした者達のためにした<sup>(1)</sup>と述べている。同じく人間の生き方を記録するにしても、「本紀」の場合はその時代の中心たるべき人物―主上―を記述したのであり、「世家」は二十八宿の北斗星をめぐるが如く、三十輻が一轂を中心としてあるが如く、股肱の臣として輔佐するのに忠信を以って道を行い主上を奉じた者について述べたのである<sup>(2)</sup>という。

司馬遷の人間に対する記述が生彩を帯びているという云い方をしてくらべるとするならば、「本紀」及「世家」のもつ性格にもよるであろうが、そこにおける者達に比較して「列伝」の方がより優っているように思われる。しかしながら、いま「本紀」に於ける「項羽本紀」の記述などは読者を惹きつける魅力溢れるものとなっている。そしてそこには、項羽という人間の激しい興亡と得失について明確な司馬遷の判断が示されている。司馬遷の論贊「太史公曰」によれば霸王と号した項羽はその位を全うすることはできなかつたが、近古以来これほどの人物はなかつたという。また、義帝を放逐して自立するや王侯が叛き、力による天下経営は五年で終つたのであるが、

死に至るまでその自らの過失に気付かず、武勇を矜って、天意は我を亡ぼさんとするにあると称するのはなんと  
いう誤りであることかと慨嘆する。そこには司馬遷の人間に対する愛しいまでの情感があると共に、口惜しさが  
籠められているように思われる<sup>(3)</sup>。「太史公自序」の著述動機の部分には秦が政道を失って豪傑が並び起り、項  
梁を継いだ項羽はやがて上將軍宋義を殺してより、諸侯は彼に帰服したと述べ、更に降王子嬰を殺し、楚の懷王  
にそむく<sup>(4)</sup>に至って天下はこれを非としたと述べるところよりすれば、司馬遷の項羽に与える評価は至って厳正  
なものと思われることができよう。先の「太史公曰」の記述といいこの記述といい、項羽のいわば過失の部分のみが  
取り上げられているように見えるのである。「本紀」として立てるについては余りにも評判の宜しくない理由を  
挙げていようである。尺寸の地すらなかった項羽が、勢に乗じて僅か三年で霸王と号するに至った経緯と天下  
への号令を下す豪壯な興起の姿と、義帝が信頼する上將軍宋義を誅殺してまでして趙を救ったという、この二つ  
の記述はその評価の宜しくない面とあい半ばするようである。「本紀」が天下に号令を下す事実上の権力者を以つ  
て構成されていることには異論はない<sup>(5)</sup>が、著述の趣旨を述べるにしては他の「本紀」の趣旨と比較して見劣り  
がするようである。更に「高祖本紀」の部分には「子羽暴虐」の語句すら記述されている。

ところで、「項羽本紀」の著述趣旨の説明に匹敵する記述には「呂后本紀」がある。「本紀」に立てられた理由は恐らく項羽の場合と同様に事実上の権力者であったことにあるのであろう<sup>(6)</sup>。「太史公自序」の著述趣旨には  
惠帝早死し、呂氏一族は百姓の怡ぶところとはならなかった。また、呂后が呂祿及び呂産を尊位につけて強権を  
与えて呂氏を強固にしたため、諸侯は呂氏一族を誅せんと謀るに至った。且つ呂后によって趙の隱王如意が殺さ  
れ、趙の幽王友が幽閉されて死ぬなどで大臣等は疑心を抱き恐れた。このようにして遂に呂氏一族は滅亡の禍を

ひきおこしたと述べられている。恵帝の早死は呂后の戚夫人に対する無惨な仕うちや年少であったその子の趙王如意の毒殺、或いは兄である斉の悼惠王に対する未遂に終わったとはいえ毒殺しようとしたことなどが、彼の繊細な神経をずたずたにしてしまった事に原因があるのであろう。「呂后本紀」には「人彘」と呼ばれる戚夫人を見て慟哭し、一年以上も病床に伏したのみならず、この所業は人のよく為す所のものではないと責め、その子として天下を治めることはできないとさえ述べる。かくして、恵帝はこれより飲酒・淫楽に明け暮れる毎日を送り、政治を聴かず、遂に病を得たのであったという。恵帝の性格については仁弱と記述され、或いは慈仁ともあるところから、心優しき人物であったのであろう。一方の呂后については、野口定男氏「呂后本紀を読む<sup>(7)</sup>」や武田泰淳氏「司馬遷」に述べられる如く恐るべき性格の持主であったと云えるだろう。呂后は剛毅の人であったと書せられ、高祖の天下平定を助け、多くの功臣・重臣を誅殺するにも多く呂后の力が働いていたとある。そもそも呂后は高祖が微賤の頃より辛苦を共にして兵馬の間に留守居をし、年たけていった者であり、加えて吾が子が廢せられて如意が太子に取り立てられようとした事件が起り、留侯張良の力を借りてようやく事無きを得た<sup>(8)</sup>などの波瀾の生活を強いられたのである。剛毅の人でなければ到底生きられぬところであったと思われる。この培われた性格は重臣等を誅殺したりする間に益々残忍さを加えていったものである。かくして仁弱なる恵帝が継位した時、剛毅な呂后が背後に控えて補佐しようとしたのである。戚夫人を「人彘」と名づけて己れの憎悪をはらした時、その満足感と力に酔ったのではあるまいか。そして、恵帝に「人彘」を示したのはいわば仁弱を矯勵せしめるための教育的配慮が働いていたのではなかったか。しかし、この事は全く逆の結果をもたらした。謀略と血のりの中で生きて来た呂后にとっては快心以外の何物でもないことであっても恵帝には耐えられぬことであっ

たのである。

韓信は斬殺される時に婦女子にあざむかれたと口走った。彭越もまた謝罪しようとしてかえって呂後の術中に陥った。盧縮の寵臣に告げた言葉の中に「往年の春には淮陰侯韓信を族滅し、夏には彭越を誅殺したのは全て呂後の計略であったのだ。しかも、今は主上が病床に在って、全てを呂後に任せている、呂後は婦人であるから、専ら越度を探しては異姓の王や大功ある臣を誅殺しようとはかりしているのである<sup>(9)</sup>」とある。こうして盧縮は高祖の全快を待ったのであったが、遂に崩ずるに及んで郎党数千人をひきいて匈奴に逃亡したのであった。高祖存命中に既に呂後は陰險な謀略の楽しみを知っていたように見える。「高祖本紀」には高祖の病が重くなった時に、呂后と死後の漢の屋台骨を補佐するべき人物についての会話が記載されている。この会話は呂后からの問いではじまる。高祖の口にはほった人物は曹參・王陵・陳平・周勃であったが、劉氏を安泰にするものは勃であろうと述べている。呂后がその次の人物を訊ねたとき高祖は「此後亦非而所知也<sup>(10)</sup>」と答えたという。しかしながら、呂后にとってこれでは困るのである。辛苦の上得たこの世界は永久でなければならぬと考える彼女には太子改廢の危機を脱した恵帝護持の思いがあったに相違ない。その故に嫉妬のみでなく戚夫人と如意に対する陰惨な事件を引き起し、斉の悼恵王の来朝した際に恵帝が斉王を兄として上座に据えたことに対して烈火のごとく怒って毒殺しようとしてまで図ったのであろう<sup>(11)</sup>。

呂后が己れの一族のために利を図るようになったのは、恵帝の死を境としてであろう。この母のもとに鬱々として楽しななかつた恵帝が未央宮に崩じたのは即位して七年秋八月のことであった。班固はその贊において「遭呂太后虧損至徳、悲夫。」と慨嘆する<sup>(12)</sup>。恵帝の死はその中心が失われたのである。それにもかかわらず呂后は

涙を見せなかったと記述されている。それは留侯張良の子で僅か十五歳の侍中辟疆の言葉に「帝毋壯子。太后畏君等。」とあるように陳平等重臣が画策して権力を握るのではあるまいかと懼れてのことであるという。野口氏が指摘されるように、これ等重臣は本質的には高祖とおなじく天下に号令しようとする乱世の雄なのである<sup>13</sup>。将来を思う時、死を悲しむ余猶がなかったのは当然である。辟疆の呂后を慰め且つ不安を除く策、即ち呂氏一族を国家の枢要の地位に置こうとする策<sup>14</sup>が丞相によって請われて、はじめて彼女は悦びそして悲しげに哭したのであった<sup>15</sup>。ここに司馬遷は「呂氏権田此起。」と書いている。

少帝即位の元年より号令は呂后より出るようになり、帝が年少であることで朝に臨んで天子の事を行い、下すところの政令を制と称した。その得意の様子がわかる。呂后はまた、呂氏一族の者を王にしようと右丞相王陵に相談すると、高祖に「少戇」と評されたこの人物はその愚直のままに正論を述べ、徐々にその実権を奪われ、遂に病を得て帰国したという<sup>16</sup>。また、「陳丞相世家」には呂后の妹呂嬃が夫樊噲を捕えた一件を根にもつてしばしば讒言したことに対処する陳平の様子を記述している。陳平が智謀秀れた者であったことは高祖の語に見える。左丞相・辟陽侯審食其が呂后に寵遇されて、諸事が全て彼の手によって決定される事態を見て摩擦を避けたとも考えられる。陳平が飲酒・淫楽にふけるのを見て呂后はひそかに独り喜んだという、むしろこれこそが陳平の望んでいたことであった。呂后は陳平に面会して呂嬃の讒言を畏れる必要はないと慰留するに至ってはなおのことである<sup>17</sup>。そもそも呂氏一族を立てて王とするについて認めたことも、いつわってそのようにしたのであるという。呂后の死後、この一族を誅滅して文帝を立てるとするのが、彼が本来抱いていた計謀であったと記載されている。しかし、この本来抱いていた計謀という記述も実は割り引きして考える必要がある<sup>18</sup>である。「鄴生・



陸賈列伝」に呂氏一族の専横によって劉氏が危殆に瀕している国家の不安を憂慮しながらも、何ら為す術もなく家居している姿が述べられている。「右丞相陳平患之、力不能争。恐禍及口、常燕居深思。」とあるから、反対する程の力もなく、禍いの身に及ぶことを恐れていたのである。しかも、陸賈が陳平のために呂氏を掣肘する策をいろいろと考え、陳平はその計略を用いて絳侯周勃と親密にしたため呂氏の陰謀はやりづらくなったという。陸賈は高祖に「居馬上得之。寧可以馬上治之乎。」と文武並び行うべきを述べた人物である。ともあれ、呂后が恵帝の死に遇っても泣くこともできぬほど恐れたこの重臣等のありようは上述の如きものであったのである。

右丞相陳平を「世家」に列した司馬遷はその「太史公曰」の中で、若い頃は黄帝・老子の術を好んだと述べている。してみると先述の彼の処世は正に「太史公自序」に記述されている父談の六家要旨にいう「其為術也、因陰陽之大順、采儒墨之善、撮名法之要、与时遷移、応物变化。云々」或いは「其術以虚無為本、以因循為用。無勢、無常形。故能究万物之情。不為物先、不為物後、故能為万物主。云々」というものと合致しているといえるであろう。

実に呂后の剛毅な性格によって統宰される漢室は恐るべきものであった。恐怖が支配していたといつてよい。恵帝の死を境として彼女が中心となったのである。阻むものはない。有ったとしても踏み潰すだけである。恵帝を継いだ少帝は本来自分が恵帝皇后の子ではないと知った時、太后が己れの母を殺して引き取ったことを怨み、壮年になったら乱を起そうと語った<sup>13</sup>という。これを聞いた呂后は早速彼を幽閉し、重病と発表した上で、帝は失惑昏乱して宗廟の祭も出来ず、天下をまかせるわけにはいかぬ、帝を代えようと宣言するのである。群臣は皆頓首し口々に天下万民のため、宗廟社稷を安んずるご深慮と云うばかりであった。呂后内心の得意や思うべし、

帝位をすらいのままに出来るのである<sup>19)</sup>。かくして、少帝は廢位、幽殺されるに至った。

まだ呂后の恐るべき一面を語るものが記述されている。趙王友は呂氏一族の女を妃とし、これを嫌って他の女性を愛したのために讒言され、召し出されて幽閉された上に、絶食を強いられて悲憤のうちに歌をうたい、遂に幽死するに至ったという<sup>20)</sup>。実に呂后の殺人嗜好を示す好材料が提供されていると云えるであろう。「己丑、日食。昼晦。太后惡之。心不樂。乃謂左右曰。此為我也。」とある記述もまた凄じいものがある。果して呂后がこの日蝕をおそれたのか、それともにくんだのか。おそれたとするならば端無くもこの絶大なる権力者が見せた恐れを知る人間的な一面であることになり、自分のせいであると側近にもらしたのは幾度となく血を流したことへの反省の意が籠められているように見える。しかし、呂后のこの後に於ける権力に酔う姿と流血は停まることを知らないかのようである。それは彼女の剛毅な性格がそのまま反映しているように、この日蝕の年の六月に趙王恢は脅かされるままに自殺し、九月には燕の靈王建の死を幸いにその子を殺したのである。恐らくおそれがこのような所業に駆りたてたのではあるまいと思われる。このように見てみると自分のせいであるともらした言葉は、実は何物をも恐れぬところの不遜な自信がむき出しになったものと考えられるであろう<sup>21)</sup>。日食は古來人事・万物の順調ならざる時にその戒めとして現われるものであるとする考えがある<sup>22)</sup>。それにも拘らず呂后は殺人絵巻を繰りひろげたのであるから、この天象をにくみこそすれおそれる筈はなかったというように理解すべきもののように考えられる。

淮陰侯韓信及三族、彭越及一族、戚氏及趙王如意、少帝生母及少帝、趙王友、趙王恢、燕靈王建の子、以上は呂后が直接、間接に関わった殺に関する事件である。容赦ない所業と云わなければなるまい。呂氏一族を諸王と

することで安泰を図るためには情は不用なのであった。このことは過去の呂後のあり様から見れば表裏を為すものと云えよう。戚夫人如意の一件も根は恵帝や己れを含めた呂氏一族に対する肉親の情から発したとも云えるのではあるまいか。恵帝の死に呆然とすると共に一族の命運を考える時、その剛毅な性格と相俟つて涙を見せずに硬直していた呂後は、張辟彊及重臣等の計画によつてはじめて泣いたのである。それは安堵の涙であると同時に吾が子の死を悲しむ母親の涙であった。かくして安泰への歯車を自らの手によつて廻わすとき、更にまた幾つかの殺人が行われたのである。

呂後の人情の有無をうかがい知るには「呂后本紀」のみでは不足である<sup>23</sup>。「劉敬・叔孫通列伝」には平城で匈奴に包囲されてようやく脱出した高祖が、劉敬に対匈奴策を下問することが記述されている。劉敬の策は適長公主を冒頓に嫁がせて和親することであった。高祖はこれを実行しようとしたのであったが、呂後は日夜自分には太子と一女しかないのに匈奴に棄てるようなことはできないと泣き口説いた<sup>24</sup>ため、遂にこれを断念して宗室の女をもつてしたという。ここにあるのは母親の姿そのものである。また、周昌は太子改廢の議がおこつた時に、断じてその詔には従いかねることを吃りながら主張したのであったが、これを東廂で耳をそばだてて聞いた呂後はわざわざびざまずいて感謝したという<sup>25</sup>。ここにもまた母親の姿がある。或いは留侯が人間界を棄てて赤松子に従つて遊ぶことを望み、道引して穀類を避け、身を軽くするを学んだが、呂後は太子擁護の尽力を徳として強いて穀類を食べさせたという<sup>26</sup>。その恩義に報いようとした行為であろう。或いは陳平に対するねんごろないたわりの言葉も記載されている<sup>27</sup>。以上見てきたように呂後は決して無情の人ではない。むしろ子煩悩な人であったからこそ戚夫人や如意の事件を起し、斉の悼惠王への憎しみがあつたのであろう。恵帝の死後、それは権力護

持と共に呂氏一族に向けられていったものと考えられる。

さて、八年間にわたって君臨した呂后は、三月に覇上で除害の祭を行った帰途、蒼い犬の如きものがその腋にとりついたように見え、忽ち消えてしまうという不思議な体験をした。卜したところそれは趙王如意の祟りであるという。やがて腋の下に傷を病むが、呂后は外孫魯王偃のために凶り、張釈・呂榮を封じ、宦官の令・丞を関内侯とし、食邑五百戸を与える等と目まぐるしい動きをみせる。如意の祟りであるという不思議な体験も、恰かもそれが原因であるかのようにみえる腋下の傷も、呂后のこの精力的な動きを見る限りいかなる影も見い出すことはできない。更に病が重くなった七月には、呂祿を上將軍に任命して北軍におらしめ、呂王産を南軍におらしめて兵権を掌握し、宮中を守って他に制せられぬよう誠めて崩じたのであった。犬禍を病んで崩じたといわれる<sup>88</sup>。

これほどまでに将来を配慮した呂后ではあったが、彼女の死後数月を経ないで呂氏一族が誅滅されてしまったのは憐れむべきである。それだけ陳平等を筆頭に逼塞を余儀なくされていた者達の多かったことを物語るものであろう。

以上、呂后の言動にまつわるいろいろな側面について見てきたのであるが、「本紀」に記述されている「太史公曰」は先の「項羽本紀」に於ける敵しとは異って意外にもおだやかなものとなっている。「本紀」を立てるについての百官人民に怡ばれず、呂氏一族を強固なものにしようとして、遂に宗族誅滅の悲劇をひき起したと記述した激しいものは此処にない。筆者は先に「項羽本紀」の「太史公曰」の部分で触れたように、そこには広義な意味での人間に対する愛しいまでの情感と項羽本身への口惜しさが籠められているように思えると述べたのであるが、「呂后本紀」と「太史公曰」にはそのように思わせるものは微塵もない。むしろ、「本紀」の陰惨な殺人

や呂氏一族の誅滅の過程を読みたどってきた者にとっては、余りにもおだやかな、ある種の明るさをさえ伴っているのに戸惑いを覚えるのである。

「太史公曰」では先ず恵帝・呂后の時は人民がようやく戦乱の苦しみから解放されて、上下共に平穩無事にすごしたいと願った時期である<sup>82</sup>と述べることからはじめられる。次いで「故恵帝垂拱」とあるのはまことに皮肉である。文字通り手をこまねいて何もしなかったことを指している。このあたり司馬遷の記述は実に容赦ない。如意・戚夫人の事件は恵帝に「終不能治天下。」と云わしめるほど衝撃を与えた。如意が毒殺されたのは恵帝即位の十二月のことである。戚夫人の「人彘」の一件はこの後のことであろう。これより後の恵帝に関する言動は「史記」を通じてみえるところ極めて僅少なものである。「蕭相国世家」に蕭何を病床に見舞った恵帝が、蕭何の死後誰を以って宰相にすべきかを問うことが記述されている<sup>83</sup>。恵帝が曹參の名を挙げて蕭何と同意するのであるが凡庸ではなかったことを意味しているであろう。但し、蕭何の死後誰を以って宰相とするかについては、「高祖本紀」の中で呂后の相談に対する高祖の語に見える<sup>84</sup>ところであり、これとは無縁ではないようにも思われる。また、恵帝が大いに怒ったという話が「酈生・陸賈列伝」にある。辟陽侯審食其は呂后の寵を得ていた——審食其は太公・呂后と共に虜とされたこともある（項羽本紀）ので寵を得ていたであろう——から、自然素行もおさまらなかつたものと思われるが、平原君朱建の母の喪に百金を持参した事に関して恵帝に讒言する者があつたからであると記述されている<sup>85</sup>。この事件はほとんど誅殺されるまでに至つたが、恵帝の寵臣閼孺のとりなしによって赦免された。恵帝が怒るといふような感情を示す記載であるが、今一つ「孝恵帝大懼曰、急壞之。」という記述が「劉敬・叔孫通列伝」に見える。これは宗廟への道の上に複道を築かせたことを叔孫通に誤つた行

為と言われた時に示した言動である<sup>33</sup>。また、前述の恵帝の寵臣閼孺については「佞幸列伝」に記述がある。側近の者達まで羽毛で飾った冠、貝で飾った帯、脂粉をつける有様であったという<sup>34</sup>。以上みてきたところでは政治に関する恵帝の言動は蕭何との問答に示される程度のものである<sup>35</sup>。「垂拱」と記述される所以である。

次いで「高后女主称制、政不出房戸、天下晏然。」と「太史公曰」には述べている。いわば司馬遷は宮中のみに限られたもので、人民とは隔絶したところでのものとして扱えているのである。従って、人民は戦乱もなく各々がその才覚により自然に豊かになったと述べる。孝恵帝の「本紀」を立てずに呂後の「本紀」を立てたのは、孝恵帝即位より呂後の死に至る約十五年に及ぶ事実上の権力者と考えた司馬遷の透徹した判断がある。いま「呂后本紀」は人民に関わりある施策を記述することは皆無といつて良い<sup>36</sup>。それは一にかかつて蕭相国何と曹相国参によるものと考えざるべきもののように思われる。二者共に秦の苛政からようやく免れ得た人民の趨くところを察し、時流にまかせ、人民が安らかに生活し得るままにした<sup>37</sup>のであった。そして「呂后本紀」は呂後の凄まじい殺人と呂氏一族の隆盛の姿を前半に記述し、後半は一転して呂后死後の呂氏一族の誅滅されてゆく過程を記述しているのである。これは呂氏一族の興亡の歴史でもある。

さて、司馬遷は「奇」を愛したという<sup>38</sup>。李長之著「司馬遷之人格与風格」は好奇与愛才の項でこれを説いて詳しい。「司馬遷愛一切奇、而尤愛人中之奇、人中之奇、就是才。」と説明している。その故に惨酷無比の酷吏にも人才を認めて立伝したのであり、そして司馬遷が最も愛した者達は項羽と李広であったと述べる<sup>39</sup>。

司馬遷の時代、漢室はいよいよ強固であり、項羽は建国にまつわる敵手としての意味しかもたなくなっていたように考えられる。従って司馬遷は何等顧慮する必要なく李氏の述べるように最も愛すべき者として記述し、自

然その筆は生彩を帯びたものとなつたのであろう。いま、この「呂后本紀」は呂后を頂点とする呂氏一族の興亡であつて、しかも劉氏にとつてはその存続をあやうくしたという意味で鑑戒とはなり得ても、もはや記述する上での配慮は無用といえるであらう<sup>40</sup>。呂后の凄惨な殺の記述は、また司馬遷の「奇」を愛するの性向と合うところがあつたのではあるまいか。呂后はそれなりに自己の思うところを堂々とやつてのけた人物といえる。それは殺という最も忌むべき所業でいろどられた女人による天下経営の構想であつたのである。所詮それは房戸より出ずることなく終つたが、司馬遷にとつてこの鬼気せまる呂后の姿は驚嘆すべきものだつたように思われる。

註 (1) 扶義俟儻、不令己失時、立功名於天下。作七十列伝。(太史公自序)

(2) 二十八宿環北辰、三十幅共一轂、運行無窮。輔弘肢肱之臣配焉。忠信行道、以奉主上。作三十世家。(太史公自序)

(3) 政由羽出、号為霸王。位雖不終、近古以来未嘗有也。及羽背閔懷楚、放逐義帝而自立、怨王侯叛己、難矣。自矜功伐、奮其私智而不師古。謂霸王之業、欲以力征經營天下、五年卒亡其國。身死東城、尚不覺寤。而不自責過矣。乃引天亡我、非用兵之罪也、豈不謬哉。(項羽本紀)

(4) 「太史公自序」秦失其道、蒙桀並擾。項梁業之、子羽接之。殺慶救趙、諸侯立之。誅嬰背懷、天下非之。作項羽本紀。と立伝の趣旨を述べる。項梁をついで趙を救うの功業と誅嬰背懷の罪過とが相い半ばして書かれている。背懷については蘇東坡「范增論」羽之殺卿子冠軍也、是弑義帝之兆也。と述べ、且つ沛公のみを入関せしめたり、宋義を衆人の中より拔擢して上將軍に任命したことなどの点から義帝は天下の賢主なりと評する。既にして宋義を誅殺して義帝の意に負

いたのみではなく、「高祖本紀」には広武山で高祖が項羽の罪過を数え上げた十項のうち四、五項にはその暴逆と子嬰殺害を挙げ、九項には人を遣わして陰かに義帝を江南に弑したことを挙げてゐる。従つて背懷は弑殺を意味していると考えられるのであるが、これほど明らかなることを何故か背字を用いて弑殺の語を用いていない。「項羽本紀」には乃陰令衡山・臨江王擊殺之江中。と書し、「高祖本紀」は乃陰令衡山王・臨江王擊之。殺義江南。と書し、「黥布列伝」は適陰令九江王布等行擊之。其八月、布使將擊義帝、追殺之郢県。と書してゐる。ところで、「漢書・高帝紀」には二年冬十月、項羽使九江王布殺義帝於郢。とし、師古の注は項羽・黥布（布使將追殺之郢）の伝に合致する所から衡山・臨江・黥布等が命を受け、布が実行したものとされている。しかし、「考証」は「黥布列伝」に黥布に漢王に与みすべきを説く随何の言葉に天下が楚に不義の名を負わせてゐるのは義帝を殺したからであることによつて、いわば手を下した当人の前で述べるべき言葉ではないので「漢書」による後人の竄入ではなからうかと疑つてゐる。だが、口説の徒でも称すべき随何が果して楚王の責として説く場合にこの事を配慮したか否か。楚王の非を唱へることに重点が置かれてゐるとともに、武人である被命令者は当時の風潮としてそれほどの意識を持たなかつたのではあるまいか。黥布は秦卒二十万を坑埋めにした当人であるが「高祖本紀」では命令者の項羽の罪過として挙げられているが如きであろう。季鎮淮氏「司馬遷」寫作方法の項に於ける互見法という意味で考えることも可能なものではあるまいか。そして、なによりも班固がよく「史記」の文をそのまま活用することを考えておくべきであらう。師古の見解が妥当であるように思われる。ところで、義帝の弑殺の事件が何時であつたのかについては項羽・高祖の両本紀は元年四月、黥布の伝は元年八月、「秦楚之際月表」は二年十月として「漢書」では二年十月とする。梁氏の説もあるが、いづれとも判断し難い。此れ等の差は司馬遷が拠つた資料や伝聞に於ける差であつたかも知れないが、この月表著述の趣旨には事繁変衆、故詳著秦楚之際月表。とあり、班固はこれに従つたもののように思われる。

- (5) 「項羽本紀」立伝の是非については「索隱」にその妥当でないことが指摘されているが、「考証」は張照・馮景の説を挙げて是とする。事実上の支配者である事を以つて「本紀」に列したとする見解は妥当であらう。その意味で呂后もまた「本紀」に列せられてゐるのである。



(6) 注(5) 這樣的の処に司馬遷の事実に対する態度がうかがわれる。「呂后本紀」の「考証」に史公舍惠帝而紀呂后、猶舍楚懷而紀項羽、蓋以政令之所出也。と説明する。

(7) 野口定男著「史記を読む」所収。原題「文学以前の話」草稿。

(8) 「留侯世家」上欲廢太子、立戚夫人子趙王如意。大臣多諫争、未能得堅決者也。呂后恐、不知所為。人或謂呂后曰。留侯善画計策、上信用之。呂后乃使建成侯呂沢劫留侯曰。云々とある。呂后の不安と狼狽振りが目に見えるようであり、留侯を劫かし強要したことがわかる。それだけに戚夫人・如意に対する憎悪は激しいものがあつたと見られる。

(9) 「韓信・盧縮列伝」謂其幸臣曰。非劉氏而王、独我与長沙耳。往年春、漢族淮陰、夏、誅彭越。皆呂后計。今上病、属任呂后。呂后婦人、專欲以事誅異姓王者、及大功臣。

(10) この一連の会話は已而呂后問。陛下百歳後、蕭相国即死、令誰代之。上曰。曹參可。問其次。上曰。王陵可。然陵少戇。陳平可以助之。陳平智有余。然難以独任。周勃重厚少文。然安劉氏者必勃也。可令為太尉。呂后復問其次。上曰。此後亦非而所知也。とある。「考証」は中井積徳曰、是數語恐有後人所附益也を挙げる。顔師古は言自此之後、汝亦終矣、不復知之。と「高帝紀」に注している。

(11) 「呂后本紀」二年、楚元王・齊悼王皆來朝、十月、孝惠与齊王燕飲太后前。孝惠以為齊王兄。置上坐、如家人之礼。太后怒、遇令酌阿卮。酹置前。「考証」顔師古曰、以兄弟齒列、不從君臣之礼、故曰家人也。(漢書・高五王伝注)

(12) 「漢書・惠帝紀」贊。

(13) 注(7)

(14) 辟彊の策は陳平・周勃の阿意として諸家の悪評を蒙っているものである。(考証)

(15) 「芸文類聚」人部、泣に「楚漢春秋」を引いて「呂后欲為惠帝高墳、使從未央宮坐而見之。東陽侯垂泣曰、陛下日夜見惠帝家、悲哀流涕無已、是傷生也、臣竊哀之。太后乃止。」とある。司馬遷も班固も此れを採っていない。もつとも此の事は九月埋葬時のことであらう。

(16) 「陳丞相世家」に王陵の略伝が記述されており、「呂后本紀」の「遂病免掃」とは異なり、「実不用陵。陵怒、謝疾免、

杜門竟不朝請。七年而卒。」とある。

(17) 呂太后聞之、私独喜。面質呂須交於陳平曰。鄙語曰。兒婦人口、不可用。願君与我何如耳。無畏呂須交之讒也。(陳丞相世家)

(18) 太子立為帝。帝壯(張文虎曰、壯字疑衍)。或聞其母死、非真皇后子、迺出言曰。后安能殺吾母而名我。我未壯。壯即為變。(呂后本紀)。考証、楓、三本、后上有太字。校補、桃源史記抄に太后に作るとある。「漢書・外戚伝」には太后に作る。「外戚世家」には呂后は親屬關係を二重・三重に結びたいと考えて魯元公主の娘を惠帝の皇后にしたとあるから、少帝の母を殺すなどの所業は呂后にこそ相応しい。

(19) 太后曰。凡有天下治、為万民命者。益之如天、容之如地。上有歎心以安百姓、百姓欣然以事其上。歛欣交通、而天下治。今皇帝病久不已。適失或悞乱、不能繼嗣奉宗廟祭祀。不可属天下。其代之。(呂后本紀)。この宣言は堂々として自信に満ちたものである。故にこそ呂后は恐るべきものといえよう。

(20) 乃歌曰。諸呂用事兮、劉氏危。迫脅王侯兮、彊授我妃。我妃既妒兮、誣我以惡。讒女乱国兮、上曾不寤。我無忠臣兮、何故弃国、自決中野兮、蒼天拳直。予嗟不可悔兮、寧蚤自財。為王而餓死兮、誰者憐之。呂氏絶理兮、託天報仇。(呂后本紀)

(21) 注(7) 野口氏は天変をも惹き起こすことのできたという得意と今までの生活が非行の集積でしかなかったという苦々しい痛みとの両面で理解されている。

(22) 「孝文本紀」十一月晦、日有食之。十二月望、日又食。上曰。朕聞之、天生蒸民、為之置君、以養治之。人主不徳、布政不均、則天示之以菑、以誠不治。乃十一月晦日有食之、適見于天。菑孰大焉。云々。また「天官書」其食、食所不利、復生、生所利、而食益尽、為主位。とあり、太子公曰に諸呂作乱、日蝕昼晦。と説明している。呂后だけが古來からのこのような考えに無知であつたとは思えない。

(23) 武田泰淳著「司馬遷」。「呂后にも、愛情が有つたかどうか、そこまではわからない。しかし、いずれにせよ、そうした女らしさは、『本紀』には残らなかつた。残っているのは、殺人の記録だけである。」とある。

24 呂后日夜泣曰。妾唯太子一女。奈何弃之匈奴。上竟不能遣長公主。

25 「張丞相列伝」昌為人吃。又盛怒曰。臣口不能言。然臣期期知其不可。陛下雖欲廢太子、臣期期不奉詔。上欣然而笑。

既罷。呂后側耳於其廂聽。見周昌、為跪謝曰。微君、太子幾廢。そして此の後文には高祖が戚夫人と如意の将来に呂后による迫害を予想し、周昌を趙王如意の宰相として万全を図ったが、その悲惨な結果に終わったことは先述の通りである。

26 「留侯世家」(張良)願弃人間事、欲從赤松子游耳。乃学辟穀道引輕身。会高帝崩。呂后德留侯。乃彊食之曰。人生

一世間、如白駒過隙。何至自苦如此乎。留侯不得已彊聽而食。後八年卒。また、徳とした事では「樊・鄴・滕・灌列伝」に孝惠帝及高后、徳嬰之脱孝惠・魯元於下邑之間也、乃賜嬰鼻北第第一。曰、近我。以尊異之。とある。楚軍に追われた高祖が危険になると二子を車よりつき落したのを、夏侯嬰が三度もひろい載せて遂に脱出し全きを得た(「項羽本紀」にもある)ことを指している。

27 「陳丞相世家」(樊)噲受詔。即反接載檻車、伝詣長安、(中略)平行聞高帝崩、平恐呂太后及呂嬃讒怒、乃馳伝先去。逢使者。詔平与灌嬰屯於滎陽。平受詔、立復馳至宮、哭甚哀。因奏事喪前。呂太后哀之曰。君勞。出休矣。

28 「漢書・外戚伝」太后持天下八年、病犬禍而崩。「五行志」遂病掖傷而崩。

29 時期について「平準書」孝惠・高后時為天下初定。「外戚世家」及孝惠帝崩、天下初定未久、繼嗣不明。「吳王濞列伝」会孝惠・高后時、天下初定、郡國諸侯、各務自拊循其民。「匈奴列伝」高祖崩、孝惠・呂太后時、漢初定。故匈奴以驕。「朝鮮列伝」会孝惠・高后時、天下初定。「酷吏列伝」博士狄山の匈奴和親策の語に、(高帝)乃遂結和親。孝惠・高后時、天下安樂。とある。

30 及何病、孝惠自臨視相国病。因問曰。君即百歳後、誰可代君者。对曰、知臣莫如主。孝惠曰。曹參何如。何頓首曰。帝得之矣。臣死不恨矣。

31) 注(10)

32) 辟陽侯行不正、得幸呂太后、(中略)及平原君母死、陸生素与平原君善。過之。平原君家貧、未有以發喪。方假貸服具。(中略)辟陽侯乃奉百金往稅。(中略)人或毀辟陽侯於孝惠帝。孝惠帝大怒、下吏欲誅之、呂太后慙、不可以言。大臣

多害辟陽侯行、欲遂誅之。今少しく誅殺せんと欲する理由が判然としないが、呂后の寵を笠に着る振舞が惠帝を怒らせていてこれを契機としたのか、更に平原君の貧に百金を贈ったのを面当て考えた（司馬遷に於ける李陵之禍の如く―報任安書―）ものであろうか。

33 孝惠帝為東朝長樂宮、及間往、數踴煩人。迺作複道、方築武庫南。叔孫生奏事。因請問曰。陛下何自築複道。高寝衣冠、月出游高廟。高廟漢太祖。奈何令後世子孫乘宗廟道上行哉。孝惠帝大懼曰、急壞之。

34 孝惠時有鬪孺。〔中略〕故孝惠時、郎侍中皆冠鷄鶩、貝帶、傅脂粉。化鬪・籍之屬也。

35 「漢書・高后紀」元年春正月、詔曰、前日孝惠帝言欲除三族壘・妖言令、議未決而崩、今除之。とあるが、「史記」には見えない。果して惠帝の意であるのか否か判断できない。

36 「漢書・惠帝紀」贊と「文帝紀」贊を比較すればその活動の差は一目瞭然である。なお「高后紀」贊は「史記」の「太史公曰」とほとんど同じである。

37 「蕭相国世家」（蕭何）因民之疾奏法、順流与之更始。「曹相国世家」（曹）參為漢相国清静、極言合道。然百姓離秦之酷、後参与休息無為。

38 揚雄「法言」君子篇。多愛不忍、子長也。仲尼多愛、愛義也。子長多愛、愛奇也。「史記索隱後序」其人好奇而詞省。故事覈而文微。

39 李氏は司馬遷が最も愛した人才について、一般地説、是聰明智慧、是才能、是不平庸、或不安於平庸、或意識到自己不平庸的。但尤其為他所深深地礼賛的、則是一種衝破規律、傲視万物、而又遭遇不幸、產生悲壯的戲劇性的結果的人物。夠上這個資格的、就是項羽和李広、と述べる。

40 「外戚世家」で司馬遷は劉氏の正統性を述べて、高后崩、合葬長陵。祿・産等懼誅、謀作乱。大臣征之。天誘其統。卒滅呂氏。（中略）是為孝文帝、泰漢宗廟。此豈非天邪。非天命孰能当之。という。

## 第二節 呂后伝

此の日、天地晦暝。

「此為我也」

一

呂后は側らに侍する者にこう告げた。呂后の七年正月のことである。これは明年呂后の死を予告したものであるという（漢書五行志）。日食は二年六月にも起っているが、此の日の日食は呂后にとって殊に嫌なものであったらしい。

太后之を悪み、心樂しまず（呂后本紀）。とある。

この日食が果して呂后の明年の死を告げるものであったか否かは兎も角、「私のせいだよ」と側近に告げる呂后の心情は一体いかなるものであったであろう。

呂后の人生はその当初から苦難の連続であったと云える。殊にその後半生に於ける彼女の在りようは、正に阿修羅の如きものであった。恐らく一日として心の安まる時はなかったのではあるまいか。

呂后は夫である漢の高祖（劉邦）の死後、仁弱であった恵帝を補佐して遂に政治を動かすに至った。しかし、不幸にして恵帝は即位七年で崩じた。年二十三。十六才で即位した恵帝では、その仁弱な性格を以って高祖と共に戦場を往来した諸将を抑えていくことは難かしい。高祖が長樂宮に崩じた時、四日を経過してもなお喪を發することをしなかつた。一に諸將の叛乱を懼れたからである。呂后は審食其と相談して、

諸將は帝（高祖）と同様に平民にすぎなかつた。それが今や北面して臣となつてはいるが、常に心中におさまらないものを持つている。今度は幼帝に仕えることになるが、彼等一族を根だやしにしなければ天下の安泰は難かしい。（高祖本紀）

と語っている。この時期、呂后の心配がいかなるものであつたかを示している。しかし、この諸將誅滅のことは、かえつて叛乱を引き起す口実を与えることになる。と忠告する者（鄼將軍）が有つて終つた。かくして、喪を發し、大赦を行い、廟前に即位した。呂后は高祖存命中、既に將軍誅滅に一役買つた経験がある。それらがいま幼帝擁護の立場から這樣的言葉となつて出たものである。こうして恵帝即位後も呂后は思いのままに振舞い、特に恵帝崩御の後、政令は呂后より出され、帝の改廢もまた彼女の自由に取り行われる處となつた。

「史記」には歴代王朝の帝王、言い換えれば人間世界の中心——黃帝より漢の武帝に至る——を記述する「本紀」と呼ばれるものがある（筆者は曾つて「東洋」第十一卷五号に「史記の諸相——構成について——」なる一文を草して、本紀・表・書・世家・列伝について解説・卑見を述べた）。しかし、恵帝には「本紀」は立てられず、「呂后本紀」が立てられている。これらについて滝川資言「史記会注考証」は「史公舎恵帝而呂后、猶舎楚懷而紀項羽、蓋以政令之所出也」と説明する。つまり、政令が呂后によつて出されたという実質的な権力者であるからだと云

うのである。但し、「漢書」では「惠帝紀」「高后(呂后)紀」共に立てられている。著者班固は、惠帝は短世とはいえ帝位にあったことを重視して立てたものであろう。また、「高后紀」は惠帝崩御後、呂后の朝に臨んで制(みことりの)と称して政令を出したことによるものであろう。「史記」では惠帝が何等為す所なく、呂后の臨朝称制を以つて「本紀」を立てたものと理解される。惠帝在位七年の間、何等為すことなく終つたには勿論理由がある。後述するように、即位の年十二月に起つた戚夫人及び趙王如意の一件が、彼の政治に対する意欲を全く沮喪せしめたのであつた。従つて、司馬遷の事実認識が「呂后本紀」のみを立てるといふ形で表明されたと見られるであろう。惠帝の後を継いで即位したのは後宮の子であるが、在位四年の半ばにして呂后の怒りを買ひ、幽閉された上で廢位、結局殺されてしまい、次いで常山王弘(惠帝後宮の子、もと襄成侯山、常山王となつた時に義と改名、即位後に弘と改名した)が即位、いずれも呂后の力によるものであるが、呂后の死後、呂后一族と共に誅殺された。しかしながら、この二帝はいずれも惠帝の子ではなく、呂后が他人の子を惠帝の実子といつわつたのだということが諸大臣の言にある(呂后本紀)。この二帝こそ災難である。全く呂后の操るままに即位し、一方は呂后に幽殺され、一方は諸大臣の手の者に誅殺された。ここに帝紀を立てられず「呂后本紀」中に記述されるに止まつた所以が知られるであらう。

かくの如く呂后は己れの意のままに振舞い続けたのであつた。この帝国を維持するためには手段を択ばず、謀略・殺人をも辞さなかつた。これを安泰にするための構想の中には、彼女の一族、呂氏を強固にすることが含まれていた。

劉氏にあらずして王たるは、天下共に之を撃て。(呂后本紀)

という高祖劉邦の遺訓（右丞相王陵の語。「漢興以來諸侯王年表」序に同意異文がある）を無視してまで呂氏一族の者三人を王としている。しかし、死の直前に一族の呂産・呂祿を誡める語にこの遺訓を引いて、呂氏で王たる者があるので大臣達は心中おだやかでなく、自分の死後、帝は年少でもあり、恐らく大臣は乱を起すであろうから用心せよ（呂后本紀）とある。己れの強引な振舞の結果が、死後に大臣の乱となって現れることを予測したのである。果して、死後に事態はこの予測通りになった。但し、あくまでも呂氏一族のみに対して諸大臣の刃は向けられたのである。呂後の呂氏一族を強固なものにしておきたいという希いには、案外戚夫人との確執や、その立場の脆弱さによって考える処があつたかも知れない。他方に於いて、呂後は恵帝に魯元公主（恵帝の姉）の娘を配して皇后とし、常山王弘を帝とした時には呂祿の娘を配して皇后とするなど、劉・呂二族の絆を強固なものにしようとしたのであつたが、何らの効果をあげることなく終つたのは哀れである。

呂後の死後に於ける変転推移については扱措き、彼女は漢室の中心として天下を思いのままに動かす立場に身を置いて、それを遮るものは何もない。だが、呂后が這樣な力を持つに至つた道程には大小の起伏があり、特筆すべき重大な危機が二度あつた。一つは戚夫人の子趙王如意と我が子恵帝との太子更改の件であり、一つは恵帝崩御の際の危機であつた（後述）。夫高祖と共に戦場を往来し、且つ此れ等の危機を切り抜けるなどによって、その精神はいよいよ強靱の度を加えていったであろう。とはいへ、恵帝・魯元公主などに対する情愛には見るべきものがあり、呂後の冷酷さは恵帝崩御を境にして一段と増しているようである。

かくして呂后死の前年正月、彼の日食をみたのであつた。「此為我也」と側近に告げた彼女の心情について、野口定男氏は「呂后本紀を読む」（『史記を読む』研文選書、所収）の中で次の如く述べられている。「恐らく彼



女の顔面には、遂に自分の力によって、天変をも惹き起こすことができたと得意の色が表われていたであろう。しかし、同時に、それにもまして、今までの生活が非行の集積でしかなかったという苦々しい痛みの色が、濃くうかんでいたことであろう。人間の分際をはなれて、天地の営みを動かすものにまで飛躍しようとした瞬間、彼女はやはりただの人間に還つたのだ。」と。しかしながら、果して呂后にこの天変を惹き起こしたなどという得意の一面が存在し得たであろうか。確かに呂后は人間世界の全てを思い通りに為し得た。しかし、果して此処までの自信があつたか否かは疑問である。彼女がこの天象をにくみ、心樂しまなかつたのは、むしろ、天象が己れの所業を非難するものとして感得されたからではなかつたか。古来、天変地異は為政者の不穩当なる施策を諷める意があると考えられ、反省の資とされてきたのである。晩年になるほどに何一つとして懼れるべきものを持たなかつた呂后は、此処に己れの行為を遮ろうとするものを見たのではなかつたであろうか。野口氏の云われる己れの非行に対する苦々しい痛みが走つたかも知れない。しかし、それは束の間に己れの所業に対する何物の容喙も許さぬ思いに變つたのではなかつたか。以後の呂后の所業に日食による反省の跡を見出すことはできない。この年には更に趙王恢を自殺に追い込み、燕の靈王建の子を殺している。此の日、冷えびえとした闇がりの中で、天空を睨んで立つ呂后の姿には鬼気迫るものがある。この天象が呂后に残したものは、どうやら憎悪のみであつたように思われる。

呂后の凄まじい生き方の一面に殺人がある。彼女には容赦を意味する語は無いかのようである。武田泰淳氏は名著「司馬遷―史記の世界」の中で、「呂后は偉大なる殺人者である。殺人の智慧ゆたかに、殺人精神に徹している。もちろん彼女は英雄豪傑のように多数の敵を殺すことはできなかつた。そのかわり、英雄豪傑を殺す術を

心得ていた。」と述べ、更に「呂后にも、愛情が有ったかどうか、そこまではわからない。しかし、いずれにせよ、そうした女らしさは、『本紀』には残らなかつた。残っているのは、殺人の記録だけである。」と述べる。

漢室の中心としての呂后は、その感情のままに人を殺した。当初、高祖を佐けてその智を働かせ、韓信・彭越等を誅殺したのには、謀叛或いはその禍根を絶つという理由があつた。しかし、恵帝即位後の呂后は、とかく感情の激するままに此れを行つた感が強い。結局、劉・呂二族の繁栄を希い、臨朝称制を以つて呂后が成し遂げたものは一体何んであつたのであろう。司馬遷は「呂后本紀」の末尾に、人民が戦乱の苦しみから脱れ得た此の時代、君臣共に平穩でありたいと願つた。故に恵帝は拱手して何もせず、呂后は女王として政令を制と称したが、政事は房戸宮室を出ることなく、天下は平安であつたと述べる。司馬遷が把えた呂后の阿修羅の世界は、房戸を出ざるものであつたのである。

## 二

呂后、名は雉、字は娥姁。高祖が亭長であつた頃、父の呂公は仇を避けて沛の県令の許に身を寄せた。珍客到来といふことで、沛の主だった者達が挨拶に出かけた処、取り仕切つていた蕭何は進物の費千錢以下の者は堂下に坐つてもらふと取り決めていた。ところが、一錢も持たぬ高祖は一万錢と名刺に書いて差し出したため、大いに驚いた呂公は門まで出迎え、鄭重に上坐に案内したという。鄭重に迎えたのにはもう一つ理由がある。呂公はかねてから人相を見るのを好んでいたので、高祖の人相が高貴であるのを見て上坐に案内したというのである。

かくして呂公は此の夜に娘を高祖に嫁がせることに決した。

しかし、当時に於ける高祖の評判は極めて悪い。呂公の妻は余りにも簡単に大切な娘の嫁ぎ先を決めたことを怒った。案外、高祖の無頼の評判を妻は耳にしていたからかも知れない。後に高祖の臣として功績第一に挙げられた蕭何は、「劉季固多大言、少成事」（高祖、姓は劉、字は季。劉季は元來、大言ばかりで、まるで仕事をしな）と罵っているほどである。ところが、その一方で、高祖がまだ無位無官の頃、既に官吏であつた蕭何はしばしば高祖を事件から救つたり、亭長となつてからはいつも側について補佐した（蕭相国世家）とあるから、この悪口は何時のことであつたのか、兎も角、高祖という人物には不思議な魅力があつたのであろう。

呂后が高祖に嫁いだのは以上のような訳であつたが、この人相に関わる話は他にもある。高祖が亭長の頃、帰省して田の除草をしていた呂后と二人の子供（惠帝と魯元公主。呂后の子供はこの二人のみ）に、飲水を乞うた老人が呂后の人相を見て「夫人天下貴人」と云い、後ろの惠帝を見て夫人の貴人たる所以は此の子の故である、また、魯元公主も貴人の相だと告げる。後刻、高祖はこれを聞いて老人を追いかけて、自分の人相を見てもらつた処、先の夫人、子供の貴人の相は貴殿によるもので、貴殿の高貴さは口に云い表せないと云つた（高祖本紀）とある。どうやら此の種の話は、漢朝創始者である高祖は天命を受け王となるべき人であり、当然何らかの瑞祥があるべきであるとする後世捏造の感あるを免れない。先の呂公觀相の一件も同様附加されたものかも知れない。高祖にまつわる此れに類する話はまだある。高祖を懐胎する折、母の劉媪は大沢の堤で休息していた処、夢の中で神に遇い、此の時雷電きらめいて暗くなり、上に蛟竜がいたという。高祖が亭長の頃、酒家で酔つて寝込むと何時もその上に竜の姿が見え、酒の売り上げも数倍になった。同じく亭長の頃、命令で鄴山に人夫を送つた処、

逃亡相つぎ、計算では目的地に着く頃には誰も居なくなつてしまふ、そこで高祖は皆に逃亡を許し、自らも逃亡することにした。その夜、酒を飲んだ上で数人と沢の中を行つた処、大蛇が道に横たわつていて通れない、高祖は此れを両断して道を開き、数里行つた所で遂に酔つて寝てしまった。一行の後ろの者が大蛇のいた所を通ると、老婆の暗闇で泣いている声が聞え、訳を訊ねると、私の子は白帝(秦の祠つた神)の子で大蛇となつて道にいた処、今、赤帝(堯の子孫、漢を指す)の子に斬り殺されたからだと言ふ。この話は漢が秦を倒すことそのままである。また、秦の始皇帝は常に東南の方向に天子の氣が有ると云い、東遊してこれを払拭しようとした時、高祖は直ちに自分のことではないかと考え、山沢や岩石の間に逃げかくれたという。一方、呂后は人と一緒に高祖を探し、いつも間違ひなく探し当てるので、その訳を訊ねると、高祖の居る上には雲氣があるからだと言へている(以上高祖本紀)。或いは「項羽本紀」には、彼の有名な鴻門の会が行われる前に、高祖を攻めようとする項羽に対して説く范増の語に、高祖の居る所の氣を望ませた処、竜(項羽本紀には竜虎とあるが、漢書高帝紀には虎字はなく、これに従つた)の形で五色の綾を為している、これは天子の氣であるから取り逃してはならぬとある。此れ等の話にはいささか噴飯ものもあるが、いづれも漢が所謂受命の君として、天下の宗主たる資格を有するのしたい為めに考え出されたものであらう。這樣にして漢室不動の權威を作り上げる役目を此れ等は担つてゐるのである。

さて、呂后は二人の子をもうけた。高祖の戰場往來と共に、母子三人もまた遂にその渦中の人であつた。高祖の二年、高祖は彭城に於いて大敗を喫し、睢水で大暴風に紛れて部下數十騎と辛じて逃れた。此の時、郷里の沛に家族を連れに戻つたが、既に一家は逃げ去つていて会えなかつた。しかし、偶然道に於いて二人の子供と会い、

車に乗せて行った処、楚軍（項羽軍）の追撃を受け、高祖は危険が迫ったときには三度も二人の子供を車から押し落し、そのたびに夏侯嬰が助け上げて脱出した（項羽本紀）。樊鄴滕灌列伝の汝陰侯夏侯嬰の記述では、危険が迫るたびに蹴落そうとしたが、嬰がかばって遂に脱出した。途中、高祖は憤怒の余り十数回嬰を斬ろうとしたとある。此の一件は高祖の性格・思考の一面を示している面白い。この大敗走は四月のことで、敗走時の恵帝に対する仕打ちに思う処があつたのかどうか、六月、太子に立てた。一方の呂后の方は、高祖の父太公と共に高祖を探して、却って楚軍と出遇い捕われている。太公・呂后が漢に帰つたのは、四年項羽との講和が成つたからで、ほぼ二年にわたって項羽軍中に留められていたことになる。

ところで、捕えられていた記述には「父母妻子」とあって、「項羽本紀」に一度、「高祖本紀」に二度見える。して見ると太公・呂后の外になお母と子がいたことになる。清の趙翼は「廿二史劄記」に於いて母は高祖に楚元王劉交という異母弟（楚元王世家、高祖之同母少弟也とある。しかし、呉王濞列伝中の壘錯の語は楚元王を異母弟とし、漢書・楚元王伝では同父少弟也としている）がいたのでこれを指し、子は恵帝の庶兄、後の斉の悼恵王劉肥であろうと云う。此の二人もまた敵中に苦労したと云わねばならないが、母についての記述も問題が存し、斉の悼恵王（斉悼恵王世家）の記述には、なぜかこれほどの苦難について触れる処がないという疑問が残る。

高祖の七年、韓王信が謀叛して匈奴に奔つた。高祖は兵を發して白頭山に至つたが、逆に七日間にわたつて匈奴に包囲され、ようやく脱出した。嚴冬の折、漢軍二十余万のうち十人に二・三人の割合で指を凍傷で失つたという（高祖本紀）。当時、匈奴は冒頓単于に率いられ、弓の隊三十万を以つてしばしば北辺を脅かした。高祖は此の対策に苦慮し、劉敬に下問した処、直ちに武力・仁徳を以つて匈奴を臣服させることは不可能で、ただ、後

世子孫を臣従せしめる計画を立てることは出来る、しかし、陛下には恐らく出来ないであろうと答えた。こうして、高祖の誠に良い策ならば、なんで出来ないことがあるかという言葉を引き出しておいて、劉敬が持ち出した策は、適長公主―皇后所生の娘―を冒頓に嫁がせて女婿とし、贈り物をし、仁義を説き聞かせて、その子の時代には外孫ということで行いよ臣従するようになるであろうというものであった。高祖は此の策に同意した。この話のゆきがかり上、承知せざるを得なかった感がないでもない。驚いたのは呂后である。呂后は日夜泣きながら、「妾にはたまた太子と一女のみ、なんぞ之を匈奴に棄てんや」と掻き口説いたため、高祖は遂に諦め、宗室の女子より選んで長公主とし匈奴と和親した（以上、劉敬叔孫通列伝）。ところで、この時呂后の娘魯元公主は既に高祖の五年に趙王敖（張耳の子）の後妃となっていた（張耳陳余列伝）。清の梁玉繩は「史記志疑」に於いて、既に嫁している娘を奪って単于に嫁がせるなどは理に合わないから、恐らく事実ではなからうと述べている。しかし、前述の如く劉敬が策を云う途中で、恐らく陛下には出来ないであろうと一旦切って、高祖のなんで出来ぬことがあるかという言葉を引き出した事を考えると、ただに愛娘というだけではなく、既に嫁している事情をも含めてこの会話が為されているように思われる。

さて、この魯元公主の夫趙王敖であるが、高祖の九年、高祖弑逆の謀議をした疑いで逮捕されたことがある。これより先、七年に高祖が趙を通過した際、女婿として仕える敖に対する態度が余りにも傲慢であったため、趙の相であった貫高・趙午等が怒って、この謀議を為したのである。しかし、敖は指をかねて盟い、高祖の恩義を述べ、二度とこの事を口にせぬようとどめている。「吾が王は長者なり、徳に倍かず」としながらも、貫高等は臣下としてこの王への恥辱は到底忍び得ないものであり、高祖弑逆が成功すればよし、失敗した場合は自分等

罪を負つて、趙王には累が及ばぬようにしなければならぬと考えるに至つた。八年、高祖は趙の柏人（県名）に宿泊しようとした。貫高等は此処に待ち伏せさせていたが、胸さわぎした高祖は柏人は人に迫る意であると不吉を予感して遂にそのまま通過したのであつた。かくて九年、貫高を怨む者がこの謀議を訴えたため、趙王敖・貫高等は捕らえられて長安におくられた。この時、趙午等十余人は自殺した。貫高は彼等が趙王の無実を証明せずして死んだことを怒り罵つた。一方、孟舒・田叔（二人共に田叔列伝に見ゆ）等十余人は奴隸の姿となつて長安におもむいた。彼等は殉ずるつもりだったのである。貫高はこの謀議に趙王敖は全く関わりのないことを主張し続けた。獄吏は貫高を笞打ち数千、鉄針を以つて責め、遂には身体に刺す所が無くなるほどであつたという。當時、呂后は愛娘の夫である趙王がこの様なことをする筈がない、としばしば訴えたが、高祖は趙王が天下をものにしたら、お前の娘ぐらいの女はいくらでも手に入るのだと怒り全く耳をかさない。どうやら呂后の哀訴も全く効果はなかつたらしい。しかし、この一件は貫高等の趙王を思う至情より出たことが明らかとなつて、感じ入つた高祖は遂に赦免した。貫高は趙王の赦免を確認した後に、趙王の潔白を証明し得た今日、自分の責務は終つた、且つ人臣として篡殺の名がある以上、何んの面目あつて主君に仕えよう、たとえ赦されても自分の心に愧じればかりである、と云つて自ら咽喉をかき切つて果てた。高祖は這樣な者達に感激する質である。奴隸の姿をして来た者達を賢として諸侯の相や郡守に任命した。

さきの匈奴の一件やこの一件に見える呂后の娘に対する愛情は世の常のものと変らないであろう。武田氏が前掲の書に於いて呂后に愛情があつたかどうかとする記述が、いささか誇張であることを知らねばならない。

呂后の性格は剛毅であつたという（呂后本紀）。高祖の天下を定める大業を佐け、諸侯を誅殺するにも呂后の力による処が大きかつたといわれる。呂后が関与する諸侯誅殺で先ず挙げられるべき人物は淮陰侯韓信である。

高祖の六年、楚王である韓信が謀叛したと上書する者があつた。捕らえられた韓信が「狡兔死して良狗烹られ、高鳥尽きて良弓蔵し、敵国破れて謀臣亡ぶ」と述べたのは此の時である。しかし、この折は大赦が行われ、淮陰侯に左遷されてこの事件は結着をみた。這樣の形でこの一件が終つたのは、韓信の功績を考慮すると、彼を誅殺した場合の影響、即ち他の功臣に動搖を与えるということを恐れたのだと思われる。以来、韓信は高祖が自分の才能を嫌っていることを知つて、日夜高祖を怨み、怏怏として楽しまなかつたという。這樣的憂憤はいづれ噴き出ざるを得ない。韓信の謀叛の芽は、七年、陳豨が鉅鹿の太守に任ぜられて赴く時、暇乞いに訪れた豨に対して、事あらば内応しようと相談している処に見られる。

十年、陳豨が叛いた時、韓信は高祖自ら討伐に出向いた留守を幸いに、豨に内応するべく、偽詔によつて徒囚を放ち、呂后及び太子を襲わんと計画した。しかし、此の計画は韓信に怨みを抱く者の訴えで事前に呂后の知る処となり、蕭何と謀つて陳豨誅殺一事実はまだであつた——の祝賀にことよせて彼を参内させ、遂に長樂宮懸鐘の室で斬殺したのであつた。此のあたり、呂后は曾つて韓信に謀叛の噂が有つたこと、或いは高祖が嫌つていたこと、そして不満を抱いていることなど、恐るべき知謀の持主である彼が、将来漢室にとつて禍いの種になる予感を持つていたのではあるまいか。韓信は曾つて官職に不満で逃亡した時、丞相蕭何はその才能を惜しんで追いかけて、連れ戻したことがある。それだけに韓信は恐るべき存在ではあつた。韓信は斬られる時、蒯通の言——曾つて



信に独立して王となる策を説いた―を納れずに、婦女子（呂后を指す）にあざむかれてかくなつたのは天命だと云つたという。高祖は韓信誅殺を聞いて、喜び且つ憐れんだとある。

韓信の三族は誅滅された。十一年春のことである。

次いで起つたのは彭越謀殺の一件である。彭越の場合は韓信に較べて一層憐れであつた。高祖の十一年夏のこゝとである。この一件の発端は、先の韓信が十年秋に陳豨が漢に叛いて匈奴に趨つたのを機として、日頃の憂憤（先述）を以つて、呂后及び太子を襲わんとしたのとは違い、理由が判然としないようであるが、陳豨討伐によつて起つたものである。高祖は梁王である彭越にこの討伐の出兵を命じた。彭越は病と称し、將軍に兵をひきいさせて高祖の許に派遣した。彭越は元來鉅野の沢中に漁をし、時には群盜の真似をしていたが、若者達に推されて嫌々ながら首領となり、諸將に伍するようになったという。五年に梁王となつて此処に至るまで平穩に生き、戦いを嫌つて病と称したように見える。高祖は嚇怒した。早速、使者を遣わして責めたため、彭越は恐れて自ら出向いて謝罪しようとした。時に、將軍扈輒は彭越に説いて、責められて行けば虜にされるであろう、むしろ、兵を挙げて叛く方がよい、と云うが、彭越はいずれとも判断することなく、遂にまた病と称して動かなかった。

此処に曾つて彭越に斬られそうになつた者がいる。太僕（官職）である。彼はこの謀叛の相談を漢に告げ、高祖は使者を派遣してまふと彭越を捕えた。かくして雒陽に幽閉された。謀叛は宗族誅滅が原則である。しかし、高祖は憐れんだのであろう、彭越を庶民におとし、蜀の地に居らせようとして西に向わせた。彭越は西への途中で、長安から雒陽に向う呂后と出會ひ、彼は涙ながらに無実を訴えて、せめて故郷に居住することを願つた。呂后は承諾した。こうして彭越を連れて雒陽に着いた呂后は、高祖に向つて越は壯士である、これを蜀に遷して置

くのは思いを自ら遣すようなもので、むしろ、誅殺されるにこしたことはないと考え伴って来ましたと報告した。他方、呂后は侍従に命じて彭越はまた謀叛を企図していると訴えさせたのである。廷尉は族滅を奏請し、許可された。

十一年夏、彭越の宗族は滅び去った。

欒布という男がいる。彼は梁王彭越の大夫として斉に使い、留守の間に主人は族滅されていた。彭越の首は雒陽にさらされていたので、彼はその頭下に報告し且つ哭礼した。高祖は詔を下して首の取り片付けを禁止してあったため捕えられ、彭越と共に謀叛したと見られて釜茹でに処せられることとなった。欒布は彭越の漢室への功績大なることを述べ、更に、一度出兵の命を下して彭王が病んで参上しないと謀叛であると疑い、その証拠もないうちに族滅してしまった、これは功臣達に危機感を抱かせるものであらうと述べた。高祖は欒布の語に道理を認め、赦し、都尉としたとある。

以上のことを見ると、彭越の謀叛は判然としたものではなく、扈輒の謀叛にしかずという語に反応を示した訳でもないようである。漢室は僅かにでも謀叛を感じさせるものがあれば、素早くこれに対処する方法を採っていたものであらう。高祖は五年に項羽を東城に滅して、諸侯及び諸將の願いに従って皇帝となったが、十一年の韓信・彭越の誅滅に至る間、燕王臧荼・利幾・韓王信・陳豨等の謀叛があいついで起っている。此れ等戰場往來の者達は長い間権謀術数に明け暮れる中で生き残ってきたのである。従って、事が不利に傾くと見るや、忽ち応変する生き方を身につけて、しかも、戦いの技術に於いてはむしろ高祖より上であるという自信家達でもある。建國間もない高祖は素早い対応で、一気に謀叛の疑いある者を押し潰す方法をとった。これ等はまた呂后の備さに

見聞する処であった。彼女は夫高祖が此く為すであろうと忖度して実行したものであろう。それにしても呂后のありようは容赦なく、陰謀の暗さがつきまとう。

さて、彭越の族滅は更に黥布の謀叛を惹き起した。淮南王黥布は呂后が淮陰侯韓信を誅滅したと聞いてひそかに恐れたという。更に彭越が誅殺され、その肉は醢（ししびしお。塩辛）にされて諸侯に配られた。黥布はこの醢を見ていよいよ恐れ、万一に備えて軍兵の配置を行っている。司馬遷は論贊に於いて、黥布が項羽のもとで暴虐の限りを尽し、諸侯に冠絶する軍功があつて王となつた（黥布は二年に漢についた）が、終に己れもまた誅戮を免れなかつたと述べる。

この謀叛の発端は寵愛する女性にまつわる嫉妬によつて起つた。中大夫賁赫と病気で医者に通う黥布の幸姫とが、医者の家で宴会をした。或る日、幸姫が賁赫を誉めたことから黥布は疑い、賁赫を捕えようとしたため、彼は長安に逃亡して黥布に謀叛の兆しありと訴えたのである。黥布は先の軍兵配置などが漏れたであろうと気にしている処に、上訴の真偽を調査する使者が来たため、遂に謀叛に踏み切つた。

もと楚の令尹であつた薛公は滕公に次の如く云う。主上はすでに彭越・韓信を殺したが黥布を含むこの三人は同功一体の者であるから、布は禍がやがて身に及ぶであろうと危ぶみ謀叛に趨つたのである、と。これによれば、先に二人の誅殺を聞いて恐れた黥布の心境がわかる。彼の謀叛は幸姫の件が無かつたとしても、二人誅殺による恐れでいつかは引き起こされるものであつたかも知れない。しかも、黥布の最も恐るべき者は韓信・彭越の二人であつた。彼は謀叛の時に部下に向つて、諸將の中で恐るべきは此の二人で、既に二人亡く、他は恐るるに足らないと告げている。

しかし、この戦いは高祖自ら行い、黥布は敗走した。黥布は番陽で殺された。高祖はこの戦いで流れ矢に当り、これより病重く死の床につくこととなる。

高祖の十二年、燕王盧綰は謀叛を疑われた。発端は淮陰侯韓信と同様に陳豨に関わる。陳豨は代の辺境の將として軍を統轄する立場にあった。処が、陳豨が趙を通過した時、趙の宰相であった周昌は、その従う処の賓客が千余乗という大人数であったため、長く辺境で兵権を掌握し、且つ、賓客の盛大さを黙視すれば、必ず謀叛の気を起すであろうと危惧して報告した。此の報告を受けた高祖は、陳豨はじめ賓客の身辺を調査せしめた処、不法の点があり、ほとんど陳豨と関連することが判明した。一方、陳豨はこの調査によって恐れ、遂に十年九月に叛いたのである。司馬遷は論贊に於いて、陳豨は若い頃に魏の信陵君を称賛・思慕していたと述べているから、賓客を招く癖があったのであろう。

さて、燕王盧綰は陳豨討伐の軍中に在った。陳豨が匈奴に応援を求めた頃、盧綰もまた部下の張勝を匈奴に派遣して応援させまいと謀ったのである。匈奴には元の燕王臧荼の子衍が亡命しており、彼は張勝に対して、燕（盧綰）が存続しているのは諸侯の叛乱が続いているからで、陳豨等が減尽すれば次は盧綰の番になるだろう、むしろ、戦いが長びいてその間に漢に危急が起れば燕は安泰になる、と説いたのである。

盧綰はこの報告を受けて悟る処があったというから、彼のみるところ漢の危急はまだまだ諸侯の謀叛が起つて、遂にはその存続が難かしくなるということなのか、或いは高祖の高齢疾病を考えて、燕獨立の機をうかがおうとしたのか、兎も角、彼は陳豨と連絡して戦いの長びくことを計画した。あくまでも今後の推移を見ようとするものであろう。十二年に樊噲が陳豨を斬り、降伏した副将から此の二者が通じていることを知った高祖は盧綰を呼

び寄せようとした。廬縮は病と称して閉じ籠った。当時、高祖は黥布討伐で受けた傷で病床にあった。廬縮は寵臣に云う。

劉氏（高祖）一族でないのに王となっている者は、自分と長沙王（呉芮）のみだ。去年春に淮陰侯韓信を族滅し、夏には彭越を誅殺した。この二者の誅滅はみな呂后の計謀である。いま高祖は病み、全て呂后に任せている。呂后は婦人だから、専ら事を探して異姓の王や功臣を誅殺しようとはかり考えているのだ。（韓信廬縮列伝）

と。廬縮は呂后側近の辟陽侯審食其（呂后と共に項羽に捕えられ、患難を共にした。故に呂后に親愛されていたのである）が召し出しの使者として来たために、益々呂后の計略であると考えた（徐孚遠の説）という。事實は高祖が御史大夫趙堯をも一緒に派遣したものであるが、誅殺を恐れる余り廬縮が辟陽侯によって然う考えたのかも知れない。しかし、それよりも呂后の韓信・彭越誅殺への関わりが、全て彼女の計謀によるものとして、世上流布されていたということではあるまいか。

それでも廬縮は高祖の病が癒えたら、自身で謝罪するつもりであったという。部下数千騎と共に長城の下で様子を伺っていたが、四月高祖の崩御にあい、その機を得られずして遂に匈奴に逃亡した。

廬縮は常に漢に帰りたいと希いながら、一年余の後に匈奴の地で死んだ。

高祖晩年に至るほどに、諸侯の眼には呂后の動きが目立ったものとして写ってきたように考えられる。それにして、特に十一年春の韓信誅殺、夏の彭越誅殺、十二年黥布誅殺、廬縮謀叛という動きの中で、呂后が目立ってきたのは何故だったのか。此の時期、前稿で触れた呂后の子惠帝と戚夫人の子趙王如意との太子更改の問題がいよいよ表面化しており、呂后の動きはこの事と無縁ではないと見られるであろう。

#### 四

戚夫人とその子趙の隱王如意の最後は哀れであった。この二人は呂后の激しい憎悪・嫉妬によって無残な死を強いられた。戚夫人は高祖が漢王となってから寵愛されたという。「漢興以來諸侯王年表」の九年に如意は趙王となったとあり、「張丞相列伝」の周昌の伝には「戚姫子如意、為趙王。年十歳」とあるから、高祖と戚夫人との出会いは元年以前にあると考えた方が理に合うだろう。呂后の子恵帝の性格はあくまで心根やさしく弱々しかったので、戦場に半生を過し、群雄をひきいて天下を定めた高祖の眼には、余程自分に似ない子として映ったらしい。しかも、如意の方が自分に似た子と映っている以上、太子更改の問題は起るべくして起ったと云えるであろう。これに加えて、呂后は年をとり、常に留守して、高祖とは希にしか会うこともなかったのに対して、戚夫人は常に高祖と共に居り、日夜泣きながら如意を太子に立てんことを口説いたというからなおのことである。

かくして太子更改の問題が起り、これが十二年の黥布を敗走せしめて帰還し、病状が悪化してなお更改を高祖は考えていた（留侯世家）というから、この問題は長い間くすぶり続けて、留侯張良の策によって恵帝の安定を見たのは、ほとんど崩御間近であったようである。しからば、この問題が始まったのは何時頃のことであったのか。このあたりの判然とする記述は見当らない。二年の六月に恵帝を太子に立てた頃は、如意はまだ二、三歳であったと考えられ、此の時期以降のことになるであろう。事実「呂后本紀」の記述に拠れば、如意を趙王に立てた後に、しばしば太子を改めようとしたとあるから、どうやら此の問題が表面化したのは此の時期を境にしてのようである。高祖内心の記述は見えないから、この考えが何時頃より萌したのかは全くわからない。如意が趙王となったのは、前稿で述べた呂后の子魯元公主の夫趙王敖が、貫高等の高祖暗殺（柏人の件）の謀議に関わりが

あると疑われ、結局は無実とはいえ宣平侯に改められた九年のことであった。後述するように、高祖は如意を趙王とした頃、既に自分の死後如意が安全ではなからうと危惧しているが、呂后の戚夫人に対する嫉妬が見え、更に、娘の夫趙王敖が廃せられて宣平侯となり、如意が趙王となったことへの憎悪が見えていたからではなかったであろうか。戚夫人及び趙王如意への憎悪は、太子更改の一件のみではなかったと云えるであろう。

太子更改の問題は諸大臣による諫争があつたが、高祖の翻意にまでは至らなかつた。結着を見たのは十二年であり、此の間に於ける呂后の心労は並大抵のものではなかつたろう。呂后の高祖を助け、功臣の誅殺などの動きが目立つのは、吾が子恵帝の地位を確かにするためにも、このような活動を積極的にせざるを得なかつたのであるまいか。これには呂后親子の正統性を主張確認せしめる意味があつたのであろう。

この問題に終止符を討つ役割を担つたのは留侯張良であつた。呂后はこの事態の推移を恐れ、どうしてよいか悩んだ。此の時期、或る人が留侯は計謀に巧みで高祖の信頼も厚いと呂后に話した。即ち、留侯の知慧をかりよというのである。呂后は建成侯呂沢を遣わし、ほとんど脅かすようにして留侯に方策を樹てさせた。最初、留侯は高祖が肉親の愛で更改を考えている以上、骨肉間のことは臣下何人居ようと役にはたたぬと決つていたが、口舌では争えない問題として樹てた計謀は次の如きものであつた。

高祖が招いてもその高慢侮辱を嫌つて応じない人物が四人いる。しかも、高祖は高潔の人として此の四人を尊敬しているから、太子の書を持ち、金玉璧帛を惜しまず、辞を卑くして招き、賓客として時々此の四人を従えて朝廷に出入すれば、自然高祖の目に止り、四人が彼の賢者であることがわかれば太子安泰の一助となるであろう。

かくして四人は招かれてやって来た。何れも八十有余歳で、東園公・用里先生・綺里季・夏黄公である。此の四人が太子の許に招かれたのは、この後文（留侯世家）に十一年黥布の謀叛について、病中の高祖が太子を討伐の將軍にしたいと望み、四人の反対する意見が建成侯に述べられているから、恐らく十年のことであつたろう。太子を將軍とする件は、高祖と共に戰場往來した諸將を統率するのは到底無理（四人は羊に狼をひきいさせるようなものと云う）で、功績が無ければ如意が太子となるのは明らかであると四人は反対し、猛將黥布には高祖自らの出陣が望ましいと呂后に泣いて懇えさせた。その時、高祖は「吾惟豎子固不足遣。而公自行耳」（もとより青二才八太子∨では派遣しても頼りないと思つている。わしが自分で行くしかならう）と云つている。元來高祖という人物は直情の性で、この討伐の成否と太子更改とを関連して考へていた様子はない。自分が病氣であることで、單純に太子派遣を思ひ着いたものであろう。此の四人は日夜戚夫人が高祖の傍に如意を抱いて侍しており、高祖は不肖の子（太子）を愛子（如意）の上におらせぬと云つた等を見聞して、この討伐に失敗すれば必ず太子更改が行われると考へたのである。高祖出撃の際に留侯は太子を將軍として関中の兵を統監せしめるよう獻言している。滝川資言「史記会注考証」は太子が関中の兵を統監するのは根本を固めようとするもので、また太子を安定させる意もあるという徐孚遠の説を引いている。留侯は少傅（太子補佐官）を命ぜられた。

十二年、黥布を撃破して帰還した高祖は、病状の悪化と共に、益々太子を易えたいと考へた。黥布との戦いで流れ矢に当つたため途中より悪化した（高祖本紀）ともあるから、高祖自身余命を考へたのであろうか。留侯を始めてとして周昌・叔孫通（九年、太子傳八傳育の官∨となつてゐる）等の強硬な諫言が行われた。高祖は一応彼等の諫言に従うように見せて、本心はなお易えたいと考へていたという。



このような折柄、高祖は酒宴を開いた。勿論太子も高祖の側に侍したのであるが、例の四人の老人が従っていた。高祖の目に止まらない訳はない（これまで知らなかったのも不思議だが）。四人の名を知り、彼等の口から太子の人柄は仁孝恭敬で士を愛し、天下の人は太子を慕い命を惜しまないと聞いたので身を寄せたのだ、と聞かされた高祖は一転して太子更改を諦めた。高祖は数年にわたって求めた四人が以上の理由で太子を輔翼しているのを見ては、もはやいかんとも為し難いと思ったのである。戚夫人に向って「呂后は真に汝の主なり」と告げた。高祖は戚夫人を慰めるためであろう、吾が為めに楚の舞を舞え、吾れ汝の為に歌わんという。歌に曰く、

鴻鵠高飛、一挙千里。羽翮已就、横絶四海。横絶四海、當可奈何。雖有矰繳、尚安所施。（鴻鵠高く飛ぶ、一挙千里。羽翮已に就り、横しいままに四海を絶る。横しいままに四海を絶る、當に奈何すべき。矰繳有り）と雖も、尚ほ安くにか施す所あらん。）

戚夫人は嘘啼流涕した。高祖は太子の周囲に構成されたいかんともし難い勢力を見たに相違ない。また、呂后の正妻としての行動が政治的力となっていることも見たであろう。こうした思いが歌に見える。呂后の行為は遂に無駄ではなかった。

以上は「留侯世家」に拠って述べた。

同じく諫争した者に叔孫通（劉敬・叔孫通列伝）がいる。司馬遷は論贊の中で、漢初朝廷の礼制を樹て儒家の宗師となったと述べる（拙稿「史記列伝考IV—司馬遷より見た思想界の一側面—」東洋学論叢四を参照されたい）。九年に太子太傅となった彼は、十二年なおこの職にあった。今や生命を賭して諫争しなければならぬ。彼は古今の太子更改によって惹き起こされた混乱滅亡を述べる。更に、いま太子は仁孝を以て天下に聞え、呂后は帝と苦

難を俱にされた、此れに負くなどできない筈、どうしても太子を易えようとされるならば、先ず臣（叔孫通）を誅し頸血を以つて地を汚されたいという強硬なものであった。高祖はこれに辟易したとみえ、ただの冗談だと云う。叔孫通は云う、太子は天下の本、一たび揺らげば天下振動す、これを冗談とされるのかと。執拗である。高祖は遂に叔孫通の言に従うと云うに至る。しかし、これが口先のみでなお太子更改を考えていたとは「留侯世家」に述べるところである。

周昌（張丞相列伝）もまた諫争した者の一人である。司馬遷は論贊の中で「木彊人也」と述べる。質朴正直の謂である。諸大臣も彼に対しては憚る処があつたという。太子更改についての諫争は、周昌が生来吃りであるため、却つて人に迫るものがある。司馬遷はその口調を次の如く書き写して、

臣口不能言。然臣期期知其不可。陛下雖欲廢太子、臣期期不奉詔。（臣口に言ふ能はず。然れども臣期期して其の不可なるを知れり。陛下太子を廢すと雖も、臣期期して詔を奉ぜず）

という。高祖は欣然として笑つたとある。周昌の諫言について、いつそ痛快なものを感じたからであろうか。呂后は東廂でこれを聞いて、周昌が退出して来ると思わず跪き、君なかりせば、太子ほとんど廢せられんと感謝した。臣下に対して此のような形をとるまでに呂后は追い詰められた思いを持つていたのである。太子の保全のため（ひいては自己の保全ともなるが）になりふりかまわぬ姿がある。この苦惱・憂憤がいかなる形で噴出するかは予想できないことではない。高祖は己れの死後に於ける戚夫人・如意の悲運を想像した。不幸にしてこの予想は的中した。

従来、漠然としていたものが、高祖の心中に危懼として形作られたのは、如意を趙王に封じた九年前後のこと

であろう。「呂后本紀」に如意を趙王に封じた後、しばしば太子更改を云うとある。高祖はこの危懼の故にむしろ太子とすれば安全であろうと考えた点があるかも知れない。「漢興以来将相名臣年表」の九年に、御史大夫昌（周昌）趙の丞相となるとある（周昌が御史大夫となったのは同年表に四年のこととある）。御史大夫から趙の丞相となるのは左遷であるが、高祖は敢えてこれを行う。この間の事情は「張丞相列伝」にある。符璽御史趙堯（周昌の転出後、御史大夫となる）は、高祖が鬱鬱として悲歌をくちずさんでいるのを見て問う。戚夫人と呂后の仲がよくないので、陛下萬歳の後（死後）、趙王如意の身が安全ではなからうと憂慮されてのことでしょうかというのである。これに拠ると、単なる趙堯の推量のみでこのような問いが発せられるとは考えられないから、二女性の不仲は周知のものであったように見られる。どうやら、呂后の剛毅な性格を知っているだけに、高祖は益々不安に駆られたものようである。かくして、高祖と趙堯の話の中で、呂后・太子・群臣の平素より憚る人物として、周昌が趙王如意を庇護すべき丞相に選ばれたのであった。高祖崩御の後、呂后は如意を召し出そうとした。使者は三度も往復したが、病と称して趙王を押しとどめて行かせなかったのは周昌である。しかし、これで引きさがる呂后ではない。先ず周昌を召し出して趙王から引き離し、その上で改めて趙王を召し出したのであった。趙王如意の殺害については後述するが、いま、更に高祖がいか如意の身を案じていたかを示す一つの話をつけ加えておく。「樊・鄴・滕・灌列伝」の樊噲の伝に見られるものである。樊噲は鴻門の会に於いて、沛公が項羽と亜父（范増）によってあわや撃殺されるかという危急の場に押し入り、道理を説いて沛公と共に脱出した人物である。また、呂后の妹である呂須を妻として高祖に最も親しまれていた。これほどの間柄でありながら、戚夫人・如意に関して高祖の怒りに遇い、危く軍中に斬殺されそうになった。

先の廬紹謀叛の疑いが生じて、討伐を命ぜられた樊噲が燕に出撃すると、重病の高祖に讒言した者があつた。その内容は樊噲は呂後の徒党であるから、もし陛下が崩御されたら、彼は兵を以つて戚夫人・趙王如意の血族を誅滅しようとしているというものである（「陳丞相世家（陳平）」では樊噲は我が死を望んでいるとなつている）。高祖の怒りは凄まじい。陳平に命じて樊噲を軍中に斬れという。高祖がいかに戚氏母子を愛し、自分の死後における二人の身を憂慮していたかがわかるであろう。しかし、陳平は一時的な怒りと考え、樊噲を斬らず、捕らえて長安に戻つてみると高祖は崩じていた。かくて樊噲は呂后によつて赦さるるを得たのである。

既にして太子更改の問題も結着をみ、呂後の漢朝を定める上での功績も諸人の認める処で、彼女の立場はいよいよ重きを加えた。高祖崩御の間近であろうか、呂后は陛下百歳の後（死後）、蕭相国（蕭何）が死んだら誰を相国にして国政を補佐させようかと相談している。高祖は曹参を挙げる。呂后は次を訊ねた。高祖は王陵・陳平・周勃を以つて互いに補うべきを云う。更に次を訊ねた。高祖は「此れより後は亦汝の知る所にあらず」と答えたという（高祖本紀）。この二人の間答は恐らく後世の附益であろうとする説（中井積徳）もあるが、呂后が高祖崩御後いかにすべきかを考えていたことを示している。

かくして、呂后專政の時を迎えることになる。

## 五

「此非人所為。臣為太后子、終不能復治天下。」（此れ人の為す所にあらず。臣、太后の子と為り、終に復た天

下を治むる能はず。）

惠帝は使を呂后の許に遣わして以上の如く請願した。このように惠帝の政治に対する意欲を沮喪せしめたもの、それは「人鏡」と名づけられて廁中（「漢書・外戚伝」鞫城。顔師古注、謂窟室也。）に居住せしめられる戚夫人の姿であった。呂后―惠帝即位後、皇太后となったが、便宜上、呂后と記述するので了承されたい―は高祖崩御の後、憎怨してきたところの戚夫人を永巷（後宮女官の罪人を入れる獄）に囚え、子の趙隱王如意を召し出して誅殺しようとした。如意については後述するが、彼は戚夫人よりも先に毒殺されている。惠帝元年冬十二月のことであった。戚夫人に対する無惨な計が行われたのは此の後のことである。「呂后本紀」には趙王如意的死後、淮陽王友を趙王と為し、夏に詔を下して酈侯の父に追諡して令武侯としたという記述があつて、それから戚夫人の刑が述べられ、二年冬十月（惠帝紀）齊悼惠王肥の来朝の記述へと続いている。

さて、呂后の戚夫人に対する憎怨は、手足を切り離し、両眼を抉り出し、耳中に薬を熏べて聾とし、瘖薬を飲ませて声を奪つた上で、廁中に居らしめたのである。ここに於いて「人鏡」（人豚）と名づけたという。呂后の憎怨の深さがわかろう。数日後（「外戚伝」は数月とする）、呂后は惠帝を召して此の「人鏡」を見せた。惠帝は初め全くわからず、問いただしてようやく戚夫人であることを知つて慟哭した。この衝撃がいかに大きなものであつたか、惠帝はこのため病をえ、一年余も病床にあつたと記述されることで想像がつくであろう。この哀れな戚夫人の死について記するところはない。しかし、かくの如く形骸を以つて長く生きられるとは考えられぬ。

呂后が惠帝を召して態々戚夫人の無惨な姿を見せたのは何故だったのか、これについての明確な記述は見えない。これは復讐なのである。戚氏母子によつて与えられた心痛が大きかつたほどに、その復讐は惨忍の度を加え

たものであった。呂后は復讐の成ったことで喜悅したのであろう。そして、この喜悅をわかちあえるものは恵帝であると考えたとしても無理はなからう。太子更改の件（既述）で最も苦痛を味わったのは呂后と恵帝だったのである。当然、恵帝もまた戚夫人の姿を見て喜悅すると考えたのであろう。しかし、呂后のこの考えは誤算であった。彼女は恵帝の仁弱・慈仁と称される性格を考慮していなかったのであらう。或いは恵帝のこのような性格を強靱なものに変えたいという願望が働いていたのであろうか。いずれにしても、恵帝が「人彘」なるものを見て、余りの無惨さに病を得ようとは思っても奇らなかつたに相違ない。病中より呂后に請願した言葉は本章冒頭に述べた通りである。この言葉は母呂后に対する精一杯の抗議であらう。しかし、呂后がこの言葉に対してどのような思いを抱いたかについて記するところはない。

ところで、戚夫人が永巷に幽囚せられてから「人彘」と呼ばれるに至る間に、次のようなことがあつたと「漢書・外戚伝」は伝えている。囚人としての戚夫人は髡鉗（頭髮を剃り、金輪の首枷をする）に赭衣（罪人の赤色の着物）をまとい、白で穀物をつく仕事をさせられていたという。戚夫人は舂きつつ、

子为王、母为虜、终日舂薄暮、常与死为伍、相离三千里、当谁使告女。（子は王と為り、母は虜と為る、終日舂きて暮に薄り、常に死△死囚▽と伍を為す。あい離るること三千里、まさに誰をかって汝に告げしむべき。）

と歌つたとある。呂后はこれを聞いて、子に助けを求めめるのかと大いに怒り、趙王如意を召して誅殺しようとしたと記述する。このことは戚氏母子を憐れむ後人の手になるものであるかも知れない。

さて、戚夫人のこの一件にさきだつて趙王如意は毒殺された。受刑の時、戚夫人が果して愛子如意が既に殺さ

れていることを知っていたか否かは不明である。がしかし、もしその死を知っていたとするなら、「人殺」と呼ばれるほどの屈辱を受けてまで生に固執したであろうか。恐らく戚夫人は愛子の死を知らぬままに、むしろ、生きていることを種にこの屈辱を受けざるを得なかつたのではあるまいか。趙王如意が毒殺されたのは既述の如く、惠帝元年冬十二月のことである。

呂后の命を受けた趙王召し出しの使者は三度往復した。前稿で触れたように、高祖の要請によつて趙の丞相となつていた周昌が、頑として招喚に応じさせなかつたからである。よく高祖の付託に応えたといふべきであろう。周昌は使者に向つて次の如く述べる。

高祖は私に趙王をまかせられた。なお趙王は年少であらせられる。竊かに聞くところによれば、太后は戚夫人を怨まれ、趙王を召されて共に誅されようとのことである。王をおおくりすることはできぬ。王はまた病んでおられるので、詔を奉ずることはできない。

と。呂后は激怒した。そこでまず周昌を長安に招喚し、その留守に使者を派遣して、遂に趙王を召し出した。このあたり呂后らしいやりくちといえる。呂后は拜謁した周昌に、「なんじは我の戚氏を怨むを知らざるか。しかるに趙王を遣わさざるは何ぞや」（張丞相列伝）と罵つたという。用心深い周昌は長安に赴くについて、恐らく留守中に於いて招喚に応ずべからざるを言い残したに相違ないと思われるのだが、行けば誅殺されるであろうことを知りつつ趙王が招喚に応じているのはどうしたことであろう。察するに何らかの術策―周昌の趙王上京を促す偽言、或いは母の生死に關することなどが用いられていたのではあるまいか。趙王年少とはいへ余りにも易々と長安に赴いているように見える。

ところで、戚夫人が幽囚せられ、趙王招喚の使者が何度も往来している間、恵帝はただこれを拱手傍観していたかのようである。この仁弱と称せられる皇帝は、母呂後の激しい戚氏母子に対する憎悪を知りつつ、いかなることも言い得なかつたのであろう。恵帝が成し得ることは、せめて趙王への優しい思い遣りを示すことのみであった。

趙王如意が上京の途次にあることを知った恵帝は、その行程をはかって長安近くの霸水のほとりに出迎え、共に宮中に入った。少なくとも己れが共に在る時には、いかな母でも手を出すことはあるまいというのが恵帝の考えであつたようである。恵帝は趙王と起居飲食を共にし、護ろうとしたと記述されている。しかし、月余の後、即ち十二月になつて、恵帝は朝早く狩獵に出かけ、早く起きることのできなかつた趙王のみが残つた。何時も恵帝が傍らに居るため、機会を得られなかつた呂后は遂にそのときを捉えた。呂后にしてみれば、趙王が京師に入るや直ちに誅殺できるという考えがあつたであらう。それが恵帝の寢食を共にするという行為によつて、遅延せざるを得なかつたのである。趙王が独り残つてゐることを知つた呂后は、人に酖毒を持たせてこれを飲ませ、遂に殺した。酖毒は鳩という毒鳥より撰る。この鳥は平素蝮などを食べ、その羽に猛毒を蓄えているので、この羽をもつて酒などを攪拌して飲めば、たちどころにして死ぬといわれる。古来この毒薬の多く用いられていることが諸書に見える。恵帝が狩獵より帰つてきた時には、趙王は既に死んでいたのであつた。

丞相の周昌は趙王が毒殺されたのを機に、病と称して引き籠り、三年後に死んだ。この趙王の一件の余波は、当時御史大夫となつていた趙堯（既述、(二)を参照されたい）の身にも及んだ。趙王を安全に置くために周昌を丞相とした計画が、実は趙堯より出たことが呂後の知るところとなつて怨まれたのである。呂后元年のことで



あった（「漢興以來將相名臣年表」は恵帝六年に薨抵罪と記すが、「張丞相列伝」の記載で考えると呂后元年となる。「漢書・趙堯伝」は呂后元年とする。）周昌が趙王招喚を沮んで呂后の怒りを買ったことは既に述べたが、これによって罪を得た様子はない。恐らく前稿（二）で触れたように、太子更改の問題が起った時、周昌が吃舌にしてよく諫争したことを、呂后は恩としていたからであらうと思われる。

さて、趙王如意の死について恵帝がいかなる思いを抱いたか、これを示す記述は見当たらない。記載は淡淡として如意亡きあと、空位となった趙王に淮陽王の友を移したとあるのみである。恵帝の如意の死に対する悲哀は、次いで起った戚夫人の「人彘」を契機として、遂に嘔き出たものと見るべきなのであろう。それが本稿の冒頭にあげた語となつて表わされたのである。「人彘」はまさに人として許されざる行為の果てに生れた。恵帝はこの行為者の子として天下を治めることは出来ないと思ひ定めたのである。父の寵姫と子を結局は救い得なかつたことを以つて、天下を治め得ないとしたという理解もある（胡三省）。恵帝は日々飲酒し、淫樂を為し、政を聴かず、七年にして崩じたと「漢書・外戚伝」は無為の七年を強調するかのようである。恵帝即位後間もなく起つたこれ等の出来事以来、この記述の如く全く何事も為すことなく崩御の時を迎えたのかとなると、必ずしもそうとは云えないのである。従つて、この無為の七年というが如き記述はいささか誇張されたものと云わなければならぬ。

いま、ついでながら恵帝のこれより以後について触れておきたい。先述の如く趙王如意及び戚夫人の一件が、恵帝の政治への意欲を沮喪せしめたとはいへ、全くその事蹟が記載されていない訳ではないのである。政治への関心を示す記述が「蕭相国世家」に見える。蕭何は高祖が無官の頃より助力し、漢室草創期功績第一と称された人物である。この蕭何が死んだのは恵帝二年のことであつた。恵帝は蕭何が病気になると思ひ舞ひ、蕭何に万

一のことが有った時は次の相国を誰にすべきかと相談した。惠帝は自ら曹参の名を挙げ、蕭何をして「死んでも思い残すことはない」と云わしめている。次期の宰相選任で両者の意見が一致したのである。これを見ると惠帝には人を見る眼があつたと云うべきであろう。但し、前稿(二)で触れたように、高祖と呂后との問答には蕭何亡き後は曹参を相国にせんとすることがあり、このことを惠帝が耳にしていたとも考えられるから、必ずしも独自のものではなかつたかも知れぬ。

当時、齊の丞相となつていた曹参を次期相国に登用するのは、実に時宜に適つていた。前任者蕭何は人民が秦の苛法から解放されたばかりなので、人民の願うところに従つて安寧に心掛けたという。「曹相国世家」に曹参は齊の丞相として、戦乱より脱却したばかりの人民を安定せしめるため、黄老の学(黄帝・老子の学)を治めた蓋公という人物を登用したとある。政治は清静を貴べば民は自ら定まる(「老子」五十七章、我無為而民自化、我好静而民自正、我無事而民自當、我無欲而民自樸。とある。)という蓋公に任せて、齊国はよく治まつたという。曹参は漢の相国になると、蕭何の定めたところを一つとして変更せず、ひたすらこれに従つた。また、木訥で重厚な仁徳ある人物を任用し、嚴酷にすぎて名声を求めようとする者を退けたと記述されている。当時、官民共に無事安息を求めていることを熟知していたための施政であつた。

こうした上で曹参は毎日醇酒を飲んで過した。余りにも政事に務めないのをみて意見しようと思はれる者があつても、彼は徹底して酒を飲ませ、遂に酔わせて何事も云わせないので常としたという。惠帝もまた曹参が政務に熱心でないのは自分を軽んじているからではないかと疑つた。これについて、曹参は惠帝と共に高祖の聖武、蕭何の賢能には及ばないことを問答した上で次の如く説く。高祖は蕭何と共に天下を定め、法令も既に明らかであつ

て、いまや、陛下には手をこまねいておられ、参らが職を守り、定められたところを遵守して過失がなければ、それで宜しいではありませんか、と。ここに於いて惠帝は納得した。人心の要請するところを理解したといえよう。曹参は惠帝二年七月に相国となり、五年八月に死んだ。「史記」「漢書」共に蕭何、曹参を称える人民のうたを、

蕭何法を為り、あきらかなること一を画くが如し。曹参之に代り、守りて失うことなし。その清浄をおこないて、民以って寧一なり。

と記載している。

なお「漢書・高后紀」には、吕后元年春正月、詔して「前日、孝惠帝言欲除三族舉・妖言令、議未決而崩、今除之。」とある。刑罰が過酷であるため廃止しようとしたのは、いかにも寛仁の惠帝の考えらしい。

以上、惠帝の政治に関する記載について述べた。なお、更に二・三の点について触れておこう。

「郷生・陸賈列伝」に惠帝が大いに怒った話が記載されている。辟陽侯審食其は曾って吕后に従って項羽に捕えられ、苦勞の末に漢に帰った人物である。その故に吕后の寵愛を受け、審食其はこれを持って吕后に従って項羽に捕えられたかとは不明であるが、さきの素行に関することであつたと思われる。大いに怒った惠帝は彼を吏に下して誅しようとした。さすがの吕后もこれには口出しもならず、大臣等もまた彼の行いを心よからず思っていたため、遂に誅罰はさし迫つたものとなつた。しかし、この一件は惠帝の寵臣閻孺のとりなしで赦免されることになる。正廉剛直で聞えた平原君朱建という人物がいる。朱建は審食其の不正を嫌つて交際を求められても断つていたのであつたが、母の死にも貧乏で葬

札の道具もなく困っている時、交際の機と考えた彼から百金を贈られ、これを恩として閔孺に働きかけた結果である。

「劉敬・叔孫通列伝」に、惠帝は即位すると宗廟の儀法を叔孫通に定めさせたとある。叔孫通は先述(前稿(二))の如く太子更改について諫争した者の一人であるが、司馬遷は論贊に於いて漢朝儒家の宗と述べている。また、惠帝は長樂宮へ行くのに、しばしば人の往来を止めるなど煩わしいため、複道(二階造りの道)を作ろうとして着工させた。ところが、宗廟への道の上に築く形になり、叔孫通にたしなめられて、惠帝は大いに恐懼したという。

また、「佞幸列伝」には先述の惠帝の寵臣閔孺のことが記載されている。彼は婉麗・佞媚をもって惠帝に寵愛され、起臥を共にしたとある。司馬遷は彼に格別の才能があったわけではないと書き添える。公卿等は彼を通じて奏上し、そればかりか側近までが羽毛で飾った冠、貝で飾った帯を身につけ、脂粉をつけて、閔孺等と同様の態を為したという。惠帝身邊の様子が想像し得るであろう。

以上みてきたように惠帝の事蹟は寥々として寂しく、実に司馬遷が論贊に述べる如く「垂拱」そのものではある。

なお、「漢書・惠帝紀」には長安造成の記事がある。不断に行われたようであるが、大がかりであるのは、三年春、長安六百里内の男女十四万六千人を三十日間動員、同年六月諸侯王・列侯の徒隸二万人を動員、五年春正月、再び長安六百里内の男女十四万五千人を三十日間動員等である。かくして同年九月落成した。

班固は論贊において、惠帝は内に対する恩敬も篤く、叔孫通・曹參の言を納れた寛仁の主とすべきである。

ただ呂後の戚氏母子の殺戮が、恵帝の憂疾を誘い、政治を聴かずして崩御に至らしめ、その至徳を虧損するに至ったのは悲しむべきであるという。

呂後の恵帝への愛情・庇護は、戚氏母子を誅殺することによって思わぬ結果をもたらした。しかし、呂後の恵帝護持の思いは強いものがある。彼女の意志は大きな力を持ちつつあった。専政への下地はこのようにして形成されていくのである。

## 六

さて、「外戚世家」には、高祖の後宮に於いて事なきを得たのは、寵愛を受けず疎遠な者達だけであったと記述され、また、寵愛された諸姫・戚夫人などの人々は、高祖崩御後に呂後の怒りによって幽閉され、宮中より出ることではできなかったともある。そして、最も悲惨であったのは戚氏母子であった。

そもそも高祖には八人の男子がいる。長男は斉の悼恵王劉肥で、庶子である。母は曹氏という。次男は呂後の子恵帝である。次は戚夫人の子趙王如意であり、次は薄姫の子代王恆で、呂氏一族誅滅の後に迎えられて文帝となった人である。薄姫は所謂疎遠なる者の一人であったので、宮中より出て代に趨くことを得たのであった。次は梁王恢で、後に呂后によって趙王に遷された。次は淮陽王友であるが、彼は戚夫人の子趙王如意が毒殺されて空位となった趙王に遷され、後に呂后によって幽閉憤死させられた。またしても空位となった趙王に、先の梁王恢が遷されたのである。恢は後に悲傷のうちに自殺することになる。次は淮南王長で、その剛毅な性格の故に、

文帝八年絶食して死んだ。次は燕王建で、呂后七年九月に死亡した。以上は「高祖本紀」の記述の順序に従って略述したのであるが、淮南王長について「史記」「漢書」の伝には「高祖少子」とある。少子は末子の意である。王に封ぜられた順序もまた上述の順であり、「呂后本紀」の順も同じであるから、淮南王を末子とする記述はいささか問題が存するように思われる。この八男子については、これより後、呂后との関わりに於いて逐次触れざるを得ない。そして、いま直ちに述べなければならないのは齊王劉肥についてである。

恵帝二年十月、楚元王交（高祖同母の末弟）と齊悼恵王肥が来朝した。齊王肥は高祖六年十二月に齊王に立てられた。適子恵帝が太子に立てられたのは高祖二年六月のことで、これを除いて諸子のうち最も早く封ぜられたことになる。六年十二月に韓信謀叛の報があり、これを雲夢に捕えて淮陰侯に左遷した（既述（二））が、その折に田肯なる人物が、齊は遠方に位置する廣大肥沃の地であるから高祖の子弟を王とすべきである、と進言したことによつて劉肥を齊王とした。司馬遷は「齊悼王世家」を立てた理由を、劉肥は実に東方の地を鎮め、高祖の股肱であつたことを嘉したからであると説明している。

さて、恵帝は来朝した齊王肥と呂后の前で酒宴した。恵帝は彼を兄として待遇し、一般家族が行うと同様に上座に案内した。このあたり恵帝の寛仁・優愛を示すが、呂后は怒った。兄とはいえ恵帝とは君臣の關係にある、いかにすすめられようと辞退すべきである、ないがしろにされたと呂后は考えたのであろう。怒りのあまり、呂后は醖酒の杯を二つ用意して前に置かせ、齊王を起させて祝杯を上げさせようとした。齊王は杯を手にとつた。こうした杯が兄弟の前に置かれること自体すでに危険を伴っているが、恵帝もまた起つて祝杯を上げようとした。慌てたのは呂后である。そもそも、彼を兄として上座に案内したほどの恵帝が、その祝杯に応酬しない筈はない

のに、このことを思ってもみなかった様子は滑稽である。呂后は起つて恵帝の杯をくつがえした。斉王は呂后の慌てた様子を見て怪しみ、杯を置いて飲まずに酔ったふりをしてこの場を去った。後に問いただすと果して酖酒であった。斉王はもはや長安を脱して斉国には戻れないのではあるまいかと恐れた。

ところで、呂后が一般家族と同様の、所謂家人の礼を恵帝がとり、斉王が辞退しなかったことに対する怒りには、恐らく次の如き事柄も知見としてあつたからだと思われる。

高祖六年、既に帝位に在つた高祖は五日に一度の割合で父の太公にお目にかかり、一般家族の親子（父子礼）と変わる処はなかつた。太公の家令は「天に二日無く、土に二王無し（『礼記』坊記の語。）いま高祖子なりと雖も人主なり。太公父なりと雖も人臣なり。いかんぞ人主をして人臣を拜せしめんや。此くの如ければ、則ち威重行われず。」と太公に述べた。次回高祖が来ると、太公は箒を抱えて門まで迎え、そのまま後退して恭敬を示したのである。驚いた高祖に「帝は人主なり、いかんぞ我を以つて天下の法を乱さんや。」と太公は云う。

父子の間に於いてすらかくあるべしとし、高祖もまたこの在り様を善しとしたという。呂后は高祖の如く君臨することを希んだのであろう。従つて、斉王の兄弟の礼を受けた態度は、恵帝をないがしろにする不遜なものに見えたのである。このことは呂后にとつて誅殺に価すると判断された。

辛うじて毒殺の危機を脱した斉王劉肥は、国に戻れないであろうと憂慮した。此処に内史士（官名。「世家」は内史勲に作る。勲は名であろうか。）は斉王に云う。呂后の子は恵帝と魯元公主（宣平侯張敖の妃。既述した柏人の一件で趙王より宣平侯となつた。）とのみであり、いま斉王は七十余城を有し、公主は数城であるから、一郡を公主の湯沐の邑（その地の賦税を湯沐の費とする）として献上すれば、呂后は必ず喜ばれ、この憂慮から

免れられましよう、と。齊王は城陽の郡を献上し、且つ、公主を母の如く王太后と称して尊んだので、呂后は大いに喜び、齊王の邸で酒宴したという。かくして齊王は帰国することができたのであった。

呂后の酒宴の席に於ける怒りは、直ちに毒殺せんとするほど凄まじいものであったのだが、一郡を献上されると一転忽ち許すという、極めて単純な落着に驚かされるであろう。彼の戚氏母子に対する執拗、且つ、残忍さとの相違をどう理解すべきなのであるか。これより以後、呂后の立場からいう所謂誅殺は、邪魔者は消すというような極めて明快な一面をもっているように見える。それは戚氏母子に対するような長い年月によって醸成された憎悪がないということなのであるか。此処、呂后には齊王への怒りの余り、惠帝をも毒死の危険にさらしたという反省・後悔の如きものが芽生え、このような落着をむしろ喜んだというのが実情であったのかも知れない。既に、戚氏母子の殺戮は惠帝をして天下を治むる能わずと云わしめ、恐らく呂后は苦い思いを噛みしめることになったと思われる。従って、呂后の赫怒は冷却の時を経て、解決の方途——ここ公主湯沐邑の献上——を待っていたとさえ思われるのである。

齊の悼惠王劉肥は封国に帰って国政に努め、惠帝六年に薨じた。齊王となって十三年であった。子の襄が立ち、哀王という。

さて、「惠帝紀」には、四年十月、皇后張氏を立つという記述がある。宣平侯張敖と呂后の子魯元公主の間に生れた娘で、名を嫣という（皇甫謐）。呂后は惠帝に魯元公主の娘を配偶し、劉・呂二氏二重の強固な結びつきとしたのであった。ところが、肝心要の子が生れず、あらゆる手を尽したが、遂に得ることができなかった。そこで、呂后は張皇后にいかにも懷妊・出生したかの如くさせ、後宮美人の子を引き取って、その母を殺した。こ



れについて、恵帝は全く関知しなかったようである。この子を太子に立て、恵帝が崩御すると帝位につけたのであるが、後に経緯を知った帝は呂后を怨んだため、呂后の四年に幽閉されたうえ殺されることになる（後述）。劉・呂二重の縁組による血の濃さを求めた呂后の慮りが、この母子の死を招いたのである。張皇后もまた哀れであった。恵帝崩御にあい、更に八年後に呂后の死と呂氏一族の誅殺が行われる中で、彼女だけは恵帝の妃ということであつた。未央宮の北、北宮に幽閉されて、ひっそりとその生涯を終った。文帝後の元年三月のことであつた。安陵（恵帝陵）に葬られたという。そして、張皇后の感懐を示す記述はどこにも見当たらない。

また、恵帝の在位中、驕慢になつてきた匈奴の冒頓単于は使者をして呂后宛の書簡を持参せしめた。「季布樂布列伝」及び「匈奴列伝」には嫚・不遜・妄言の内容であつたと記述されるが、その文面の記載はない。しかし、「漢書・匈奴伝」はこれを記載する。本章末尾に参考文（一）として挙げておくので参照されたい。司馬遷が記載しなかつたのは無礼を嫌つたためであろうか。激怒した呂后は匈奴討伐を諸將に謀つた。上將軍樊噲は十万の兵を以つて匈奴の地を蹂躪したいと願い、諸將も呂后の意に阿諛して賛同した。反対したのは季布である。彼の語は激しい。先ず樊噲は斬らるべき罪を犯したと云う。即ち、曾つて高祖は三十余万の兵（原文四十万、漢書に拠つて改む）を以つて逆に匈奴に苦しめられたのに、今十万の兵で出撃するなどは人を欺くもの、また、国家は戦乱に疲れて未だ安定をみないのに、阿諛して匈奴戦を行い、天下の動揺を招かんとしているからだといふのである。朝議の席にいた者は皆恐れたという。呂后の意に逆らい、樊噲が呂后の妹呂嬃の夫であることで恐れたのであろう。この一件は、樊噲の死が恵帝六年六月であるから、これより以前のことである。かくて呂后は和親の道を選んだ。

ところで、「漢書・匈奴伝」には季布の語はなお続き、「且つ夷狄は譬えば禽獸の如く、其の善言を得るも喜ぶに足らず、悪言も怒るに足らず」とある。いわば、禽獸の如き夷狄がいかなることを云おうとも、気にする必要はないのである。呂后の自尊心・体面を保たしめる巧みなこの言辞は、彼女に「善」（よろしい）と云わせている。此処に於いて張沢に命じて返書を作らせるが、その文面は屈膝的なものであった（参考文献（二）を参照されたい）。

匈奴に対しては既に高祖の時に劉敬の献策（既述（二））によって和親し、毎年綿・絹・酒・米など一定の数量を奉呈してきたのである。しかも、既述の曹参の言や此処季布の言に見られるように人民は安息を求めている。いま、匈奴戦を行えば単に軍を破るのみならず、漢朝崩壊と容易に結びつく危険があることを呂后も理解したのである。さらに、呂后の意は対外的なことよりも、むしろ漢室内部に向けられていたようである。司馬遷が呂后の政は房戸宮室より出なかつたと述べるように、その世界は極めて狭小なものであった。

#### 参考文献

- (一) 冒頓の書簡、「孤憤之君、生於沮沢之中、長於平野牛馬之城、數至辺境、願遊中国、陛下獨立、孤憤獨居、両主不樂、無以自虞（娛）、願以所有、易其所無。」——（ ）は筆者補
- (二) 返書、「單于不忘弊邑、賜之以書、弊邑恐懼、退日自圖、年老氣衰、髮鬪墮落、行步失度、單于過聽、不足以自汗。弊

邑無罪、宜有見赦。竊有御車二乘、馬二驪、以奉常駕。」

※紀庸編著「漢代対匈奴的防禦戦争」（新知識出版社・一九五五）は匈奴戦に反対した者を「漢書」の「召丞相（陳）平及樊噲・季布等」とあるに拠つてであろうか陳平等とする。しかし、「史記」「漢書」の伝には「季布曰」と明記してい

るから、本稿では季布の言とした。

七

七年秋八月戊寅、孝惠帝崩。

十六才で高祖の後を継いだ惠帝は、在位七年で崩御した。年二十三才。戚氏母子の無惨な死によって与えられた心痛は、遂に彼をしてさしたることも成し得ないままにその生涯を終わらせたようにみえる。

呂后は惠帝の崩御によつて再び危機の時を迎えることになる。ともあれ、先ず喪を發した。しかし、吾が子を喪つた彼女の目に涙は見られなかった。此処、司馬遷は「發喪。太后哭。泣不下。」と記述している。哭とは死者をいたんで大声を出して泣きさげぶことを指すが、いま、呂后の目に涙が見られないというのは肉親の情愛からみてやはり異常と云わなければなるまい。

この呂后の涙を見せることなく、しかも、心中狂乱の存することによるのを逸速く見抜いた者がいる。留侯張良の子で、侍中（天子に侍す）の職にあつた張辟彊であつた。時に十五才であつたという。後述の如く丞相に説く彼の方策は専ら呂后への阿諛より出たように思われ、このあたり機微を察する所謂聰明にすぎる子供であつたのであろう。張辟彊の名は此処「呂后本紀」と「漢興以來將相名臣年表」に見えるのみである。

太后（呂后）には惠帝しか男子は有りません。いま、たよるべき惠帝が崩御されたのに、哭しても悲しまれておられぬ訳を丞相はおわかりですか。

と彼は丞相に問う。いかなる訳かと訊ねる丞相に辟彊は云う。

恵帝には大きな御子がありません。それで太后はあなたがたの力を恐れておられるのです。従って、丞相にはいま太后一族の呂台、呂産、呂禄を將軍に任命して南北軍におらしめ、さらに呂氏一族の者を皆宮廷に入れて諸事を行わせるように奏請なさい。かくの如くされるならば太后は安心され、あなたがたも災禍より免れられます。

既に前稿(一)に於いて触れたように、恵帝が幼かったため、高祖の崩御後四日を経てもなお喪を發することなく、諸將の謀叛を恐れて主だつ者の一族を根だやしにさえしたいと考えた呂后であった。今度は唯一の男子恵帝の崩御に遭つたのである。且つ、「外戚世家」には継嗣も明らかでなかつたことが記述されている。呂后が恐れるのは当然と云えよう。彼女の最も恐るべき者は高祖崩御の際と同様に、依然として智謀と行動力を温存していると見られる丞相等、所謂重臣達であつた。この恐れがいかなる形で噴出し、重臣等の上に加えられるかは想像に難くない。わずかな瑕瑾が彼等を死に導くことになる。張辟彊の察するところ、呂后の不安を取り除くには呂氏一族を側近に置き、且つ、一族に兵権を把握せしめて変事の起り得ないことを示すというものであつた。

ところで、此処呂台・呂産・呂禄三人を挙げて將軍に任命せんとするが、「漢書・外戚伝」は呂禄の名を欠いている。梁玉繩は南北軍に三人の將は不可解で、呂禄は呂台の後を繼いで北軍の將になつたのであり、「漢書」の記述が正しいと述べる(「史記志疑」)。呂台は呂后の二年十一月に死んでいるから、梁氏の説の如く考えるべきであらう。

さて、丞相等は辟彊の方策の如くした。ここにおいて呂后は悦び、そして哭することもまた悲しげであつたと

記述されている。彼女はここに始めて惠帝の崩御を悲しんで涙を流したのである。司馬遷はこの記述の後に「呂氏の権これより起る。」と述べる。呂后を頂点とする一族の専断はこの時の丞相奏請を機としている。時に右丞相は王陵、左丞相は陳平であったが、「外戚伝」は丞相陳平の名を明記し、辟彊との会話は彼がしたことになっている。相国について高祖の遺言に曹參亡きあとと王陵・陳平・周勃を以って互いに補うべしとあって、この言の如く彼等が国政に与っていた。従つて、後世の評者は辟彊の策を採つた彼等の不明を責めるが、果してこれより後に呂后が呂氏一族の者を諸国王にしようと考えることまで予測し得たのか否かはわからない。

この陳平、既に前稿(二)で触れたように、呂后の妹呂嬃の夫である樊噲が、戚氏母子の一件で高祖の怒りを買い、陣中に噲を斬れと命令された時、呂后・呂嬃の怒りを恐れて殺さずに連れ帰つたことがある。陳平が保身に汲汲としていたことは此の他にも証し得る。そもそも陳平は黄・老の術を好んだと司馬遷は記述している。惠帝治下ようやく戦乱より解放されて和平に趨いた頃の述懐であろうか、陳平は「われ陰謀多し。これ道家の禁ずる所なり。」と述べたという。高祖に従っている時、彼には六奇計が有つたとされる。その一つに項羽・范増の離間の策もある(此の策については幼稚すぎて信用し難いの評がある)。「考証」引「通鑑輯覽」(V)が、これ等計謀への反省がこのような言葉となつて表明されたものであろう。前稿(三)に於いて述べた曹參の治政と比較するならば、その違いがより判然とするであろう。がしかし、陳平は道家の思想を信奉しながらも、所詮は計謀の人であった。この後、呂后の死によつて呂氏一族を誅滅し、文帝を迎立したのは全て「陳平本謀(本来いだけいた謀)」であつたとされる。彼はこの呂后への奏請以来、保身と韜晦に明け暮れることになる。なお、陳平については後文で触れざるを得ない。拙稿「史記世家考一―陳平―」(『東洋学論叢』八)を参照していただければ

は幸いである。

今、ついでながら張辟疆の父である留侯張良について述べておきたい。彼は智謀の人として高祖に籌策を帷帳の中に運らし勝を千里の外に決すると称賛されたほどのものである。また、前稿(二)で触れた惠帝と趙王如意の太子更改に四賢人を招いて此の問題に終止符を打つ役割を演じたのは張良である。しかし、彼は生来多病であった故もあるであろう、栄位盛名を得て此の上は人間界のことを棄てて赤松子(古代の仙人)に従って遊びたいのみと述べ、穀類を絶ち、道引(氣を体に導き充足される)し、身を軽くすることを学んだという。惠帝が即位すると、呂后は太子更改における張良の尽力を徳として、強いて穀類を摂らせようと、「人生一世の間、白駒の隙を過ぎるが如し、何ぞ自ら苦しむこと此の如きに至らん。」と云った(留侯世家)とある。張良はこの好意を退けることもならず穀類を口にした。彼の死は呂后の二年のことである。惠帝即位以後、死に及ぶ略九年の間について司馬遷は記述していない。張良は全くその存在を示すようなことは無かつたようである。先の仙界への憧憬が彼の痕跡を消してしまつたのであろうか。

張良の死後、子供の不疑が留侯となつた。してみると辟疆は不疑の弟であつたのかも知れない。記述は留侯の子とあるのみである。梁玉繩は留侯の孫という一説(楊維禎「史義拾遺」)を引いて根拠不明としている。また、楊雄「法言」重黎卷第十には辟疆を十二才とする記述も見えるが、「史記」の十五才とする記述よりも年少とされて、その聡明を強調するもののように思われ、いずれが是であるかは判断し得ない。

さて、張辟疆の計の如くした丞相等は、呂后の安心を得たのであつたが、しかし、既に惠帝在世中には背後にあつての專政の立場であつたものが、此処に臨朝称制への発端となつた意味は大きい。呂后はかねてから劉呂二

氏の絆を強固にするために努力してきた。恵帝に配するに魯元公主（恵帝の姉）の娘を以つてしたのである（既述（三））。それがいま恵帝の崩御によつて、頼るべきは己れの一族を描いては無いことを知つたのであろう。丞相等の奏請は呂后の意に添うものであつた。

大赦を行い、九月辛丑、安陵に埋葬した。「芸文類聚」には「楚漢春秋」を引いて、呂后は恵帝の陵墓を高くして、未央宮から見ようとしたため、日夜これを見て悲哀・流涕すれば玉体を害すと諫められた話を載せている。情愛のしからしむるところであらう。太子が即位し、高祖廟に拜謁し、これ等の諸行事は滞りなく進められた。元年、号令は呂后一人より出るようになり、遂に朝に臨んで政令を制（みことり）と称するに至つた。また、既述（三）の如く「漢書・高后紀」には恵帝の未決の議であつた三族を戮する罰や妖言令を過酷であるため除くということを詔している。

かくして、呂后は一族の者を諸国の王に封じ、強固にしよつとする計画を押しすすめることになる。まず、右丞相王陵に相談した。恐らく王陵は驚愕したに相違ない。彼は先の奏請が契機となつてこのような形で表面化してくるとは予測することもしなかつたであらう。高祖によつてその性格が「少慙」と称され、呂后が病中の高祖に崩御の後いつたい誰を相国に任ずべきかを訊ねた時、蕭何・曹參に次いで挙げられたのが王陵であつた。「少慙」とは実直で融通のきかない一徹者の謂であらう。故に高祖は智者の陳平、重厚な周勃を以つて相い補い、国政に任ずべきを指示したと考えられる。この王陵には次の如き高祖の遺訓が存在する。故に彼は云う。

高帝（高祖）白馬を刑し盟つて曰く、劉氏（高祖の姓）にあらずして王たるは、天下共に之を撃て。（「漢興以來諸侯王年表」劉氏にあらずして王たる者、若しくは功無く、上の置かざる所にして侯たる者は、天下共

に之を誅せ。とある。)

白馬の血をすすつての盟誓である。そして此の事は上下共に周知のものであつたらう。従つて王陵にとつてこの呂后の相談は驚くべきことであつた。更に彼は云う。「いま呂氏を諸国の王とするのは、この盟誓にそむくことである。」と。実直な王陵は恐らく頑にこの盟誓を口にするのみで、呂后のいかなる言も受けつけなかつたのであろう。不愉快になつた呂后は左丞相陳平と絳侯周勃に問う。彼等は次の如く答える。

高祖は天下を定められ、その御子・御弟を王とされた。いま太后は政令を制と称されて帝に同じであらせられるから、ご兄弟や呂氏一族の方がたを王とされていけないことはありません。

と。呂后は満足し、喜んで朝廷より退つた。「呂后本紀」では「(周)勃等対曰」とあつて、二人が答えたように記述するが、「陳(平)丞相世家」では「陳平曰」となつており、「絳侯周勃世家」には記述していない。周勃は人と為り木彊敦厚で飾り気がなかつたと司馬遷は記する。してみると、このような奉答は周勃の口から出るようには見えない。いつわつて呂氏一族を王とし、呂后の死後にこの一族を誅滅したのは陳平の本来の計謀であつた(陳丞相世家)等の記述によれば、此処の奉答は陳平が主であつた可能性が強い。陳平の趨勢に逆らわない立場と保身からいへば、この奉答は至極当然であつたとみられよう。彼は既に樊噲捕縛によつて呂嬃(先述、樊噲の妻、呂后の妹)の怨みをかつていたのである。これ等が錯綜して彼の身にある。王陵は忿つた。ここに陳平・周勃を責めて云う。

始め高帝と血を噀りて盟ふに、諸君在らざりしか。今高帝崩じ、太后女主として呂氏を王とせんと欲す。諸君たとひ意に阿ね約に背かんと欲すとも、何の面目あつてか高帝に地下にまみえんや。



王陵にとって陳平等の奉答は正に裏切り以外の何ものでもない。盟誓の時、共に彼等もまたその場に居たのである。どの面さげて地下の高祖におめにかかれようか。王陵の忿怒の声が響くようである。しかし、陳平・周勃は次の如く云う。

いま此処に面折廷争（面と向つて責め、朝廷に諫争する）することでは、貴方には及ばない。だが、この国家を全うし、劉氏の後裔を安定せしめることでは、貴方は私たちには及ばない。

と。ここにおいて王陵は沈黙した。彼は面折廷争の結果生ずるものが死か或いは混乱であるかも知れないことに気付いたのであろうか。しかも、陳平等の阿諛としか見られない奉答の裏に、かくの如きしたたかな計謀の存在するであろうことを想像したのであろう。がしかし、これがどうやら陳平の保身を主としてのものであったらしいことは、「酈生・陸賈列伝」に劉氏のことを心痛しながらも禍を恐れ、汲々として日を送る姿が記述されているから、文字通り受け取るべきではないかも知れない。

ともあれ王陵は口をとぎした。しかしながら、呂后にとって己れの意に逆らう者として映つたのである。やがて十一月（漢は秦が十月を歳首としていたのを踏襲）になると王陵を廢しようと考え、帝の太傅に移し、右丞相としての権を奪つた。まもなく王陵は病を得て職を辞したと「呂后本紀」にある。しかし、「陳丞相世家」には王陵の反対に呂后は怒り、口実を設けて帝の太傅とし、全く彼を用いなくなつたと記述し、更に、この処遇に対して王陵もまた怒り、病と称して職を辞し、引き籠つて春秋の參内すらしなかつたとある。このように二様の記述が存在するが、前者に比較して後者は王陵の伝記を兼ねたものであるから、おそらく後者の記述の方が真実を語るものであるように思われる。そして、このありようがいかに王陵の性格にふさわしい。

こうして怒った王陵は門をとぎしてより七年後に死んだ。但し「漢書」では十年後に死んだと記されている。筆写の誤りかも知れない。王陵は高祖と同じく沛の人であるが、豪族の出である。しかも、高祖がまだ微賤の頃は王陵に兄事していたというから、二人の交際は古いものである。この伝に記述される王陵は飾りけがなく気軽に富み直言を好む人とされる。高祖が秦の都咸陽に入城した頃、王陵もまた南陽の地に於いて数千人を率いていたが、高祖の傘下にあったわけではなかった。時の勢いというものであろう。此処に雍齒という人物がいる。秦二世の二年、群雄蜂起の頃、雍齒は高祖の命で豊邑を守っていたが、元来高祖に従うことを嫌っていた彼は、魏国の誘いに応じて寝返ったことがあるため、高祖にひどく憎まれていた。王陵はこの雍齒と親交を結んでいたこともあって、もともと高祖に従う気はなかったという。ところが、高祖が項羽と覇を争うに至ると、南陽に数千の部下をもつ王陵を招こうとした項羽は、陵の母を捕えて軍中に置いたのであった。しかし陵の母は漢王高祖に仕えるべきを遺言して剣に伏して死んだ。項羽は激怒し、彼女を烹たと伝えられる。かくして王陵は母の遺言の如く、遂に高祖に従ったのである。彼が右丞相となったのは恵帝の六年のことであった。

王陵の辞職にもなつて、呂后は陳平を右丞相とし、辟陽侯審食其を左丞相に任命した。呂后は心中ほくそ笑むものがあつたであろう。唯々として彼女の意に従う者のみを側近としたのである。審食其は沛の出身で、呂后に侍して項羽に捕えられ、苦勞を共にした人物である。従つて呂后に寵遇され、素行に修まらない点があつたため、恵帝の怒りを買ひ殆んど誅殺されそうになつたこと（既述（三三））さえある。審食其は左丞相となつたが、その職分を行わずに専ら呂后に侍していたという。公卿等は彼を通じて諸事を決定する有様であつた。

呂后が呂氏一族を諸国の王にせんとする希望は、このような情勢の中で着々と進められた。先ず鄴侯（呂台）

の父であり、呂後の長兄である周呂侯（名。沢。高祖八年卒。）を追尊して悼武王とした。王号を追諡することによってその下地を作ろうとしたのである。

四月。呂后は此処に呂氏一族の者を侯に封じようとし、高祖の功臣をも含めてこれを行っているのは、或いはなお異議の出るのを懼れるということの意味しているのであろうか。更に一族の者を王とするためには、恵帝の後宮の子を諸王とせねばならない。これを為してこそ呂氏一族を王とすることを大臣等に促がすことが出来るのである。恵帝の後宮の子、彊を淮陽王、不疑を常山王、山を襄城侯、朝を軹侯、武を壺闕侯とした。かくして呂后の意とするところをほのめかされた大臣等は、鄼侯呂台を立てて呂王と為すよう奉請するのである。呂后はこれを許した。いまや、呂后の思いのままに動きつつあるのである。彼女は満足気にこの奉請を許可したのである。

かくの如き動勢の中で左丞相審食其は宮中に在って権を振っていたが、他方右丞相陳平はどうしていたか。「陳丞相世家」には彼の様子を伝えて次の如く記述している。

既にいささか触れたように、陳平は樊噲を捕えたことよって、ひたすら呂嬰の讒言を恐れたのであった。樊噲は既に恵帝六年六月に死んでいるが、呂嬰の夫を捕えたという陳平に対する憎しみは消えていなかった。彼女はしばしば讒言する。陳平は丞相の職にありながらも政事も行わずに、日夜酒を飲み、婦人と戯れている、と。彼はこれを聞いて日々いよいよ耽楽した。呂后は陳平の様子を聞いてひそかに喜んだという。最も気になるところの彼が、職務とは一切無縁の様子で保身に汲汲としていることに安心したのである。呂后は陳平を慰めて云う。

世間の諺にも、子供と女の言葉をきいてはいけないという。そなたと私とでどうするかを考えるだけのこと

で、呂嬃の讒言など恐れる必要はない。

と。こうした言葉を得ることで陳平の目的は半ば達せられたといえる。呂后は彼が智謀の士であることを忘れていたのか、或いはみくびったのであったか。陳平はなおこれより後の呂氏一族の王となるのを唯々として従っている。彼は呂后の死によって、はじめて太尉周勃と共に呂氏の掃蕩に乗り出す。このように呂后が威を振っている間は隠忍することが彼の本来の計謀であったという。しかし、呂氏の専政に災害を恐れておろおろと日を過す陳平の姿が「陸賈列伝」に見えるから、彼の計謀とするのは後に至って仕立てられた話であるかも知れない。他方、王陵に面詰された際に述べた、劉氏を安泰にしようと思ひ悩んでいたこともまた記述されるところである。

## 八

呂后の二年、恵帝後宮の子で常山王に封ぜられた不疑が死んだ。そこで弟の襄城侯山を常山王に移した。山は名を義と改める。義は二年の後、即ち呂后の四年に帝となり、名を弘と改めた人物である。がしかし、これは実に名目上の帝であって、即位しても元年と称さないのは呂后が天下の事を決していたからであると司馬遷は書き残している。

なお、この年正月に長安の西方（隴西・武都）に地震が起り山が崩れた、また、夏六月に日食があったと「漢書・高后紀」にある。このことについて「五行志」には、この地震によって七百六十人が死亡し、八月まで余震が続いたと記述している。

三年、無事。と「呂后本紀」は至極簡単である。しかし、「漢書・高后紀」は夏に漢水が氾濫して四千余家の流失があつたと伝え、秋には星が昼なお見えたと特記する。

四年、呂後の妹で樊噲の妻であつた呂嬃を臨光侯に封じた。「考証」は婦人が侯に封ぜられるのは此れより始まつたのであると記している。此の時、呂氏一族の者三人と諸侯の丞相六人が侯に封ぜられた（本文は五人とあるが、梁玉繩は「惠景間侯者年表」によつて六人とする）。

さて、此の年には特筆すべき事件がある。既に前稿（三）でいささか触れたところの、惠帝を繼いで即位した太子は、実は呂后が劉・呂二氏の強固な結びつきを希つて自分の子魯元公主の娘を惠帝の妃としたのであつたが、不幸にして子供に恵まれず、遂に後宮美人の子を引き取つて太子としたと記述されているその人である。無慘であるのは、かように引き取つていかにも張皇后（魯元公主の娘）の生子の如くした上で、その生母を殺したことである。少帝は皇后が本当の母ではなく、しかも、自分の母が殺されたことを知つた。誰がこの慘酷な話を告げたのかはわからない。少帝は云う。

呂太后はいつたいていどうして母を殺して私を皇后の子供としたのか。自分はまだ年少であるが、大きくなつたら乱を起してやるぞ。

と。これを耳にした呂后は、少帝がいずれは乱を為すものと苦慮した。呂後の対処は早い。少帝を永巷に幽閉して重病であると称し、側近すらも会えないようにしたのであつた。たとえ年少であつたとしても、このような謀叛の口吻は許せぬというのは、過去の呂後のありようからみても当然であろう。こうした上で呂后は次の如く云う。

凡そ天下を有ち、万民の命を治する者は、之を蓋ふこと天の如く、之を容るること地の如く、上は歡心有りて以て百姓を安んじ、百姓は欣然として以て其の上に事へ、歛欣交々通じて天下治まる。今、皇帝病久しく已えず。適ち失惑悖乱し。継嗣して宗廟の祭祀を奉ずる能はず。天下を属すべからず。其れ之を代へんと。誠に堂々たるものではある。しかし、それだけに此の言葉の裏面に存在する無惨な血腥さを感知する者にとつては、正に戦慄すべきことであつたに相違ない。「漢書・高后紀」では此の語の末尾に議せよと云うが、群臣は「太后が天下万民のため宗廟社稷を安んぜられる深慮、群臣頓首して詔を奉ず」と云うのみであつた。かくして少帝の処置は決定した。位を廢され、幽殺されたのである。「漢書」には「之を永巷に幽す」とのみ記述するが、「史記」は「太后之を幽殺す」と呂后の手によることを明記し、「考証」は此れ漢廢帝の始めであると注している。年少である皇帝の怨言は或いは不図もられたものであつたかも知れないが、かくも悲惨な結末を迎えることとなつた。呂后は此処に於いて、帝位をすら己れの意のままにできることを示したのである。しかし、この事も、呂后の死後に呂氏一族を誅滅した上で、皇帝擁立を相談する諸大臣の言葉に、少帝をはじめその他の子（呂・淮陽・常山の諸王）は恵帝の眞の子ではなく、呂后が恵帝の子とさせて帝とし、或いは諸王として呂氏一族を強くせんとしたものである、とあるから、このような廢帝・幽殺も躊躇することなくできた、ということであるのかも知れない。ともあれ、呂后は得意の頂点にいる。

五月、直ちに立てられて即位したのは常山王となつていた義である。名を弘と改めた。既往の如く元年とは称さない。この帝もまた少帝と記述されている。

五年、「史記」は八月に淮陽王彊（呂后元年、恵帝後宮の子として封ぜられた）が死亡し、弟の壺関侯武を淮

陽王に移したとあるのみである。これで惠帝後宮の子は先の幽殺された少帝を含めて七人のうち三人(二年不疑・四年少帝・五年彊)が死亡したことになる。四年に即位した少帝弘とその兄弟、即ち呂王太(この兄弟中最も幼なかつたのである)か、呂后四年二月に封ぜられている。「惠景間侯者年表」、常山王朝(元、軹侯)・淮陽王武の四人は、呂后の死後ほどなく諸大臣等によつて殺された。その時、諸大臣の誅殺を正当化した理由は、先述の如く惠帝の真の子ではないということであつた。これについて後文に触れることになる。

なお、「漢書・高后紀」には五年春に南越王尉佗(姓は趙)が南越の武帝(此処、南武帝と記するが、「史記」によつて改めた。)と自称したことを記述している。趙佗は漢十一年に高祖が陸賈を派遣して南越王とされた。「漢書」に記載される佗自身の帝と号した理由に拠れば、呂后は讒臣の言を信じて南越を蛮夷であると差別し、金・鉄・田器の類を与えるな、馬・牛・羊を与えるには牡のみにして牝を与えるなど命令したこと、謝罪の使者を三人派遣したがいずれも帰つて来なかつたこと、風聞によれば佗の父母の墳墓が破壊され、兄弟宗族が断罪されたこと等が挙げられている。呂后のこのような処置をとつた理由については記すところはないが、広大な南越がいずれは力を蓄えて朝廷に脅威を与える存在になるということを懼れたのであつたかも知れない。呂后死後、呂氏一族が誅滅されて迎えられた文帝は、元年に佗の親の墓を修治し、従兄弟等を官に即ける等を行つて論説しているから、どうやら佗の風聞とするとところは事実であつたのである。また、文帝は呂后が不幸にして病に侵され、日増しに悪化したために政治に悖ることをしたとも云う。いわばすべて病の為せる業ということにされたのである。地下の呂后は一体いかなる顔をしたものか。これは後のことである。

さて、呂后生前のこと、佗の帝号を怒つた彼女は南越の籍を削り去り、使者の往来も禁止した。佗は讒臣を、

南越を手中にせんと謀る隣国の長沙王であると考え、長沙の辺境を侵した。呂后は死の前年、七年に隆慮侯を將軍として攻撃せしめたが、士卒は暑湿と疫病のために苦しみ、一年余の後に呂后の死によって兵を引いた。かくて、先述文帝の論説が為されるのである。

六年十月に呂后は呂台の子嘉が驕慢であるとして廢し、呂産（呂台の弟）を呂王とした。呂后の一族に対する態度が決してあまいものではなかったことの証であろう。「漢書・高后紀」には春に星が昼に見え、四月大赦を行ったと記載されている。また、匈奴が隴西の地に侵入したことを伝える。

七年正月、呂后は趙王友を招喚した。友は高祖の遺子で、惠帝元年に不幸な死を遂げた戚婦人の子趙王如意の後に淮陽王から移された人物である。友は呂氏一族の娘を妃としていたが、これを嫌って他の女性を寵愛したため、妃が嫉妬のあまり呂后に讒言したのである。友は次の如く云っていると告げる。

呂氏なんぞ王たるを得ん。太后百歳の後（死後）、吾必ず之を撃たん。

と。友が如意の死や少帝の怨言幽死について何らかの感懐を抱かない筈はないが、このような言葉を口に出すほど軽卒であったとも思えない。しかし、妃の妬心より出たこのことは、友が心中ひそかに考えていたことと合致する部分があったとみられる。後文の歌がそれを示している。呂后の怒りは激しい。招喚した友を屋敷に閉じ込めて謁見を許さず、衛兵に包囲させて、食を与えなかった。或いは羣臣の中にあわれんでひそかに食をおくる者があれば、これを捕えて処罰するほど徹底している。友は餓えた。飢餓の中で友は免れ難い死を覚悟した。もはや恐るべきものは何もない。心中わだかまるものが吐き出されて歌となる。歌に云う。

諸呂事を用ひ、劉氏危し。王侯を迫脅し、彊ひて我に妃を授く。我が妃既に妬み、我を誣ふるに悪を以てす。



讒女国を乱す、上曾て寤らず。我に忠臣無きも、何んの故に国を棄てん。自ら中野に決し、蒼天直きを挙げん。于嗟悔ゆべからず、寧ろ蚤に自財せん。王と為りて餓死せば、誰か之を憐れまん。呂氏は理を絶つ、天に仇を報ずるを託せん。

と。ここには自裁を思わせる語が見える。果して然うであつたか否か、記述は「趙王幽死」と伝えるのみである。趙王友の怨言は恐らくこのような処遇の中ではじめて吐露された。しかも、この憤怒を天に託さざるを得なかつた。怒れる呂后の感懐を示す記述はない。友を飢餓の中に置くという異常な処遇によって、その凄まじさを想像し得るのみである。そして、友は死してなお赦されざる者であつた。呂后の怒りは趙王友を全く庶民と同様の葬礼を用い、長安庶民の墓地に埋葬したことによって示されている。

かくして、冒頭に述べた如く、日食を憎む呂后の姿が此処に記述されている。これについては再説しない。

## 九

趙王友を幽閉悶死せしめた直後に起つた此の日食は、呂后の其の後の行動にいかなる影をもおとさなかつた。彼女の行動はめまぐるしい。

二月、梁王恢を移して趙王とした。恢は高祖の遺子である。空位となつた梁王には六年十月に呂王に封じた呂産を移し、且つ、封地に赴かせることなく幼帝の太傅に任じた。また、恵帝の遺子平章侯太を呂王とした。趙王友の死によつて此れ等の移封が行われたのである。趙王というのは不吉の王座であるようである。如意は毒殺さ

れ、友は幽死を迫られた。そして、いま趙王となった梁王恢にもまた不幸な死が待ちうけていたのである。

「呂后本紀」は上述の如く移封について記述した後、更に當陵侯劉沢なる人物が琅邪王に封ぜられたことを記している。しかし、劉沢を琅邪王に封ずる一件は、秋に代王恒（後の文帝）を趙に移封しようとして辞退された後のこととみられるから、此処の記述は前後しているようである。従って、劉沢については後述することとし、先ず梁王恢について述べることにしたい。

梁王恢は高祖の十一年夏、謀叛を疑われて蜀に移される途中、呂后に欺かれて誅殺された梁王彭越（既述三）の後に封ぜられた。高祖の八人の男子のうち、五番目に王に封ぜられた人物である。既に酒宴の席上あやうく呂后の毒殺を免れて帰国した斉王劉肥も亡く（恵帝六年薨す。既述六）、趙王如意は毒殺され、淮陽王であった友は趙王に移されて幽閉憤死させられたことは既述の通りである。恵帝を含めると八人中、既に四人が死亡している。

さて、いま趙王に移された恢は心中楽しくなかったという。趙王となった兄弟二人が不幸な死を遂げているのである。このことを考えるだけでも楽しくかろう筈はないであろう。梁王に封ぜられて以来、ここに至るほほ十六年間について、彼がいかなる日々を送ったのか記すところはない。しかし、己れの一族劉氏が呂氏に迫られている状態を知らない筈はなからう。ただ、恢の性格には兄の恵王に似た心優しい何処か弱々しいところがあつたらしい。こうした彼の身に憂鬱なことが起つた。呂后は呂産（呂后長兄の子）の娘を彼の后妃としたのである。此処の記述は趙王の妃としたとあるから、或いは恢が趙王に移された直後のことであつたかも知れない。しかも、后妃の侍臣には呂氏一族の出身者を以つて充て、権力をほしのままにして、ひそかに恢の動靜をうかがわせた

いう。当然、恢は趙王の身でありながら、意のままに振舞うことすらできなかつた。いつの頃からか彼には愛する姫がいた。后妃がこれを黙過する筈はない。人を使つてこの愛姫を毒殺した。ここに用いられたのもまた鳩毒であつた。このようにして恢の精神はいよいよ耐えられないまでに追い詰められていったものである。彼は毒殺された姫のために詩四章を作り、楽人に歌わせたという。この詩四章の内容について記するところはない。しかし、恐らく怨言も含まれていたのではあるまいか。趙王恢は悲しみの日々を送ることになる。六月、遂に彼は悲哀のあまり自殺した。

呂后を筆頭とする呂氏一族の趙王恢に対するありようは、まさにこの結末に導くして行われたの感がある。かくして、趙王の座についた如意・友に次いで、恢もまた異常な死を遂げたのである。恢の自殺を聞いた呂后は、女性のために宗廟の礼を棄てたとして、その嗣を廢絶した。これによると趙王恢には後嗣がいたようにもみえる。またしても趙王は空位となつた。秋、呂后は代王恒―高祖の中子（四番目）、十一年春、陳豨を破つて代の地を平定した際に、代王に封ぜられた―に使者を派遣し、移して趙王にしたいと告げさせた。ところが、代王恒はこれを辞退して、代の地の辺境を守らせていたのだきたいと請願した。恒には既に趙王となつた三人がいずれも不幸な死を遂げたことに対する懼れがあつたのであろう。彼があえて趙王に移らなかつたのは、呂后を畏れて自ら遠ざかる識慮があつたのだという理解がある（茅坤）。他方、呂后は強いて恒を趙王に移そうと望まなかつたふしがある。後述「荆燕世家」の劉沢封王の件で触れるように、彼女は代王恒を趙王に移し、空位となる代王に一族の呂祿（武信侯、呂后次兄の子）を封じて王にしようと考えていたようである。しかし、代王恒が趙王となることを辞退したために、呂后は結局張子卿の進言―実は田生なる人物の計謀―によって呂祿を趙王とするように

諸大臣にはかったのであった。「呂后本紀」には太傅呂産・丞相陳平等が、武信侯呂祿は諸侯第一位であるから趙王に立てられたい、と奏請したとなっている。後文で触れる如く、この奏請は呂后が大臣に問う形で行われたものである。呂后はこれを許可し、呂祿の父である呂釈之（建成侯。恵帝二年卒。康王と諡す）を追尊して趙昭王とした。これによると、どうやら呂后は代王であれ趙王であれ、呂祿を王に封ずれば事足りたということであるらしい。

いま、代王恒に触れたので、更に少しく述べておきたい。既述の如く、彼は高祖の第四子として生れ、後に迎えられて文帝となった。彼の出生について、この母薄姫のことが「外戚世家」にみえる。彼女の父は呉の人で姓を薄という。秦の時代に元の魏王の宗家の女魏媼と通じて薄姫を生んだ。諸侯が秦に叛くに及んで、魏の諸公子の一人であった魏豹（魏豹・彭越列伝）は遂に魏王となった。そこで魏媼は薄姫を魏宮に入れたのである。薄姫を親相の大家許負（絳侯周勃世家）にみえる。また、「游侠列伝」の郭解は許負の外孫とある。）に見せたところ、まさに天子を生むべし、と云ったという。

ところが、いささか滑稽なことに、この許負の言を聞いた魏豹は、項羽と抗争中の高祖に負いて独立をはかったのである。もともと、この独立の件について魏豹の伝には、漢王は驕慢で諸侯・羣臣に対しても、まるで奴僕のように罵詈雑言を浴せ、上下の礼節がない、もはや我慢できぬ、とその理由を語っている。やがて魏豹は虜にされ、高祖に滎陽を守備するように命ぜられたが、項羽の軍に包囲された際、周苛等に反国の王とは共に城を守り難しとして殺された。魏豹を虜にしても直ちに誅することもせず、滎陽の守備につけたのは、寛容ということのみではなく、人材不足という当時に於ける高祖の辛さを物語っているものかも知れない。

さて、薄姫は魏豹が虜にされ、国が漢の郡に編入されてより、織室（織物の室）に送り込まれて従事していた。豹の死後、たまたま高祖が織室に入ったところ、美貌の薄姫を見て心惹かれ、詔して後宮に入れた。しかし、一年有余を経ても恩寵を蒙ることはなかった。これより前、薄姫年少の頃のこと、管夫人・趙子兒（この二人は「外戚世家」に見えるのみ）と仲が良く、「先貴無相忘」（だれが先に貴くなっても、互いに忘れまい。）と約束しあっていたという。いまや二人は既に高祖の寵愛を受け、ある時、この約束事を語り笑っていると、これを聞いた高祖は薄姫の心根を思い、憐れんで召し出した。薄姫は云う。

昨暮夜、妾、蒼龍の吾が腹に抱るを夢む。

と。それは貴い証である、汝のため成し遂げさせてやろうと高祖は云ったとある。かくて一度だけの寵愛で生れたのが、代王恒であった。薄姫はまれにしか高祖に会わなかったため、戚夫人を始めとする諸姫が呂後の憤怒に遇って幽閉されたりしたにも拘わらず、彼女は代王について封地に向うことができたのである。以上が代王恒、後の文帝出生にまつわる話である。薄姫は諸大臣によって仁善を称されたという。

さて、先に触れた宮陵侯劉沢であるが、彼は呂後の妹呂嬃（樊噲の妻）の女婿で、時に大將軍であった。呂后は一族の者を王に封じ基盤を固めんとしていたが、自分の死後に於いて劉沢將軍による呂氏への迫害を恐れ、彼を琅邪王に封じて不満のないように講じたのであるという。劉沢については「荆燕世家」にその事蹟が書き残されている。燕王と称するのは、呂后崩御後に呂氏一族を誅滅するに功績があり、諸將相と共に代王を迎えて即位せしめるに与って燕王に封ぜられたからである。

劉沢は劉氏一族の中でも疎遠なる者であった。高祖三年に郎中となり、十一年には將軍として陳豨討伐（既述

(三) に従い、敵将王黄を捕えて營陵侯に封ぜられたのである。しかし、「韓信・廬縮列伝」の陳豨の伝には、王黄は元來韓王信の部将であつたとあり、高祖は同じく將軍であつた曼丘臣にそれぞれ千金の賞金をかけて求め、これにつられた部下がこの二人を生捕りにして突き出したと記述されている。また、「樊・鄴・滕・灌列伝」の樊噲の伝には王黄等を捕虜にしたとあり、「漢書・荊燕吳伝」には劉沢が陳豨の将王黄を撃ち營陵侯に封ぜられたとある。いずれの記述が是であるのか判断し難いが、強いて云えば陳豨の伝が王黄と最も深い関係にあるという点で、賞金目当の部下が生捕りにして突き出したものと考えの方が妥当であるのかも知れない。樊噲の伝に王黄の軍を代の地に破つた、「漢書」の撃つなどの記述よりすれば、將軍の一人として劉沢も与つていたのであろう。さらに、沢は先述の如く呂嬃の女婿であり、呂嬃の夫は樊噲という関係も無視できないように思われる。ともあれ、劉沢はこの討伐による論功行賞で營陵侯に封ぜられたのである。

ついでながら、千金の賞金が莫大なものであつたことに触れておきたい。「項羽本紀」に項羽の首級に千金の賞金がかけられていたとある。「正義」(張守節)に漢は一斤(約250g)の金を以つて一金とし、一万錢に相当するとしている。また、「越王句踐世家」に范蠡は殺人を犯した次男を死刑より救出しようとし、結局、長男の猜疑心と金の出し惜しみによって失敗したのであつたが、諺を引いて「千金之子、不死於市」(千金を蓄えた富裕の家の子弟は、市に死なぬ)と述べている。千金がいかに魅力ある賞金であつたかが想像できよう。従つて、王黄・曼丘臣の部下が賞金に目が眩んで、二人を生捕りにして突き出すという挙にでたのも無理からぬ。

劉沢を琅邪王に封じて不満のないようにと呂后が計つたのは、先述の如く己れの死後に於いて一族が迫害されることを懼れたからであつたが、これには田生という人物の計謀が存在している。田生、字を子春という。斉の

人である。彼は遊歴して資金が乏しくなり、そこで何か計画を考えて劉沢に会った。沢は大いに喜び、田生の寿を祝つて金二百斤を贈つたという。この計画について記するところはないが、恐らく後述の劉沢を諸國王の一人にしようとするものであつたのであろう。田生は金を手に入れると齊に帰つてしまい、何らの行動も示していない。劉沢が田生に使を出して「私に味方して助けてくだらない」と云わせたのは二年後のことである。行動を促された田生は長安に出て大邸宅を借り、子供を呂后が寵遇している大謁者（宮中で賓客の取り次ぎなどを掌る）の張子卿―張沢、子卿は字。既述六に触れたが、匈奴への屈膝的な返書を作成した人物である―に任せさせようとした。数月の後、息子を通じて張子卿を招待したが、その席は諸侯の如く豪華なもので、子卿を驚かせた。宴もたけなわの頃、他の人を退らせて田生は彼に説く。いま、この口吻はおよそ次の如くである。

太后（呂后）は老齡であるが呂氏はなお強固ではない。そこで太后は呂祿を代の王に封じたいと望んでいますが、云い出すことをはばかっておられる。それは大臣等の反対を気にされてのことである。いま、卿は太后に最も寵遇され、大臣に尊敬されています。それなのに、どうして大臣にほめかして太后に申し上げないのですか。そうされるなら、太后は必ず喜ばれ、呂氏一族が王に封ぜられたら、卿もまた万戸の侯になれます。太后が望んでおられるのに、卿は内臣として早く申し上げなければ、恐らく禍が身に及ぶことになりましょう。

と。張子卿は大いにその通りであると考え、大臣にそれとなく悟らせて呂后につげた。呂后は朝において問い、大臣は呂祿を趙王にしたいと請願した。（此処、田生語中の呂祿の部分、原文に「太后欲立呂産為呂王代」とあり、大臣の請願は「大臣請立呂産為呂王」とある。しかし、呂産は六年十月に呂王となっており、七年秋に呂

禄を趙王に封ずるを請う呂産と丞相陳平の語が見えるから実情に合わない。この計謀の間に代王恒が趙王移封を辞退した事情があるのであろう。梁玉繩「史記志疑」∨は前者を「太后欲立呂祿為王、王代」と訂し、後者を「大臣請立呂祿為趙王」と訂す。今、これに従った。猶、後文の田生の語に「呂産王也」とあるが、これも呂祿である。呂后は満足して、張子卿に金千斤を与えた。この金の半分を田生に与えようとしたが、田生は受け取らずに更に説く。

呂祿が王となつても、なお諸大臣は心服していない。いま、當陵侯劉沢は劉氏一族で大將軍となつてゐるが、彼一人だけが満足していない。卿より太后に言上して十余県<sup>の</sup>王に封ずるようになさい。劉沢は王になれば喜んで長安を去りましょう。それで呂氏一族の王は益々安泰です。

と。此処に至つてはじめて劉沢を王にせんとする策が明らかになる。当時、劉氏一族の中でも劉沢は最も年長であつた。その故に呂氏一族を誅滅して文帝擁立の際には諸將相と共に与つたのである。それにしても這樣的計謀は鄙薄の感あるを免れない。

以上が劉沢の琅邪王に封ぜられた経緯であるが、田生は急いで封地に向うことを勧めてゐる。呂后の氣の変わることを懼れたからである。果して、劉沢等が関門を出た後に、呂后の使者が彼等を止めようとしてやつて来た。しかし、追いつくことなく引き返したのであつた。

そもそも、劉沢が王黄生得の功(?)で當陵侯に封ぜられたのは高祖十一年のことであつた。以来、呂后七年のこの時までおよそ十五年間、いわば全く影の薄い存在であつたようにみられる。しかも、呂嬰の女婿という縁があつたにもかかわらずにである。呂后にとって劉沢は何ら危懼の種としても存在しなかつたのであろう。もし、



何らかの危険が予想される人物であったとしたら、呂后にとって瑕瑾を探し出して処断することは容易だった筈である。それがにわかに関の死後に於ける呂氏一族の安泰のためには、劉沢を王に封じて不満をやわらげなければならぬ、と考えるようになったのは、張子卿を通じた田生の口説の故であったであろう。呂后がこの口説の故に劉沢を実力以上に評価して王に封じたと気付いた時こそ危険なのである。田生はこの危険を察していたからこそ、関門を出ることを急いだのである。使者が追いつけなかったことで、この後にいかなる処置もとられていないのは、余計な混乱を避けるという政治上の配慮よりも、むしろ、劉沢が今までが然うであったように何事も為し得ないであろうということではあるまいか。どうやら、呂后の劉沢に対する認識というのは、以上の如きものであったらしく思われる。田生の策にはまったと云うべきであろう。

ところで、司馬遷は「荊燕世家」の末尾に於いて、いささか難解な劉沢の評を記述している。劉沢が王になったのは、田生の謀によつて呂氏の禍を激成させんとしたからだといふのである。劉沢は劉氏一族でありながら、呂録を王に封せんと計り、呂氏一族の横暴をあからさまにし、諸臣に不満を抱かせて、呂氏の崩壊を早めたといふことなのである。但し、この謀略について催促されて長安に出た田生は劉沢とは会わなかったといふから、劉沢はほとんどこれについて知らなかったのかもしれない。とすれば、先述の呂氏の禍激成云々といふのは、後世に於ける司馬遷の穿つた見解ということになるのではあるまいか。

さて、呂後の妹呂嬃の女婿である營陵侯劉沢は、田生の謀によってまんまと琅邪王となった。呂氏一族の者を諸國王にしたいと望む呂后に巧みにつけ入ったといえよう。

ところで、同じく劉氏一族の中で、呂後の神経を逆に撫で上げたような人物がいる。朱虚侯劉章という。齊王劉肥（前述）の中子である。劉肥は恵帝六年に崩じ、子の襄が立つて哀王となった。呂后元年は哀王二年に当る。呂后は兄の子呂台を呂王に封じ、齊の濟南郡を割いてその邑とした。このように地を割かれた齊王にとっては不快なことであった筈である。更に、呂后の七年（齊哀王八年）には先述の如く劉沢を王に封ずるため、齊の琅邪郡を割いた。齊王の心中に憤怨が存したとしても不思議ではなからう。かくの如く呂后は思いのままにその権を用いたのである。劉氏一族は全く生氣を失い、中央に於いて何らかの地位にある者は皆無といつてよい有様であった。

劉章は呂后元年に朱虚侯に封ぜられた。且つ、呂后は呂祿の娘を章の妻とした。この配偶はいかにも呂后の考えそうなことではある。劉・呂二氏の絆を強くしたいという呂后の願いを示すものであろう。「齊悼惠王世家」に拠れば、劉章は漢宮室の宿衛に任ぜられたようである。四年後、弟の興居もまた出京して宿衛に任じ、東牟侯に封ぜられている。劉章は呂后七年に二十才であったというから、十三・四才頃に朱虚侯に封ぜられたことにならう。

呂后七年は先述の如く、劉氏一族では趙王友の幽死と恢の自殺があり、呂氏一族では呂産が梁王、呂祿が趙王となった。劉沢は呂后の不安につけ入って琅邪王となったが、それは齊を削つてのことである。劉氏の逼塞を見

せつけられ、氣力溢れる劉章は憤懣やるかたなく、機を見て溜飲を下げようとひそかに思っていたのであろう。

ある時、呂后は宴会を催そうとして、劉章にその酒宴を取りしきるよう命じた。章は、臣は將軍の家柄の者ですから、軍法によって此の酒宴を取りしきらせて下さい、と請願して呂后の許しを得た。果して彼の家柄が將軍といえるものかどうか。このあたり作爲が感じられる。何事につけても呂氏一族の傍若無人の振舞が目立ち、恐らく、折あらば挫いてやりたいと考えていた劉章にとつて、これは絶好の機会に恵まれたといえよう。軍法を以つてするからには、違反者に対する厳しい処断が可能となつた。宴酣となり、章は酒や歌舞をすすめていたが、やがて、太后のために耕田の歌をうたわせて下さい、と申し出た。呂后は章をまるで子供あつかいにして笑ひながら、「考えてみるとその方の父は高祖が微賤の頃の生まれだから田を知っていたはず、しかし、その方は生れながらにして王子なのだから、どうして田のことを知つていようか。」と云う。結局、試みに歌つたみせよ、ということになり、章は次の如く歌う。

深く耕し、しげく種う。苗を立て、おさめんと欲す。その種うるにあらざるは、鋤きてもつてこれを去らん。と。これを聞いた呂后はすっかり黙りこんでしまったという。歌の意はまさに收穫のためにする農作業そのものであるが、その裏面に意味するところを察知したのである。顔師古は「高五王伝」に注して、最初の句は子孫繁多なるを云い、次の句は四方に藩輔（王室を守護する諸侯等を指す）として配するを云い、後半は呂氏一族を斥くるの意と解している。しかし、この歌は他方に於いて、呂氏一族の盛んであることと、呂氏以外を除き去るの意に解することができるのである。いずれにしても、呂氏一族を非難するものである。呂后は俄に黙り込んで不愉快な様子を示した。いま、劉章は猛虎の前で挑撥している。しかし、猛虎は遂に口を開くことはなかつた。そ

の心中がいかなるものであったかについて記すところはない。当初、子供あつかいしたということが、彼女の怒りをおさえたのであるかも知れない。

酒宴は続く。しばらくすると、呂氏一族の一人が酔って宴席より抜け出した。酒杯に耐えられなくなったのであろう。すると、劉章はこれを追いかけて、剣を把って斬り殺した。彼は宴席に戻ると、酔って宴席をはずした者が一人おりましたので、臣は謹んで軍法にてらし、只今、この者を斬り棄てて参りました、と報告した。呂後の左右に侍する者達は大いに驚き慌てた。しかし、すでに軍法を以ってこの酒宴を取りしきることを許可してあった以上、今更いかんともできなかった。またしても呂後の心中にただならぬものが生じたであろう。ここにおいてこの酒宴は中止された。呂后がとった己れの一族に対する庇護については既に幾つかの例をみたが、それ故に一族の中には勝手な振舞を為す者がいたのである。この宴会の件は呂氏一族の横暴をひそかに憤る者達に、劉氏の健在を思い起させた。諸大臣でさえも劉章を頼りにするようになり、呂氏一族の者は彼をばかるといふようになった。司馬遷は伝えている。呂後の専断で影の薄かった劉氏は、これより彊くなったという。

この翌年、呂后が崩ずると、劉章は妻が呂祿の娘であったので、呂氏一族の動向を逸速く知ることができ、これに対応する策を樹てることになる。これについては後述する。

さて、呂后七年九月のことである。高祖八子のひとり燕王建が崩じた。建が燕王に封ぜられたのは高祖十二年のことであった。以来、崩御に至るは十五年の間、特記すべきことはなかったらしい。平穩な日々を送ったということを意味しているのであろう。「漢興以来諸侯王年表」には恵帝の五年・七年に燕王の来朝を記しているが、呂后の時代になってからは一度も来朝することはなかったようである。このあたりに燕王建の呂后に対する心裡

が表明されていると考えるべきかも知れない。建には後宮美人の生んだ子供がいた。ところが、呂后は無惨にもこの遺子を殺害させたのである。これによって燕王の後嗣は絶え、国は断絶ということになった。しかし、この遺子の殺害と国の断絶とは、呂后が呂氏一族の者を王とするための策謀であった。格別に燕王に落度があった訳ではない。強いて挙げれば呂后專政となつてから、一度も来朝しなかつたということであろう。建の死は呂后に一族を王とする絶好の機会を与えたのである。またしてもここに呂后は一人の命を奪つた。

ここに高祖の八男子は遂に代王恒と淮南王長の二人のみとなつた。代王恒は既述の如く後に迎えられて即位した文帝である。淮南王長は高祖十一年に封ぜられた。高祖の末子であるという。長については「淮南・衡山列伝」に記述されている。司馬遷は長の驕慢ぶりを述べ、子供の安等が叛逆したことによつて「世家」に配しなかつたものである。長の母は曾つての趙王張敖（既述Ⅷ-Ⅴ、呂后の娘魯元公主の夫）のもとにいた美人（女官）であつたが、高祖が趙を通過した際（八年）に献上されて懐妊したのである。張敖は彼女をあえて王室におくらずに宮殿を建てて居住させていたが、翌年、貫高等の柏人の一件により、敖をはじめとして母・兄弟・美人に至るまで尽く捕えられた。勿論、この中に彼の美人も含まれていた。彼女は役人に高祖の寵愛を受け懐妊していることを告げる。しかし、この報告を受けた高祖は張敖への怒りのみが念頭にあり、美人に対する処遇については何ら指示しなかつたという。美人の弟の趙兼は辟陽侯審食其を通じて呂后に言上したが、嫉妬した呂后は処遇について高祖にとりなすことを承知しなかつた。また、審食其もそれ以上強いて呂后を説得しようとはしなかつた。かくするうちに、美人は長を生んだ。そして彼女はその処遇の不当を悲怒し、遂に自殺したのである。高祖は後悔した。それだけに母を失つた長を憐れみ、呂后に母となつて養育することを命じた。こうして、長は何時も呂

后に附いて成長し、恵帝・呂后の時代にも寵遇されて、いかなる患害も受けることはなかったのである。

此処、呂后の心裡について記すところはないが、あるいは彼女の一面を示すものであるかも知れない。呂后は生後間もなく母に死別した長に対して、格別に憐憫の情を抱いたのではなかったであろうか。あるいは嫉妬のあまり長の生母を何らかばおうとせず、遂に自殺するに至ったことについて、内心忸怩たるものがあつたということかも知れない。

淮南王長は心中常に辟陽侯審食其を怨んでいたという。勿論、恵帝・呂后の時代には寵遇なみなみならぬ審食其であつたから、これを顔色に出すこともしなかつた。彼が生母について呂后を説得し得た筈であるのに、それを強いてしなかつたことを怨んだのである。

以下は後のことであるが、呂氏一族が誅滅された後、長は即位した文帝と只二人残つた兄弟であるため、とかく驕慢の態度が見られるようになった。しかし、文帝は親眷の故をもつて常に寛赦した。長は鼎を持ち上げるほどの腕力の持主であつたという。文帝の三年四月、長は審食其に面会を求め、出てきた彼を袖中に隠していた鉄椎をもつて打ち、従者の魏敬にその頸をはねさせた。長が闕下にはだぬぎして謝罪し、審食其殺害の理由として挙げた三罪は、彼は母が趙の事件とは関係ないにも拘わらず不当な処遇を受けた際に呂后を説得諫争しなかつたこと、戚氏母子が罪なく呂后に殺された時も諫争しなかつたこと、呂后が呂氏一族を王に封じて劉氏を危くした時も諫争しなかつたことであつた。更に「臣謹んで天下の爲めに賊臣辟陽侯を誅し、母の仇を報ず。」とのべた。文帝はその母を思う心根を傷んで赦したのである。呂后元年左丞相となつた審食其は、八年の呂后崩御後に免官となつてゐた。呂后の余波はなおかくの如く及んでゐるのである。

以後の淮南王長はいよいよ驕慢で、文帝六年に至り、遂に謀叛をもって糾奏があり、棄死せらるべきところ、文帝は王位を廃して蜀郡に流した。肉親の情として、長が後悔すれば復位させようと文帝は考えていたという。流刑地への旅は、文帝の命によって日に肉五斤・酒二斗を給し、女官十人を随伴させる配慮が為された。しかし、剛毅な性格の長は、己れの驕慢を慙悔し、輜車の中に絶食して死ぬ。文帝は慟哭した。十二年のこと、庶民の中に淮南王長のことを歌に作る者があつた。

一尺の布、なほ縫ふべし。一斗の粟、なほ舂くべし。兄弟二人、あひ容るる能はず。(一尺の布ですら縫い合わせて、共にきて寒さを凌ぐことができ、一斗の粟でさえ舂いて、共に食べて飢を堪えることができる。

それなのに、兄弟只二人、この広い天下にどうしてあい容れることができなかつたのであろうか。)と歌にいう。文帝はこれ聞き、人民の曲解を嘆いたと伝えられる。かくて、遂に高祖の八男子は文帝一人を残すのみとなつた。

此処、呂后と淮南王長との関わりを述べて、長の死後にまで及んだ。

## 十一

既に燕王建の薨去によって、呂后はその遺子を殺害せしめ、国を廢絶せしめたのであつた。しかし、この断絶は彼女が呂氏一族の者を王にしようとした策謀よりでている。呂氏一族を強固にせんとした呂後の欲望は、またしても犠牲を生むことになつたのである。

八年十月、即ち九月に燕王の薨去があり、翌月には呂肅王（呂台）の子である呂通を以って燕王とした。この策謀は実に無惨な手段を弄していると云わなければならぬ。老齢の呂后はいまや可能ならばいかなる手段も嫌わなかったようにみえる。彼女の念頭にあるのは、ただ呂氏一族を安泰におくことのみであった。

ところで、呂通について「呂后本紀」には東平侯呂通を燕王と為す（「漢興以来諸侯王年表」にも呂通を東平侯としている）とあるが、「惠景間侯者年表」には呂后六年四月に鍾侯となつた記述があり、東平侯については呂后八年五月に始めて呂通の弟呂莊が封ぜられたとあるから、此処は梁玉繩が「史記志疑」に指摘するように鍾侯と考えるべきであろう。

さて、呂后の殺戮はこの燕王の遺子を以って終焉した。これより以後、呂后によつて為された殺人の記述は見当らない。高祖在世中、淮陰侯韓信の誅殺に始まり、此処に至るの間、いったい幾人が殺され、自殺に追い込まれたであろうか。簡単に列挙すれば、淮陰侯の外に梁王彭越・趙王如意・戚夫人・少帝及びその母・趙王友・趙王恢・燕王の遺子等がある。また、惠帝についても、彼が政治への意欲を沮喪し、問々のうちに崩御したのも呂后にその責があるであろう。更に疑えば趙王恢の愛姫毒殺についても、何等かの呂后の意志が働いていたのかも知れない。そして、その他記述上に表れない者達の死もあつたに相違ない。

八年は呂后最後の年である。彼女の死病となつた原因について、司馬遷は奇妙な事件を記述している。「漢書・五行志」を参考にしながら、この奇妙な事を以下に述べよう。

この事は八年三月に起つた。呂后は所謂除悪の祭を行うために霸水のほとりにでかけた。この行事は何事もなく終る。その帰途、軹道という所を通過した時、突然、青い犬のようなものが呂后の腋の下にとりつくように見



えた。それは実に瞬時にして消え、いくら目をこらしても、もはや何物も見ることができなかつたという。この時、呂後の腋に痛みなどがはしつたものかどうか、これについて記述するところはない。しかし、この事は剛毅と称せられる呂后にとつても薄気味悪いものであつた。これを占つたところ、それは趙王如意のたたりであるのでた。既に(五)に於いて述べた如く、如意は恵帝元年十二月に呂後の憎しみをもつて毒殺され、その母戚夫人は手足を切断され、両眼を抉られ、聾とされ、声も奪われて「人彘」と呼ばれたことをも含めてたたりであるという。いわば戚氏母子の怨念がこのような形であらわれたということなのである。この占いの結果について呂后がいかなる感懐を抱いたものか、これについても記述するところはない。しかし、この占卜についてかくの如く書き残されていることにこそ意味があるであろう。世上及び記述者において、戚氏母子に対する少なからざる憐愍の情が存在したことにもよると思われる。この奇怪な事件の後、暫くして呂后は腋の下に傷ができて病むこととなつた。老齡の彼女にとつて、この病はやがて七月の崩御に結びつくものとなるのである。以上がこの事件の概略である。

ところで、呂后はこの腋下の傷に悩まされていたにもかかわらず、元年以来、彼女の脳裡より離れることになつた呂氏一族を強固にせんとする為の封侯を精力的に続けるのである。翌四月、呂后は娘の魯元公主(呂后元年薨。夫は宣平侯張敖、呂后六年薨)の子で魯王(呂后元年封)となつてゐる偃が、年少のうちに父母と死別しているために、とかく心細いであろうと考へ、張敖の前の姫の二人の男子を侯に封じた。張修を信都侯とし、張寿を樂昌侯としたのである。二人を以つて魯王偃を輔翼せしめようとの意である。また、かねてより寵遇してきて張沢(既述九、張子卿)を建陵侯に封じた。彼が呂祿を趙王とするなど、呂氏を諸国の王とするのに与つて力

を致した点も封侯の理由となっているのであろう。「惠景間侯者年表」には宦者で奇計が多かったと記述されている。奇計とは呂祿を趙王とし、劉沢を琅邪王とするなどの策謀を指すものであろう。「考証」はこうした宦官が列侯となったのは、これが最初であると指摘している。田生（既述九、張沢の策謀は田生にでている）が呂祿を王にすることができたならば、万戸の侯になれるだろうと予測したのであったが、果して万戸であったか否かは不明であるが侯に封ぜられたのである。更に、呂后兄弟の子である呂栄を祝茲侯に封じ、宮廷に仕える宦官の者達を関内侯（関内の邑を与える）とし、食邑五百戸を与えたのであった。これもまた、呂氏一族の輔翼となす意図より出たものであろう。

かくして五月になると、先の燕王呂通の部分で触れたように、その弟呂莊を東平侯に封じた。呂后が呂氏一族を諸国王・列侯に封ずることは此処を以って終る。この時期について、後に文帝は南越王尉佗を説諭して、呂后が病の悪化によって政治に悖ることをしたと述べているが、それほどではないにしても、彼女の病は甚だしく進んでいた。

一方、この夏、「漢書・高后紀」には江水・漢水が氾濫して一万余家の流失があったと記載されている。また、「五行志」には漢中・南郡に復た出水があり、六千余家の流失をみたと伝える。復たと記述するのは呂后三年夏に四千余家の流失があったからである。更に、南陽・沔水（漢水）が氾濫して一万余家の流失があったとある。この一万余家流失の記事は「高后紀」にいうものと同じことを指しているであろう。上記について、「五行志」の記事の末尾には「是時女主独治、諸呂相王。」とある。これは鬼神を敬はず、政令が時宜に適はない時に起る異変であり、呂后及び呂氏一族の称制と相王となったことに対する災異として把えていることを示している。

いま、ついでながら上述の如き異変について、「五行志」によって恵帝・呂后に関するいくつかのことをみておきたい。およそこのような異変・災害は、人君等に於ける行為に対する天の戒めであったり、或いはその子兆であったりするのであると考えられている。

恵帝二年正月葵酉の日の朝、二匹の竜が蘭陵県廷東里の温陵という者の井戸の中にいるのが発見され、二日後の夜に何処かへ去ったという（「恵帝紀」には単に家人井中とある）。これについて劉向（B. C 77-16）は、竜は貴象であるが庶人の井戸の中にくるしんでいるのは、諸侯将が幽執の禍に遇うことを表わしており、果して、後に呂后は三趙王（如意・友・恢）を幽殺し、呂氏一族もまた誅殺されたと述べている。

同じく恵帝二年、天は宜陽の地に血をふらせた。一頃（182a）ほどの地域であったという。これについて劉向は赤管（五行の赤の気による災）とし、当時、冬の雷や桃・李が咲いたのは君主の舒緩によって暖気が去らない故である。そして時に政は舒緩して呂氏一族が諸事を為し、讒口妄りに行われて三皇子（三趙王）を殺し、正嗣ではない後宮美人の子を帝として呂氏一族の者を王とした上、王陵・趙堯・周昌（上記三者、いずれも既述）を退け、呂后が崩ずると大臣等は呂一族を誅滅して僵尸流血の事態となったと述べる。また、桃・李が咲き、棗が実ったということが恵帝五年十月にあったという。こうした草妖は邪謀と成功を意味するものであろう。

恵帝四年十月乙亥の日、未央宮の凌室（蔵氷の室）が火災に遇い、翌日には織室が焼けた。劉向は元年に呂后が趙王如意を毒殺し、戚夫人を残戮したこと、四年十月壬寅に呂后の娘魯元公主の娘を皇后としたことを挙げ、凌室は飲食を供養し、織室は宗廟の衣服を奉ずる所で、天がこの災を下して戒めたものである（これには前例があり、春秋時代、魯の桓公十四年に御慶入祭祀の穀を蔵する神倉が火災に遇ったが、時に夫人に淫行があり、

桓公を弑せんとする逆心があつたことの戒めであるという。天の戒めに、皇后宗廟を奉ずるの徳なく、將に祭祀を絶たんとすと。その後、惠帝の皇后に子供がないため、後宮美人の子を引きとつて子とし、その母を殺した。惠帝崩御後、この子を立てたが怨言があつたため廢位幽殺して、呂一族の弘（常山王。惠帝の子ではないとされる）を立てた。更に呂一族が誅滅されて文帝が立ち、惠帝の妃は幽廢されるという一連の事件は、呂後の行為に相い応ずるものであるというのである。

他方、呂后称制の間であるが、元年五月に趙王宮室の叢台が火災に遇っている。劉向は趙王友が呂一族の娘を妃としていて、嫉妬のあまり友が呂氏を討たんとしてしていると讒言し、七年、遂に幽殺された（既述八）ことに応ずるとみるのである。なお、既に触れた如く、二年正月の地震、二年・四年・八年の洪水、七年の日食が翌年呂后崩御の予兆であるとか、或いは八年三月の犬禍等がある。

以上は「五行志」に記載されるいくつかについてみたのであるが、災異と人事との関係についてどのように考へていたかの一端が知られるであろう。

さて、呂後の病はいよいよ重くなった。七月になると彼女自身も、もはや余命いくばくもないと覺つたらしい。そこで彼女は最も信頼する呂氏一族の二人、趙王呂祿と呂王呂産を呼び寄せて、己れの死後について誡めたのであつた。時に呂祿は上將軍として北軍を統轄し、呂産は相国（「史記」は呂后崩御後に任じたとあるが、「漢書」では七年に任じられている）として且つ南軍を統轄していた。呂后は二人に向つて次の如く云う。

高帝已に天下を定め、大臣と約して曰く、劉氏にあらざして王たる者は、天下共に之を撃て、と。今呂氏王たり。大臣平かならず。我もし崩ずれば、帝年少にして、大臣恐らく変を為さん。必ず兵に拠りて宮を衛り、

謹しんで喪を送り、人の制するところとなるなかれ。

と。この訓戒によれば、呂后自身が高祖の遺訓に負っていることを承知していたのである。彼女が違背を承知でそうせざるを得なかつたのは、唯一の男子であつた恵帝が崩御すると、あと頼るべきは血縁の呂氏一族以外になかつたからである。従つて、王陵の強硬な反対を押しきつてまで一族の主たる者を諸国王に封じ、劉氏との婚姻を謀つてきたのであつた。重臣等の不平を高祖の皇后という地位を最大を利用して押えてきたのである。いま、この重圧が無くなるならば、重臣等が政変を惹起するであらうことは明らかである。故に、兵を以つて固め、人に乗ぜられぬようにせよという。呂后のこの危懼は事実となつて現われた。この訓戒が何ら生かされることなくおわたつたのである。

七月辛巳、呂后崩御。遺詔によつて諸侯王にはそれぞれ千金を賜い、将相列侯郎吏に至るまで、その秩禄に応じて金を賜つた。また、天下に大赦を行つている。この遺詔には己れの死後において諸侯王を始めとして郎吏に及ぶまで広範囲に恩沢を施し、政変の起らないようにしようとした呂后の願いが籠められている。かくまで死後を慮つた彼女の心情はあわれと云わざるを得ない。しかし、このこともまたほとんど効果はなかつた。

「呂后本紀」には上述の記載の後に、呂祿の娘を以つて少帝（常山王弘、呂后四年、怨言のため廢位幽死を迫られた少帝の後に即位した。八を参照されたい）の皇后にしたと記述されている。どうやらこの記述は前後してあるようである。「漢書・外戚伝」には四年に弘が即位した時に皇后としたと記述があり、此処、呂后の遺詔の如くみえる「史記」の記述よりも、恵帝をはじめとする諸劉王に於けると同様、劉・呂二氏の結びつきをはかつた彼女のありようからみても、少帝即位の時と考えたほうが理に合うであらう。

ところで、呂后崩御にいたるまでの重臣等の様子についてみておきたい。先ず、丞相の位にある陳平がいる。呂后が呂氏一族の者を諸国王にせんとした時、彼は偽わってこれを承諾したのであるという。しかも、硬骨の人であった王陵と争いながらであったが、こうした呂后の意に逆わなかつた陳平の行動は、後に呂氏一族を誅滅して文帝を迎立するという本来の計謀に基づくものであったとされている。彼は王陵に高祖の盟誓に背くと難詰された時、面折廷争は貴君に及ばぬが、国家を安全にし、劉氏の後裔を安定せしめるのは自分等である、と何らかの計謀の存在を思わせる発言をしている(七)。既に陳平が右丞相となつても何ら丞相の事を行わずに、酒におぼれ、婦女子に戯れて呂后の安心を得たことなどについては触れた(七)が、こうした保身と韜晦の日々を送る中で、劉氏存続を慮つて悩む姿が記述されている。しかし、どうやら先述の計謀といえるほどのものは無かつたというのが本当のところらしい。

陸賈という人物がいる(酈生陸賈列伝)。楚の出身で、賓客として高祖に従い、雄弁家として有名であつたという。高祖の命によって、趙佗(既述八)を南越王に封ずる使者となり、漢に臣従することを説得したのは陸賈である。また、彼はしばしば高祖に詩経・書経を称説したため、高祖は罵つて「俺は馬上において天下を得たのだ。詩経・書経なんぞ関係ない。」と云うのに対して、「馬上で天下を得られても、どうして馬上で天下を治められましようか。湯王(殷)・武王(周)でさえ、武を以つて天下を得ても、文を以つて守つたのです。文武の並用こそ、国家長久の術です。云々」とやり込め、高祖には不愉快な様子と慙ずる様子とがあつたという話がある。平素より儒家を嫌つていた高祖であつたが、国家存亡に関する述作を陸賈に求め、かくて出来上つたのが「新語」という書である。

さて、陸賈は惠帝在位中に呂后が政治の実権を握り、やがて呂氏を諸国王に封げんと望むに至るまでを備さに観た。呂后が呂氏封王を望んで、なお、重臣等の反対を恐れていた頃、陸賈は自ら到底論争することはできないと考え、病と称して隠居したという。このあたり、彼の明智の一端を示すと考えるべきものであろうか。以来、陸賈はいつも四頭だての馬車に乗り、歌舞琴瑟を演奏する者十人を従え、値百金の宝剑を身につけていたと伝えられる。この時期、呂后は意のままに振舞い、一族の者を諸王とし、一族は権を擅にし、幼君を劫かし、劉氏をいよいよ危うくせんとしていた。右丞相陳平はこれを憂慮しながらも、諫争する力もなく、禍いが身に及ぶのを恐れ、いつも家に閉じ籠って考え込んでいたという。既述の酒色に耽楽することで呂后の安心を得たというのはこの時期であろう。或る日、陸賈は不意に陳平をおとすれ、そのままか部屋に入って坐ったが、深く考え込んでいた陳平は全くそれに気付かなかつたという。陸賈は云う、「何をそんなに考え込んでおられるのか」。陳平云う、「何んであるかわかりか」と。かくて、陸賈は云う。

あなたは上相の位にあり、三万戸の侯である。これは富貴を極め、他に欲しいものはないと云うべき身分です。しかしながら、憂思することがあるとすれば、呂氏一族の専権と幼君を憂慮されることしかないでしょう。陳平が深思していたのは正に然うであつたから、いかに対処すべきかを問う。陸賈は云う。

天下平穩の時は丞相が注目され、天下危機の時は將軍が注目されるものです。將相が和調すれば士人も慕いましょう。そうになると、天下に異変が起つても権力は分割しません。社稷（国家）を保つ大計は兩君（陳平と太尉周勃）の手に握られています。私は常に太尉に話そうと思つてはいますが、彼と私とは戲狎の仲で、私の言葉なぞ馬鹿にしてとりあつてくれません。あなたこそ一体どうして太尉と深くよしみを結ばないので

すか。

と。ここに於いて陸賈は陳平のために呂氏に対する種々の計謀をめぐらしたとある。よほど綿密なものであったのであろう。陳平はその計謀を用いて、直ちに五百金を使って絳侯周勃のために鄭重な寿宴を開いてもてなし、絳侯もまた同様のお返しをした。こうして陳平・周勃二人が強く結束したのである。このため呂氏の謀略はいよいよやりにくくなったという。但し、呂后を頂点とする呂氏一族に関する記述からは、この二人による掣肘を思わせるものは見当たらない。従って、先述の呂后訓誡における「大臣平らかならず」という危懼を与え続けていたということかも知れない。

以上のような事情からみると、「陳丞相世家」に記述されるころの、呂氏一族を王に封ずるにも偽わって認められたもの、或いは呂后崩御を待つて呂氏を誅滅して文帝を擁立したとかするものが、陳平本来の計謀であったとするのは割引きして読む必要があるであろう。ここには、おろおろとするばかりで、いかなる方策もたてられずに悩む陳平の姿があり、対応の策は全て陸賈より出たものであることが明らかにされているのである。

絳侯周勃についても既にいささか触れた部分もあるが、木彊敦厚の人と記述されている。彼が太尉（軍事を掌管）となったのは恵帝六年のことであった。但し、太尉に任ぜられた記述には二様があつて、「絳侯周勃世家」には「孝恵帝六年、置太尉官。以勃為太尉。十歳高（呂）后崩。」とあり、「漢書・百官公卿表」にも六年の項に「絳侯周勃復為太尉、十年遷。」（復と記するのは、高祖十一年に周勃は太尉に任ぜられ、後に太尉の官が無くなっているからである。また、十年遷とは文帝元年に太尉より右丞相になったことを指している）となつているが、他方、「呂后本紀」・「高祖功臣侯者年表」・「漢興以来将相名臣年表」はいずれも呂后四年に太尉に任ぜられ



たと記述されている。梁玉繩（「史記志疑」）は記述年数が合致するところを以つて前者を正しいとする。なお、周勃の恵帝六年太尉任命については次の如き点が存在したものとされる。即ち、恵帝六年十月に相国曹參が死去し、それにとり代つて王陵を右丞相、陳平を左丞相に任じたのである。高祖は相国蕭何の死後は曹參、曹參の死後は王陵・陳平・周勃を以つてあい補い合うべきであることを呂后に云い残しており（四）、しかも、特に周勃については「劉氏を安んずる者は必ずや勃なり。太尉と為さしむべし。」とさえ云っている。以上の事情によれば、彼等三人は曹參の死によつて恵帝六年同時に任ぜられたと考えるべきであろう。そして、恵帝は高祖の遺訓に従つたといえる。また、背後にあつた呂后もこの三人の任官については、高祖遺訓を聞き取つた本人であるため、むしろこの人事を推進したものと見られる。彼女の極端な変貌は恵帝崩御に遭つてからである。

さて、太尉に任ぜられた周勃は、呂后の時代になると軍門に入ることすらできなくなつた。呂祿・呂産等によつて兵権は掌握されていたからである。それは、陳平が丞相でありながら、何ら政事にたずさわることなく隠忍苦悩（その内容は複雑であるが）の日を送つたのと同様である。しかし、此処に陸賈によつて強く結びついた二人は、呂后崩御を境にして呂氏一族を誅滅し、劉氏安泰を画策することになる。

## 十二

呂后崩御。この記述を以つてこの稿は擱筆すべきであるかも知れない。しかし、呂后称制八年間の余波は、なおも幾つかの悲劇を生む。以下、その様相について略説しておきたい。

呂氏一族にとって呂後の死は、その頼るべき中心が失われたのである。従つて、今後をいかにすべきかに迷つたようである。呂后最後の訓戒は、既述の如く劉氏以外の者が王たる時は天下共にこれを撃つてという遺訓に負っている以上、必ず大臣等による異変が起るであろうから、制せられてはならないということであつた。そこで、諸大臣・諸侯王等に誅滅されることを恐れた上將軍呂祿（趙王）と相国呂産（呂王）は、兵権によつて素早く彼等を制しようとしたのであつたが、高祖の頃より重臣であつた絳侯周勃や穎陰侯灌嬰等の動きをおそれて実行に至つていなかった。呂氏にとってこの二人を中心とする動きが余程気になるものであつたらしい。司馬遷は呂氏のこの動勢を「欲為乱」と記述して、その不当性をいうものようである。但し、ここに陳平の名が見えていないのは、呂氏にとって前述二人の兵権に関与する力の方を評価していたということであろうか。灌嬰は早くから高祖に従つて戰場を往来した者である。彼の戦歴戦功は「楚鄢滕灌列伝」に記述されるが、文帝擁立後には太尉・丞相に任ぜられた。

さて、呂氏のこのような動向に逸早く反応したのは朱虚侯劉章である。劉章は既述（十）の如く宴会の席上呂氏の一人を斬り、呂后に冷水を浴びせるような振舞をした人物である。彼の妻は呂氏の娘であつた故であろう。呂氏の陰謀を知ることが早かつた。劉章は身の危険を感じ、兄である齊の哀王に使を出した。兵を發して呂氏を誅滅されよ、自分は長安に於いて大臣と共に呼応するようにならうというのである。劉章の腹案には呂氏誅滅後に哀王を帝位に即けたいということがあつた。齊王はこの使を受けて、直ちに兵を發しようとしたが、宰相の召平は承知せず（中尉魏勃の言によれば、漢の虎符―出兵の証―が無いために反対したらしい。漢朝の制度に忠実であつたといえる。）、遂に召平を殺して出兵した（「齊悼王世家」は自殺とする）。他方に於いて、琅邪王劉沢（既

述九)を欺いてその兵を手中にした。また、諸侯王に書を送り、呂后と呂氏一族の暴虐の数々を挙げて、宗廟を安んじ、王たるべからざる者を誅するため、都に兵を進めようとすると告げたのである。

呂産等は齊王出兵の報を受けて、灌嬰を將として兵を發した。しかし、灌嬰は東に向つて滎陽(現在の鄭州市附近)に至つたが、齊兵を撃破することは呂氏を助成することになると考え、周勃等と謀つて此処に駐屯した。また、齊王及び諸侯に使者を遣わして説得し、連合して呂氏の乱を起すのを待つて誅殺の行動を起そうというのである。乱を制圧するという名分を得るためである。齊王は齊国西境に兵を引いて待機した。

呂祿・呂産等は内には周勃・劉章等の動きをおそれ、外には齊軍(原文、齊・楚兵―後文にも与齊・楚合従―)とあるが、楚出兵の記述は見えない。梁氏「史記志疑」は誤りであろうとする)をおそれ、また、灌嬰が叛くのではないかと疑い、嬰が齊軍と戦うのを待つて事を起そうなどと決心できずぐずぐずしていた。灌嬰等の動勢に関する情報がなかなか彼等の耳に入つてこないのである。すでに呂氏は孤立化の様相を呈し始めていたのである。

時に、列侯羣臣はどうしていたか。彼等の大半はこの情勢の中でいかに処すべきかの目途さえつかぬ有様であつたようである。反呂氏の中心は陳平・周勃等である。ようやく行動の時がきた。

太尉でありながら兵権を掌握できずにいた周勃は、曲周侯酈商(酈商は陳勝挙兵の時より従軍し、後に高祖に従つて功績があつた。呂后の時には病を得て、ほとんど隠居の形であつたらしい。)の子の寄(字は況)が呂祿と親しくしているのに目をつけ、陳平と謀つて、商をおびやかして寄を呂祿のもとに行かせ、欺かせたのである。

酈商脅迫の内容は明らかでない。

かくて、鄒寄は呂祿に向つて、呂氏の王たる者は三人であるが、全て大臣・諸侯の承認したものの、いま、太后崩御し、帝年少で、足下は趙王でありながら趙国に行かず、上将として兵を都に留めているため諸侯が疑つている、故に、将印を返して兵権を太尉に委ね、呂王（呂産）にも相国の印を返させて、大臣等と盟約して国へ帰へるならば、斉は兵を止め、大臣も安心し、足下も安泰でありましょう、と説いたのであった。此処、鄒寄の言はその大意を記述したが、呂祿を兵権より引き離すことが目的なのである。自己安泰の方策を聞かされた呂祿はこれに惹かれたが、なお、呂産及び一族の長老に相談している。しかし、彼等による結論は出ないままに時は推移した。

この時期、呂祿は鄒寄と共に狩猟に出かけている。呂祿のこのような間暇は鄒寄を全く信頼し切っていたことによる。恐らく狩猟の帰途なのであろう、彼は姑（おば）の呂嬃の家立ち寄った。彼女は既に触れたように呂後の妹、樊噲の妻であるが、気性も激しく、烈火の如く怒った。兵権を返して身の安泰を図ろうとすることが、いかに呂氏一族を危険な立場に追い込むかに気づかず、しかも、のんびりと狩猟に出かけたりしているのを見た時、遂に怒りが噴出したのである。もとより彼女は将印を返すことには反対する者の一人であった。彼女は云う、汝は將軍の職にありながら軍権を投げ出そうとしている。呂氏一族は今に身の置き所もなくなるだろうよ。と。狂わんばかりに怒った彼女は、手許にあった珠玉宝器の類を尽く堂下にはらまき、「いざれ他人のものとなるものを大切に守蔵して置く必要はない。」と云う。呂嬃の目には、いまや呂氏一族崩壊の姿が見えてきたのに相違ない。やがて、彼女には答によつて打ち殺されるといふ悲運が待っている。

九月庚申（原文、八月。考証に拠つて改む）、この日の事態はめまぐるしい。この朝、郎中令賈寿が使者とし

て齊より来て、呂産に向い、先に齊討伐に進発させた灌嬰が齊と共に呂氏を誅滅しようとしてと図っていると告げ、宮中に入って身を守るようにと進言した。他方、周勃もまた慌しい。彼は北軍に入ろうとしたができないため、帝の命令と詐わって入ろうとし、また、郵寄と典客（官名）の劉揭を呂禄のもとに差し向けて、

帝、太尉をして北軍を守らしめ、足下をして国（領地）に之かしめんと欲す。急ぎ將印を歸し辞去せよ。然らずんば、禍且に起らんとす。

と説かせた。呂禄はなお郵寄が自分を欺く筈がないと思ひ込んでいる。彼は遂に將印を解き、兵權を太尉に授けた。かくて、周勃は將軍として軍中に入り、

呂氏に味方する者は右袒（袒。右肩をぬぐ）せよ。劉氏に味方する者は左袒せよ。

と令する。直ちに軍中の者はみな左袒したのであった。遂に北軍を掌握したのである。

しかし、呂産が掌握する南軍がある。陳平は劉章を召して周勃を助けさせ、周勃は劉章に軍門を監督せしめた。また、平陽侯曹窋（曹參の子）を派遣して衛尉（宮門護衛）に相国呂産を入れるなど告げさせた。呂産は呂禄がすでに北軍を去っていることを知らない。彼は未央宮に入って乱を起そうと考えたが、殿門を入ることができずに徘徊していた。周勃は呂氏一族に勝てる見通しがたたず、従って呂氏誅殺についても公言できずにいる。彼は劉章に対して至急宮中に入って帝を守護するように命じた。劉章は兵卒を請い、千余人を与えられて未央宮の門を入ったが、遂に呂産を廷中に発見した。日舗（申の刻、午後四時）であった。劉章は呂産とその従者に襲いかかった。産は逃げる。突如として大風が起り、産の従者は乱れ散って戦おうとしない。劉章は呂産を追い詰め、遂に郎中府吏舎の廁の中で殺した。これが呂氏一族を誅殺する始まりとなる。

帝は謁者（接待の官）に符節を持たせて劉章をねぎらわせた。章は符節を奪い取ろうとしたが謁者は承知せず、止むを得ず共に車に乗せて長樂宮へ行き、衛尉の呂更始（呂氏一族、滕侯）を斬った。次いで引き返して北軍に入り、周勃に報告した。勃は劉章に拝礼し、且つ云う。

患ふる所は独り呂産のみ。今已に誅す。天下定まる。

と。北軍は既に掌中にあり、南軍を掌握する呂産だけが心配の種だったのである。産の誅殺によってほとんど形勢が定つたと考えたのは当然であろう。ところで、帝が劉章をねぎらつたというのは、記述の序からみると恰も呂産誅殺についてであるかのように思われるが、恐らくそうではなかつたのではあるまいか。劉章の帝の守護として任に就いたことに対するものであらうと考えられる。謁者が章に符節を与えようとしなかつたのは、呂産誅殺を知つて事態の急変に驚いたためであらう。このあたり、記述が錯雑しているようで、いささか判然としない。かくして、太尉周勃は此処に手配して、尽く呂氏一族の男女を捕え、老少となく全て斬つて捨てたのである。以上が九月庚申の日の事情である。此の日、呂産・呂更始を始め、呂氏一族の老幼男女の捕え得た者を尽く斬殺し、事態は急速に動いた。呂産誅殺以後における周勃の行動はかくの如く凄まじい。呂産誅殺以前には形勢がいかに展開するかをはかりかねて憂慮していた周勃であつたが、いまや、その反動に衝き動かされるように殺戮を重ねている。

翌辛酉の日。呂祿を捕えて斬殺し、前述の如く呂嬃を笞をもって打ち殺した。また、燕王呂通（呂後の兄の子、呂后が諸国王とした三王の一人）を誅殺し、更に、魯王偃を廢した（「漢興以來諸侯王年表」孝文元年の項に廢為侯とある。時期にずれがある。）陳平・周勃等の施策はさらに続く。

更にその翌日。帝の太傅であつた審食其を復たび左丞相とした。既述（七）の如く彼は呂后と共に項羽の軍に捕えられて辛苦した者であり、呂氏封王に高祖の遺訓を以つて反対した右丞相王陵の辞職にもなつて丞相となつた人物である。呂后の寵を侍んでとかくの悪評があつたことについては既に触れた（五）。この人物は後に淮南王長によつて、文帝三年四月にその邸で撃殺され、頭を斬り落された（十）。いま、審食其を再び左丞相としたことに、一体いかなる理由が存したのかよくわからない。彼が呂后元年に左丞相となつた時以来、その任を解かれるまで、宮廷内の諸事を専らに行い、政治上の事を取り扱つていないのである。彼をこの時期に左丞相に任じたのは、政治上何も為さない人物であるということと関わりがあるかも知れない。

これよりほゞ七日の後、済川王を梁王に移した。済川王は恵帝の子太で、呂后七年に封ぜられた。梁王呂産の誅殺にともなつて移されたのである。しかし、この太は諸大臣に恵帝の子ではないと疑われていた人物で、實にこの後、文帝が未央宮に入った日の夜、他の諸公子と共にその廷内に誅殺された。また、趙幽王の子遂を趙王とした。趙王呂禄が誅殺されたための措置である。趙幽王は既述（八）の如く呂后によつて幽閉憤死せしめられた友のことである。

これ等の施策は、實質的には陳平・周勃を中心とした諸大臣の手によつて為されたものであろう。しかし、諸侯王誅殺の件は乱を防ぐという理由が成立するにしても、その移封及び丞相任命というのは帝がこれを行ったと見られる。少帝は諸大臣の奏請のままにこれを承認許していったものであろう。

這樣に呂氏一族を誅殺し終つた段階で、劉章を齊王の許に派遣して此の事態を報告せしめた。そこで齊王は兵を収めて帰国し、灌嬰もまた駐留していた滎陽より京師に帰つた。使者の劉章は灌嬰と共に京師に帰つたのであ

ろう。王鳴盛は「十七史商榷」で、派遣された灌嬰が斉王と連合して呂氏の動向をうかがい、一方、呂産・呂祿は灌嬰の動きを用心して遂に乱を為すに至らず、この間に陳平・周勃によって呂氏は誅殺されたのであって、嬰が外部から牽制した功績は高く評価されるべきものである。もし、嬰が斉との連合軍で京師に戻り、呂氏を討滅しようとしたならば必ずや喋血の事態を招いたであろう、と述べる。従って、灌嬰の滎陽駐屯にその明智を見るというのである。

さて、諸大臣は相談する。少帝を始めとして恵帝の子とされる梁王（太）、淮陽王（武）・常山王（朝）は、いずれも実は呂氏の者であり、いま、呂氏を誅滅したが、呂後の立てた彼等をそのままにしておけば、成長した時に吾々は誅殺されるかも知れない、むしろ、諸王の中で最も賢明な者を帝に立てたほうがよいのである。こうして、彼等の口に上ったのは斉王襄（高祖の長子、悼恵王劉肥の子、劉章の兄）であつたが、斉王の母家の驪鈞は悪虐暴戾、虎が冠をつけているような者で、呂氏の如くなる恐れがあるとされた。驪鈞が悪人であるという説明は見当らない。初め斉王が出兵する時、琅邪王劉沢を欺いて捕え、その軍を掌中にしたことがあるが、或いはこの謀略の主が驪鈞であつたのであろうか。とすれば、この悪評は劉沢のもたらしたものとならう。次いで、淮南王長も挙げられたが、年少であり、且つ母家が悪いとされた。かくて代王恆（文帝）が挙げられ、高祖の子として生存する最年長であり、人と為りは仁孝寛厚、母家も謹良で、年長を立てるのは順序でもあり、仁孝を以つて天下に聞こえているのが何よりも宜しいと相談はまとまつた。使者は代王のもとに二度往復して懇請し、ようやく六乗の伝車（馭伝の車）で京師に入った。この時の衆議に与つた諸大臣及び列侯は、陳平・周勃・灌嬰（大將軍、原文は陳武とあるが誤記であろう）・張蒼（御史大夫）・劉鄩客（宗正、皇族の身分を掌管する）・劉章・



劉興居（東牟侯、劉章の弟）・劉揭・陰安侯（高祖の兄伯の妻）・頃王后（高祖の兄仲の妻）・劉沢等を始めとし、二千石の吏に及ぶ者達であったと代王即位の請願に述べられている。

代王は即位を承知した。文帝となる。しかし、即位を決意して京師に入るまでの様子を「孝文本紀」には次の如く述べ、決して単純なものではなかったことがわかる。迎えの使者が来た時、代王はこれを群臣に下問した。郎中令張武等は、陳平等は詐謀の士であるから信用し難い、暫く事態の推移を見るべきであろうという。また、中尉宋昌は、既に劉氏が天下を統一して盤石であり、徳恵を施して民心も動揺し難く、呂氏を滅すにも一呼して兵はみな左袒して劉氏に味方したことなどを考えると、これは天授であつて人力とは思えないから、入京して即位すべきであると主張した。代王は母の薄太后に告げて相談したが、なかなか決定できない。さらに亀甲をもつて卜すると、天王（皇帝）となるとでた。かくして、決断はしたが、なお、太后の弟の薄昭を周勃のもとに遣わして詳細を聞かせ、疑わしい点のないことを確認して後に出発したのであつた。また、長安近くの高陵まで来ると休止し、宋昌を先駆せしめて、長安に異変が起つていないかを確認せしめている。実に代王の行動は慎重であつた。東牟侯興居は太僕の汝陰侯滕嬰と共に宮中に入り、少帝に対して「足下は劉氏にあらず、まさに立つべからず。」と言ひ、小駕に乗せて少府（天子のご料庫）に案内した。手の裏を反すような侍臣の態度に、幼帝はいかなる思ひをいだいたであらうか。不安の心裡について記すところはない。かくして、その夕方、代王は宮中に入った。この夜、最後の殺戮が役人達の手によつて行われた。少帝・梁王・淮陽王・常山王等がその邸内で誅殺されたのである。

「惠景間侯者年表」に拠れば、呂后称制八年間の封侯の数は三十一（梁氏「史記志疑」は呂祿・蕭何夫人・蕭延・

呂嬰・劉信の母の封侯が脱けているので、三十六であるとすると、を記録するが、呂氏の族十四人が誅されている。呂氏一族は呂后崩御よりおよそ二ヶ月でその全てが消え去った。

司馬遷は云う。呂后の称制は、遂にその房戸宮室に限られ、人民にはほとんどその累を及ぼさなかつた。従つて、天下は平安であり、刑罰も行われることが罕で、罪人も少なく、人々は農事に励み、衣食も豊かであつたと。これが呂后の世界であつた。

第三章 「世家」について

## 第一節 「世家」考——陳平・蕭何・曹參・張良等——

「世家」という形式が、「史記」全体の構成の中でいかなる意味をもつて著述されたのかを、司馬遷は「太史公自序」の中で次の如く説明する。

二十八宿環北辰、三十輻共一轂、運行無窮。輔拂股肱之臣配焉。忠信行道、以奉主上。作三十世家。

「世家」なる語については既に諸家に説かれるところがあるが、「孟子・滕文公」に見える語によつて、世祿の家と考え<sup>(1)</sup>、また、「世家」を以つて史の目として樹てたのは司馬遷に始まるとする滝川亀太郎氏「史記会注考証」の所説がある<sup>(2)</sup>。

衆星は北辰を中心としてめぐり、三十輻は一轂を中心として、運行窮りないという表現は君臣関係を美事に云い表わしていると云える。諸王侯の位置は正にこのような配置として把えるにふさわしい。ここに取り上げられる諸国は周代以降の世家である。但し、三十世家の第十七には「孔子世家」、第十八「陳涉世家」が区切るようにして置かれている。すなわち「孔子世家」より前に記述される諸王侯諸国の歴史は、その消長を含みつつ秦の統一を以つて終焉するのである。諸侯国の歴史はそれぞれ虚実を含むものであるが、司馬遷はその歴史の古さを

云い、その中心との関係を説く。

以上の如くに、孔子・陳渉を除く「世家」群は、衆星の北辰をめぐり、三十輻の一轂を共にする輔弼の臣の位置にあることは間違いない。従つて、司馬遷が「世家」を樹てる理由を説明した此の一文は、その基調を為すものであつた。

しかしながら、孔子・陳渉二「世家」以降に記述されるものは、多少の変質を余儀されている。それは「世家」一―十六に於けるような所謂封建諸侯という形態が、既に秦によつて郡県制度が採用され、漢代に至つては一部に封建諸侯の出現を見るものの、やがては全面的な郡県制度に移行し、武帝の時代には全く安定した政治形態を保有するに至つた点が作用していると見られる。その意味で、司馬遷は「世家」を第十六「田敬仲完世家」でとどめるべきであつたかも知れない。しかも、こうした封建諸侯の歴史と云うべきものは、秦以降に於いてその姿をほとんど見せていないことも、また再びその姿を見せることもないであろうということも司馬遷は熟知していた。

「秦始皇本紀」に於いて丞相王綰等の諸皇子の策と、廷尉李斯的周朝子弟封建が後世に於いて仇讎の如く相攻伐するに至つた歴史に鑑み、「置諸侯不便」とする論議は、始皇帝の「又復立国、是樹兵也。而求其寧息、豈不難哉。廷尉議是。」という語によつて締めくくられ、三十六郡の設置を記述している。封建諸侯の歴史はまたこのような弊害・危険を含むものであつた。そして、「世家」はいはは滅亡の歴史を記述することでもあつた。これ等の存在は衆星の北辰をめぐり、三十輻一轂を共にする基調から程遠いものになる歴史でもあつたのである。しかし、司馬遷はこの理想とでもいうべき基調、君臣関係の美事な図式を虚空に描いていたものようである。

また、「留侯世家」には漢の三年に項羽が急に滎陽に高祖を困んだ時、楚の勢を弱めるための策を酈食其と謀つた話が記述されている。酈食其は六国の後裔を立てて諸侯とすれば、君民共に陛下の恩徳を慕つて犬馬の勞を尽すようになり、やがては楚も来朝することになると云う。しかし、張良はこの策の不可なる理由を八項目挙げて反対した。殊に最後の項は「且天下游士、離其親戚、弃墳墓、去故旧、從陛下游者、徒欲日夜望咫尺之地。今復六国、立韓・魏・燕・趙・齊・楚之後、天下游士、各歸事其主、從其親戚、反其故旧墳墓、陛下与誰取天下乎。」というものであった。仮りにこの策を行うにしても強盛な項羽に屈伏してしまうという時期の不適当を問題にするが、高祖に従っている者達は実に咫尺の地を得んことをひたすら日夜望んでいるからである、と適確に把握している点は重要である。高祖はその不利なる点を理解し、「豎儒幾敗而公事。」と罵り、直ちに彫りかけの六国の印を削り取らせたという。

従つて封侯のことは、項羽が敗死して後ほどなく諸將の気になる処となった。「留侯世家」には高祖が雒陽南宮の復道より望見したところ、諸將が何事か話し合っており、留侯に問うと謀叛を図っているであると応答されて困惑・憂慮したことが記述されている。既に二十余人の封侯を決定していたが、その他についてはまだ決定できずにいたからである。先の咫尺の地を得んと望んで奮闘してきた者達に報いるには、この方法しかないのである。こうして封侯は実行された。

しからば、先の六国封建に反対し、諸侯封侯を推しすすめた留侯張良自身についてはどうであったか。彼は斉三万戸の地を扱ぶよう高祖に云われて辞退している。このあたり、封建にひそむ諸々の不安な要素を考慮に入れていたというように見られよう<sup>③</sup>。また、張良がこの三万戸を辞退したのは、単なる謙遜ではなく、隠者への願

望がこれ等人事・榮達を空しく思わせていたのである。うという理解もある<sup>(4)</sup>。

ところで高祖は功臣の封侯を行う一方に於いて、「非劉氏而王者、若無功上所不置而侯者、天下共誅之。」という遺訓を残したという<sup>(5)</sup>。司馬遷は「漢興以来諸侯年表」に於いて、周の衰徳と共に形勢の薄弱であった点を挙げ、漢代に至っては高祖の子弟、同姓で王たる者一（長沙王）、功臣で侯となった者百有余人と述べる。更に、漢室定まって百年の間に、漢室の郡は八、九十に及び、宗室の本幹を強くし諸侯の勢を弱めるに至ったと述べ、「形勢雖彊、要之以仁義為本。」の語を以つて結んでいる。司馬遷は漢初に於いて骨肉・同姓が少なく、先の如く封侯の賞を与えなければならなかった事情を洞察しており、それもまた忽ちのうちに誅殺等が行われて、徐々に同姓を以つて形勢を整え、遂に百年の間に根幹を強固にしたことを備さしているのである。

こうした歴史の中で「世家」として挙げられるべき者は、彼の短世であった秦代に於いては見い出すことは当然出来得なかつたであろう。そして漢代に於いては、外戚を尊んでこれを挙げ、漢室一族の侯王に封ぜられた者を挙げ、漢室草創期の功臣を挙げる。功臣達は勿論漢室と同姓ではない。ここに挙げられた者は蕭何を筆頭に曹參・張良・陳平・周勃の五人である。これ等五人こそ同姓にあらざして漢代に於ける衆星北辰をめぐるといふ基調に合致する者達であった。この五人の功績に匹敵し得る者達は実に誅殺されたのである。その筆頭に挙げられるべきは淮陰侯韓信であり、そして梁王彭越・淮南王黥布等が相い次いで謀叛し誅殺された。韓王信・盧縮は疑われて匈奴に逃亡した。このように封侯の賞を受けた功臣達の中で、所謂大なる者は高祖の崩御する十二年頃までに姿を消したと謂つてよい。これは漢室を強固にしてゆく第一段階であった。以後、黽錯・主父偃等の策を取り入れつつ諸侯を削弱し、支配力を固めていったのである<sup>(6)</sup>。司馬遷はこうした体制の中から世家の歴史を見て

いる。

誅滅された者はその戦闘技術に於いては高祖の上に出る者達であつた。従つて彼等の實力を以つてすれば、なお成立間も無い漢室を覆滅して、自ら天下の宗主たらんと望みを抱いたとしても不思議ではない。高祖と対陣した黥布は「欲為帝耳」と云つたとある<sup>7)</sup>。恐らくこのような危惧を早くから抱いていたのは、高祖よりも呂后であつたろうと思われる。淮陰侯韓信を誅殺すべく策を樹て、実行せしめたのは呂后と相国蕭何である。高祖は韓信の死を聞いて喜び且つ憐んだというから、なお何処かに余裕を思わせるものがある。もつとも、呂后の場合は襲われそうになつたという切迫した事情の存在したこともあろう<sup>8)</sup>。彭越の場合は実に誅殺の感がある。彭越は謀叛を疑われ、梁王より庶人におとされて且つ蜀に遷される途中、呂后の口舌を信じて雒陽に戻つた。呂后は「彭王壯士。今徒之蜀、此自遺患。不如遂誅之。妾謹与俱来<sup>9)</sup>。」と高祖に述べる一方で、人を使つてまた彭越は謀叛を企図していると訴えさせている。こうした有力者を消去しながらも、なお呂后がいかに不安を抱き続けていたかを示す記述が「高祖本紀」に見える。高祖が長樂宮に崩じた後、四日を経てなお喪を發せず、呂后は審食其に謀つて、「諸将与帝為編戶民。今北面為臣。此常怏怏。今乃事少主。非尺族是、天下不安。」と語つたと記載されている。この時期、このような危惧を抱き続けていた様子を示している。

かくして功臣でありながら謀叛・誅殺の路をたどつた者は、「世家」の基調から外れるとはいへ、その功績の故に漢室の歴史から抹殺することは出来ず、彼等を司馬遷は「列伝」中に記載する。「太史公自序」に於ける立伝の理由は、その功績をのみ挙げる。

「世家」に名を列ねる蕭何・曹參・張良・陳平・周勃等は、張良を除いていずれも呂后が病床の高祖に向つて



誰を相国に任命すべきかを訊ねた際に、託すべき人物として高祖の口に上った者達であった<sup>40</sup>。留侯張良の名が上らなかつた理由は不明である。張良は生來多病で道引して穀類を避け、且つ一年以上も門を閉じて籠っていたというから、蕭何を相国に任じている以上、張良の性向を知って強いて求めようとしなかつたのかも知れない。或いは穿鑿すれば、戚夫人の子趙王如意を太子に立てんとした高祖をしてこれを断念せしめる策<sup>41</sup>を設けたのは張良であつたから、この事に関して含むところがあつたのか。この理由について記述するところは見当らない。ここに名の挙げられた者に王陵がいる。彼の事跡で詳細なのは「陳丞相世家」である。沛の豪族であるが、高祖が微賤の頃は王陵に兄事したこともあつたという。但し、高祖に従うのが最も遅かつた。王陵は惠帝の時右丞相であつたが、惠帝崩御後に呂后が呂氏一族を王に樹てんとしたことに對して、先述の高祖の遺訓を以つて反對し、ために閑職に追われた。怒つた王陵は病と称して門を閉じ、遂に朝請すらしなかつたと記述されている。高祖に「少戇」と称された如く生きた人物であり、司馬遷好みの人物のように見えるが、どうやら「世家」及び「伝」に立てる程もなかつたのであろう。

さて、「世家」について更に附言せざるを得ないのは「孔子世家」と「陳涉世家」であろう。この二者が諸侯国と漢代の「世家」との間に置かれて区切るような位置にある点については先に触れた。「孔子世家」は衆星北辰をめぐる基調とは勿論合致しない。しかし、説く処の精神は合致する。しかも、孔安国に至る家系はその学芸と共に伝えられて、その歴史は実に「世家」に挙げられる諸侯国に比して遜色はない。司馬遷はこの学芸の持つ生命に驚嘆した。「儒林列伝」にはこの学派の苦難の歴史が記述されている。そして、今や「卓然罷黜百家、表章六經<sup>42</sup>。」と云われる時代を迎えたのである。司馬遷は「太史公曰」に於いて「天下君主、至于賢人、衆矣。

当時則策、没則已焉。孔子布衣、伝十余世、学者宗之、自天子王侯、中国言六芸者、折中於夫子。可謂至聖矣。」と述べ、「太史公自序」の「孔子世家」の著述の意には天下の儀法を制し、六芸の統紀を後世に垂れた<sup>14</sup>と述べる。まして、司馬遷は父談の言を踏襲して周公・孔子の後を継がんと考えた者である。この学芸の伝統からいえば「本紀」に匹敵するものであったかも知れない。しかも「世家」中に位置させ、「儒林列伝」に於ける漢代のこの学派の活躍を描くに至る橋渡しの存在ともなっている点に注目しておきたい。

「陳涉世家」が漢代「世家」への連続の線上にあることは了解できるであろう。「世家」の時代的配置はこれより漢代に入るのである。且つ、漢朝成立の契機を作ったのは陳涉であった。「太史公自序」の著述の意には、秦を滅す天下の大事は陳涉の起兵に端を發したものであると記する<sup>14</sup>。高祖がいかに陳涉を徳としたかが「陳涉世家」に「高祖時、為陳涉置守家三十家賜。至今血食。」と見えることでもわかる<sup>15</sup>。こうした司馬遷の時代に至るも存続する祭祀は、まさに「孔子世家」に漢に至るまで二百余年にわたって存続した孔子塚の祭祀<sup>16</sup>と同様の意味をもつものといえるであろう。そして、陳涉発難の功績は漢朝の成立と存続に姿を変えてあるといえるのではあるまいか。して見ると、陳涉もまた「世家」に列せられる相応しいものがあると思われることができよう。

以上「世家」の大略について見てきた。

## 二

陳丞相平を「世家」に著述した理由を司馬遷は「太史公自序」に於いて次の如く述べる。

六奇既用、諸侯賓從於漢。呂史之事、平為本謀。終安宗廟定社稷。

他の著述の意を述べるものに比較していささか漠然とした感があるように思われるが、他方「世家」の記述を見ると、要約すれば陳平の事蹟はこれに尽きると見ることもできるようである。

衆星北辰をめぐるといふ基調よりして、「世家」に挙げられる蕭何・曹參・張良・陳平・周勃の五人は、漢朝草創の大功臣として等しく終りを全うした者達であった。「世家」に於ける序列はどうやら卒年の順序でもあるようである<sup>17)</sup>。高祖崩御直前の呂后との会話で、相国とすべき人物の名を挙げた時、張良を除いて四人の名が有ったことは先に触れた。ところで、同じく「高祖本紀」には、五年に洛陽南宮で酒宴を催し、高祖自身から「吾所以有天下者何」の問いを發し、王陵等の答えに対して更に解説する高祖の語がある。高祖が天下を取った所以として三人の人傑を用いたからであると云い、こうして挙げられた者は張良・蕭何・韓信であった。高祖に従った者の中で、この三人の功業は壮大である。これに比較して、ここに挙げられなかった曹參は司馬遷が「太史公曰」に指摘するように、攻城野戦の功があったのは淮陰侯韓信と共に在ったからで、韓信滅亡後に曹參はその名声をほしいままにしたとするのは適確であると云わねばならない<sup>18)</sup>。従って先の酒宴に於いては韓信の名が挙げられて、曹參の名が挙げられなかったのは当然であろう。同じく此処に挙げられなかった陳平について、「太史公曰」には楚と魏の二国の間を徘徊逡巡し、高祖の下に至ってより常に奇計を出して紛糾の難を解き国家の憂患を救ったとあり<sup>19)</sup>、更に呂后以後の宗廟安定の功を挙げている。どうやら陳平の功績は呂后以後にむしろ重点があるのであって、計謀の意味では張良に一步ゆずるものであったように見られる。しかも、陳平の計謀の場合、どこかに隱微な感がつきまとうように思われる。更に周勃に於いては、高祖に従って相国一人、丞相二人、將軍・二千

石の者各々三人、別に軍を破ること二、城を下すこと三、郡五と県七十九を平定し、丞相・太将を各々一人捕えたと記述されるが、「太史公曰」には呂氏一族が乱を謀った時、国家の難を救いこれを正に復したと述べ、「太史公自序」に於ける著述の意を述べる部分ではもっぱら呂氏に対応して漢室安定に力を尽した点を挙げている<sup>20</sup>。周勃の功績の重点は呂氏一族に関しての方が大きく、戦功に於いては淮陰侯韓信に比すれば一步をゆずるものに見られるようである。

さて、周勃を除いて他の四人には共通の思想が根底にあるように思われる。所謂道家思想であるが、このことは彼等の処世の態度にも見られるところである。蕭何は元來秦の吏として極めて有能であったとみえ、中央に召されたというが固く辞退したという。この時代能吏であることは法家的思想の持主であったと思われるが、高祖が亭長となるとこれを補佐し、更に興起するに及んでは常に庶事を監督したといわれるから、高祖に対する何等かの魅力を見出し出していたかも知れないという点も含めて、秦の酷法に対する疑問を抱いていたかも知れない。漢の三年、高祖は項羽と京・索の間に戦いを展開していた中で、しばしば蕭何の労をねぎらう使者を派遣した。鮑生は蕭何にこのように使者をしばしば送って慰勞するのは疑っているからで、子孫昆弟の兵事に耐え得る者を軍に派遣して疑いを解くよう進言し、蕭何はこれに従った。これはいわば保身の術といえるであろう。このような保身の術は漢十一年陳豨討伐に出陣していた高祖は、留守中における淮陰侯韓信の誅殺を嘉して、蕭何には増封と護衛がつけられたのを、これは疑われているからで増封を辞退し私財も軍に差し出して疑いを解けという召平の進言にも見える。また、漢の十二年黥布討伐に出撃して高祖は関中を留守にした。この時もまた高祖はしばしば使者を派遣して蕭何が何をしているかを問わせた。客は蕭何にその疑いを解く方法<sup>21</sup>を説き、蕭何は従って

高祖の安心を得ている。これらは一面に於いて高祖の猜疑心の強さを物語るものである。この保身の術とも云べきものは呂後の時代、殊に陳平に於いて甚だしく見えるところのものである。秦の酷法・酷治より解放された人心の趨くところを察して、咸陽に攻め入った高祖は「法三章耳」と告諭したことは有名である。こうした人民の希いに最も有用であったのが道家の現実にも則した思想であったと見られる。「及漢興、依日月之末光、何謹守管籥。因民之疾秦法、順流与之更始<sup>33</sup>。」と記述されるところよりすれば、曹參などに見られる道家的傾向をもつものと云えるであろう。蕭何が道家思想の信奉者であったとする記述は見当らない。しかし、蕭何の晩年、恵帝の蕭何の死後誰を相国にしようかという質問に答えて曹參を推しているのは、曹參が功臣であるからの理由のみであったとは考えられない。蕭何の死は恵帝二年のことであり、曹參が斉の丞相となつて黄・老の道を政治上に反映して効果を上げてから九年を経ているとされるから、蕭何はこれを熟知して認めたと見られるであろう。して見ると、蕭何には先の保身を通し、曹參の治績を通し、自ら取つた政治の要点を通して、道家的思想が彼の中に醸成されていったと見ることができよう。

曹參は沛の獄掾であつた。蕭何が主吏であり、沛に於いては二人共に主要な官吏であつたという。蕭何と同様に法家的思想を持っていたものであろう。曹參がはつきりと道家的思想に変化したのは、恐らく斉の丞相に任命された時をもつてである。それまで攻城野戦に明け暮れた曹參は、斉の丞相に任ぜられた時に困惑しきつた。斉の長老諸生、儒者など百を以つて数えるほどの人々に人民安定の道聞き、なお、いかなる決定も為し得なかつたというから曹參の困惑たるや知るべしである。かくて蓋公の「治道貴清静、而民自定。」という意見によつて正堂を蓋公に任せるに至る。このあたり、曹參にはこの思想への理解が下地としてあつたと思えない。彼は

これによつて賢相と称されたという。恵帝二年に蕭何の後を継いで相国となつてからの曹參の在りようは徹底したものがあつた。彼は日夜醇酒を飲んで、何か意見を述べようとして訪ねて来る者があれば、これと共に醇酒を酌んで結局は何事も云わせずに帰へしたという。美事を韜晦振りである。これはまた美事な保身の術ともなつていふことに注意したい。それにもまして、齊に学び、齊に実践した無為清静の治政が、いかに当時の人民の希うところと合致していたかである。このことは余りにも仕事をしない曹參の態度に、自分が年少であるため侮られたかと疑つた恵帝と曹參との会話の中にもうかがわれる。恵帝を納得せしめたこの治政は、曹參をして何一つとして改める必要のないものであつたことを見ると、蕭何の治政と曹參の治政とがいかに一致したものであつたかがわかる。司馬遷は「太史公曰」に於いて「參為漢相国清静、極言合道。然百姓離秦之酷、後參与休息無為。故天下俱称其美矣。」と述べる。且つ、人民が歌つたというものを「蕭何為法、顛若画一。曹參代之、守而勿失。載其清静、民以寧一。」と記載している。

張良は韓の貴族の出身である。秦が韓を滅した時期、張良の家には三百人からの僮僕が居たという。彼は全ての家財を投げうつて人を求め、鉄椎を投じて始皇帝を狙つたが失敗して逃亡を続け、後に高祖に従つて遂に復讐を遂げた。逃亡生活の頃、張良は一老人より「太公兵法」の一書を授けられたと伝へられる。このことは司馬遷も全面的に信用しているようには見えない。<sup>24</sup>「夫運籌策帷帳之中、決勝千里外、吾不如子房<sup>25</sup>。」と高祖に称せられた張良である。彼は後に穀城山下に黄石を得て、己れの智謀のよつてきたるところを明らかにしようとし、老人授書の一件を作爲したのかも知れない。とすれば、韜晦の法も此処に極まるの感があるが、それは取りもなおさず保身の術でもある。張良は生來多病であつたという。「道引不食穀」「学辟穀道引輕身」という記述がある。

前者は多病による養生として、後者は栄位盛名を得て今や人間社会のことを捨てて赤松子に従って遊びたいとしてある。こうして張良は全く世間から姿を消して呂后二年に卒した。栄達の末の禍を避ける道家的な処世として、仙人を慕うなどは保身のために利用されたのではないかとする理解がある<sup>29)</sup>。して見れば、実に張良は道家的思想の実践者ということになるであろう。

陳平は家は貧しかったが読書を好んだという。読書の内容は「太史公曰、陳丞相平少時、本好黄帝・老子之術。」とあることでわかる。また、陳平は自ら反省して「我多陰謀。是道家之所禁。」とも述べている。しかしながら、処世・保身というものに於いては、陳平が最も巧みであったと云うべきであろうか。彼の身辺には隱微な、そして卑屈の影がつきまとっているようである。即ち、曹參や張良の処世・保身の在りように見える悠悠としたものが無いのである。例えば、先に触れたように張良には鄙食其の六国封建に対する堂々とした論議があるが、陳平にはそのような国家の大計に関わるといったものが見当らない。また、高祖の四年、斉を平定した韓信が高祖に使者を送り、斉は偽詐多変の国であるから、これを鎮定しておくためには自分を仮の王にして欲しいという申し入れをした際、嚇怒した高祖の足を踏んで認めるようにしたのは張良と陳平であったというが、これも張良の認めるべしという語はあるが陳平の語は残されていない<sup>30)</sup>。このことをみても、陳平は張良に従う形で前面に出ることはなかったように見える。

陳平の処世・保身の用心深さは次のような記載の中にも見える。項羽の下で殷王をくだして帰還した処、項王は都尉に任命し、且つ金二十鎰を賜った。処が、ほどなく漢王が殷をくだしたため、怒った項王はさきに殷を平定した将吏を誅しようとしたという。陳平は金と印綬を封じ、使者をして項王に返させたとある。これと同様の

話が高祖の部下になった頃のこととして記述されている。陳平が都尉に任命されたため、周勃・灌嬰等の讒言があり、高祖に詰問された陳平は「臣裸身来、不受金無以為資。誠臣計画有可采者、願（原文は願、漢書に従う）大王用之。使無可用者、金具在、請封輸官、得請骸骨。」と述べる。金が無いから受けたと云いつつ、その金はそっくりあるから返すという。この二つの話は陳平の性格をも示しているように思われる。

陳平の計謀について、最も良く知られているものに項羽と范増とを離間させた計がある。後に高祖が「項羽有一范増、而不能用。」と項羽の諸將の中で唯一挙げられたのは范増であった。この外に鐘離昧等もまた陳平の計謀によって項羽に疑われた。高祖は黄金四万斤を与えて陳平の使用にまかせたというが、どうにも陰險なやりくちに見える。また、楚王韓信の謀叛が報じられた時、高祖に雲夢に遊ぶといつわって諸侯を会同させ韓信を捕えるよう計画せしめたのも陳平である。陳平は六度奇計を出し、そのたびごとに増封され、その奇計のあるものは秘密にされて、世に伝えられることはなかったと司馬遷は記述している。

高祖は陳平の功を賞して戸牖侯に封じた。その折に陳平は辞退して自分の功績ではなく、「非魏無知、臣安得進。」と述べて、魏無知の推挙の賜であるという。かくて魏無知も賞せられたのであるが、後述に戸牖より曲逆侯となっているから、一応の辞退はあっても結局これを受けたのであろう。この一事も張良が自分の功績は三万戸には当らずとして、留侯となった程の高潔さといったものが見えない。

高祖崩御の近くより呂氏滅亡の間に於いて、陳平の処世・保身の用心深さは実に美事という外はない。高祖崩御の直前、呂後の妹である呂嬃の夫樊噲について讒言するものがあつたため、高祖は「噲見吾病、乃冀我死也。」と怒った。時に樊噲は盧縮を伐つべく相国として出発していた。陳平の謀を用いて周勃を以つて将とし、樊噲を斬



れという詔を受け、伝車を馳けさせての途中で二人は相談する。「樊噲、帝之故人也。功多、且又乃呂后弟呂嬰之夫。有親且貴。帝以忿怒欲斬之。則恐後悔。寧囚而致上。上自誅之。」と。ここに云う陳平の謀というものの内容が詔を受けるまでのことを指すとすれば謀と称される程のものではない。ともあれ、陳平の推量は緻密である。樊噲を檻車に乗せて京師に向う途中で高祖崩御を聞いた陳平は、直ちに呂后と呂嬰の讒怒を恐れて京師に馳せ向った。又、使者に行き逢うと灌嬰と共に祭陽に駐屯せよとの詔であった。しかし、陳平は急いで宮中に馳せ入り、哭泣且つ報告して呂后の同情を得ている。それでも陳平は讒怒を恐れ、強いて宿衛を請うた。かくして、呂后によって郎中令に任せられ、「博教孝惠。」の命を受ける<sup>33</sup>。「是後呂嬰讒乃不得行。」と司馬遷は記述している。陳平自身陰謀の士であるだけに呂后・呂嬰等の心理がよく推察し得たのであろう。彼は遂にこの危機を脱することができたのである。

これより後、恵帝の崩御に至る約六年間というものは、陳平の生涯にとつて最も平穏な歳月であったのである。司馬遷は曹相国の死後に王陵が右丞相、陳平が左丞相になったと記述するのみである。

恵帝崩御後、呂后が呂氏一族を王にしようとして希ったことから、陳平は再び独得の処世と保身をもって生きることなる。「呂后本紀」には留侯張良の子辟疆が恵帝崩御に涙も流さずにいる呂后の意に阿ねて、陳平<sup>34</sup>に「帝母壯子。太后畏君等。君今請拜呂台・呂産・呂禄為将、将兵居北軍。及諸呂皆入宮、居中用事。如此則太后心安。君等幸得脱禍矣。」と云う。この策を以って呂后に申し出ると、喜び且つ始めて哭した。かくして、遂に呂后は制を称し、呂氏一族の者を王にしようとして謀る。右丞相の王陵は高祖の遺訓<sup>35</sup>を以って反対し、陳平・周勃等は賛成する<sup>36</sup>。王陵に責められた陳平・周勃は、いま朝廷において争うことは君に及ばないが、社稷を安全にし

劉氏の後を定めることでは、君は私に及ばないと答えている。これに対して王陵は何も云わなかったと記述される。或いは王陵にはかねて見る陳平の陰謀を以って悟るところがあつたのであろうか。やがて徐々に実権を奪われた王陵は病と称し辞職して引き籠つた。これより陳平は右丞相に任ずるが、何もしなかつた。呂后の死に至るほぼ八年間、ただ汲汲として韜晦と保身に精力を注いだかに見える。且つ、呂嬰は夫の樊噲を捕えたことを根に持ち、しばしば讒言して陳平は仕事をせず酒を飲み婦女にたわむれていると告げる。陳平はこの讒言を知つていよいよ遊んだという。果して呂后はひそかに喜び、陳平に対して「鄙語曰、兇婦人口、不可用。顧君与我何如耳。無畏呂嬰之讒也。」と云っている。陳平に何事をも為す意志もなく、いわば無能といえる有様に呂后は安心したのである。後文に呂氏一族を王とするにも陳平はいつわつてこれをゆるし、呂后の崩ずるや周勃と謀つて呂氏を誅滅し、文帝を立てたのも「陳平本謀也。」と記述される。これは恐るべき計謀といわなければならぬ。呂后の喜びや陳平への言葉は美事にその術中にはまつたということになる。飲酒淫楽も単なる讒謗を避けるのみではなく、この最終目的のための狂態であつたことになるが、同じ飲酒無為に日を送つた曹參の場合は、人民の希望と合致した治政の要諦が根底にあるのとは大いに異なるように見られる。曹參の場合は「垂拱」と司馬遷に記述される<sup>37)</sup>といえ恵帝が存し、陳平の場合は呂后專政の下にあるという違いはあるが、それにしても卑屈の影は覆い難い。実に恐れるのみといった感が強い。

ところで「鄒生陸賈列伝」に、陸賈は恵帝の時代に呂后の勢も大きく、到底正論も通らないと見きりをつけて病を理由に隠退したという。陸賈は高祖に時折詩・書を説くなど、元來儒家思想を抱く者である。呂后專政の時代、幼帝を劫かし劉氏を危うくするのを、右丞相陳平は心配しつつもこれについて争う力もなく、禍いが身に及

ぶのを忘れていつも家に閉じこもって考えにふけていた。これはその計謀をめぐらしていたのだという<sup>8)</sup>。しかし、呂氏を制する何等の計謀も浮ばなかったようである。陳平を訪れた陸賈は数々の計を教え、陳平はこれに従って実行したと記述される。して見ると、実際に呂氏に対する計謀を案出したのは陸賈であって、「陳平本謀」と述べる司馬遷の記述はどうやら割引いて考える必要がある。「陳丞相世家」には陸賈の策について触れるところはない。

陳平は呂氏一族を誅して文帝を迎えた時、実行者の周勃の功績が上であると認め、病と称して辞職した。文帝もまたその旨を善しとして周勃を右丞相、陳平を左丞相に任じた。陳平の死は文帝二年のことである。

以上見てきたように陳平の生涯のうち、前半は計謀に明け暮れ、功成った後の彼は保身に汲汲として日々を送ったかに見えるが、文帝下間に於いて丞相の役割を「宰相者、上佐天子、理陰陽、順四時、下育万物之宜、外鎮撫四夷諸侯、内親附百姓、使卿大夫各得任其職焉。」と述べる。このことは、曹參が斉国を去る時、後任の相に「慎勿擾也」と云い、相国となつてからは「木訥於文辭、重厚長者、即召除為丞相史。吏之言文刻深、欲務声名者、輒斥去之、日夜飲醇酒。」という在り様と通じている。陳平は死の前年に至つて始めてその道家的治政を述べることができたのである。彼の計謀は道家の禁ずるところとする反省が、いかに苦悩を秘めたものであつたかがわかる。

註

- (1) 「孟子」滕文公章句下。曰、(陳)仲子、齊之世家也。兄戴蓋祿萬鍾、以兄之祿為不義之祿、而不食也。とある。「索隱」「正義」「考証」及び、B・ワトソン氏「司馬遷」(今鷹真氏訳)等、「孟子」の意に拠る。
- (2) 趙翼「廿二史劄記」各史例目異同の項には「史記衛世家贊、余說世家言云云、是古來本有世家一體、選用之以記王侯諸國。」と述べる。「史記會注考証」史記体制の項に「孟子云、仲子、齊之世家也、猶言世祿之家。以為史目、与本紀・列伝並称、蓋自史公創。」と述べ、また、「吳太伯世家」の「考証」に於いて、「不知世家言三字、又見管蔡陳杞各世家、史公自称其書也。」と述べる。盧南喬氏「論司馬遷及其歷史編纂學——紀念司馬遷誕生二千一百周年——」(『文史哲』叢刊第三輯「司馬遷与史記」及び作家与作品叢書「司馬遷」所収)には諸例を挙げて滝川氏の「史公自称其書也」の見解に賛同している(但し、盧南喬氏は滝川氏の「史公自称其書也」の記述を史記体制の条であると註しているが、この記述は指す処には見えず、「吳太伯世家」冒頭の「考証」中に見えるから思い違いされたものであろう)。しかし、滝川氏、盧南喬氏は「世家言」の三字に拘し、「有世家言」「有本紀言」を以って考え、趙氏の指摘する「衛康叔世家」贊の「余說世家言」を以って古來世家の体ありとする見解の解決とはならず、なお問題を残しているといえよう。
- (3) 宮崎市定著「史記を語る」(111P~118P、岩波新書)
- (4) 野口定男著「行動者・張良」(「史記を読む」所収。研文出版)
- (5) 「漢興以來諸侯王年表」高祖末年として此の語がある。また、「呂后本紀」に呂后が呂氏を王に立てんとした時、王陵の語に、「高帝刑白馬盟曰、非劉氏而王、天下共擊之。今王呂氏、非約也。」と強硬に反対したと述べられている。
- (6) 「漢興以來諸侯王年表」漢定百年之間、親屬益疎。諸侯或驕奢、怙邪臣計謀為淫亂。大者叛逆、小者不軌干法、以危其命、殞身亡國。天子親於上古、然後加惠、使諸侯得推恩分子弟國邑。故齊分為七、趙分為六、梁分為五、淮南分三。云々。とある。このような記述によれば、司馬遷が「世家」とすべき者達がもはや存在し得ないであろうと予測できたとと思われる。
- (7) 「黥布列伝」上廼壁庸城、望布軍。置陳如項籍軍。上惡之。与布相望見、遥謂布曰、何苦而反。布曰、欲為帝耳。上怒罵之。とある。「考証」中井積徳曰、布之反、苟自救死也已、其言欲為帝、是憤言而誇張、非其情。とするが、荆王

劉賈を敗走せしめて死に至らしめ、楚軍を打破して勢に乗ずる形勢と、謀叛のはじめに部将に向って説く次の語、上老矣。厭兵。必不能來。使諸將。諸將独患淮陰・彭越。今皆已死。余不足畏也。などに拠れば、むしろ黥布の真意も含まれていると考えるべきもののように思われる。

(8) 「淮陰侯列伝」信乃謀、与家臣夜詐詔赦諸官徒奴、欲發以襲呂后・太子。

(9) 「魏豹彭越列伝」

(10) 「高祖本紀」已而呂后問。陛下百歳後、蕭相国即死、令誰代之。上曰、曹參可。問其次。上曰、王陵可。然陵少驍。

陳平可以助之。陳平智有余。然難以独任。周勃重厚少文。然安劉氏者必勃也。可令為太尉。呂后復問其次。上曰、此後亦非而所知也。

(11) 「留侯世家」に呂后におびやかされるようにして策を立てたという。高祖が招いても応じなかった所謂四皓を太子につけ、その勢を動かし難いものとして、太子更改を断念せざるを得ないようにした。

(12) 「漢書・武帝紀」贊。また、貝塚茂樹氏「儒教的精神の勝利」(「古代中国の精神」所収)には、彼(司馬遷―筆者補)においては儒教の伝統は濁世に染まぬ理想主義の潔白さにあると観念せられ、かかる伝統の命脈を維持することに儒教の本質があると考えられたのである。(中略)儒教の学徒が過去において混濁した社会のなかにおいて理想主義を守り続けることによって鍛錬した精神の堅固さ、その種子が、新しい時代の変化によって、俄に発芽生育して国教に開花したものであるといえるであろう。と述べられる。

(13) 「太史公自序」周室既衰、諸侯恣行。仲尼悼礼廢樂崩、追脩經術、以達王道。匡乱世反之於正。見其文辭、為天下制儀法、垂六芸之統紀於後世。作孔子世家。

(14) 「太史公自序」桀・紂失其道、而湯・武作。周失其道、而春秋作。秦失其政、而陳涉發迹、諸侯作難、風起雲蒸、卒亡秦族。天下之端、自涉發難。作陳涉世家。

(15) 「高祖本紀」高祖曰、秦始皇帝・楚隱王・陳涉(考証、注文竄入)・魏安釐王・齊縉王・趙悼襄王、皆絶無後。予守家各十家。秦始皇帝二十家。魏公子無忌五家。とある。「陳涉世家」に三十家とするものと数が異なる。十戸を与えた

のは十二年十二月のことで高祖崩御の約五個月前あるから、これより以前に二十家を与えたのでなければ合致しないが、それを思わせる記述は見えない。

16 「孔子世家」魯世世相伝、以歳時奉祠孔子家。而諸儒亦講礼郷飲大射於孔子家。孔子家大一頃。故所居堂、弟子内、後世因廟、藏孔子衣冠琴車書。至于漢二百余年不絶。高皇帝過魯、以太牢祠焉。諸侯卿相至、常先謁、然後從政。また、「漢書・高帝紀」(十二年)十一月、行自淮南邊。過魯、以太牢祠孔子。とある。

17 「漢興以來將相名臣年表」蕭何は惠帝二年七月、曹參は惠帝五年八月、陳平は文帝二年十月とあり、張良は「世家」に高祖崩後八年卒とあつて、呂后元年の卒となるが、「漢書」の伝では高祖崩後六年とし、「漢書・高惠高后文功臣表」では封十六年薨としており、梁玉繩「史記志疑」は考表良以高帝六年封、卒于呂后二年、在位十六年、則当是九年、史漢俱誤。とする。周勃は文帝十一年卒と「世家」にある。

18 「曹相国世家」太史公曰。曹相国參、攻城野戰之功、所以能多若此者、以与淮陰侯俱。及信已滅、而列侯成功、唯独參擅其名。(後略)

19 「陳丞相世家」傾側擾攘楚・魏之間、卒掃高帝、常出奇計、救紛糾之難、振國家之患。(後略)

20 「太史公自序」諸呂為從、謀弱京師。而勃反經合於權。(後略)

21 「蕭相国世家」客有說相国曰、君滅族不久矣。(中略)上所為數問君者、畏君傾動関中。今君胡不多賈田地、賤賈貨以自汗。上心乃安。於是相国從其計。上乃大説。とある。先の鮑生の計に従った時も、召平の計に従った時も「漢王大説」「高帝乃大喜」と記述されている。

22 「蕭相国世家」太史公曰の語。

23 「曹相国世家」參免冠謝曰。陛下自察聖武孰与高帝。上曰、朕乃安敢望先帝乎。曰、陛下親臣能、孰与蕭何賢。上曰、君似不及也。參曰、陛下言之、是也。且高帝与蕭何定天下、法令既明。今陛下垂拱、參等守職、遵而勿失、不亦可乎。

惠帝曰、善。君休矣。

24 「留侯世家」太史公曰、学者多言無鬼神。然言有物。至如留侯所見老父予書、亦可怪矣。と述べる。

- 25 「高祖本紀」及び「留侯世家」太史公曰に見える。
- 26 金谷治氏「秦漢思想史研究」第二章漢初の道家思潮。
- 27 「高祖本紀」留侯曰、不如因而立之、使自為守。「留侯世家」張良說漢王。「陳丞相世家」陳平躡漢王。「淮陰侯列伝」張良・陳平、躡漢王足、因附耳語曰、漢方不利、寧能禁信之王乎。不如因而立、善遇之、使自為守。不然、變生。ここに高祖の耳に口を寄せてささやいたのは、「高祖本紀」の張良の語の具体的な形であるから、恐らく張良なのであろう。
- 28 「陳丞相世家」絳侯・灌嬰等、咸讒陳平曰（中略）臣聞平受諸將金。金多者得善処、金少者得惡処。平反覆亂臣也。願王察之。
- 29 「高祖本紀」。「陳丞相世家」には陳平の范增離間の計謀について、「考証」は通鑑輯覽云、陳平此計、乃欺三尺童、未可保其必信者、史乃以為奇、而世伝之、可發一笑。を引く。「項羽本紀」の「考証」に引かれている。
- 30 「陳丞相世家」陳平既多以金縱反間於楚軍。宣言諸將鐘離昧等、為項王將、功多矣。然而終不得裂地而王。欲与漢為一、以滅項氏而分王其地。項羽果意不信鐘離昧等。
- 31 「陳丞相世家」六奇計について「考証」錢大昭曰、間陳楚君臣、一奇計也。夜出女子二千人榮陽東門、二奇計也。躡漢王立信為齊王、三奇計也。偽游雲夢縛信、四奇計也。解平城圍、五奇計也。其六當在從擊臧荼・陳豨・黥布時、史伝無文。と引く。
- 32 「樊鄴滕灌列伝」人有惡喻党於呂氏。即上一日宮車晏駕、則喻欲以兵尽誅滅戚氏・趙王如意之屬。とある。「陳丞相世家」の記述は簡略にすぎて意味不明である。
- 33 この一連の陳平の動きが高祖崩御後いかほどの日時を経てあったのか不明であるが、「高祖本紀」に高祖崩御後四日を経て喪を發せず、諸將の動向を恐れていた時、鄴（商）將軍の語に「吾聞帝已崩四日、不發喪、欲誅諸將。誠如此、天下危矣。陳平・灌嬰、將十萬守榮陽、樊噲・周勃、將二十萬定燕・代。此聞帝崩、諸將皆誅、必連兵還郷、以攻関中。大臣内叛、諸侯外反、亡翹足而待也。」とあって、陳平は榮陽に、樊噲は燕・代の地に在ることになる。「考証」諸説を引くがいずれも説得力に乏しいように思われる。

34 「呂后本紀」では丞相とのみ記述し、王陵か陳平か不明であるが、「漢書・外戚伝」では陳平としている。王陵の呂氏を王とすることに反対する硬骨と陳平の平生とを比較すれば「漢書」の記述は妥当であろう。

35 註(5)

36 「呂后本紀」陳平・周勃の二者を挙げるが「陳丞相世家」では陳平の名のみを挙げる。「絳侯周勃世家」にはこれに關する記述はない。

37 「呂后本紀」太史公曰に見える。

38 「鄴生陸賈列伝」の「正義」に国家不安、故靜居深思其計策。とある。



## 第二節 読「外戚世家」——后妃婦徳をめぐつて——

司馬遷は二十八宿の北斗星をめぐり、三十輻が一轂を共にして運行窮まりないと同様に、輔弼股肱の臣をこれになぞらえ、忠信にして道を行い、主上を奉ずる者について「世家」を作つたのであると「太史公自序」に述べる。それは時代の中心たる主上を記述する「本紀」の周辺をいゝるどる存在なのである。

三十「世家」の中で、「孔子世家」は諸侯国の歴史の後に置かれて時代を劃し、次いで新らしい秩序世界を構成する発端となつた。「陳涉世家」が置かれ、以後は漢代の所謂「世家」が並んでいる。それは新しい「世家」の出現と司馬遷が把えた結果に外ならない。第一の「呉太伯世家」から第十六「田敬仲完世家」までは、王朝への貢献、王朝の遺徳等々の理由で封地を与えられた者たちの興亡を記述したものであつて、衆星の消長といった趣がある。そして「孔子世家」は文化の担い手として、連綿として漢代に至る学統とその子孫の存在は「世家」たるの資格を備えたものとして把えられたと考えられる。さきの第一から十六に至る一群の歴史に比すれば、その継続する歴史は驚嘆に価するであろう。しかも、この学統は漢代に於いて、司馬遷をして「儒林列伝」として立てせしめるほどの輝きをもつものであつた。「世家」の構成序列の上で「孔子世家」の位置する所以は恐らく上述の如きものであつたと思われる。次いで置かれる「陳涉世家」は新秩序への発端として此処に位置している。

陳渉が王位にあったのは略六ヶ月であったが、御者の莊賈に殺された後、彼に任ぜられた侯王将相等は遂に秦を亡ぼし、新しい時代を準備する役割を果たしたのである。従つて高祖の時には陳渉のために冢守三十家を置いて祭祀せしめたと「陳渉世家」に司馬遷は記述している。こうした新時代への幕開けを為したことに對する功績を祭祀という形で高祖は存続せしめ、「太史公自序」には「桀・紂失其道而湯・武作、周失其道而春秋作。秦失其政而陳渉発迹、諸侯作難、風起雲蒸、卒亡秦族。天下之端、自渉発難。作陳渉世家第十八。」と著述動機を述べ、湯・武・春秋と同列の功績を認めている。そして、漢王室はまさに孔子の文化的継承者であり、陳渉の軍事的業績の継承者であり、司馬遷がこの二人の伝記を漢の世家の劈頭に置いたのは、おそらく心中このことを考慮したためであろうとしたワトソン氏の説は當を得たものと思われる<sup>1)</sup>。

かくして「世家」は第十九以降第三十に至るまで漢代の諸侯王を以つて構成する。本稿の「外戚世家第十九」は暫くおいて、以下の「世家」について概観しておきたい。「楚元王世家第二十」は高祖六年に楚王韓信を禽したのち封じた処の同母末弟劉交、字は游とその子孫を記述し<sup>2)</sup>、「自序」には越・荆楚の地は剽軽であるために劉交を封じて漢の宗藩となつたと述べる。此処には趙王劉遂の一代が附載される。劉遂は高祖の中子である趙王友の子で、友が呂后に幽閉されて憤死し、呂氏一族誅滅の後に立てられたのであったが、所謂呉楚七国の乱で自殺滅亡した。

「荆燕世家第二十一」に於ける荆王劉賈は劉氏の一族<sup>3)</sup>として漢王劉邦の下に早い時期から加わり、將軍の一人となつていたらしい。項羽との戦いに功績があり、高祖の六年に荆王に封ぜられた。十一年に至つて、淮南王黥布の謀反に遭い、布が東進して荆を撃つたため防戦するも敵せずして殺された。劉賈には子孫がなく終つてい

る。以後の荆の地は呉王劉濞（高帝兄劉仲之子）に引き継がれた。燕王劉沢は劉氏一族<sup>(4)</sup>の中でも疎遠なものであったという。高祖十一年に將軍として陳豨を撃ち、部將王黃を虜にして營陵侯に封ぜられ、呂后の時に田生の謀略によつて琅邪王となり、呂后の死後、呂氏一族誅滅に兵を動かして、孝文元年に燕王となった。孫の定国に至つて、無頼の行があり、元朔元年、これが発覚して誅殺の朝議が起り、定国は自殺した<sup>(5)</sup>。従つて燕王は三世で終り、国は除かれて郡となつてゐる。司馬遷は論讚に於いて劉賈・劉沢が漢室の藩輔としての功績を評価して「豈不為偉乎」と述べる。

「齊悼惠王世家第二十二」は高祖の長男で庶子であつた劉肥とその子孫を記述するが、劉肥は高祖六年に七十城の食邑を与えられて齊王に封ぜられた。漢初に於ける最大の封地を与えられたのは、司馬遷の論讚に述べる如く、高祖を中心とする子弟が少なく、しかも、秦が同族の封土を持たずに滅亡したことに鑑みて為した体制であつた。劉肥の場合、呂后の憎悪を買つて危うく脱する等もあるが、よく藩屏輔臣の役割を果たしたといえようである。子の哀王襄は呂太后の故に弟の朱虚侯章・東牟侯興居と共に漢室と深い関わりを持ち、章・興居の二人は呂氏一族誅滅の際には哀王を迎えて帝位に即けようと図るに至る。しかし、この件は琅邪王及び大臣等が、「齊王母家驍鈞患戾、虎而冠者」であり、哀王を立てるならば呂氏の二の舞を為すであろうと述べ、代王迎立の理由には、生母薄氏の家は「君子長者」であると比較し、代王は高祖の実子として存命の最年長で継位は順当と結論した。章・興居の内応で呂氏を誅滅し、哀王を擁立せんとした時、哀王と共に謀に与つて兵を出そうとした者に舅父鈞・郎中令祝午・中尉魏勃がある。宰相の召平は出兵を阻止せんとして欺かれて自殺した。代つて宰相となつたのが驍鈞であるから、その責は彼に存するということかも知れぬが、呂氏同様のことが起ると危懼せしめたのに

は、さらに理由があると思われる。しかし、その具体的内容は不明である。呂氏誅滅後に齊王が兵を還してから、大將軍灌嬰が魏勃を召喚して、齊王に反乱を教唆した責を問いただしている。実は魏勃の權勢が宰相を凌ぐものであった。このことは哀王の出兵を反乱と疑っていることを物語っている。従って、出兵時の宰相駟鈞の責もまた免れ得ないであろう。そして何よりも駟鈞とその家に問題が存するというのである。「自序」にも駟鈞暴戻の語が見える<sup>(6)</sup>のは余程のことと思わせる。にもかかわらず、「孝文本紀」には「齊王舅父駟鈞為清郭侯」とあり、淮南王長の舅父趙兼と共に侯に列せられている<sup>(7)</sup>。これは論功行賞として呂氏誅滅の旗幟をにかけて出兵したことに對するものとみられる。灌嬰が魏勃を追求し、その態度から魏勃が何等為し得ないと判断したことで反乱の疑いは消えたということであろうか。かくして駟鈞は侯に列せられたのであるが、これに比して齊王の弟である朱虚侯劉章及び東牟侯興居の場合はいささか過酷であるように思われる。二人共に中央にいて劉章は呂産を誅殺し、興居は少帝を宮中より退隱せしめて文帝を迎えるのに功があった。故に各二千戸の封邑と金千斤を賜ったが、この二人が当初兄である齊王を迎立しようとしたことが文帝の耳に入って、その功績を削られたのである。文帝の二年に至って、諸王子を王に封じた際、章を城陽王とし、興居を濟北王としたが、二人は職階・功績を奪われたと考えたという。三年に章は死に、興居は文帝の太原行幸を北迎を騒がしていた匈奴を親ら伐つものと考えて、遂に反乱するに至った。さきの貶黜がこれを機として暴発せしめたものである。滎陽を襲わんとした。滎陽は四方への要地であり、穀倉を押える地として重要であったと思われるが、最終の目的がいささか不明瞭である。従って文帝による罪を問わないという吏民への呼び掛けは効果を上げたとみられ、忽ち軍は撃破され、興居は捕虜となった後に自殺している。他の悼惠王の遺子は淄川王・濟南王・膠西王・膠東王等に封ぜられたが景帝三年

の呉・楚の反乱に与してほとんど滅亡するに至った<sup>(8)</sup>。

「蕭相国世家第二十三」「曹相国世家第二十四」「留侯世家第二十五」「陳丞相世家第二十六」「絳侯周勃世家第二十七」はいずれも高祖に従って功績のあつた者達である。前述の諸「世家」が劉氏一族で漢室を補翼した者達であつたのに比して、此処に挙げられる者は漢室との血脈はない。彼等は漢室を創建し、基礎を固め、「非劉氏王者、天下共擊之」という高祖の遺詔を奉じた忠良と称してよい者達であつた<sup>(9)</sup>。しかし、彼等は本来乱世の雄としての資質を有する者達である。「王侯將相寧有種乎」と呼号した陳涉と同様の気概を内に秘めているにもかかわらず、高祖の下で榮達を極めた。彼等は戰場往來の間に臨機応變の処身を実践してきた者達で、高祖の利器に従い、韓信等はこれに従えずに滅亡していったのである。「高祖本紀」には高祖崩後四日も喪を發せず諸將の動向を氣遣う呂后のことが記述され、「呂后本紀」には惠帝崩御の際、死を悲しむ余猶もなく丞相陳平等の動勢を恐れる呂后が描かれていて、彼等の本質がいかに上述のごときものであつたかを物語っている。しかし、今やその功績・榮達の故に彼等は世家に列せられた<sup>(10)</sup>。

「梁孝王世家第二十八」は父は文帝、母は竇太后で、長子は景帝であるが、次子孝王武を中心としたものである。「自序」には呉・楚七国の乱の際に果した梁国の功績を嘉したと述べる。但し、その後の武は竇太后の寵愛をも受けて、功を誇り僭上の振舞も多かったという。以下孝王の長子買（共王）を述べ、孝王の子である濟川王明・濟東王彭離・山陽哀王定・濟陰哀王不識等の事蹟があつて、明・彭離は罪を得て庶人となり、定・不識は後嗣なく、国はいづれも漢に編入された。孝王は景帝時に最も勢威を振つた者といえよう。こうした状況は母である竇太后に関わる処が大きい。

「五宗世家第二十九」は景帝の子武帝を除く十三人の封国の歴史である。十三人の母は五人である故に「同母者為宗也（索隱）」と五宗の所以をいう。武帝を含めると景帝には十四人の皇子が存した。この中には一度は太子に立てられた長男榮がいる。榮は母の栗姫の嫉妬・讒言・不遜といった所謂外戚の渦中で太子より臨江王に封ぜられ、栗姫は憤死するといった悲運の人であるといえよう。臨江王となつて四年、宗廟の外垣を自己の宮園に取り込んだ罪によつて長安に召喚され、酷吏として名高い中尉郵都の追求を受けて自殺した。榮の藍田の塚墓には数万の燕が土をふくんで運んだといい、「百姓憐之」とあるから余程の人物であつたのであろう。いま一人の特色ある人物が存する。母は栗姫、河間献王徳は「好儒学。被服造次必於儒者」であり、山東の諸儒は多く王の下に集まつたと伝えられる。徳についての記述は「漢書・景十三王伝」が詳細である<sup>110</sup>。しかし、献王の下に多く人の集まることは危険であつた。ここに於ける記述は極めて簡単であるが、「集解」はこの間のことを伝えて<sup>111</sup>いる。献王は儒学を好み、武帝と同じき方向にありながら、遂に隱退の風を保たざるを得なかつたようである。漢室が創立当初から危険に思われる諸侯国を容赦なく滅亡せしめてきた歴史を思いみるまでもないであろう。此処に記述される他の諸王の歴史も滅亡への輓歌である。五家は一代を限りで国は除かれて漢に編入されている。

「三王世家第三十」は「太史公曰」に「然封立三王、天子恭讓、羣臣守義、文辭爛然、甚可親也、是以附之世家」とあり、「自序」には「三子之王、文辭可親。作三王世家第三十」とある。これによつて司馬遷の意図は明らかとなるが、褚少孫の補写には好んで太史公の「列伝」を読んだが、伝中に「三王世家、文辭可親」と称するのを見て、その「世家」を探したが手に入らなかつたと述べ、故に長老の故事を好む者に従つて封策の書を取つて伝えるとあるのを見ると、その成立に疑問なしとは為し得ない<sup>112</sup>。

以上、「外戚世家第十九」以降に列せられる「世家」について概観してきたのであるが、漢代に於ける「本紀」をとりまく衆星の配置と歴史的序列とが巧みに組み合わさったものであることがわかるであろう。そして、これら衆星は「漢興以來諸侯王年表」の「太史公曰」に述べられる如く「漢定百年之間、親屬益疎。諸侯或驕奢、忤邪臣計謀為淫亂。大者叛逆、小者不軌于法、以危其命、殞身亡國」といった推移のつきまとうものであった。その意味で「外戚世家」もまた例外ではない。外戚は漢代「本紀」により近く、他の「世家」・「列伝」との間に位置して、絶えず影響を与え続ける存在だったのである。そしてその最たるものは遂に「本紀」に列せられるに至っている。「史記」一百三十巻の中で、「本紀」に列せられているのは勿論呂后のみであるが、惠帝の「本紀」が埋没して「呂后本紀」が立てられたのは、ほぼ十五年にわたる事実上の権力の存する処を見極めた司馬遷の透徹した判断である。同様の意味で「項羽本紀」も存在すると見られる。呂后について「太史公曰」では「高后女主称制、政不出房戸、天下晏然」と述べ、天下晏然に記述者の安堵の思いが込められてあるようである。但し、呂后は帝位に即いたということではなく、高祖の嫡妻として宗廟社稷を安ずる大義名分の下に権力を行使し、群臣も認めて惠帝以後の廢位が為されているのである<sup>14</sup>。「政不出房戸」とは皮肉な言い方であるが、劉氏の宗廟社稷という意味では遂に守り通された。「呂后本紀」は呂氏一族の歴史でもある。

さて「外戚世家」は后妃と所謂外戚が述べられ、その行為の見るべきものは「列伝」に立てられている。司馬遷は冒頭の文に於いて、「夫婦之際、人道之大倫也」と述べ、「自序」には薄姫・竇姫等の婦徳を嘉して「外戚世家」を作ったと記述している。后妃の所謂婦徳による外戚の歴史といえよう。漢代より始まる記述は当然ながら呂后を筆頭とする。呂后のあり様と一族の興亡が簡略に述べられる。血腥い呂后と一族の歴史は「呂后本紀」に

において詳細であるが、筆者は曾つて検討を加えたことがある<sup>15)</sup>。

呂氏一族が誅滅されて、迎立されたのは代王恆、即ち文帝である。母薄姫の生涯には他の諸姫にも時としてみかけるような奇異なる事柄が存するようである。父は呉の人で姓は薄氏であるという。薄姫は此の父ともとの魏王宗家の女魏媼との間に生れた。弟に薄昭がある。諸侯が秦に対して挙兵し、当時庶人となっていた魏豹の兄咎は立てられて魏王となったが、秦将章邯に破れて自殺する。弟魏豹は逃れて楚に走り、項羽の下で魏王となった。しかし、項羽によって河東に移され西魏王とされたことから不満が生じ、高祖が漢中より出て関中を攻略して東した時を機に漢王についた。漢王は彭城で項羽に破れ滎陽に陣する。その頃のこと、既に薄姫は魏媼によって魏宮に入っていたが、人相をみる許負<sup>16)</sup>にみてもらった処、「当生天子」と云う。魏豹はこれを聞いて心中ひそかに喜んだというから、後に薄姫が高祖の後宮に入るとは思いもよらず、魏王家は天子が出生するものと考えたようである。そこで魏豹は独立の立場を得るべく、親の病を見舞うと称して帰国し、黄河の渡しを絶つて高祖より離れた。高祖は酈生を派遣して説得するが、魏豹の謝絶は「人生一世間、如白駒過隙耳。今漢王慢而侮人、罵詈諸侯羣臣如罵奴耳、非有上下礼節也、吾不忍復見也」というものであった。この謝絶の語は平常における高祖の対人の姿を浮き彫りにし、謝絶の理由となり得る程のものであったことを示している<sup>17)</sup>。魏豹は韓信及曹參等にとらえられ、魏国は郡に編入されたが、なお滎陽に置かれた。「曹相国世家」に拠ればこの時、その母や妻子も捕虜としたとある。薄姫が織物の室におくられて従事するようになったのはこれからであろう。他方、虜とされた魏豹は滎陽に於いて楚軍に包囲され、食糧の尽きた高祖が詭計によって脱出した後を受けて、御史大夫周苛及び樅公等と共に守ることになった。記述に拠れば高祖は魏豹を虜として拘禁したようにはみえない<sup>18)</sup>。どうやら



一将として守城の役割を担ったものであろう。高祖の人材登用の一面を示すようではあるが、しかし、滎陽守護は必死の状況にあった。周苛・縦公の二人は「反国之王、難与守城」と相談して魏豹を殺した。反覆の行為が疑念を生んだのである。魏豹は空しい夢を抱いて終った。

薄姫の場合は此処から展開する。たまたま織室に至った高祖は薄姫の美貌に惹かれ、後宮に入れたものの一年余の間忘れ去っていたらしい。ところが、薄姫が年少の頃に仲良くしていた管夫人と趙子児が既に寵愛を受けていて、二人が高祖と共に河南宮の成臺台にいる時に、薄姫との約束「先貴無相忘」を話題にして笑ったことから、高祖に憐憫の情が起こり、召し出されるに至ったという。そもそも此の話は後から附加されたものではあるまいか。管夫人と趙子児なる女性はどうやら「史記」中に於いて此処だけにしか記述されていない名前であり、「先貴無相忘」の語にしても、「陳涉世家」や「外戚世家」にも似た言葉が記述されて当時広く人口に上るものであったように思われる<sup>19</sup>。かくて召し出された薄姫は云う、「昨暮夜妾夢蒼竜抱吾腹」と。高祖は「此貴徴也」と云い、遂に寵愛されて生れたのが代王（後の文帝）であった。蒼竜の腹中に抱るといった瑞祥を語り、生れた者が帝王となる型は此処だけではない。同じく「外戚世家」にも王美人は日輪の懐中に入るのを夢みて太子（後の景帝）に告げ、太子は「此貴徴也」と云ったという話が記載されている。この時生れた男子は後に武帝となった。これに似たような話は高祖の出生の際にも述べられている<sup>20</sup>。とかく此のような話は帝王出生にまつわる奇瑞として創出附加されたものであろう。

その後の薄姫は「希見高祖」とあるから、ほとんど縁がないということなのであろう。高祖十一年に恆は代王に封ぜられた。これより前、七年に代王に封ぜられていた高祖の兄劉仲が代を棄てて洛陽に戻り<sup>21</sup>、十年には趙

の相国陳孫が代で負くなど、此の地は連年騒然たる有様であつた。故に藩屏として恆を此処に封じたものである。時に恆はようやく八歳であつた。薄姫は同行して代におもむいた。高祖が崩じて呂后專權となつた際、戚夫人を筆頭に諸姫は幽閉されたりといった境遇に見舞われるが、薄姫はまれにしか高祖と会わなかつたことが幸したのである。諸姫のうち最も呂後の憎怨を買つていた戚姫とその子趙王如意の最期は哀れなものであつた。かくて、弟の薄昭も共に代王恆に従つて封地に行き、十七年後に呂后が崩じて新たな局面が開くことになる。十七年間の事跡について記すところはないが、呂氏一族を呂后崩御を機に誅滅した重臣等の帝迎立をはかる語には、「代王、方今高帝見子、最長、仁孝寛厚、太后家薄氏謹良。且立長故順。以仁孝聞於天下」と見えるから、代国の治績には見るべきものがあつたと思われる。「孝文本紀」には犯罪の一族連坐を憐れんで法の廢止を決定したり、立太子の際の辭議、体刑の廢止、田地租税の免除など、代国治政より得たかと思われる方針施策が実行されている。仁孝寛厚を以つて迎立の条件とし、生母の家柄が問題にされているのは、呂氏の苦い経験からである。齊の哀王が舅父驪鈞悪辰として退けられたことは既述した。「外戚世家」ではその性格上薄氏の仁善を称揚し、その故に代王を迎立したと述べ、迎立の最大理由としている印象を与える。

代王の許には丞相陳平・太尉周勃の使が迎えに行つた。郎中令の張武・中尉の宋昌等の上京についての論争がある。代王は薄太后<sup>㊦</sup>に報告し、相談したが結論は出ず、龜卜によつて「大横庚庚、余為天王、夏啓以光」を得て、薄昭を確認の使者として周勃の許に派遣した。薄太后に相談することは大事な手続きだったのであるまいかと思われる。龜卜も薄昭派遣もこの相談より生れているようである。果して迎立は眞実であり、宋昌の進言<sup>㊧</sup>通りであつたことが確認されて即位する。やがて、車騎將軍薄昭を派遣して薄太后を代より迎え、改めて皇太后

と称することとなった。又、薄昭を封じて軹侯とした。「外戚世家」の薄太后に関する記述の末尾近く「薄氏侯者凡一人」とあるのは薄昭を指すものであろう。薄太后の父を追尊して靈文侯とし園邑三百家を置き、母の墳墓滎陽には靈文侯夫人の園を置いた。又、母は魏王の後裔であること、早く父母を失って自分のために尽力して呉れた魏氏一族を召し、親疎に応じて賞賜した。恩義に報いたのである。

さて、文帝は有司等の奏請によって太子を立て、次いで有司等は皇后を立てんことを奏請し、薄太后の太子の母を立てて皇后と為せの一言で竇氏を立てた<sup>24</sup>。かくの如き場合、太后の発言がそのまま決定実行されていて、その主導的権能の存在といったものを思わせる。また、薄太后は竇氏を皇后に立てた後に、有司に詔して竇後の父を追封しているのもさきの権能の一端を示すものであろう。

ところで、薄太后が薄一族の繁栄を願ったらしいと思わせる事柄がある。薄氏で侯になったのは一人のみであった。呂後の如き野心とも見えないが、景帝がまだ太子であった時、薄氏の女を妃としている。景帝が即位すると薄皇后となったが、子供に恵まれず、寵愛もなく、景帝前二年に薄太后が崩ずると廃せられた。「漢書・外戚伝」は皇后を廃せられて四年後に薨じたと述べる。まさに薄倅の人と云えよう。薄太后が漢室との結びつきをより強くにと願ったと思われるが、かくの如く消える結果となった。

文帝の三年に淮南の厲王長が従者魏敬と共に辟陽侯審食其を殺害する事件が起きた<sup>25</sup>。長は高祖の末子で当時文帝と二人だけが現存していたために、その親近に驕り、しばしば無法の行いがあったという。辟陽侯の罪三事を挙げ、生母と劉氏を思う心情に同情した文帝は罪を問わなかった。こうした状況で、厲王は益々驕慢であり、薄太后以下、太子、大臣もはばかりと伝えられる。果して文帝六年に厲王は謀反の罪を問われて

流罪となり、蜀への途次、絶食して死んだ。薄太后にして如何とも為す術もなく、ただはばかりであったのであろう。

一面、薄太后の激しい怒りを記述するところがある。文帝四年のこと、陳平の死後をうけて丞相となった周勃は、文帝の列侯封領に帰へるべしの詔が実行されないため、文帝から率先して封領へ帰へよう説かれ、丞相を辞して封領に帰っていた際に、何らかの誅罰を恐れて巡察の太守・尉との面会に甲冑を着け、武器を用意していたことを以て、謀反しようとしていると告発された。誅罰というのは曾って周勃が呂氏を誅滅して文帝を迎立し、厚賞・尊位・寵遇を得た時に、「久之即禍及身矣」と説く者がいて、周勃自身懼れ危ふんだというから、恐らく這樣的の幻影に悩まされた行動なのであろう。絶えずこうした危機を感じていた臣下は多く、蕭何の如きに於いても配慮対処の跡がみられる<sup>29)</sup>。捕えられ糾問に遇うが朴訥な周勃は弁解できず、千金を与えた獄吏に「以公主為証」と示唆される。公主は文帝の娘で、周勃の子勝之の娶るところであった。しかし、他の所では公主と勝之の仲は宜しくなかつたらしい。此処では公主証言の信用の高さをいうのであろう。又、薄太后の弟薄昭には、周勃が増封の賜金のあるときには尽く与えていたということもあって、薄昭は薄太后に懇えた。薄太后も謀反の事実ではないかと思っていたから、文帝が参朝した時、頭にかぶっていた老人用の頭布冒絮を文帝に投げつけ、周勃の無実を云ったとある<sup>30)</sup>。曾って兵権を握った時に反せず、いま一小県で反する筈がないとは道理である。単に薄昭に対する周勃の恩義に報いるのみでなく、性来の正直ということがあろう。かくして周勃は釈放されたが、獄吏がこれほど尊貴であったとは知らなかったと述懐したのはこの時である<sup>31)</sup>。

「張枳之馮唐列伝」に枳之が公車令として司馬門を警護していた時、太子と梁王（孝）の兄弟が共に車で参内

したが、司馬門で車から下りず、積之は追いかけて止め殿の門には入らせなかったことがある。公門で下車しないのは不敬に当る。この事が上奏されて薄太后の耳に入った。文帝は冠を脱いで「教兒子不謹」と謝し、薄太后は詔を持たせて参内を許したという。こうした事は偶然耳に入ったということではあるまい。皇太后として万事に目が届くような機構になっていたのではあるまいか。文帝がこうした行為をなさなければならぬ権能の存在を思わせる。

薄太后の崩御は文帝崩御に遅れること二年で、景帝前二年のことである。南陵に葬られた。「索隱」は「廟記」を引いて「在霸陵西南、故曰東望吾子、西望吾夫」とある。霸陵は文帝の陵墓であり、高祖の陵墓は長陵である。薄太后にとって後宮にさして確執もなく、その意味では比較的平穩であったといえよう。呂后に於ける反省と他に比する者の無かったことが幸いしたのであろう。但し、竇姫以降に於いては異なる。竇姫の積極的な性格に負うところが多い。

註 (1) B・ワトソン「司馬遷」(今鷹真訳)・第四章「史記」の体裁。

- (2) 元王劉交以下、夷王郢、戊(孝景三年、反乱自殺す)、交の子文王札、安王道、襄王注、そして「子王純代立。王純立、地節二年、中人上書告楚王謀反。王自殺。国除入漢、為彭城郡」と末尾に記述されるが、節王純の継嗣は元鼎三年(B・C114)で、地節二年は宣帝の時(B・C68)であり、「漢書・楚元王伝」では純の子延寿が趙長年の上書で告発されて自殺し、国除かれたとある処から、梁玉繩はこの謬を指摘し、「王純立」以下二十七字は後人の妄続で削るべきであると述べる(史記志疑)。

- (3) 「漢書・荆燕吳伝」 荆王劉賈、高帝從父兄也。「諸侯王表」 高帝從父弟。とする。
- (4) 「漢書・荆燕吳伝」・「諸侯王表」 高祖の從祖昆弟。とする。
- (5) 「漢興以來諸侯王年表」 元朔元年、坐禽獸行自殺。 国除為郡。
- (6) 「呂后本紀」 麴鈞惡人也。
- (7) 「惠景間侯者年表」 清都（考証、清都当作清郭）。以齊哀王舅父侯。元年四月辛未、侯鈞鈞元年。前六年、鈞有罪、国除。「外戚恩沢侯表」 鄒侯麴鈞（索隱、蓋後徙封於鄒）以齊王舅侯。四月辛未封、六年、坐濟北王興居舉兵反弗救、免。
- (8) 「齊悼惠王世家」 孝文帝尽封齊悼惠王子罷軍等七人、皆為列侯とあるが、梁玉繩は十人の誤りとし、「惠景間侯者年表」は九人を挙げるが、これも誤りとする。「漢書・王子侯表」で文帝四年五月甲寅に封じた十人を挙げている。齊哀王・城陽王章・濟北王興居を含めると十三人。封侯のうち、齊王の後継、興居の逆乱自滅の後継等の移封があるが、呉・楚七国の乱で四人が殺され、三国は漢に編入された。又、後嗣三人が誅せられる有様となっている。従って、呉・楚七国の乱後に残った封家は四家のみである。
- (9) 武田泰淳氏「史記の世界」 第二篇・二、「世家」について。この五名の忠臣の性格は、狼から狗への変種性格と見るべきであると述べる。
- (10) 野口定男氏「史記を読む」所収「行動者・張良」に於いて、氏は張良の隱者的願望に注目し、蕭何等とは異なる側面を指摘されている。
- (11) 修学好古、実事求是。從民得善書、必為好写与之、留其真、加金帛賜以招之。繇是四方道術之人不遠千里、或有先祖旧書、多奉以奏獻王者、故得書多、与漢朝等。（中略） 獻王所得書皆古文先秦旧書、周官・尚書・礼・礼記・孟子・老子之属、皆經伝説記、七十子之徒所論。其学拳六芸、立毛氏詩・左氏春秋博士。修礼楽、被服儒術、造次必於儒者。山東諸儒者多從而游。武帝時、獻王来朝、獻雅楽、对三雍宮及詔策所問三十余事。其対推道術而言、得事之中、文約指明。云々とあり、崩じては中対常麗以聞、曰王身端行治、温仁恭儉、篤敬愛下、明知深察、惠于鯨寡。と記述する。
- (12) 「五宗世家」集解に漢名臣奏を引き、武帝に朝して帰国した獻王の様子を「縦酒聽楽、因以終」と記述している。

(13) 褚少孫の補写は次の如くである。「好覽觀太史公之列伝。伝中称三王世家文辞可觀、求其世家終不能得。竊從長老好故事者、取其封策書、編列其事而伝之、令後世得觀賢主之指意」。「考証」は「柯維騏云、太史公書原欠三王世家、独其贊語尚存、故褚先生取廷臣之議及封策書補之、柯説近是」と述べる。

(14) 「呂后本紀」羣臣皆頓首言、皇太后為天下齊氏計所以安宗廟社稷甚深、羣臣頓首奉詔。とある。漢代に於ける皇后の地位に関わる機能・性格を論究したものに、谷口やすよ氏「漢代の皇后權」(『史学雜誌』第八七編十一号)及び「漢代の『太后臨朝』」(『歴史評論』一九八〇・三)がある。

(15) 拙稿「読『呂后本紀』」(『東洋学論叢』七)

(16) 許負について「絳侯周勃世家」には絳侯臣夫の人相をみて、三年後には侯、八年後には将相、そして九年後には餓死すると予言したが、まさにその通りであったことが記述されている。「索隱」に応劭云、負、河内温人、老嫗也という。又、「游侠列伝」に郭解、軹人也、字翁伯、善相人者許負外孫也と見える。

(17) 「高祖本紀」高起・王陵対曰、陛下慢而侮人、項羽仁而愛人。云々と見えるのはその一例であろう。

(18) 「項羽本紀」漢王使御史大夫周苛・樞公・魏豹守滎陽。「高祖本紀」令御史大夫周苛・魏豹・樞公守滎陽。と人名順序が異なるので、周苛・樞公の語に与に城を守り難いともみえるから、共同して任に就いたのであろう。「魏豹彭越伝」漢王令豹守滎陽と記述されるのは魏豹の伝であるからで、魏豹殺害も周苛一人の名を記している。

(19) 「陳涉世家」苟富貴、無相忘。「外戚世家」即貴、無相忘。とある。

(20) 「高祖本紀」父曰太公、母曰劉媪。其先劉媪嘗息大沢之陔、夢与神遇。是時雷電晦冥、太公往視、則見蛟竜於其上。已而有身、遂産高祖。

(21) 劉仲の代を棄てた理由は、「呉王濞列伝」匈奴攻代、劉仲不能堅守、弃国亡、間行走雒陽とある。

(22) 「外戚世家」従子(恆)之代、為代王太后。とある。後に皇太后と号するが、本稿では薄太后と記述する。

(23) 「孝文本紀」宋昌の言。羣臣之議皆非也。夫秦失其政、諸侯豪傑並起、人人自以為得之者以万数、然卒踐天子之位者劉氏也、天下絶望、一也。高帝封王子弟、地犬牙相制、此所謂盤石之宗也、天下服其疆、二也。漢興、除秦苛政、約法

令、施德惠、人人自安、難動搖、三也。夫以呂太后之蔽、立諸呂為三王、擅權專制、然而太尉以一節入北軍、一呼士皆左袒、為劉氏、叛諸呂、卒以滅之。此乃天授、非人力也。今大臣雖欲為變、百姓弗為使、其黨寧能專一邪。方今內有朱虛・東牟之親、外畏吳・楚・淮南・琅邪・齊・代之疆。方今高帝子独淮南王与大王、大王又長、賢聖仁孝、聞於天下、故大臣因天下之心而欲迎立大王、大王勿疑也。

24 「孝文本紀」立太子の奏請の語に「子其最長、純厚慈仁、請建以為太子」は「文帝紀」では「子啓最長」に作る。啓は景帝の名である。又、請立皇后では「孝文本紀」は「薄太后曰、諸侯皆同姓、立太子母為皇后」に作り、前半は内容に問題がありそうで、「文帝紀」は「皇太后曰、立太子母竇氏為皇后」と明瞭である。

25 その理由は「淮南衡山列伝」に厲王自ら次の如く述べる。「臣母不当坐趙事。其時辟陽侯力能得之呂后。弗争。罪一也。趙王如意、子母無罪。呂后殺之。辟陽侯弗争。罪二也。呂后王諸呂、欲以危劉氏。辟陽侯弗争。罪三也。臣謹為天下誅賊臣辟陽侯、報母之仇。謹伏闕下請罪」

26 「蕭相国世家」に蕭何は高祖に疑われないために私財を献じたり、故意に土地の買い占めを行ったりしていることが見える。

27 薄太后の語「絳侯紹皇帝璽、將兵於北軍。不以此時。今居一小県、顧欲反邪」(「絳侯周勃世家」)

28 「絳侯周勃世家」絳侯既出曰、吾嘗將百万軍。然安知獄吏之貴乎。

29 薄太后にまつわる記述がもう一件ある。「楚元王世家」王戊立二十年冬、坐為薄太后服私姦、削東海郡。と。